
DRAGON NAIL ~ 竜の爪 ~

烈火竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DRAGON NAIL 竜の爪

【Nコード】

N9528K

【作者名】

烈火竜

【あらすじ】

青いタヌキ先生のご許可を取っております。

『アニメ&ゲームキャラ大集合 復讐の戦場』のスピノフ作品！

暗躍する組織（前書き）

青いタヌキさんがしばらく更新できないらしいので、スピノフ作品を書きました。

これもいつ更新できるか、不明です。

暗躍する組織

【とあるビル】

若い男女がビルの階段から駆け上がる。

男は秋本優太。女は榊原綾華。

二人はドアの横に並び、デバイス（優太は紅。綾華は白百合。）を構える。

綾華はドアノブを掴む。

優太が合図を送り、綾華はドアノブを開ける。

そして、素早く入る。

【部屋内】

優太と綾華は驚愕する。

それは辺りが大量の血とバラバラに切り刻まれた死体だった。

そしてその中央にある人物がいた。

黒いマントに、竜を象った黒い大鎌を持った髑髏の仮面を被っていた。

優太

「……………貴様が殺したのか？」
「……………」

「そつだ」

綾華

「……………なんでこんなこと？」
「……………」

「こいつらに同情しているのか？」

綾華

「いいから答えて！」

「……………」

「……………取引をしていたが、こいつらが約束を反して、我を殺して金を奪おうとした。だから返り討ちにした」

優太

「だからって、殺さなくても良いじゃないか？」
「……………」

「やらなきゃ、やられる。そつだろつ？」
「……………」

「あんたなら、大丈夫でしょう？ 『竜の爪』メンバーの黒鎌竜さん」

黒鎌竜と呼ばれた男は驚く。

黒鎌竜

「我を、『竜の爪』を知っているのか？」

綾華

「調査をして、少しだけね」

黒鎌竜

「おやおや……」

黒鎌竜は大鎌を握る。

優太と綾華はデバイスを構える。

黒鎌竜を振り回す。

すると、壁が切り刻まれる。

二人は驚く。

黒鎌竜は後ろに下がりながら、

黒鎌竜

「さらばだ」

と言いながら、落ちる。

二人は慌てて追い掛ける。

下を見ると、黒鎌竜の足元に魔法陣が現れ、黒鎌竜は魔法陣の中に入る。

そして魔法陣は消える。

優太

「……逃げられたか」

綾華

「どつする？」

優太

「……この世界の警察に連絡しよう」

優太は惨劇の場を見ながら指示をする。

綾華

「……『竜の爪』。一体奴らの目的は何？」

『竜の爪』

それは各異世界で暗躍する謎の組織である。

続く

暗躍する組織（後書き）

好評するかしないかは関係なく、地道にやりたいと思います。

話し合うメンバー（前書き）

『竜の爪』メンバー達が遂に登場！

話し合うメンバー

【?????】

とても広い洞窟内。

その地面には大きな絵が描かれていた。

爪のひっかき傷の上に、西洋の竜の顔の絵だった。

すると、一人の人物がやって来る。

その人物は東洋の龍の仮面を被り、金色に輝くマントを羽織っていた。

?????

「……ビジョン」

唱えると、絵の中心に大きな薄紫色の水晶が現れる。

そして、光り出す。

すると、絵の周りに次々と影が現れる。

その影達も仮面を付け、マントを羽織っていた。

ただし、それぞれの仮面の形は異なっていた。

そして、その中に黒鎌竜もいた。

????

「これより、現状報告を聞く」

影達は頷く。

????

「まずは白天竜と聖唱竜から」

若い東洋の龍の仮面を被り、白いマントを羽織った白天竜。

額に十字架の紋章がある西洋の竜の仮面を被り、黄色いマントを羽織った聖唱竜は頷く。

白天竜

「奴ら『??機関』はまんまと情報に食いつきました」

聖唱竜

「『時空管理局』もです。奴らがぶつかり合うのは、時間の問題です
すね」

????

「同士討ちする可能性は？」

白天竜

「『??機関』はともかく、『時空管理局』は低いかもしれませんが
聖唱竜

「彼らはそんなに愚かではないですから」

????

「根拠は？」

聖唱竜

「彼ら……。いえ、あのアニメキャラ達がいるからです」
「??？」

「そうか……」

「??？」

「あほか？」

恐竜の顔に派手な後ろ髪の仮面と緑色のマントを羽織った大男がバカにする。

「??？」

「奴らは所詮は烏合の衆。一捻りで潰せばよい」

「??？」

「焦るな、喰樹竜」

大男は喰樹竜と呼ばれる。

「??？」

「彼らは個性は違うが、ある共通点がある。それは『正義感』だ」
喰樹竜

「『正義感』?。そんなものの為に戦うのか、奴らは……」
「??？」

「人間達はそーゆうのが大好きだ」

黒鎌竜

「……気に入らん」

白天竜

「本当です。『正義感』だの『平和』などは言い訳に過ぎないのに……」

「??？」

「話はズレた、戻そう。次に黒鎌竜の報告」

黒鎌竜

「取引にトラブルがあったが、手に入れた」

黒鎌竜はあるものを取り出す。

それは小さな金色の女神像だった。

???

「それがロストロギア『聖母の女神』か？」

黒鎌竜

「本物だ」

????3

「邪気退散の効果を持つ女神像だな」

蛇の仮面を被り、紫色のマントを羽織った人物が呟く。

???

「コレの研究はいつする呪血竜？」

呟いた人物は呪血竜と呼ばれる。

呪血竜

「帰ったら、すぐにやります」

????4

「すぐにですか？無理しない方が良いですよ呪血竜さん」

ガーゴイルの仮面を被り、銀色のマントを羽織った人物が心配する。

???

「光翔竜、呪血竜がどうかしたのか？」

心配する人物は光翔竜と呼ばれる。

光翔竜

「僕も呪血竜さんもやられました」

呪血竜

「…………お前のせいだな（怒）」

????

「…………何があつた？」

光翔竜

「詳しくは『3年StrikerS組 銀八先生』の第二十二講を
読んで下さい」

呪血竜

「省くな！」

????

「わかつた、あとで読もう。次は喰樹竜は…………」

喰樹竜

「残念ながら手に入れる前に、奴らが破壊しやがつた」

????

「…………残念だな。『大地の聖書』さえあれば、大地の力を操る事が
できるのに…………」

喰樹竜

「…………本当だぜ」

????

「最後に魔炎竜と氷刃竜」

サラマンダーの仮面を被り、赤いマントを羽織つた、魔炎竜。

額から鼻の先に剣のような一角を生やし、後ろに無数の角を生やした竜の仮面を被り、青いマントを羽織つた氷刃竜が頷く。

魔炎竜

「『けんぷファー』世界の白のケンプファー達の同盟は結べました」

氷刃竜

「あれで結べたのが、奇跡だよ」

????

「良くやった。これで戦力はアップだ」

氷刃竜

「それで、水蓮竜はどうしている？」

????

「ぐっすり寝ているよ。夜帝竜と一緒にね」

魔炎竜

「そうですね……」

????

「寄り道しても良いぞ。久しぶりの二人きりだ」

魔炎竜と氷刃竜は戸惑うが……。

魔炎竜

「……わかりました」

氷刃竜

「お言葉に甘えるよ」

白天竜

「久しぶりのデート、楽しんで下さい」

聖唱竜

「たまには子供のことを忘れて、羽を伸ばしなさい」

????

「以上報告は終了する。任務を終えた者はすぐに帰ってこい」

黒鎌竜

「了解した、リーダー」

水晶の光が消えると、影達は消える。

そして、水晶も消える。

リーダーと呼ばれた人物はその場を立ち去る。

リーダー

「今日はまあまあだな、ロストロギア収穫と同盟確保は。しかし、まだ『竜の爪』の目標にはほど遠いな」

リーダーは呟くのだった。

すると、青い肌と黒い竜の鉄仮面を被った兵士、竜兵が駆け寄る。

竜兵

「真王竜様」

リーダーは真王竜と呼ばれる。

真王竜

「どうした？」

竜兵

「『？？？機関』の動きがありました」

真王竜

「ほーっ」

竜兵

「いかなさいます？夜帝竜様を行かせましょうか？」

真王竜

「彼女は寝ている。私が行こう」

竜兵

「真王竜様、自らですか！」

真王竜

「いけないかな？」

竜兵

「いいえ」

真王竜

「心配なら、龍騎士二体ぐらい付けても構わんよ」

竜兵

「わかりました！」

竜兵は走り去る。

真王竜

「私も一仕事しますか」

真王竜が動く！

次回に続く。

話し合うメンバー（後書き）

リーダー・真王竜が自ら動き出した。

邪炎の剣（前書き）

『竜の爪』リーダー、真王竜が動く！

その実力は！？

邪炎の剣

【?????】

?????

「ふあ〜…」

年上の少女が幼い少女と手を繋ながら、歩いていた。

年上の少女は瞳の色が青ふじ色で、髪はストレートに伸ばし、色はきずいせんであった。

幼い少女は瞳は赤く、髪の色は青のショートヘアだった。

すると、一人の竜兵と顔を合わせる。

竜兵

「夜帝竜様、水蓮竜様、お目覚めですか」

年上の少女を『夜帝竜』、幼い少女を『水蓮竜』と呼んだ。

夜帝竜

「よお〜」

水蓮竜

「おはよー」

竜兵

「よく眠れましたか？」

夜帝竜

「まーな。変わったことはなかったか？」

竜兵

「先ほど、現状報告がありました」

夜帝竜

「なんだよ、あたしも呼べばいいのに……」

竜兵

「お二人はよく眠ってられましたから、真王竜様が起こさなくても良いと……」

水蓮竜

「お父さんとお母さん、仕事終わった？」

竜兵

「はい、終わりました。寄り道をして帰るそうです」

夜帝竜

「寄り道？」

竜兵

「デートですよ」

夜帝竜

「そうか……。遊んで、美味いもん喰って、夜はベッドの上で旦那が腰を振るのか」

竜兵

「ちよっとちよっと！子供の前で何を言っているんですか!?!」

水蓮竜

「なんでお父さんが腰を振るの？」

竜兵

「き、聞かなくて良いです!」

夜帝竜

「んで、真王竜は？」

竜兵

「『???機関』が動き出したそうなので、自ら出向きました」

夜帝竜

「そうか……。お父さんが腰を振るのはバナナを出し入れ……」
竜兵

「だから、子供の前でそーゆう話はしないで下さい！」

水蓮竜は首を傾げるのだった。

【小さな村】

静かな森林に囲まれた移民の村。

しかし、静か過ぎた。

それは……。

真王竜

「……酷いな」

真王竜と、

額から鼻の先まで鉄仮面を覆い、背中に翼を生やした青い竜、竜騎
士二匹が見たものは、

数多くの倒れた村の人々だった。

竜騎士の二匹は倒れた人々に駆け寄り、調べる。

竜騎士 1

「……死んでます」

竜騎士 2

「こつちもです」

真王竜

「やはりな」

竜騎士 1

「気づいていましたか」

真王竜

「生きている気を感じない」

竜騎士 2

「外傷はありません」

竜騎士 1

「泡を噴いてますね。なんかの疫病ですかね？」

真王竜は辺りを見渡すと、ダガーが突き刺さっていた。

1、2本ではなかった。

辺りに沢山刺さっていた。

竜騎士 1

「なんですかね」

ダガーを抜き、調べる。

すると、柄頭から穴が開いた筒が飛び出る。

竜騎士 1

「仕掛けがあります！」

真王竜はダガーを取り、見てる。

真王竜

「……何か出てくる仕掛けか」

竜騎士2

「なんだ、お前ら？」

真王竜

「どうした？」

真王竜は駆け寄る。

竜騎士2

「子供です」

竜騎士2が見つけたのは、幼い二人の姉弟だった。

真王竜

「生き残りか」

真王竜はしゃがんで、姉弟と顔を見合わせる。

姉弟は真王竜を見て怯える。

真王竜

「……怖がらなくて良い」

真王竜は優しく諭す。

姉弟は徐々に警戒を解く。

真王竜

「……………何があつた？」

姉

「……………突然、フード姿の人がやってきたの」

弟

「お父さんや村長さん達と、喧嘩したの」

竜騎士1

「それで？」

姉

「フード姿の人が怒って、ナイフを投げたの」

弟

「ナイフから、白い煙が出てきたの」

姉

「そしたら、お父さん達は苦しんだの」

弟

「それで、お母さんが僕やお姉ちゃんに奥に隠れてって……」

真王竜

「……………そうか」

姉

「……………お父さんとお母さん達は？」

真王竜と竜騎士二匹は悩む。

真王竜

「……………死んだ」

姉/弟

「えっ……………」

竜騎士1

「し、真王竜様」

真王竜

「……隠すことはできない」

姉弟達は両親や村人達の死に嘆く。

真王竜や竜騎士二匹は静かに見守る。

しばらくして、なんとか姉弟は泣き止む。

真王竜

「……フード姿の人は何て言った？」

姉

「えっ……」

真王竜

「なんで喧嘩してか、わかるか？」

姉

「……『秘宝』の在処はどこだって」

真王竜

「『秘宝』？」

姉

「もしかしたら、『風の笛』だと思っの」

真王竜

（……ロストログアか）

竜騎士1

「その『秘宝』の場所はどこに？」

弟

「この先の湖に……」

すると、真王竜は立ち上がる。

竜騎士2

「どちらに?」

真王竜

「……お前達は姉弟を見ている。私が行こう」

竜騎士1

「でしたら、我々も…」

真王竜

「一人でやりたい」

真王竜の言葉で、竜騎士二匹は黙り込む。

真王竜

「お前達、代わりに仇をとってやる」

姉弟は驚く。

真王竜は森の奥に入っていく。

【湖】

フード姿の男が湖のそばにいた。

?????

「この中にあるのか」

フード姿の男はカーペットを取り出す。

すると、カーペット黒い物体が数体現れる。

人型だが、魚をモチーフされたヒレなどが付いていた。

????

「行け、フィッシュアーマー」

フィッシュアーマーと呼ばれた物体は湖に飛び込む。

しばらくして。

湖からフィッシュアーマーが上がってくる。

そのうちの一体は小箱を持っていた。

フード姿の男は小箱を取り、開ける。

中には、立て笛が入っていた。

????

「手に入れたぞ、『風の笛』を」

フード姿の男は笑う。

真王竜

「そんなに凄いの？」

???

「『風の笛』は曲によって空気を操るのだ」

真王竜

「そうか、例えば？」

???

「癒やしの曲なら、傷を癒される。激しい曲なら、まわりを破壊するのだ……。つて、誰だ!？」

真王竜

「『竜の爪』の真王竜だ」

???

「し、真王竜!?! 『竜の爪』のリーダーか!?!」

真王竜

「ほーっ、私のことを知っているのか?」

???

「我々の情報を侮つてはいけませんよ。しかし、何故リーダーであるあなたがこんなところに?」

真王竜

「他のメンバーがいない時に、『??機関』の君が動き出したと聞いてね」

???

「それはそれは……」

真王竜

「ところで、あの村人達を殺したのは、お前か?」

???

「その通りです」

真王竜

「理由は?」

???

「最初はちよつとした『脅し』でした。なかなか『コレ(風の笛)』の在処を教えてくれなかつたので…。そこで村人達をわが毒で苦し

めました。そしたら、『彼らを助けてくれ！在処を教えるから』と教えてくれました」

真王竜

「…なのに、何故殺した？」
「??？」

「約束してもいなければ、『わかった』とも返事していません。それに、新型の毒の実験もしたかったですから……」

真王竜

「……相当毒にこだわるな」
「??？」

「私の名は『毒霧のポイズン』ですから」

真王竜

「『毒霧のポイズン』ねえ……」

ポイズン

「それでは……」

ポイズンはそのまま立ち去ろうとすると見せかけて……。

ポイズン

「と言いたいところですが、『竜の爪』は倒すように言われているのでね！」

フィッシュアーマー達が真王竜に襲いかかる。

その瞬間、真王竜は腰に携えていた剣と刀を抜く。

ズバッ！

真王竜はいつの間にか、剣と刀をしまう。

次の瞬間、

ドバツ！

フィッシュアーマー達は横真つ二つに斬られる。

ポイズンは驚愕する。

ポイズン

「い、居合い抜きか!？」

真王竜

「このフィッシュアーマーって、水中型だから遅いな」

真王竜がポイズンに近づこうとすると、
ポイズンは手のひらを真王竜に向ける。

手のひらから白いガスが噴き出す。

真王竜

「!？」

真王竜は驚く。

白いガスが消えると、ポイズンはいなくなっていた。

真王竜は、ポイズンが誘っていることに気づく。

真王竜はそのまま森に入る。

【森林の中】

真王竜はひたすら歩く。

すると、目の前に鳥の死骸があることに気づく。

真王竜は辺りを見渡す。

木の枝の上に乗る、木の影に隠れて、真王竜の様子を見ていた。

ポイズン

（フツ、貴様は既に我が術中にはまっているのだ）

木の根に、ダガーが刺さっていた。

そのダガーの柄から、煙が出ていた。

ポイズン

（見えないが、徐々に蝕む毒だ。苦しむが良い）

ポイズンはダガーを構え、真王竜の様子をうかがっていた。

ポイズン

（『竜の爪』のリーダーを仕留めれば、組織の名も、私の名も上がる）

しばらく経つが、真王竜に何の変化はなかった。

ポイズンは不審に思う。

ポイズン

（おかしい、もう効果は出ているはずだぞ）

真王竜

「……いつまで隠れているつもりだ？」

ポイズンは気づかれていることに驚く。

真王竜はポイズンの隠れている方に人差し指を向けて、

真王竜

「アクセルシューター」

と放つ。

放たれた『アクセルシューター』は金色に輝き、障害物を避けながら、対象のポイズンに向かう。

ポイズンは逃げようとするど、

真王竜

「ショートバスター」

ドカーーーーン！

真王竜は金色に輝く『ショートバスター』でポイズンを狙い撃ちにする。

ポイズン
「グオッー……」

ポイズンは撃墜される。

真王竜はポイズンに近づく。

ポイズンは辛うじて生きていた。

ポイズン

「な、何故だ！？我が術中に、我が毒を浴びているはずなのに、何故効かない！？」

真王竜

「……浄化しているのだ」

ポイズン

「浄化！？」

真王竜

「あらゆる毒を浄化する魔法、『セイントオーラ』を発動しておいたんだ」

ポイズン

「そんな魔法、聞いたこと無いぞ！？」

真王竜

「開発したのだよ。聖なるロストロギアを研究を元にね」

ポイズン

「か、開発！？」

真王竜

「我々『竜の爪』が、ロストロギアを集めて、使っただけだと思っただら大間違いだ」

ポイズンは驚愕する。

真王竜

「もつとも、貴様の毒には邪気が込められていたから、浄化しやすかった」

ポイズン

「どーゆう意味だ？」

真王竜

「……悪趣味と言ったら、わかりやすい」

ポイズンは激怒しながら、後ろに下がり、

ポイズン

「私の芸術を」

と指の間から数本のダガーを出す。

ポイズン

「バカにするな！」

ダガーをすべて、真王竜に向けて投げる。

真王竜は銃を持つ構えを取る。

指の先に無数の光弾が現れ、

真王竜

「クロスファイヤー」

と唱えると、光弾が撃ち出される。

すべての光弾がすべてのダガーを破壊する。

ポイズン

「チツ！」

今度は両手を広げ、手のひらから、ガスを噴き出す。

そのガスを浴びたものは溶ける。

真王竜

「硫酸ガスか」

真王竜は剣を抜く。

その剣はシグナムの『レヴァンティン』にそっくりだったが、色は異なっていた。

真王竜

「『ダークレヴァンティン』」

ダークレヴァンティン

「OK、master」

『ダークレヴァンティン』の刀身は禍々しい黒い炎に包まれる。

真王竜

「邪竜一閃！」

一振りであたれた黒い炎が竜の形になり、ポイズンに向かう。

硫酸ガスを打ち消される。

ポイズン
「ハッ……」

ポイズンは逃げようとするが、遅かった。

ゴオオオオオオ……

ポイズン
「ギャー……」

ポイズンは黒く燃え上がる。

ポイズン
「熱い！ 苦しい！」

真王竜
「教えてやろう。『邪炎』は心の悪があるほどよく燃え上がる。水などでは消えはしない」

ポイズン
「な、なんだと!？」

真王竜
「苦しみながら、燃え尽きる」
真王竜は立ち去ろうとする。

ポイズン
「ま、待ってくれ……。た、助けてくれ……」

真王竜は黙る。

ポイズンは『風の笛』を投げる。

ポイズン

「コ、コレをやるから、助けて、下さい……」

真王竜は『風の笛』を拾い、そのまま立ち去る。

ポイズン

「ま、待って！助けて、くれるんじゃない？」

真王竜

「……約束して無い。『わかった』とも言っていない」

真王竜は立ち去る。

ポイズン

「そ、そんな……」

ポイズンの炎はまだ永遠と燃え上がるのだった。

【小さな村】

弟は二匹の竜騎士と遊んでいた。

姉はずっと、森を見ていた。

すると、真王竜が出てくる。

姉

「あっ……」

真王竜

「あのフードの奴は、じきに死ぬ。仇は取ってやった」

姉

「そうですか」

弟

「おじさん、ありがとう」

竜騎士1

「コラコラ……」

真王竜は叱る竜騎士1を制する。

そして、『風の笛』を姉に手渡す。

姉

「これは……」

真王竜

「君達のだろ？」

竜騎士2

「よ、よろしいのですか？」

真王竜

「必要無い。『???機関』の一人を抹殺した、これで良い」

竜騎士2

「は、はあー」

真王竜は姉弟と話を始める。

真王竜

「その笛は、村の人々が守ってきたものだ」

姉

「……はい」

真王竜

「今度は君達が守っていく。自信はあるか？」

弟

「……わかんない」

真王竜

「なら、強くなりなさい」

姉

「……強く」

真王竜

「みんなの分まで生きて、強くなりなさい。……この笛を使うのにふさわしい者に」

姉弟は笛を見つめて、意を決める。

姉／弟

「はい！」

真王竜

「君達の手が、血に染めなくて良かった」

すると、

???

「そこまでよ」

と大声が響く。

真王竜達は振り向く。

そこには、ミレイザ・ラッシュエ率いる、武装部隊がいた。

ミレイザ

「その子達を解放しなさい！」

竜騎士1

「じ、時空管理局だ！」

竜騎士2

「どうします?」

真王竜は姉弟の肩を掴みながら、武装部隊達に近づく。

真王竜

「解放するが、条件がある」

ミレイザ

「条件?」

真王竜

「この子達を、保護しても、魔導師にして利用するな。それが条件だ」

ミレイザ

「……わかりました。約束します」

真王竜は姉弟をミレイザに手渡す。

真王竜

「さらばだ」

真王竜達の足元に魔法陣が現れ、真王竜達は消える。

ミレイザ

「……行っちゃった」

姉弟は真王竜達の消えたあとをいつまでも見ていた。

続く。

邪炎の剣（後書き）

真王竜とは、恐ろしく、優しかった。

他のメンバーの実力はいつたい。

夜帝の名を持つ夜鬼族の少女（前書き）

今回はギャグあり、シリアスあり、戦闘ありの話です。

夜帝の名を持つ夜兔族の少女

【廃墟の街】

誰もいない夜の廃墟。

風は虚しく吹く。

そんな廃墟に、一人の人物が歩く。

その人物は、激怒した表情した竜の仮面を被り、紺色のマントを羽織る。

そして、何より大きな番傘を担いでいた。

?????1

「……隠れていないで、出てきたらどうなんだ？」

声からにして、女だった。

そんな彼女の前にフードを羽織った大型の人物が現れる。

?????2

「貴様が『竜の爪』の夜帝竜か？」

女は夜帝竜と呼ばれる。

夜帝竜

「ちよっとナレーション」

はい？

夜帝竜

「『女』じゃなくて、『美少女』と言えなよ」

いや、そんなこと言われたって……。

夜帝竜

「声を聞いて、わからねーか？」

声も何も、これは小説だから……。

夜帝竜

「…せめて、空気を読めよ」

オイ！ナレーションに向かって、何だよその言い方！？（怒）

夜帝竜

「だって、あたしの出身アニメは『銀魂』だもん」

ちよつとちよつと、何出身アニメを暴露しちゃっているんだよ！？

夜帝竜

「ちなみに、アタシのイメージボイス声は沢城みきだぞ」

それも暴露かよ！？

夜帝竜

「…ついでに…」

真竜 山 宏一

聖竜 根谷 智子

黒竜 神 延年

白竜 伊 静

魔竜 鈴 健一

氷竜 坂本 綾

喰竜 村 哲生

呪竜 竹 英史

光竜 置鮎 太郎

水竜 中原 衣

夜竜

「だぞ」

「ちょっと、ついでで暴露することか!？」

夜竜

「だってよ、滅多に無いぞ。イメージボイス公開なんて……」

「あなたね……」。

????2

「オイ、コラー……！」

夜帝竜

「あつ、忘れてた」

????2

「忘れなよ！何、ナレーションと話しているんだよ!？」

夜帝竜

「ページ数稼ぎだよ」

ページ数稼ぎ!？

????2

「いちいちそんなことをしなくていいだろう！」

夜帝竜

「作者は意外と気にしているんだよ。悪かった悪かった…。んじゃ、本題に入るか。何者だ？イメージボイスも名乗れ」

????2

「……『??機関』のアイアンドだ。イメージボイスは石 運昇だ」

夜帝竜

「んで、そのアイアンドが何か用か？」アイアンド

「貴様の持っている『イフリートの銃』をよこせ」

夜帝竜は懐から、ロストロギア『イフリートの銃』を取り出す。

夜帝竜

「コレをか？」

アイアンド

「そつだ」

夜帝竜

「悪いな、それはできない相談だ。真王竜に頼まれたものなんだ」
アイアンド

「俺も頼まれたんだ。上にな」

アイアンドが手を上げると、

ガシャツ、ガシャツ、ガシャツ…

夜帝竜の周りには、数多くの黒い物体、『パワーアーマー』や悪魔などが囲んでいた。

夜帝竜

「……いつばいだな」

アイアンド

「貴様の為に用意したのだよ。貴様ら、『竜の爪』は油断ならないからな」

夜帝竜

「ふーん……」

アイアンド

「もう一度言う。『イーフリトの銃』をよこせ」

夜帝竜

「嫌だ」

アイアンド

「……貴様を殺した後で頂こう。……殺せ」

悪魔やパワーアーマー達は襲いかかる。

夜帝竜は担いでいた番傘を構え、一振りする瞬間、番傘は赤く輝き

……。

ドカーーーーン！

番傘の放った衝撃波で軍団は消滅する。

アイアンドは驚愕する。

夜帝竜

「……お前らを殺してやるよ！」

夜帝竜は走り出す。

番傘を力強く振り回しながら、軍団に飛び込む。

パワーアーマーや悪魔達は反撃する暇も無く、次々となぎ倒されていく。

夜帝竜は高く飛ぶ。

アイアンド

「撃ち殺せ！」

悪魔達は口から火炎弾を発射する。

夜帝竜は番傘を開く。

すると、赤いバリアーに丸く包まれる。

火炎弾はバリアーに打ち消される。

夜帝竜は番傘を閉じると、バリアーは消える。

次に番傘を銃のように構えると、番傘の先が砲身になる。

夜帝竜

「ファイヤー」

番傘からエネルギー弾が放たれる。

エネルギー弾を直撃した悪魔達は爆発する。

周りをも巻き込んで。

夜帝竜はエネルギー弾を連射し、次々と悪魔やパワーアーマーを狙撃する。

夜帝竜は着地して、砲身から出る煙を吹き消す。

軍団は全滅した。

アイアンド

「ば、馬鹿な…」

夜帝竜

「次はあんたか？」

アイアンド

「くっ」

アイアンドの足元に魔法陣が現れる。

魔法陣から鎖付きの巨大な鉄球が出てくる。

アイアンドは鎖を持ち、鉄球を持ち上げる。

アイアンド

「ぬっおおおおー！」

鉄球を思い切り、夜帝竜に向けて投げる。

夜帝竜は少し動いて、鉄球を避ける。

更に、鎖を掴む。

アイアンド

「なっ!?!」

番傘を地面に突き刺し、両手で鎖を掴む。

夜帝竜

「うおー！ー！ー！っ」

夜帝竜は腕の筋肉を膨らませ、思い切り鎖を引きちぎる。

アイアンド

「ちぎっただと!?!」

夜帝竜

「重いな。すげえ馬鹿力だな」

アイアンド

「くっ…」

アイアンドは新たに

鉄でできたバトルアックスと棍棒を取り出す。

夜帝竜は番傘を引き抜く。

右手に鉄球。左手に番傘を持つ。

アイアンド

「ぬっおおおおお！」

アイアンドは夜帝竜に向かっていく。

夜帝竜は両手の武器を構える。

アイアンド

「ハッ！」

夜帝竜

「あらよつと！」

キン！バキツ！キイイイイン！

鉄でできた武器は激しくぶつかり合う。

赤く光る番傘は鉄の武器と対等に渡り合う。

夜帝竜

「オラーーーーッ！」

両手の武器に力を込めて、アイアンドの武器を払いのける。

アイアンド

「うおっ!？」

夜帝竜

「どりゃー!」

瞬時に攻撃を叩きつける!

ガキーーーーン!

夜帝竜は違和感を感じる。

夜帝竜はすぐに後ろに下がる。

アイアンド

「……フッ」

夜帝竜の右手の鉄球が割れる。

アイアンド

「自分の武器にやられるわけないだろ」

アイアンドはフードを脱ぎ捨てる。

アイアンドの姿は、スキンヘッドに上半身の筋肉が剥き出しの姿だった。

そして、肌の色は鉄の色だった。

夜帝竜

「……その姿」

アイアンド

「俺の体の細胞は鉄のように堅くなっている。どんな攻撃を受けても、傷一つ付けることはできない！」

夜帝竜

「ふーん」

アイアンド

「俺の異名は『鋼鉄のアイアンド』だ。鉄の武器を使い、鉄の体を持つのだ！」

夜帝竜

「堅いねえ……」

夜帝竜は割れた鉄球を捨て、マントを脱ぐ。

夜帝竜

「少し本気になるか」

アイアンド

「少し、だと！？舐めるな！」

アイアンドは再び向かって走り出す。

バトルアックスを思い切り投げる。

アイアンド

「死ねっ！」

夜帝竜を一刀両断にしようとする。

夜帝竜は瞬時に避けて、アイアンドの腕の辺りに立つ。

ドカーーーーーン！

バトルアックスの勢いは地面を叩き割る。

夜帝竜

「……関節は普通だな」

夜帝竜はアイアンドの腕を掴み、

グシャツ！

アイアンド

「ギャーーーーーッ……」

腕の肘に目掛けて、膝蹴りをする！

アイアンドの腕は逆方向に曲がってしまう。

痛みの余りに思わず、バトルアックスを離す。

夜帝竜

「関節まで堅かったら、曲がらないよな」

皮膚が鉄のように堅いが、関節までは堅くはなかった。

夜帝竜はそこを狙い、関節部分に力を込めた一撃を喰らわす。

アイアンド

「クソッ！」

アイアンドは怒り任せに棍棒で夜帝竜を殴ろうとする。

夜帝竜はしゃがみ、瞬時に両手を重ねる。

夜帝竜

「もう一丁！」

アイアンドの片足の膝を思い切り叩きつける！

グシャッ！

アイアンド

「グワッ！」

片足も逆方向に曲がってしまふ。

アイアンドは支えを失い、倒れる。

アイアンド

「ぐっ、ぐっお……」

アイアンドは痛みの余り、唸る。

夜帝竜はそんなアイアンドの体に乗る。

夜帝竜

「二回攻撃して、感じたけど……。あんまり堅くなさそうだな」
アイアンド

「き、貴様はいつたい!？」

夜帝竜

「夜帝竜だよ。知ってるだろ？」

アイアンド

「貴様の正体だ！」

夜帝竜

「……『夜兔族』」

アイアンド

「夜帝竜に、『夜兔族』……。ハッ！」

アイアンドは思い出す。

アイアンド

「まさか、夜王……」

夜帝竜は『夜王』に反応する。

アイアンド

「夜兔族の夜王鳳仙の身内……」

グシヤッ!

夜帝竜は言い切っていないアイアンドの顔面に拳を叩き込む!

アイアンドの頭は潰される。

夜帝竜

「……あいつの、夜王鳳仙の名前を口にするんじゃないねえ!」

夜帝竜は怒りの込めて叫ぶ。

夜帝竜はマントを再び羽織り、立ち去る。

数時間後

他の『??機関』のメンバーがアイアンドの死体を見て、驚愕する。

????3

「……『鋼鉄のアイアンド』がやられてる」

????4

「あのアイアンドをここまで」

????5

「……夜帝竜、恐るべし」

????3

「今後はあの夜帝竜を相手にしないようにしよう」

他のメンバーも同意する。

【????】

呪血竜

「……何を考えているんだ(怒)」

夜帝竜を正座をさせて、呪血竜は説教する。

そんな時に白天竜が通りかかる。

白天竜

「どうかしたんですか？」

白天竜は恐る恐る尋ねる。

呪血竜

「……『イフリートの銃』を晩飯代に置いてきたらしい」

白天竜

「えっ!？」

夜帝竜

「ム力ついたから、好物のカツ丼十杯、うどん十杯、カレー十杯食べて。代金が足りなくなっ……」

白天竜

「肩代わりに置いてきたの？」

夜帝竜

「食い逃げするわけにはいかないだろ」

呪血竜

「悪の組織が、食い逃げで恐れるな(怒)」

夜帝竜

「……わりい」

白天竜

「……夜帝竜って、本当に呑気だね」

呪血竜

「しっかりしていれば、ナンバー2だったろうに」

夜帝竜

「ところで、今日のおやつは？」

白天竜 / 呪血竜

「まだ喰うんかい!？」

『夜兎族』は戦闘力も食欲も半端じゃない種族である。

続く。

夜帝の名を持つ夜兔族の少女（後書き）

戦闘描写、自分なりに書きました。

ご感想をお待ちしてます。

地獄の植物　そして復讐を誓うシスター（前書き）

今回は残酷です。

地獄の植物　そして復讐を誓うシスター

広大に広がる草原の真ん中に巨大な建物と領地があった。

そこは大地と自然を司る宗教『ガイア』の教会本部である。

そんな『ガイア』の教会本部を見つめる一人の大男が立つ。

緑色のマントを羽織り、恐竜のような仮面を被った、『竜の爪』メンバーの一人喰樹竜である。

喰樹竜

「フッフッフ、アソコに『大地の聖書』があるのか。いでよ、我が親衛隊よ」

喰樹竜の後ろに数人の者が現れる。

緑色の肌と頭が薔薇の形をした女性が赤いマントを翻しながら、喰樹竜に近づく。

???

「喰樹竜様、お呼びでしょうか？」

喰樹竜

「ブラッドローズ、リーファイ、マッシュヘッド、ニードルハンド、ウッドボディ。アソコにいる人間共を殺せ！美味そうな人肉は持って帰って来い」

薔薇の女性をブラッドローズ。

目を葉っぱで隠した魔導師をリーファイ。

キノコの傘を頭に被った巨人をマッシュヘッド。

イバラを巻き付いた忍者をニードルハンド。

そして、赤色した木製の鎧騎士をウッドボディと呼ばれた。

ブラッドローズ

「わかりました。行くよ！」

リーファイ

「あいわかった」

マッシュヘッド

「うん、行く」

ニードルハンド

「御意」

ウッドボディ

「……」

親衛隊は教会本部に向かって行く。

【教会本部内の中庭】

ザシュ！

「キヤー!」「ワー!」

叫びと切り裂く音が響き渡る。

ブラッドローズ

「ほらほら!」

ブラッドローズは司祭やシスターを斬り捨てていく。

マシユヘッド

「フン!」

ドカーン!

巨体のマシユヘッドは逃げ回る司祭やシスターを殴りつけていく。

リーファイ

「ここから、マシユヘッド。潰してはいかんぞ」

注意した後、呪文を唱える。

すると、近くにある大木の葉から目が開く。

目から光が放たれる。

放たれた光は逃げ惑う人々に当たると、人々の動きが止まる。

リーフアイ

「こつちやつて、捕まえて献上するんだよ」

マシユヘッド

「うん、わかった」

マシユヘッドは息を思いっきり吸い込み、吐き出す。

吐き出された息の中にキノコの胞子も混ざっていた。

逃げ惑う人々に胞子が当たると、胞子は急速に成長して、人々はキノコの重さに耐えられずに倒れる。

教会の騎士1

「おのれ！」

教会の騎士2

「これ以上、好きにはさせん！」

教会の騎士達は剣を持って駆けつける。

そこへ、ウッドボデイが立ちふさがる。

ウッドボデイ

「騎士であるな？」

教会の騎士1

「そうだ」

ウッドボデイ

「剣を交えましょう」

ウッドボデイは木でできた剣を構える。

教会の騎士2

「そんな木の剣で！」

教会の騎士2は立ち向かっていく。

ガキイン！

ウッドボデイの剣は教会の騎士2の剣を受け止める。

教会の騎士2

「なっ!?!」

ウッドボデイ

「この木は、鉄の刃では折れぬ！」

ガキイン！ザシヤツ！

教会の騎士2

「ぐおっ！」

教会の騎士2の剣を払いのけ、斬り捨てる。

教会の騎士1

「くそー！」

ザシユ！

斬りかかるが、返り討ちに斬られる。

教会の騎士3

「な、なんて強さなんだ！」

教会の騎士4

「魔導師達は!?!」

教会の魔導師1

「遅くなりました!」

教会の魔導師達がやって来ると、

シユルシユル!

教会の魔導師1

「ぎゃあ!」

教会の魔導師達は茨に巻き付かれる。

茨の棘が痛々しく刺さる。

教会の魔導師1

「こ、これは…」

教会の魔導師2

「い、茨!?!」

ニードルハンド

「ふっふっふっ」

茨を巻き付けたのは、ニードルハンドだった。

ニードルハンドの片腕から無数の茨が伸びていた。

ニードルハンド

「じゃあっ！」

ニードルハンドが茨を締め上げると、

グサツ！

魔導師達

「ぐあっ……」

茨の棘が魔導師達の体と喉を深々と刺さり、息絶える。

ニードルハンドは茨を操り、茨を腕にしまっ。

ニードルハンド

「ふん、人間とは弱いな」

ウッドボディはそこにいた教会の騎士達を斬り捨てる。

ウッドボディ

「……勢いは良しかったがな」

ブラッドローズ達、親衛隊は中庭にいる者をすべて殺す。

ブラッドローズ達は教会に入ろうと扉に手を触れると、

バチッ！

結界が張られていた。

ブラッドローズ

「生意気な…。リーファイ」

リーファイは呪文を唱える。

リーファイは魔力の波を結界に放つ。

しかし、結界はびくともしなかった。

リーファイ

「コレはかなり高度な結界ですね」

ニードルハンド

「どうする？」

リーファイ

「……ならば」

【教会内】

教会の魔導師達は呪文を唱え続ける。

教会の騎士6

「奴らの目的は何なんだ!？」

教会のシスター

「まさか、『大地の聖書』を狙って…」

教会の騎士6

「おそろく…」

???

「何があつたんじゃ？」

階段から一人の老司祭が降りて来る。

教会の騎士6

「大司祭様！」

教会のシスター

「化け物が現れて、皆の殺戮を……」

ボコツ！

教会の騎士6

「えっ」

床を割つて、木の芽が出てくる。

木の芽は瞬時に成長し、一本の木になる。

教会のシスター

「な、なに！？」

木の葉に、目が開く。

ピカッー！

目から光が放たれる。

教会の魔導師達

「うわあああああ！」

教会の魔導師達は動かなくなり、呪文を止まってしまう。

教会の騎士6

「しまった！」

ドカーーーーン！

閉じていた扉が破壊され、ブラッドローズ達が入ってくる。

リーファイ

「ふふっ、地面の中までは、結界が張られてはいなかったですね」

リーファイは魔法の力で、植物の種を建物の下まで移動させ、急成長させる。

地面を割って、大木になったところで、得意な魔術で結界を張っている魔導師達の動きを止めてしまったのだった。

ブラッドローズ

「さて、続きを始めましょうか！」

ブラッドローズ達は再び襲い掛かる。

大司祭

「お止めなさい！あなた方の目的は何ですか！？」

ブラッドローズ

「『大地の聖書』と此処にいる人間達よ」
リーファイ

「大人しく捕まりなさい！」

リーファイは大司祭にも光を当てる。

大司祭

「ぐわっ！」

大司祭は動かなくなる。

ウッドボディは教会の騎士達を斬り捨てながら、奥に進む。

【聖書の間】

台座に置かれてある翠色に輝く一冊の聖書。

コレが『大地の聖書』である。

一人の若い司祭が入ってきて、大地の聖書を持ち出す。

?????

「兄さん！」

一人の少女が駆け寄る。

若い司祭

「リリース！」

少女はリリースと呼ばれる。

リリース

「大司祭様が……」

若い司祭

「私がこの大地の聖書を持って、奴らをおびき寄せた。お前は子供達を連れて、逃げろ」

リリース

「そんなの危険よ！」

若い司祭

「危険は承知だ！……だが、此処にいる者達がすべて死んでいくよりはマシだ！」

リリース

「……兄さん」

若い司祭

「お前は子供達を守るのだ。頼む」

リリースは涙を流しながら頷く。

リリースは聖書の間から、走って出て行く。

ウッドボディはその様子を見ていた。

【隠し通路】

リリス
「こっちよ！」

リリスは子供達を連れて、通路を走る。

リリス
「もうすぐよ！」

行き先には梯子があった。

リリスは子供達を先に上らせる。

リリス
「急いで」

【教会の外】

草原にある隠し扉が開き、子供達が出てくる。

あとからリリスも出てくる。

リリス
「兄さん」

リリスは兄の事が心配で教会を見る。

子供 1

「……リリースお姉ちゃん
子供？」

「みんな、大丈夫かな？」

リリース

「……大丈夫よ」

すると、リリースは気配を感じて、上を見上げる。

ウッドボデイが壁の上に立っていた。

リリースや子供達は驚く。

ウッドボデイは跳んで降り立つ。

リリースは十字架を向ける。

ウッドボデイ

「……私は悪魔ではない」

すると十字架が光り出し、巨大化した。

ウッドボデイ

「デバイスか」

リリース

「ハア！」

十字架のデバイスをウッドボデイに叩きつけようとするが、
ウッドボデイは剣で払いのける。

リリス
「なっ!?!」

リリスは思わず、下がる。

ウッドボディ

「……大地の聖書はどこだ?」

リリス

「知らぬ!」

リリスは睨みつけるが、ウッドボディは顔色一つ変えずに立ち去ろうとする。

リリスは驚く。

ウッドボディ

「……とつと行け、大地の聖書を知らぬようだ」

リリス

「何?」

ウッドボディ

「戦いを続けるのか?子供達がいるのに」

リリスは子供達を見て、我を思い出す。

ウッドボディ

「……今のお前は弱い。返り討ちに遭うのが関の山だ」

リリス

「くっ……」

ウッドボディ

「名はなんて言う?」

リリス

「リリス、リリス・ソウル」

ウッドボディ

「……リリス・ソウル、我々を憎いなら、憎むが良い。その憎しみを生きる糧とするが良い」

ウッドボディは跳んで立ち去る。

リリスは悔しさを押さえて、子供達を連れて立ち去る。

【教会の廊下内】

ウッドボディが廊下を渡ると、

ブラッドローズ

「何をしていたのよ」

ブラッドローズは『大地の聖書』を手に持っていた。そして、足元に若い司祭が倒れていた。

ウッドボディは驚く。

ブラッドローズ

「大地の聖書を見つけるのは、あなたの役目でしょう」

ウッドボディ

「……すまない」

ブラッドローズ

「食材（人間）は大量に手に入れたから、とっとと戻るわよ。そこ

の人間も連れてって」

ウッドボデイ

「……わかった」

ブラッドローズは先に行ってしまう。

ウッドボデイは若い司祭にまだ息があることに気づき、抱き上げる。

ウッドボデイ

「名は何と申す？」

若い司祭

「……ハウル・ソウル」

ウッドボデイ

「リリース・ソウルの兄か？」

ハウル

「い、妹は？」

ウッドボデイ

「無事に逃げた」

ハウル

「……そうか」

ウッドボデイ

「……すまない、許してくれとは言わん」

ハウル

「……お前、変わっているな」

ハウルはポケットから小さな包みを取り出す。

ハウル

「妹に会ったら、……コレを渡してくれ」

ウッドボデイ

「わ、私がか!？」

ハウル

「申し訳……ないなら、頼まれてくれ。……お前は、悪い奴とは…

…思えない」

ウッドボデイ

「……承知した」

ウッドボデイは受け取る。

ソウル

「……感謝する」

ソウルは息を引き取る。

ウッドボデイは無言でソウルの屍を運ぶ。

戦乱の夜が明ける。

駆けつけた時空管理局が見た教会本部『ガイア』は、地獄となっていた。

建物も森林も何もかも破壊されていた。

何よりも酷かったのは、血にまみれた人骨だった。

千切れていた布はどれも司祭や騎士達の衣類だった。

無事に保護されたリリスはこの地獄を見て泣いた。

そして、心の奥に復讐の炎を燃やした。

リリス

「あいつらを燃やしてやる」

今、復讐の戦士が目覚める。

【????】

喰樹竜

「プハーツ、人肉はうまかった」

ブラッドローズ

「良かったですね、喰樹竜様」

ブラッドローズは喜び、

ウッドボディはあまり喜べなかった。

喰樹竜は大地の聖書を見て、

喰樹竜

「大地の聖書は破壊されたと、報告しておけ」

ウッドボディ

「えっ？」

喰樹竜

「この大地の聖書はわしが貰っておく。大地の聖書とわしの力は合
いそうだ」

ブラッドローズ

「それは良い考えでございますわ!」

ウッドボディ

「お待ち下さい、真王竜様に嘘をつけと?」

喰樹竜

「バレなければ良い」

ウッドボディ

「それは」

バキッ!

ウッドボディ

「ぐわっ!」

ウッドボディは喰樹竜に吹き飛ばされる。

喰樹竜

「……わしの命令に従え」

ウッドボディ

「……わ、わかりました」

ウッドボディはヨロヨロと立ち去る。

ブラッドローズ

「ふん、馬鹿な野郎だ」

ウッドボディは歩きながら、ソウルから渡された包みを見る。

ウッドボディ

「……リリース・ソウル。今度会うときは敵だ」

ウッドボディはそう予想するのだった。

終わり。

地獄の植物　そして復讐を誓うシスター（後書き）

青いタヌキ先生へ

この『リリス・ソウル』を新キャラクターにしては、いかがですか？

白き少女達との同盟。(前書き)

久しぶりの『DORAGONNEIRU〜竜の爪〜』に登場するメ
ンバーは……。

白き少女達との同盟。

【?????】

真王竜はぼーっと、専用の玉座に座っていた。

真王竜

（【けんぷファー】世界か……。ボインな美少女がいっぱいいるんだよな……）

意外にスケベな真王竜だった。

【けんぷファー世界】

この世界の住宅街に二人組が歩いていた。

赤いマントは魔炎竜。

青いマントは氷刃竜。

二人はとある家に到着する。

魔炎竜

「ここか」

魔炎竜はチャイムを鳴らす。

????

「はい」

玄関の戸を開いたのは…。

楓

「どなたですか？」

沙倉楓だった。

楓は二人の姿に驚く。

楓

「…どちら様ですか？」

魔炎竜

「我らは『竜の爪』です」

すると、楓の表情が変わる。

楓

「あなたが、『竜の爪』の使者ね」

魔炎竜

「はい、事前に連絡を受け取っている…」

すると、魔炎竜と氷刃竜の周りに四人の少女が取り囲む。

緑色の髪の少女が、皆川瞳美。

ピンク色の髪の少女が、植田理香。

黄色の髪の少女が、中尾沙也香。

黒髪の少女が山川涼花。

氷刃竜

「…何の真似だ？」

皆川

「得体の知れない奴と同盟を組めだ」と

中尾

「そんなふざけたこと」

山川

「出来るわけありません」

植田

「だから…」

楓

「逆に服従させるわ」

楓は合図を出すと、皆川達は武器を構える。

氷刃竜

「なるほどねえ…」

魔炎竜と氷刃竜はまったく動こうとしない。

楓

「…やりなさい！」

皆川達は襲いかかる、次の瞬間！

ピキーン！

皆川

「なっ！？」

植田

「えっ！？」

中尾

「うそっ！？」

山川

「冷たい！」

皆川達の足が一瞬に凍らさせられた。

氷刃竜

「…どうだ、少しは知ったか？」

楓

「ええ、ただ者じゃないってことがね」

氷刃竜

「ただ者じゃない、桂…、じゃなかった。曹操、でもなかった、氷刃竜だ」

魔炎竜

「そして、魔炎竜です」

【楓邸の居間】

魔炎竜と氷刃竜は楓と座りながら対峙する。

楓の後ろには、氷から解放された皆川達が立っていた。

楓

「確かにあなた方『竜の爪』の実力はわかったわ。確かに同盟する価値はあるわね……。でも、何で私達『白のケンプファー』と同盟を？」

魔炎竜

「我が『竜の爪』リーダーが各組織を調べてきましたね。あなた達と同盟する価値があると判断しました」

皆川

「……それで君達と同盟すれば、僕達にどんな得があるんだい？」

魔炎竜

「金銀財宝はもちろん」

氷刃竜

「欲しいものがあれば、何でも」

楓

「何でも……」

楓は考える。

魔炎竜

「あつ、そうだ！氷刃竜」

氷刃竜

「あいよ」

氷刃竜はオシャレな紙袋を取り出す。

楓

「それは？」

魔炎竜

「お近づきのしるしです」

氷刃竜は楓に手渡す。

楓は開けてみる。

楓

「こ、これは!？」

楓が驚いたものは、

体のあちこちに氷（偽物）がくっ付き、肌が水色で、お腹から内臓が飛び出ている、ドラゴンのぬいぐるみだった。

魔炎竜

「……あなたのお好きな【臓物アニマル】シリーズで、幻の珍獣」

ヒヨウケツドラゴン』です」

楓はヒヨウケツドラゴンを抱きながら、震える。

氷刃竜は耳打ちする。

氷刃竜

「…あれで喜ぶのか？」

魔炎竜

「…俺にも分からないよ」

自分達で用意したものだが、あれで喜ぶとは考えられなかった。

楓

「……欲しかった」

魔炎竜 / 氷刃竜

「えっ……」

楓

「欲しかったものが遂に手に入れた！可愛い」

魔炎竜 / 氷刃竜

「えーーーーーっ!?!」

まさかの一言で驚愕する。

楓

「魔炎竜さん！氷刃竜さん！」

魔炎竜 / 氷刃竜

「は、はい……」

楓

「私達『白のケンプファー』は、あなた達『竜の爪』と同盟します

「！」

皆川達

「えーーーーーっ!?!?」

今度は皆川達が驚愕する。

皆川

「か、楓様!」

山川

「それでよろしいんですか!?!」

楓

「だって〜」

皆川

「これだけで同盟しようなんて思っていないよね?ぬいぐるみだけで、僕達が協力するなんて…!」

魔炎竜と氷刃竜は我に返る。

魔炎竜

「も、もちろん、コレだけではありませんよ。コレを…!」

魔炎竜は一冊の冊子を皆川に渡す。

皆川

「これは?」

魔炎竜

「我が組織が研究し、開発したメカやモンスターのカタログです」

中尾

「まるで通販のカタログね」

氷刃竜

「それは同盟した組織に贈られる特別なカタログだ」

魔炎竜

「必要なものがあればいつでも送ります。送料はいりません」

氷刃竜

「その代わり、私達『竜の爪』には協力しろ」

楓

「わかったわ」

楓は手を差し出す。

魔炎竜

「同盟成立」

魔炎竜は楓と握手する。

【街】

魔炎竜と氷刃竜は真王竜に報告した後、デートする。

魔炎竜

「それじゃ」

氷刃竜

「脱ぎますか」

魔炎竜と氷刃竜は仮面を外し、マントを脱ぐ。

魔炎竜の素顔は、黒髪と黒い瞳の優しそうな青年。

氷刃竜の素顔は、髪は水色のロングヘアで、瞳は赤い宝石『ガーネット』のような綺麗な女性だった。

魔炎竜

「これからどこに行く？」

氷刃竜

「色んなご馳走が食べれるところ」

魔炎竜

「バイキングだね」

氷刃竜

「たっぷり喰えよ。栄養たっぷり補充して、寝床でたっぷり腰を振って…」

魔炎竜

「ちよつとちよつと、下ネタはよせよ…」

氷刃竜

「別に良いだろ？この【けんぷファー】世界はエロスたっぷりだから」

魔炎竜

「そーゆう問題じゃ…」

氷刃竜

「弟か妹ができれば喜ぶって」

魔炎竜

「で、でも…」

氷刃竜

「あたしが相手じゃイヤか？」

魔炎竜

「そんなことは無いって！」

氷刃竜

「そんじゃ、行くぞ」

氷刃竜は魔炎竜の腕を引っ張って行く。

魔炎竜

「…やれやれ」

魔炎竜は氷刃竜に弱いのであった。

続く。

白き少女達との同盟。(後書き)

こうして、『竜の爪』に協力する者達が現れることとなった。

少女達の欲しいもの(前書き)

短いながらエロく書きました。

少女達の欲しいもの

【楓邸内】

白のけんぷファー達が魔炎竜から貰ったカタログを読む。

皆川

「いったい、どれにしますか？」

楓

「そうね〜」

植田

「どうせなら、可愛いのがいいな」

中尾

「真面目に決めなさい」

山川

「どれも個性的ね」

皆川

「楓様、コレは使えそうです」

皆川が指したのは、

【怨魂】

戦争に巻き込まれて死んでしまった魂を実体化させたもの。物や動物などに当てれば取り憑き、暴れる。

コントロール可能。

わかりやすく言えば、『プリキュア』シリーズのザケンナーやウザ

イナーみたいなものです。 b a i 光翔竜

楓

「確かに使えそうね」

皆川

「でしよう?」

中尾

「こんなものもありますよ」

【バイオエイリアン】

寄生エイリアンの死骸から採取し、特殊に開発したエイリアン。死体に取り憑き、自らの体にする。コントロール可能。

エイリアンやホラー映画の好きな人にオススメです。 b a i 光翔竜

楓

「……あんまり使いたくないわね」

中尾

「……そうですね」

植田

「これなんか良いんじゃない?」

【呪血のビン】

我が『竜の爪』の呪血竜の血を入れた特殊なビン。
欲しい武器を念じればビンが割れて、呪血が望んだ武器の形に変わる。

呪血竜の呪血は自在に形を変えられます。 b a i 光翔竜

楓

「ところで、この光翔竜って？」

皆川はカタログで光翔竜を調べる。

皆川

「『竜の爪』メンバーの一人で、カタログのアドバイザーを務めているみたいです」

楓

「ふーん」

山川

「……こ、こんなものまでありますよ」

【オッパイザー】

相手（女性）のバストを瞬時に計るバイザー。
更にスリーサイズも計れ、天然であるか作りものであるかも識別できる。

これを使えば、憧れの人のことを大きく知れます。
私はこれで憧れのフェイトさんのバストを知りました。あれほどの
大きさを天然なんて。……私の予想以上でした。b a i光翔竜

皆川

「こ、こんなものであるのかよ」

皆川は引く。

楓

「へえー」

楓はオツパイザーを興味津々に見る。

植田

「あつ、こんなものである」

【オタ魂改】

前回の反省を生かし、どんなパンツも回収できるようになりました。
更にコントロールしやすく、美少女しか奪いません。

これで憧れのフェイトさんのパンツを……。
いえ、もちろん洗って返します。
憧れのフェイトさんのを奪ったままなんて、そんな嫌われる事はし
たくありませんから。

ただ知りたいんです、フェイトさんが何を履いているのか。

中尾

「……パンツを奪った時点で嫌われるでしょう」

楓

「オタ魂改ねえー」

楓は興味津々に見る。

山川

「こ、こんなものまで……」

【氷刃竜の精力剤】

氷刃竜の一族の秘伝薬。

昔、コレを飲んだ魔炎竜さんは氷刃竜と一生懸命一夜を頑張ったそうです。

フェイトさんに飲ませば、フェイトさんは一夜どころか一日中頑張れます。

そんなフェイトさんを想像するだけで私は……。 b a i 光翔竜

皆川

「なんだよ、このコメントは！？（怒）」

皆川はカタログを叩きつける。

皆川

「この光翔竜のコメント、途中からフェイトに対する生々しい気持ちを込めているよ！つーか、こんなものまでカタログに載せるなよ！（怒）」

山川

「お、落ち着いて〜」

皆川をなだめる。

すると楓はカタログを拾い上げ、携帯電話に番号を入れる。

植田

「楓様？」

中尾

「もしかして注文ですか？」

楓の携帯電話に着信がくる。

竜兵

「ご注文、ありがとうございます。『竜の爪』のアイテム提供係です」

楓

「欲しいものが三つあります」

竜兵

「はい、何でしょう？」

楓

「オツパイザー、オタ魂改、氷刃竜の精力剤を下さい」

四人

「ええっ!？」

竜兵

「あ、あれで良いんですか!？」

楓

「はい!」

竜兵

「わ、わかりました、送っておきます。お代はけっこうですので

通話が終わる。

皆川

「楓様、なんであの三つを……」

楓

「アレでナツルさんの胸を、パンツを、そして初夜を……。うふふ
っ」

楓は赤くなりながら笑う。

四人は啞然する。

こうしてナツルのある意味危機が迫るのだった。

そして、白のけんぷファーに新たな力が備わるのだった。
アイテム

終わり

少女達の欲しいもの（後書き）

フェイトさんがこの光翔竜のコメントを知ってしまったらどうなるでしょう……。

新たな竜の兵士（前書き）

凄く思いつきで書きました。

新たな竜の兵士

【????】

呪血竜を中心に、『竜の爪』メンバーが集まる。

呪血竜

「……遂に、完成しました」

真王竜

「あの技術がか？」

呪血竜

「はい、あの技術『サーヴァント化』です」

水蓮竜

「何それ？」

呪血竜

「英雄を使い魔に変える魔術技術だよ」

水蓮竜

「凄いの？」

魔炎竜に抱っこされる水蓮竜が尋ねる。

呪血竜

「英雄とは死んだ人。それを魔法の力で使い魔にする。使い魔とは、魔術師の手足となる生き物だ」

水蓮竜

「つまり……」

魔炎竜

「死んじゃった人を自分の家来にして、生き返させることかな」
水蓮竜

「生き返る、凄いね」

呪血竜

「しかし、今回は生身のまま、つまり生きたものをその使い魔にするのだ」

氷刃竜

「本当か？」

呪血竜

「『魔法』は自然の力だが、『魔術』は創られたものだ。組み換えをうまくすれば可能ではないかと研究した。魔炎竜と協力のおかげでな」

魔炎竜

「基本をしか教えてないけど…」

呪血竜

「何事も基本からだよ」

白天竜

「それで、その研究結果は…」

呪血竜は七枚のカードを見せる。

そのカードは、【Fate/staynight】の『セイバー』、『アーチャー』、『ランサー』、『ライダー』、『バーサーカー』、『キャスター』、『アサシン』のカードだった。

水蓮竜

「タロットカードみたい」

呪血竜

「そつだね」

真王竜

「そのカードは…」

呪血竜

「技術を閉じ込めました」

すると、七体の竜兵が現れる。

呪血竜

「まずは『セイバー』のカードです」

呪血竜は竜兵に『セイバー』のカードを当てると、カードが取り込まれる。

すると、

ピカーーーーーッ！

竜兵が銀色に光り出す。

メンバー達は驚く。

光が消えると竜兵は銀色の甲冑姿になる。

呪血竜

「これぞ、『竜剣兵』です。剣術を重視されています」

次に『アーチャー』のカードを竜兵に当てる。

カードは取り込まれ、赤く光り出す。

竜兵は肌色が赤くなり、弓矢を装備していた。

呪血竜

「これは『竜弓兵』です。弓術を重視されています」

次に『ランサー』のカードを当てる。

取り込まれ、青く光り出す。

上半身に鎧、長い槍を装備した姿になる。

呪血竜

「これぞ、『竜槍兵』です。槍術を重視にしています」

次に、『ライダー』のカードを当てる。

取り込まれ、紫色に光り出す。

肌色が紫色になり、鞭と手綱を装備した姿になる。

呪血竜

「これぞ、『竜騎兵』です。あらゆる生き物を操れます」

次に『バーサーカー』のカードを当てる。

取り込まれ、灰色に光り出す。

肌色が肌色になり、狂暴な野獣のような外見になる。
武器に薙刀を持つ。

呪血竜

「これぞ、『竜凶戦士』です。主に獣じみたで暴れます」

次に、『アサシン』のカードを当てる。

取り込まれ、黒く光り出す。

黒い忍び姿になる。

呪血竜

「これぞ、『竜暗殺者』です。主に暗殺や視察を得意分野にしています」

次に、『キャスター』のカードを当てる。

取り込まれ、白く光り出す。

白いフードを羽織り、魔法の杖を持つ姿になる。

呪血竜

「これぞ、『竜魔術師』です。魔術を得意とします」

水蓮竜

「凄い凄い!」

メンバー達は思わず拍手をする。

真王竜

「よくやった、呪血竜」

呪血竜

「しかし、まだ試験をしていません。そこで皆に、この竜兵達を選んで試してくれ」

白天竜

「それで呼んだのですね？」

呪血竜

「その通り。このまま自分専用の部下にしても良いから、自分に合ったものを選んでくれ」

メンバー達は竜兵達をじっくり見る。

真王竜

「選べるのは七つに一つだな」

呪血竜

「真王竜様には後で特別のを」

真王竜

「楽しみにするよ」

夜帝竜

「よし、あたしは『バーサーカー』だ。気が合いそうだ」

真王竜

「なるほど」

呪血竜

「『バーサーカー』は夜帝竜だ」

魔炎竜

「俺は『キャスター』だな。俺も魔術師だから」

氷刃竜

「じゃあ、私は『アサシン』だな。自分の扱えそうだ」

呪血竜

「魔炎竜は『キャスター』。氷刃竜は『アサシン』に決定」

白天竜

「それじゃ、『セイバー』ね、剣だから。黒鎌竜様は……」黒鎌竜
「いらぬ」

白天竜

「えっ……」

黒鎌竜

「白天竜の部下は俺の部下だ。……駄目か？」

白天竜は赤くなりながら、

白天竜

「いえ、全然いいです！」
と返事をする。

聖唱竜はクスツと笑う。

喰樹竜

「ワシは『ランサー』だ！」

光翔竜

「僕は『アーチャー』ですね」

呪血竜

「さて、残りの『ライダー』は……」

聖唱竜

「私には要らないわ。自分で兵士を造れるから」

呪血竜

「それもそうだな。ならば、私が『ライダー』だ」

こうして、新たな竜兵達の所属が決まった。

水蓮竜

「私は、私は？」

魔炎竜

「水蓮には早いよ」

水蓮竜

「お父さん達だけズルい」

氷刃竜

「呪血竜、水蓮にも新たな竜兵を……」

呪血竜

「えっ……」

水蓮竜

「お願い」

呪血竜

「そう言われても」

真王竜

「呪血竜、作ってやってくれ」

呪血竜

「いや、もうクラスは無いですから」

真王竜

「まだある」

呪血竜

「えっ？」

真王竜

「……『侍』だ」

水蓮竜

「『侍』？」

呪血竜

「あつたかな…」

真王竜

「無ければ、作っちゃえ」

呪血竜

「作っちゃえって…」

真王竜

「やってみる価値はあると思っぞ」

呪血竜

「えっ、え〜と…」

水蓮竜

「うるうる〜」

呪血竜

「…わかりました。研究してみます」

真王竜真剣な眼差しと水蓮竜のねだる眼差しに負ける。

水蓮竜

「やった〜」

氷刃竜

「良かったな」

喜び、水蓮竜を抱っこして、くるくると回る。

呪血竜

「はっー、仕事が増えたな〜。大量生産や他の研究もあるのに」

呪血竜は溜め息をつく。

白天竜

「……大変ですね」

こうして新たな竜兵が、

『竜の爪』に新たな戦力が加わった。

続く。

新たな竜の兵士（後書き）

これは青いタヌキ先生が喜ぶかもしれません。

人それぞれ、心に残っているキャラクターがいる。(前書き)

今回はギャグ編です。

人それぞれ、心に残っているキャラクターがいる。

【パソコンのある部屋】

カチャカチャ……。

夜帝竜の指示の元、

光翔竜はパソコンのキーボードを打ち込んでいる。

夜帝竜

「コイツはこうやって変身させよう」

光翔竜

「なるほど……」

すると、白天竜が入ってくる。

白天竜

「何をしてるんですか？」

夜帝竜

「ゲーム作り」

白天竜

「ゲーム作り？」

光翔竜

「奴らにはいつも邪魔されていますからね。仕返しにゲームで酷い評判を作ろうと考えているんですよ。軍資金調達及び敵のイメージダウンで一石二鳥の作戦でしょ？」

夜帝竜

「タイトルは、【格闘ゲーム・リリカルバトル大会】」

白天竜

「ふーん」

夜帝竜

「『銀魂』出身のあたしが、指導してるんだよ」

白天竜

「指導つて……」

光翔竜

「酷く笑える変身を指導させてもらっているんですよ。例えば……」

パソコンの画面に人物が表示される。

それは、秋本優太だった。

光翔竜

「例えば、この秋本優太をこうしちゃいます」

キーボードで入力すると、秋本優太が、

ドラえもんになる。

しかも、顔をそのままだった。

不気味なドラえもんのリアル顔である。

白天竜は笑いを堪える。

夜帝竜

「こいつはドラえもんのようにいろんな道具を出したりしてるし、異名が『青い死神』だから、ドラえもんにした」

光翔竜

「但し、笑いを取るために顔をそのまま残しました」

白天竜

「か、かえって不気味なんですけど」

光翔竜

「しかも、手足が短いので、パンチやキックは届きません。その上、体重が重いので、高く跳びません」

白天竜

「うわ、役に立たないわね」

光翔竜

「次、行ってみよう」

次は、久本雅也だった。

雅也は……、

化粧をして女の子の衣装を着た、不気味な姿になる。

白天竜は笑いを堪える。

光翔竜

「彼はモテモテなのに、女の子の気持ちをわかっていません」

夜帝竜

「そこで女になってもらい、女の気持ちを理解してもらおうと思ってな」

白天竜

「な、なるほど……」

次は臯月だった。

神代臯月は……、

珍獣ハンターの異名を持つ女芸人イトだった。

白天竜

「こ、この人はよくテレビに出ている……」

光翔竜

「そう、太い眉毛にセーラー服！そして、数多くの猛獣と戦ったあのイトさんです！」

夜帝竜

「こいつ、戦うヒロインなのに、影が薄いからインパクト与えたんだ」

白天竜

(……あれ、なんだろう。この娘が気の毒になった)

それは臯月と白天竜のイメージボイスが 藤静だからである。

次は村上絢だった。

絢は……、

教育テレビ』お あさんといっしょ』の着ぐるみシヨウ【にここ

ぶん】のピッ　口だった。

白天竜

「こ、これは？」

夜帝竜

「知っているか？昔の『お　あさんといっしょ』にいたペンギンだぞ」

光翔竜

「彼女はペンギン好きという情報がありました…」

白天竜

「なっている本人と今の世代の子供達にわかるかな？」

光翔竜

「そこは、お父さんやお母さんが教えてくれますよ」

次はメアリーだった。

メアリーは……、

お相撲さんになった。

夜帝竜

「コイツは影が薄い上に小さいからな。インパクトが強く、わかりやすいように体のボリュームを上げたんだ」

白天竜

「だからって、女性をお相撲さんにしてしまうのは……」

光翔竜

「いや、彼女は普段から、きつい毒舌を言っていますから、良いんじゃないですか」

白天竜

「た、確かに」

次は榊原綾華だった。

綾華は……、

プリキュアになった。

白天竜

「あ、あの歳で、プリキュア衣装は、ちょっと……」

白天竜は赤くなる。

確かにパンチラが見えそうなスカートに、胸の辺りがはちきれそうだった。

白天竜

「……このスタイルは？」

夜帝竜

「もちろん情報通りに再現した」

光翔竜

「かえって色っぽいですよ。それに彼女のイメージボイスは、青いタヌキ先生の大好きな水樹 々ですよ。水樹 々は既にプリキュアをやっているの、問題ありません！ちなみに、フェイトさんにも、

プリキュア衣装を着せたいんです、僕は。幼いフェイトなら断然似合います。今のフェイトさんもセクシーです」

光翔竜は幼いフェイトと現在のフェイトにプリキュア衣装を着せて、妄想する。

白天竜

「聞いてないわよ。……本当にフェイトファンクラブの会員ね」

夜帝竜

「次はそのプリキュアのパートナーだ」

次は榊原光だった。

光は……、

チョウチンアンコウの着ぐるみを着た姿になった。

その姿は、テレビゲーム【ぷよぷよ】の魚キャラに酷似していた。

白天竜

「魚！？しかもチョウチンアンコウ！？」

夜帝竜

「今までは小動物や小鳥だったから、今度は魚にしてみた」

白天竜

「でも、なんでチョウチンアンコウなんですか？」

夜帝竜

「光だから」

白天竜

「えっ？」

夜帝竜

「チヨウチンアンコウは光を放つんだ」

チヨウチンアンコウの長い突起の先には発光器があり、光で餌をおびき寄せせる。

白天竜

「た、確かに『光』という共通点はあるけど……」

白天竜は気の毒に思う。

次は滝嶋黒美だった。

黒美は……、

『おねがいマイメロディ』のクロミの格好になる。

白天竜

「……………これは？」

夜帝竜

「黒美をクロミにした」

白天竜

「なぜ、クロミなの？」

夜帝竜

「黒美だから」

白天竜はどこを突っ込めば良いか、わからなかった。

次は芹沢茜だった。

芹沢茜は……、

マイメロディの格好になる。

夜帝竜

「相方がクロミな上に、イメージカラーは赤だ」

光翔竜

「正確にはピンク色ですけど、問題ないでしょう」

白天竜

「……そうですね」

光翔竜

「次は自信がありますよ」

次は、ミレイザ・ラッシュエだった。

ミレイザは……、

女性芸人にし　わす　このように、ボルテージ服を着込み、鞭を持っていた。

光翔竜

「この人はドラゴンを従わせていますからね。それに歳のことを気にしてましたから、若く美しい女王様にしました」

白天竜

「……かえっておばさんっぽくなっているけど」

光翔竜

「えっ……」

夜帝竜

「それに女王様より、王女様の方が若く聞こえるぞ」

光翔竜は考える。

光翔竜

「問題ありません！ミレイザさんだから」

言い切る光翔竜を見て、白天竜と夜帝竜は、

「こいつ、確実に狙われるな」

と考える。

光翔竜

「そして、いよいよ彼女です」

それは高町ヴィヴィオだった。

白天竜

「この子は可愛くですか？」

夜帝竜

「いや、それじゃ不公平だろ」

光翔竜

「心を鬼にして、こっしました」

ヴィヴィオは……、

尻尾生やし、肌の色を真っ白。

髪型を残し、顔を冷酷な顔つきになる。

その姿は、『ドラゴンボールZ』の悪の帝王フリーザだった。

白天竜は恐怖する。

夜帝竜

「母親は『白い魔王』だから、娘は『白い帝王』だ。ちなみに名前は『ヴィーザ』だ。問題……」

白天竜

「あり過ぎでしょ！コレはまずいわよ！本人が見たら、本当に帝王になるわよ！」

光翔竜

「大丈夫です！販売する際は、偽名の会社を使います」

夜帝竜

「バレたとしても、戦えば良い」

光翔竜

「コレで完成です！大好評になったら、続編作ります」

夜帝竜

「追加キャラは、なのはや銀時などのアニメキャラな」

白天竜は、

「絶対にヴィーザ……じゃなかった、激怒したヴィヴィオとは戦いたくない」

と考えた。

完成されたゲームは販売された。

コレが思わぬ反響を呼んだ。

キャラクターの変身が面白いというのが、話題になったそうなの。

こうして、『竜の爪』の軍資金がかなり上がったそうなの……。

終わり。

人それぞれ、心に残っているキャラクターがいる。(後書き)

念のために言っておきます。

ちゃんと青いタヌキ先生の許可を得ています。

烈火竜を求めて……（前書き）

最近、青いタヌキ先生も読んでいたので、青いタヌキ先生ファンの皆さんも良かったら読んで下さい。

烈火竜を求めて……

【とある森】

深い森の中を歩く二人と一匹の獣と小さな妖精がいた。

ピンク色の髪にポニーテールの女性、『シグナム』。

そのパートナーであり、融合騎の『アギト』

蒼い色の狼、『ザフィーラ』。

そして、その二人を先導する少女、『村上絢』だった。

アギト

「ここなのか？」

絢

「うん、情報によれば、この森の奥に住んでいるらしいよ」
ザフィーラ

「こんなところに住んでいるのか……」

シグナム

「元『竜の爪』メンバー、烈火竜」

【森の中心】

絢達がたどり着いた場所は、小さな木の家が建ってある場所だった。

絢

「あの家だよ。ここから村や町に往診しに行っているらしいよ」
シグナム

「わざわざ此処からか？」

ザフィーラ

「ずいぶんかかるのではないか？」

すると、戸が開く。

絢達は茂みに隠れる。

出て来たのは、
紳士的な男性だった。

少し長めの黒髪に優しい目つき、鼻の下辺りに二つに別れた小さな
髭を生やしていた。

シグナム

「あの者がそうなのか？」

絢

「うん。名前はヒビキだって言っていたけど、偽名の可能性がある
から」

シグナム

「偽名か」

ヒビキは腰に付けているポーチに手を入れると、スクーター取り出
す。

シグナムとザフィーラとアギトは驚く。

そして、ヒビキの後ろに現れたのは、

ヒビキ

「留守を頼むよ、ミニ丸」

ミニ丸

「ドララ！」

忍びの姿をしたミニドラえもんだった。

ヒビキはスクーターに乗って、空を飛ぶ。

ミニ丸

「ドララ〜」

ミニ丸は手を振って見送る。

シグナム

「……あれは」

絢

「可愛い」

ザフィーラ

「そうではない」

アギト

「アレは確か、ミニドラ」

ザフィーラ

「ということとは……」

シグナム

「【ドラえもん】世界の出身」

【森の中の別の道】

フードを被った大柄の男と『??？機関』の戦闘員が進んで行く。

フードの男は腰に刀を携えていた。

戦闘員1

「うん！ヤイバ様」

フードの男は『ヤイバ』と呼ばれた。

ヤイバ

「……なんだ？」

戦闘員1

「アレを」

戦闘員1の指す方を見る。

それはスクーターで飛ぶヒビキだった。

ヤイバ

「アレは……」

戦闘員1

「追いますか？」

ヤイバ

「誰か追え。怪しいと思ったら、捕らえるのだ」

戦闘員2

「では、自分が」

戦闘員2は後を追う。

ヤイバ

「では、行くぞ」

戦闘員達

「ははっ！」

ヤイバ達は進行を再開する。

ヤイバ

「……アレが、元『竜の爪』メンバーの烈火竜かもしれんな」

【森の中の別の道2】

真王竜と白天竜が進行していく。

真王竜

「久しぶりにアイツと会う気持ちはどうだ？」

白天竜

「……そうですね、きっと怒りますね。メンバーになっちゃいましたから」

真王竜

「何を言われても、自分の気持ちをはっきり言えば良い」

白天竜

「……はい」

真王竜

「見せてやれ、成長した自分の姿を。特に、おっぱいをな」
白天竜

「はい。……って、見せるか！」

【村】

ヒビキは村の人々を診察していた。

ヒビキ

「……異常無し」

村人1

「ありがとうございます」

ヒビキ

「次の方」

戦闘員2は様子を監視していた。

戦闘員2

「……医者か」

すると、ロボットを連れた村人2がヒビキを訪ねる。

戦闘員2

「アレは!？」

村人2

「ヒビキさん、コイツの調子が」

ヒビキ

「どれどれ。ゴンスケ、何処が悪い」

ゴンスケ

「足腰が悪いんだ。このおっさんがこき使うからよ」

村人2

「おっさん言うな」

ヒビキはゴンスケの体を診る。

ヒビキ

「なるほど、手入れがうまくいってませんね」

村人2

「そうですか？」

ヒビキ

「後で教えましょう」

村人2

「すみません、機械はうまく扱えなくて……」

ゴンスケ

「女房はあんたを扱つのはうまいのにな」

村人2

「ほっとけ！」

村人達とヒビキは大笑いする。

戦闘員2は驚く。

戦闘員2

「医者なのか？ 科学者なのか？」

首を傾げる。

【ヒビキ宅前】

真王竜と白天竜がヒビキ宅に着く。

真王竜はノックをする。

戸が開く。戸を開けたのは……。

絢

「はい」

絢だった。

真王竜と絢はしばらく沈黙した。

絢

「竜の爪~~~~~!!」

真王竜と白天竜は耳を塞ぐ。

シグナム

「竜の爪だと!？」

シグナムは駆け寄り、レヴァンティンを構える。

ザフィーラも戦闘態勢になる。

白天竜は剣を構えるが、真王竜は制する。

真王竜

「ずいぶん物騒なご挨拶だな」

シグナム

「……我が名はヴォルケンリッターのシグナム」

アギト

「そのパートナーのアギト様だ！」

ザフィーラ

「ヴォルケンリッターのザフィーラ」

絢

「村上絢よ」

真王竜

「我が名は竜の爪リーダー、真王竜」

白天竜

「メンバーの白天竜です」

シグナム

「驚いたな、まさか、リーダーに会えるとは思ってもみなかった」

真王竜

「私も思ってもみなかったよ。君があのだ『烈火の将シグナム』に会えるなんて」

対峙するシグナムと真王竜の間には、緊張感が走った。

周りにも緊張感が走る。

真王竜

「噂通りの……」

シグナムは息を呑む。

真王竜

「見事な胸だ」

ズコッー！

シグナムは赤くなり、周りはずっとける。

せっかくの緊張感が無くなった。

真王竜

「いや、写真や映像で見えていたが、生で見ると、注がれる見事な巨乳だ」

シグナムは思わず胸を隠す。

真王竜

「おおっ、谷間もまた良い…」

グサッ！

白天竜は真王竜の尻を刺す。

真王竜

「痛っあああああ！」

白天竜

「何おっぱいの話をしてるのよ！」

ザフィーラと絢は唾然する。

アギト

「リーダーを刺したぞ！」

絢

「……気持ちはわかるけど」

シグナムは唾然としても、まだ胸を隠す。

白天竜は咳払いをし、

白天竜

「……大変失礼しました」

と謝罪する。

白天竜

「しかし、そちらが待ち伏せをしているとは……」

シグナム

「いや、別に待ち伏せをしていた訳ではない」

白天竜

「えっ？」

アギト

「コイツが入れてくれた」

ミニ丸

「ドララ〜」

ミニ丸を指す。

白天竜

「あつ、ミニ丸」

ミニ丸

「ドラ？」

ミニ丸は首を傾げる。

白天竜

「覚えてない？百合よ」

シグナム

「百合？」

ミニ丸は白天竜をじっくり見る。

白天竜は仮面を取る。

紺色のロングヘアー。

銀色の瞳をした美少女だった。

ミニ丸

「ドララ〜」

ミニ丸は白天竜に抱きつく。

白天竜

「……本当に久しぶり」

ミニ丸

「ドラ」

アギト

「……お取り込み中悪いけど」

白天竜

「はい？」

アギト

「素顔を見せてるぞ」

白天竜はしばらく止まる。

白天竜

「あああああ！」

ミニ丸

「ドララ！」

白天竜は驚きのあまりにミニ丸を離してしまい、ミニ丸を落とす。

【ヒビキ宅内】

白天竜は隅の向こうで落ち込む。

真王竜はシグナムとザフィーラとアギトと絢との対話形式に入る。

シグナム

「……ほっといて良いのですか？」

白天竜の落胆ぶりを見て、思わず気遣う。

白天竜

「私の馬鹿。私の馬鹿。私の馬鹿……………」

真王竜

「今はそつとしてやってくれ」

シグナム

「……………はい」

ザフィーラ

「早速で悪いのだが、この家に何しに来た？」

真王竜

「……………古い知り合いに会いに来た。こちらも聞こつ。どつして留守の家に君達が入っているのかな？」

ザフィーラ

「あのミニ丸が入れてくれた」

ミニ丸

「ドララ〜」

【数十分前】

ミニ丸がお掃除をしていると、誰かがノックする。

ミニ丸は飛んで、ドアのノブを開ける。

ノックしたのは絢だった。

絢

「…………可愛い！」

ミニ丸

「ドドララ!？」

絢はミニ丸に抱きつく。

アギト

「止めねえかあ！」

シグナムとアギトは止める。

ミニ丸は参ってしまう。

シグナム

「…………すまない」

ミニ丸

「ドドララ〜」

ミニ丸は台所に行き、お茶を沸かそうと、ヤカンに水を入れる。
しかし、運ぶ時は四苦八苦する。

シグナム達はヒヤヒヤする。

ミニ丸

「ドドララ!」

ミニ丸は転んでヤカンを落とそうとする瞬間、

ザフィーラ

「ふん！」

ザフィーラが滑り込んでヤカンを受け止める。

シグナム

「私がやるっ」

次に棚の上にあるお菓子を取るうと脚立に乗る。

シグナム達はまたヒヤヒヤする。

ミニ丸

「ドラッ」

ミニ丸がお菓子を取って喜んだ時、その弾みで脚立が揺れてしまい、ミニ丸が倒れる瞬間、

絢

「危ない！」

絢は瞬時にミニ丸を受け止める。

【現在】

真王竜

「あつはっはっはっ、相変わらずだな、ミニ丸」

ミニ丸は照れる。

アギト

「誉めてねえよ」

シグナム

「話を戻しましょう。……この家の主、ヒビキという人物とはどういた知り合いですか？」

真王竜

（あいつ、ヒビキと名乗っているのか）

シグナム

「……答えたくないなら、答えなくてよろしいです。後で本人からお聞きします」

真王竜

「本人の同意の元でかね？それとも、ありもしない罪状で連れて行くつもりかな？」

アギト

「人間き悪いことを言つなよ（怒）」

真王竜

「管理局は信用できない。……コレだけは言える、彼も管理局が大嫌いなんだよ」

ザフィーラ

「ほおー……」

シグナム

「なら、アナタから聞きたい。……何の為に『ロストログア』を集める？」

白天竜は気持ちを切り替えて、真王竜の返答待つ。

真王竜

「……潰す為だ」

ザフィーラ

「潰す？」

真王竜

「『正義』というすべての元凶
????

「実に興味深いな」

シグナム達や真王竜と白天竜は驚く。

ヤイバ

「その話、もっと詳しく聞かせてくれないか？」

ヤイバが入ってくる。

真王竜

「君は？」

ヤイバ

「『????機関』の『黒き雷ヤイバ』」

白天竜

「黒き雷ヤイバ!？」

絢

「知っているの？」

白天竜

「『????機関』内でも、かなりの実力者よ」

ヤイバ

「そつだ、俺は『????機関』内で随一の剣客だ」

真王竜

「ほおー」

ヤイバ

「『竜の爪』リーダーが居るといふことは、やはり『烈火竜』がいるのか？」

白天竜

「……真王竜様」

真王竜は黙る。

すると、シグナムが前に立つ。

シグナム

「……『??機関』か、貴様にも話が聞きたい」

ヤイバ

「……まいったなあ、どっちから話を聞こう」

ヤイバは悩む。

戦闘員2

「ヤイバ様！」

ヤイバ

「どうした？」

ヤイバは外に出る。

【ヒビキ宅前】

戦闘員2がヒビキを連れてくる。

ヤイバ

「そいつは？」

戦闘員2

「怪しいので、連れてきました」

ヒビキ

「別に怪しい者じゃない！」

戦闘員2

「お前は医者なのか科学者か、どっちなんだ？」

ヒビキ

「どっちもやっても良いだろう？」

戦闘員2

「生意気な」

ヤイバはヒビキに近づく。

ヤイバ

「両方やるとは、大した御仁だな」

ヤイバはヒビキをじっくり見る。

外の様子を真王竜を見ると、ヒビキが気付く。

ヒビキ

「真王竜！」

ヤイバは驚く。

真王竜

「……馬鹿」

ヤイバは視線を真王竜に向ける。

ヤイバ

「知り合いか？……もしやこの者が、『烈火竜』か」

ヒビキは焦る。

真王竜と同じく外の様子を見ていたシグナム達は驚く。

果たして、どんな展開になるのか……。

次回に続く。

烈火竜を求めて……（後書き）

ヒビキは烈火竜なのか、

どうする真王竜!?

ついでにシグナム達も!

絢

「あたし達はついでかい!？」

黒き雷と破邪の翼の激突！（前書き）

真王竜と??？機関の闘いが再び！

黒き雷と破邪の翼の激突！

【前回の話】

真王竜と白天竜は烈火竜に会いに行こうとするが、シグナム達と、
??機関と出くわすのだった。

【ヒビキ宅前】

真王竜やシグナム達は動けなかった。

ヤイバはヒビキを烈火竜と睨む。

ヒビキ

「れ、烈火竜？なんだそれは？私はヒビキという者……」

すると、ヤイバは刀を抜き、

グサッ！

ヒビキ

「グアッ！」

ヒビキの左足を刺す。

シグナム達は驚く。

ヤイバ

「少しだが、驚いた反応した。……隠すためにならんぞ」
ヒビキ
「くっ……」

ヒビキは痛みをこらえる。

その様子を見ていた白天竜は刀を抜こうとするが、真王竜はそれを制する。

ヤイバ

「正直に言え、貴様は烈火竜なのか？」

ヒビキ

「もしもそうなら、どうする？」

ヤイバ

「決まっている、『竜の爪』の情報を教えろ」

真王竜

「あのう……」

ヤイバ

「なんだ？取り込み中だ」

真王竜

「目の前に『竜の爪』のリーダーが居るんだけど」

ヤイバ

「それがどうし……、あっ……」

『???機関』組は気づく。

シグナム達は、

「気づけよう」

と突っ込む。

真王竜は前に出る。

そこへ、白天竜も出てくる。

ヤイバ

「もう一人居たか」

戦闘員達は真王竜と白天竜を取り囲む。

真王竜

「……白天竜」

白天竜

「はい」

真王竜

「ヤイバさんは私とやりたいらしい。お前は彼ら（戦闘員達）を」

白天竜

「わかりました」

白天竜は二本の刀を抜く。

真王竜

「空は飛べるかな？」

ヤイバ

「ああっ」

ヤイバは空高く浮かんでいく。

真王竜も空高く浮かんでいく。

シグナム達は驚く。

真王竜

「白天竜、そいつらを急いで始末して、ヒビキの治療を」

白天竜

「わかりました」

戦闘員 1

「舐めるな！」

戦闘員達は武器を取り出し、白天竜を囲む。

戦闘員 1

「やれ！」

戦闘員の数人は雷の魔法を放つ。

バシッ！バシッ！バシッ！

白天竜は雷を一本の刀で次々と斬る。
いや、斬ると同時に雷を吸収する。

戦闘員 1

「何！？」

戦闘員 2

「吸収した！？」

白天竜はもう一本の刀を掲げると、刀身から雷が発する。

白天竜

「雷、返します」

刀を横に構え、

白天竜

「白虎の爪!!」

雷でできた斬撃を一回転状に放つ。

戦闘員達達は悲鳴を挙げる暇も無く、真っ二つになる。

シグナム達は驚愕する。

シグナム

「見事な剣さばきだ」

ザフィーラ

「それに雷、いや魔法を吸収した」

アギト

「そして、威力を倍にして返しやがった」

絢

「……伊達にメンバーをやっていないね」

白天竜は急いでヒビキに駆け寄る。

白天竜

「大丈夫ですか？」

ヒビキを担ぐ。

ヒビキ

「…………百合か？」

百合こと白天竜は黙ってしまふ。

ヒビキ

「…………メンバーになったのか」

白天竜

「…………その話は後で」

ミニ丸

「ド拉拉、ド拉拉！」

ミニ丸は救急箱を掲げて、ヒビキを呼ぶ。

ヒビキ

「…………そうだな」

【空の上】

ヤイバは白天竜の剣さばきを見て、驚く。

ヤイバ

「なかなかやるね」

真王竜

「自分の部下を殺した相手をよく誉められるな」

ヤイバ

「敵だろうが、見事なら誉める。それに奴らは所詮使い捨てだ」

真王竜

「冷たいね」

ヤイバはフードを脱ぐ。

ヤイバの姿は、金髪の短髪。

服は『ブリーチ』の死神装束だった。

真王竜

「……死神か？」

ヤイバ

「ああつ、昔はな」

真王竜

「ということは『黒雷』という異名は斬パク刀か？」

ヤイバ

「その通り。この『黒雷』は闇と雷を合わせた斬パク刀なのだ」

『黒雷』を構える。

ヤイバ

「鳴れ、黒き雷!!」

『黒雷』の刀身から黒い雷が発し、周りを走る。

真王竜

「『バリアバースト』!」

真王竜は手をかざし、『バリアバースト』を発生させて防ぐ。

残った黒い雷がヒビキ宅にまで走ってくる。

シグナムは防ごうとするが、

いつの間にかヒビキ宅がバリアに包まれる。

黒い雷はバリアに打ち消される。

【ヒビキ宅内】

シグナムは驚く。

ヒビキ

「この家には、バリア発生装置を設置しているのだ」

壁に隠されたレバーを引いたヒビキは説明をする。

ヒビキ

「うっ…」

絢

「無理をしない！」

絢は痛がるヒビキの治療をする。

ザフィーラ

「助けに行かなくて良いのか？」

白天竜に尋ねる。

白天竜

「ご心配なく、あの人は一人の方がやりやすいんです。それに……」

アギト

「それに？」

白天竜

「私の師匠ですから」

【空の上】

真王竜

「闇と雷……」

ヤイバ

「驚いたか？」

真王竜

「ならば、こっちは闇と炎にしよう」

ヤイバ

「何!？」

真王竜は魔法陣を出し、魔法陣から出てくる柄を掴み引き抜く。

それはダークレヴァンティンだった。

【ヒビキ宅前】

シグナムは驚いた。

シグナム

「あれはレヴァンティン!?……いや、色が違う」

シグナムは自分と同じ武器を真王竜が持っていることに驚く。

【空の上】

ダークレヴァンティンの刀身から邪炎が燃え上がる。

ヤイバ

「邪炎……。そうか、ポイズンを殺したのは貴様か？」

真王竜

「そうだ。……仇討ちでもするのかな？」

ヤイバ

「ハッハッハッ！冗談じゃない、あんな変態野郎なんかの為にやるか！」

真王竜

「だろうと思った」

真王竜は構える。

ヤイバ

「俺は強い奴と闘いたいから、死神を抜けて、??機関に入った！」

ヤイバは黒雷を向けながら、真王竜に突撃する。

真王竜はダークレヴァンティンの刀身を片手で押さえる。

ギンンンンン！

黒雷の刃先とダークレヴァンティンの刀身がぶつかる。

真王竜は瞬時に黒雷を払いのけ、ヤイバの腹部に斬りかかるが、ヤイバは瞬時に下がる。

ヤイバ

「だぁー！」

ヤイバは黒雷を振る。

真王竜もダークレヴァンティンを振る。

ガキイン！ガキイン！ガキイン！

両者は激しく打ち合う。

二つの刃が重なる際には火花が散る。

一旦、両者は離れる。

ヤイバ

「本気を見せてやる、卍解！」

黒雷は形を変える。

黒い青龍刀になった。

真王竜

「……青龍刀なのに、黒いのか？」

ヤイバ

「細かい事を気にするな！これで動きも威力も倍増した！」

青龍刀から黒い雷が強く発生した。

ヤイバ

「行くぞ！」

ヤイバは消える。

いや、真王竜の後ろに回った。

ヤイバ

「消滅しろ、『黒落雷』！！！」

黒雷から放たれた強大な黒い雷が真王竜に襲いかかる。

真王竜は瞬時に、

真王竜

「邪竜一閃！！！」

ドカアアアアアン！

黒落雷と邪竜一閃はぶつかり、大爆発を起こす。

真王竜とヤイバは爆風に飛ばされる。

真王竜

「……………せつかく後ろに回ったのに、声を出したら意味が無いでしょう。……………仕方が無い、私も本気を出そう」

真王竜はマントを脱ぎ捨てる。

マントを脱いだ姿は、黒いインナーシャツを着ていた。

鍛えられた腕や肩にはいくつか傷があった。

そして、魔法陣を出す。

魔法陣から出てくる柄を掴み引き抜く。

それは白く綺麗な日本刀だった。

真王竜

「聖なる刀『破邪の翼』」

真王竜はダークレヴァンティンと破邪の翼で構える。

ヤイバ

「二刀流か」

ヤイバは黒雷を構える。

真王竜

「来い！」

ヤイバ

「ハアアア！」

ヤイバは黒雷を上段に構え、

真王竜はダークレヴァンティンと破邪の翼を二つを重ねて同時に動く。

バシユ！

互いはすれ違った後、動きが止まる。

黒雷が碎け散る。

ヤイバ

「……黒雷に何をした」

真王竜

「この『破邪の翼』は光と風の力を宿している。黒雷の闇は光が褪い、雷は自分の力で打ち消し、風で速さを増した。そして、心眼で僅かなひびを狙った」

ヤイバ

「……なるほどな」

ドバツーーーーー！！

ヤイバは腹部を斬られた。

ヤイバ

「……真王、竜……。確かに強者であつ……た」

ヤイバは邪炎に包まれて消える。

真王竜

「貴様はどこかで、死に場所を望んでいたのか」

真王竜はダークレヴァンティンと破邪の翼をしまい、拝む。

【ヒビキ宅前】

真王竜は脱ぎ捨てたマントを羽織り、ヒビキ宅に入るつとする。

そこへ、シグナムが立ちふさがる。

シグナム

「……お見事でした。流石はリーダーを務めることはあります」

真王竜

「……彼もなかなかの腕前だった」

ピキン！

真王竜の仮面が真つ二つに切り目が表れる。

シグナムは驚く。

真王竜の仮面が落ちる。

少し長めの黒髪に鼻の上に傷跡がある。

そして顔付きは、シグナムの見覚えのあるのだった。

シグナム

「た、高町、士郎殿!？」

そう、高町なのはの父、高町士郎にそっくりだった。

アギトもザフィーラも驚く。

絢

「……高町士郎って」

ザフィーラ

「なのはの父上だ!」

絢

「ええっ!?!?ということとは、なのはさんのお父さんが『竜の爪』のリーダー!?!?」

アギト

「そんな訳ないだろ!」

真王竜

「……他人の空似だろう?」

シグナムはじっくりと観察する。

シグナム

(確かに髪はこんなに伸びてはいないし顔に傷跡は無い。何より、声が違う)

真王竜はシグナムを無視して、ヒビキ宅内に入る。

シグナム

「あっ……」

【ヒビキ宅内】

白天竜

「真王竜様、ご無事で……あっ！」

真王竜

「……私も素顔を晒してしまった」

白天竜

「まずいですね……」

真王竜

「過ぎたことは仕方ない。それより、ヒビキ」

ヒビキと向かい合う。

ヒビキ

「久しぶりだな。……何のようだ？」

真王竜

「……もうすぐ大事なアレが始まる」

ヒビキ

「アレ？」

シグナム達は息を呑む。

しばらく沈黙になる。

真王竜

「水蓮竜の誕生日だ」

ヒビキ

「えっ？」

シグナム

「水蓮竜？」

ザフィーラ

「誕生日？」

シグナム達は首を傾げる。

ヒビキ

「ああっ、そうか。ミニ丸」

ミニ丸

「ドララ」

ミニ丸は奥に行き、プレゼントを取ってくる。

ミニ丸

「ドララ」

白天竜に渡す。

白天竜

「ああつ、ありがとう」

ヒビキ

「……百合、メンバーになった理由はなんだ？」

白天竜は動きが止まる。

ヒビキ

「真王竜、お前も何故許した？」

真王竜

「……止めれなかった」

白天竜

「……あの人についていくと決めたんです」

ヒビキは白天竜の真剣な眼差しを見て、ため息をつく。

ヒビキ

「……確かに止められないな」

白天竜

「……すみません」

ヒビキ

「君が決めた道だ。……ただし、生き抜け」

白天竜

「……はい」

シグナム

「あのう、お取り込み中すみませんが……」

真王竜

「ああつ、そうだったな」

シグナム

「はい」

真王竜

「白天竜、退散だ」

白天竜

「はい！」

真王竜と白天竜は全速力でヒビキ宅を出る。

シグナム

「違っただろうっ！」

真王竜

「シグナム、君の巨乳は最高だった！」

シグナム

「大声で言うな！」

シグナムは顔を赤くするのだった。

その後、シグナム達はヒビキに『竜の爪』に関しての情報を聞こうとするが、

ヒビキ

「ただの常連客だ」

としか言わない。

その上、

ヒビキ

「私は時空管理局が大嫌いだね、協力するつもりは無い」

と協力拒否をする。

怪我もしているので、連れて行くわけには行かなかったもので、一時『新機動六課』に戻るのだった。

終わり

黒き雷と破邪の翼の激突！（後書き）

真王竜の驚く素顔。

真王竜とは一体？

ヒビキとは何者！？

謎が深まるばかりであった。

竜よりどら焼き(前書き)

久しぶりにギャグ編です。

竜よりどら焼き

【とある会場】

数多くのアニメキャラクターが集まっていた。

司会者

「お集まりの皆様、よくお越しになりました。これよりドラえもん様の誕生日会を開きます。ドラえもん様、どうぞ」

ドラえもんが舞台上に現れると、拍手が響く。

ドラえもん

「ども、こんにちは。今日は来てくれてありがとうございます！」

そんな様子を遠くから見ていた三人の女性がいた。

髪の色は紺、水、きずいせんの色していた。

それは白天竜、氷刃竜、夜帝竜だった。

白天竜

「ドラえもんって、本当に大人気ですね」

氷刃竜

「あのタヌキ面が人気だな」

夜帝竜

「モグモグ」

夜帝竜はパーティーの料理を食べていた。

白天竜

「ちよつと、まだ食べちゃいけませんよ」

夜帝竜

「なんで？」

白天竜

「目的忘れたんですか」

夜帝竜

「あつ、そうか」

夜帝竜は目的を思い出す。

【アジト】

呪血竜は三人にミッションを話す。

呪血竜

「ドラえもん世界でドラえもんの誕生日パーティーが開かれます。メインイベントに『どら焼き早食い競争』をやる予定です。優勝者には、とても珍しい賞品が頂けます」

白天竜

「わかりました。贈呈される場所を奪うのですね」

呪血竜

「いや、優勝するのです。そこにはたくさんの方のアニメキャラクターが集まります。いくら戦闘力のあるあなた方でもてこずります。しかし、あなた方の大食いであれば難なく手に入るはずですよ」

氷刃竜

「それ、誉めているのか？」

夜帝竜

「食べれるなら何だっていいや」

白天竜

「……わかりました。やってみせます！」

【現在】

夜帝竜はパーティーの料理を置く。

司会者

「それでは本日のメインイベント『どら焼き早食い競争』を始めます！」

「わー」

と歓声が響く。

司会者

「ルールは簡単。制限時間内に一番多くどら焼きを食べた人の勝ちです！なお、審査員には秋本優太さんが務めます」

優太

「どうも、厳しく審査します」

司会者

「それでは、出場者の入場です、拍手を！」

アニメキャラクター達の拍手に伴い、出場者が入場してくる。

『糖分王』の異名を持つ天然パーマ、坂田銀時。

『かぶき町の女王』神楽。

地味だが、突っ込みは冴える新八。

虎の髪飾りは伊達じゃない、張飛。

体は小さいが、胃袋が底なし、許緒。

『大食い王』の異名を持つ騎士、セイバー。

ピンク色の星の戦士、カービィ。

蒼きフロントアタッカー、スバル・ナガジマ。

電光の騎士、エリオ・モンディアル。

甘い大好き聖王、高町ヴィヴィオ。

参加者、百合（白天竜）。

同じく、鳳華（夜帝竜）。

同じく、フローズ（氷刃竜）。

そして、本日の主役のドラえもんだった。

彼らの目の前に、山のように詰められたどら焼きが運ばれてくる。

司会者

「食べた個数はアシスタントがカウントしてくれます。それでは、スタート！」

出場者達は勢いよく食べ始める。

特に……、

銀時

「バクバクバクバクバクバク」

新八

「バクバクバクバクバクバク」

神楽

「モグモグモグモグモグ」

万事屋トリオは物凄い勢いでどら焼きを食べる。

銀時

「てめーら、1ヶ月分喰えないほど満腹にしやがれ！」

張飛

「凄いのだ！でも、鈴鈴も負けないのだ！」

張飛も勢いよくどら焼きを食べる。

許緒

「あーん、モグモグ。あーん、モグモグ」

関羽

「鈴鈴、あんまり早く食べるな」

関羽は応援するが、劉備は白天竜を見る。

劉備

(あの子、もしかして……)

許緒はゆっくりと食べる。

セイバー

「モグモグモグモグモグモグ」

どら焼きをゆっくり食べる。

メタナイト

「カービィにも劣らん食欲だ」

ドゥーエ

「カービィもやるわね」

カービィ

「あ~~~~~ん」

大量のどら焼きを一飲み食べる。

皐月

「少しは味わいなさいよ」

スバル

「美味しい」

エリオ

「まだまだいけます」

スバルとエリオは余裕しゃくしゃくでどら焼きを食べる。

ティアナ

「スバル、しっかり！」

キャロ

「……相変わらず凄い食べっぷり」

ヴィヴィオ

「美味しい」

ヴィヴィオは幸せそうに食べる。

皐月

「ヴィヴィオ、可愛い」

雅也

「ほどほどにな」

メアリー

「シュークリームなら、私が優勝してます」
「マール」
「って、関係ないでしょう」

ドラえもん

「あくん、モグモグ。このどら焼きの餡は見事だ!」

どら焼きをじっくり味わいながら食べる。

のび太

「ドラえもん、頑張って!」

静香

「ドラちゃん、頑張って!」

白天竜

「あん、モグモグ。あん、モグモグ」

氷刃竜

「あん、モグモグ。あん、モグモグ」

夜帝竜

「モグモグモグモグモグ」

それぞれのペースで食べる。

白天竜

(優勝候補はやはりカービィかセイバー、そしてスバル・ナガジマ。
坂田銀時も侮れないな)

白天竜は警戒しながら食べる。

すると、カービィが食べ終える。

カービィ

「おかわり」

アシスタント

「しばらくお待ち下さい」

カービィ

「待てないよ」

カービィは右の銀時、左のセイバーのどら焼きに目を留める。

カービィ

「いただきます」

カービィは銀時とセイバーのどら焼きを食べる。

その時、銀時とセイバーはカービィを睨み、

銀時／セイバー

「てやあー!」

ドガツバキツ!

銀時とセイバーはカービィに跳び蹴りを喰らわせる。

出場者も、司会者も、アニメキャラクター達も、そして『竜の爪』メンバーも驚愕する。

カービィ

「ペポッ…」

カービィは気絶する。

司会者

「あなた達、何やってんの!?!」

セイバー

「人のどら焼きを」

銀時

「勝手に盗るな!」

銀時/セイバー

「何歩たりとも、坂田家(王)の食卓に入ってくるな!」(怒)「」

銀時とセイバーは宣言する。

司会者

「食卓宣言です!完全に自分達の領土にしました!」

優太

「銀時は甘いもの、セイバーは食に対する情熱は凄まじいですからね」

アシスタントはカービィを診てみる。

カービィは完全に気絶していると判断し、カービィを担架で運んでいく。

司会者

「これは予想外、優勝候補のカービィがまさかの退場です！」

白天竜

(ゆ、優勝候補のカービィが退場した！これで少しは優位になった)

カービィが抜けた後も、どら焼きを食べる出場者の勢いは止まらなかった。

神楽

「おかわり！」

神楽はどら焼き、

……ではなくご飯を要求する。

アシスタント

「あのう、なんでご飯を要求ですか？どら焼きの早食い競争なのに」

神楽

「ご飯を食べなきゃ、食べた気にならないネ」

アシスタント

「今やっているのは、どら焼きの早食い競争です！普通にご飯を食べません！」

白天竜は意を決して、

白天竜

「異議有り！どら焼き以外のものを食べるのは反則ではありません

か？」

夜帝竜

「そうか？」

夜帝竜はどら焼きをおかず代わりに、カツ丼を食べていた。

白天竜

「何やってんの!？」

夜帝竜

「見てわからないか？カツ丼を食べているんだよ」

白天竜

「なんでカツ丼を食べているの!？」

夜帝竜

「カツ丼食べなきゃ食べた気がしないんだよ」

白天竜

「カツ丼は主食代わりかい!？」

司会者

「えっ」と、この異議をどうしましょうか？」

優太

「別に反則にはならないんじゃないかな。食べるのが目的だから」

司会者

「異議は却下されました。言うなれば調味料をかけているのと同じ要領です」

スバル

「そうなんだ!じゃあ、あたしも」

スバルはアイスクリームを取り出す。

ティアナ

「真似しなくて良い!」

ティアナはスバルからアイスクリームを取り上げる。

新八

「神楽ちゃん、炭水化物と炭水化物の取りすぎは良くないよ
アシスタント

「あなたも何をしてるんですか？」

新八はどら焼きをタッパーに入れていた。

新八

「冷蔵庫に入れて、温めればまだ食べれます」
アシスタント

「今、食べなきゃ意味がないんですよ」

白天竜

「異議有り！持ち帰りは競争の理念に反するのでは？」

氷刃竜

「えっ、駄目なのか？」

氷刃竜もどら焼きをお弁当箱に入れていた。

白天竜

「あなたも何やってんですか！？」

氷刃竜

「うちの子にも食べさせようと思って」

白天竜

「後でパーティーの料理がお菓子を用意させれば良いでしょ！」
司会者

「えっくと、この異議は？」

優太

「さすがに受理でしょう」

司会者

「異議は受理されました！お持ち帰りは反則です！」

新八

「ちっ！」

アシスタント

「……あなた、何しに来たんですか」

すると、

エリオ

「グオツ！！」

エリオは叫んで倒れる。

周りは驚く。

キャロ

「エリオ君！」

アシスタントは診てみる。

アシスタント

「こ、これは！？」

司会者

「どうした！？」

アシスタント

「このどら焼きを見て下さい！」

アシスタントはエリオの食べたどら焼きを見せる。

よく見ると、どら焼きの生地挟んである黒いのは餡ではなく、黒こげたものだった。

銀時

「あ、あれは！」

新八

「姉上の『ダークマター』！」

セイバー

「ダークマターとは何ですか？」

新八

「……僕の姉上が作る玉子焼きです」

セイバー

「玉子焼き！？あの黒こげた物体が玉子焼きと言つのですか！？」

張飛

「愛紗のより酷いのだ！」

関羽

「なんだと！（怒）」

銀時

「そのダークマターがあるってことは……」

妙

「私が作りました」

なんと志村妙が現れる。

妙

「お手伝いで餡をこねました」

ティアナ

「いや、おかしいでしょう！なんで餡をこねたら、黒こげた物体が出来るのよ！？」

司会者

「一時停止！すぐに志村妙さんのこねた餡のどら焼きを取り除いて！」

妙

「ちょっと、どろじてよ（怒）」

皐月

「まあまあ！」

雅也

「抑えて抑えて！」

妙は怒るが、皐月や雅也に抑えられる。

しばらく、妙のどら焼きの仕分けをする。

仕分け後、競争が再開される。

張飛

「……もう、駄目なのだ」

張飛は気絶する。

関羽

「鈴鈴！」

桃香

「鈴鈴ちゃん！」

二人は駆け寄る。

関羽

「しっかりしろ！」

アシスタント

「張飛、脱落です」

劉備は白天竜を見つめる。

白天竜はそれに気づくが、見て見ぬ振りをする。

劉備

「……あなたはもしかして」

関羽

「姉上！」

劉備

「あつ、ごめん！」

二人は張飛を連れて行く。

白天竜

(……桃香、ごめんなさい)

銀時

「うぶっ……」

新八

「もう駄目っ……」

銀時

「……まだだ。まだ終わっちゃいね。神楽！」

神楽はタップをする。

神楽

「かも〜ん、こっからが仕事ネ」

銀時

「新八！」

新八

「はい！」

新八はどら焼きを生地と餡に分けて、銀時に渡す。

銀時

「たらふく喰いやがれ！」

銀時は分けたどら焼きを神楽の口に目掛けて投げる。

神楽は投げたどら焼きを食べる。

夜帝竜

「やるな！フローズ！」

氷刃竜

「わかった！」

氷刃竜もどら焼きの生地と餡に分けて、夜帝竜の口に目掛けて投げる。

そして、夜帝竜は食べる。

司会者

「なんと、どら焼きの生地と餡に分けて食べやすくしている！」

優太

「もう競争じゃなくなっているな」

司会者

「おおっ！」

神楽はご飯を、鳳華はカツ丼も一緒に食べていた。

司会者

「なんと！神楽はご飯を、鳳華はカツ丼を再び主食にしている！」

銀時

「馬鹿、ご飯を喰うなよ！」

氷刃竜

「お前もカツ丼を喰うなよ！」

神楽

「ご飯を食べなきゃ食べた気がしないネ！」

夜帝竜

「カツ丼を喰わなきゃ、腹が満たされた気がしないんだよ！」

その時！

ベチャ！

神楽／夜帝竜

「グオツ！」

餡が二人の目に当たる。

神楽／夜帝竜

「目が、目が！」

銀時

「神楽！」

氷刃竜

「鳳華！」

銀時と新八は神楽に、氷刃竜と白天竜は夜帝竜に駆け寄る。

銀時

「新八、神楽を医務室に運べ」

新八

「銀さんは？」

銀時

「後は糖分王の俺がやる！」

白天竜

「フローズも鳳華を連れてって下さい。後は私がやります！」

新八

「でも、それ以上食べると本当に糖尿病に……」

氷刃竜

「それ以上食べるとますます太るぞ」

銀時

「ったくよ、これだから最近の若い者は」

白天竜

「ここで諦めたくないんです！」

銀時と白天竜の真剣な眼差しに心を打たれ、新八は神楽を、氷刃竜は夜帝竜を連れて行く。

銀時

「こっからが」

白天竜

「本番よ」

神楽、新八、氷刃竜、夜帝竜が退場した後の競争は過激になる。

ヴィヴィオ

「お腹いっぱいだよ」

スバル

「お腹が痛いよ」

ヴィヴィオは満腹に、スバルはアイスクリームと一緒に食べて腹痛をおこす。

ヴィヴィオとスバルは退場する。

雅也

「つーか、スバルさんは馬鹿か!？」

白天竜、銀時、そしてドラえもんは胃袋の限界を超えてもどら焼きを食べ続ける。

ドラえもん

（なかなかやるね。だけど、負ける訳にはいかないよ。何故なら、僕はドラえもん。どら焼き大好きなネコ型ロボットだ!）

銀時

（糖分王の名に賭けて、負ける訳にはいかねー）

白天竜

（私だって、『竜の爪』のメンバーよ。この勝負、負ける訳にはいかない!）

三人は残りのどら焼きを食べようとするど、

セイバー／許緒

「「おかわり（下さい）」

平然とおかわりを要求する。

それを見た三人は顔色を変えて、倒れる。

その時、ブザーが鳴った。

司会者

「時間です！終了です！」

のび太

「ドラえもん！」

静香

「ドラちゃん！」

二人は駆け寄る。

司会者はアシスタントの報告を聞く。

司会者

「判定を言います。食べた数は互角です！よって優勝はセイバーと許緒の両者です！」

「わー！」と歓声が響く。

メタナイト

「まさか優勝するとは」
ドゥーエ

「あの許緒も凄いわ！」

優勝賞品の贈呈が始まる。

司会者

「優勝賞品は全国のどら焼きが無料で食べれる『どら焼き無料券』
一年分です」

許緒

「わーい！」

セイバー

「これでしたらくは食べ物に困りませんね」

『竜の爪』メンバー達は啞然する。

白天竜

「あ、あれが賞品……」

夜帝竜

「いいな」

氷刃竜

「つて、まだ食べる気か？」

司会者

「それでは最後のサプライズ、コンサートです」

会場の真ん中から現れる三人の歌手。

それは、

ジャイアン

「みんな、俺の歌を聴け！」

カービィ

「食べられなかった分、歌うぺポ！」

新八

「いくぞ！」

アニメキャラクター達は恐怖する。

三人

「「「」」」

会場に音痴な歌が響く。

しばらく歌が続いた。

三人

「「「みんな、ありがとう（ぺポ）」」」

すべての者は三人の歌で気絶するのだった。

雅也

「……なんだよ、このオチ？」

メアリー

「ドラえもんだから、じゃないですか」

終わり。

竜よりどら焼き(後書き)

感想が来たら嬉しいです。

黒鎌竜と鬼川の闘い！(前書き)

今回は初のゲスト出演者が現れます。

黒鎌竜と鬼川の闘い！

【????】

白天竜

「……………うっぷ」

夜帝竜

「目が……………。目が……………」

氷刃竜

「……………腹が破裂しそうだ」

魔炎竜

「氷刃竜、しっかり……………」

三人の女性メンバーは前回のどら焼き早食い競争でたくさんのだら焼きを食べ過ぎていた。

ちなみに夜帝竜はどら焼きの餡で目をやられていた。

黒鎌竜は唾然する。

聖唱竜

「しばらくは安静ですね」

聖唱竜は診察して、判断する。

黒鎌竜

「……………優勝しなくて良かったな。またどら焼きを食べる羽目になるところだったから」

白天竜

「どら焼きの話をしないで」

夜帝竜

「餡が……。餡が……」

氷刃竜

「口の中がまだ甘い……」

女性メンバーはすっかりどら焼きのトラウマになった。

黒鎌竜

「……仕方がない。一人で行くか」

白天竜

「……すみません」

黒鎌竜は出て行き、目的地に行く。

そんな黒鎌竜の後を追う小さな影がいた。

【恋姫の世界】

魔法陣から黒鎌竜が現れる。

黒鎌竜

「……何付いて来ている？」

黒鎌竜は既に何者かの気配に気づく。

?????

「バレちゃった」

姿を徐々に現したのは、水蓮竜だった。

『見えなくなる輪』を使って姿を消していた。

黒鎌竜

「気配で気づいていた」

水蓮竜

「やっぱり黒鎌竜は凄いや」

黒鎌竜

「誉めても何も出ないぞ。……というより、なんで付いて来ている？」

水蓮竜

「お父さんとお母さんの代わりにお仕事しにきたの。お父さん、お母さんの看病してるから」

黒鎌竜

「……気持ちはわかるが、帰れ。仕事の邪魔だ」

水蓮竜

「邪魔はしないからお手伝いさせて」

黒鎌竜

「そんなことをさせたら、お前のお父さんに焼き尽くされ、お母さんに凍らさせる」

水蓮竜

「うっ……」

黒鎌竜

「早く帰らないと……」

ガバツと水蓮竜を伏せさせる。

黒鎌竜

「こーなるぜ」

ジャキ！

「ぐおー……」

黒鎌竜は処刑マジニを一刀両断にする。

黒鎌竜

「『ダーク・フォース』」

黒鎌竜は水蓮竜を黒い結界に包む。

黒鎌竜

「しばらく其処にいる」

黒鎌竜は大鎌を構える。

すると、続々とマジニ達がやってくる。

黒鎌竜

「随分手荒な歓迎だな！」

黒鎌竜は瞬時に動く。

マジニ達は黒鎌竜を探す。

ポトツ。

数体のマジニの首が落ちる。

黒鎌竜は後ろに回り、大鎌でマジニ達の首を斬ったのだった。

ガトリングマジニ

「ぐおー！」

ガトリングマジニは黒鎌竜に向けてガトリング砲を発射する。

黒鎌竜は大鎌を高速に回転させ、ガトリングの弾を弾く。

ガトリングマジニは驚く。

黒鎌竜は回転させた大鎌をガトリングマジニに向けて投げる。

回転する大鎌はガトリングマジニを真っ二つに斬り、黒鎌竜の手に戻る。

黒鎌竜はそのまま大鎌を握り、大振りする。

大鎌の刃先はマジニ達を一気に突き刺す。

黒鎌竜

「おりゃあ！」

ザシュザシュザシュ！

突き刺したマジニ達をバラバラに切り裂く。

黒鎌竜はマジニ達の返り血を浴びる。

水蓮竜

「黒鎌竜く、どうかしたの？」

水蓮竜は『ダーク・フォース』の外側の様子を見れなかった。

黒鎌竜

「もう少し其処にいな」

黒鎌竜の目の前にとある人物が現れる。

それは、鬼川 仁だった。

鬼川

「見事だよ。これが各世界を騒がせている『竜の爪』の実力なんだね」

黒鎌竜

「貴様が鬼川 仁か？」

鬼川

「はい、ようこそ【恋姫の世界】へ」

黒鎌竜

「来いって言うっておきながら、ずいぶん酷い歓迎だな」

鬼川

「君達の腕を確かめたいからね。なるほど、確かに世界を騒がせる程の実力だ」

黒鎌竜

「それで、呼び出した理由はなんだ？」

鬼川はあるものをポケットから取り出す。

鬼川

「この『ウロボロス・ウイルス』を使つて欲しいんだ」

黒鎌竜

「それが『ウロボロス・ウイルス』か？」

鬼川

「そうだ。人間の進化を助ける賢者の石とも言われている。遺伝子と適合していれば、理性を保ちながらも超人的な力を手に入れることができる」

黒鎌竜

「しかし遺伝子が拒絶反応すれば、暴走してしまい化け物になる」

鬼川

「その通りだよ。よく調べたね」

黒鎌竜

「こちらの情報収集を舐めては困る」

鬼川

「話が早い。ではこの『ウロボロス・ウイルス』を差し上げよう。これは私からの同盟の証として受け取つて欲しい」

鬼川は『ウロボロス・ウイルス』を黒鎌竜に差し出す。

しかし、黒鎌竜は受け取らずにそのまま立ち去ろうとする。

鬼川

「ま、待ちたまえ！ いらなのかね？」

黒鎌竜

「ああっ、お断りだ。そんなウイルスも同盟もな」

鬼川

「理由はなんだね？」

黒鎌竜

「気にいらねえからだ。ウィルスもてめーも」

鬼川

「おいおい、僕のことまで嫌うのかい？」

黒鎌竜

「あんな歓迎を受けて、『はい、同盟します』って言うと思っているのか？……それに、ウィルスに頼るほど落ちぶれてねえーよ、俺の組織は」

鬼川

「そんな勝手に決めて良いのかね？」

黒鎌竜

「俺の言葉はうちの大將の言葉なんだよ」

黒鎌竜は再び立ち去ろうとする。

鬼川

「……この僕の誘いを断ることは」

鬼川が指を鳴らすと、

ドガアアアアアン！

地面から新たなガトリングマジニが現れる。

新たなガトリングマジニは黒鎌竜の倒したより巨大だった。

鬼川

「万死に値する、行け！」

ガトリングマジニ

「グオー」

ガガガガガガガガ！

ガトリングマジニはガトリングを撃つ。

黒鎌竜は大鎌を回転させて防ぐ。

背中に弾倉を背負っているので、弾切れする様子は無かった。

黒鎌竜は弾を防ぎながら接近する。

ガトリングマジニに近づいた瞬間、

マジニ

「グオツ！」

バッキ！

黒鎌竜はガトリングマジニにガトリングガンで殴られ、吹き飛ばされる。

更にガトリングガンで黒鎌竜は撃たれる。

黒鎌竜の身体が八つ裂きにされる。

黒鎌竜は倒れる。

鬼川

「ふん、馬鹿な奴だ」

すると、『ダーク・フォース』が消え、水蓮竜が外の様子を見る。

水蓮竜

「あつ……」

倒れる黒鎌竜見て、駆け寄る。

水蓮竜

「黒鎌竜起きてよ！」

黒鎌竜はピクリとも動かなかった。

鬼川

「ソイツは死んだ。次は君の番だよ」

ガトリングマジニは水蓮竜にガトリングガンを向ける。

水蓮竜は怯える。

???

「つくづく見下げたやろうだな」

鬼川

「だ、誰だ!？」

鬼川に水蓮竜は突然の声に驚く。

すると、黒鎌竜の持っていた大鎌が立ち上がる。

鬼川と水蓮竜は更に驚く。

大鎌は浮かび上がり、そして形を変えていく。

メキメキバキバキ

大鎌は竜の姿に変わる。

黒く堅そうな体で、背中には大鎌に酷似した翼を生やしていた人型の竜だった。

鬼川

「な、なんだあれは!？」

水蓮竜は竜を見つめ、

水蓮竜

「黒鎌……竜？」

と尋ねる。

すると、竜は水蓮竜の頭を撫でる。

???

「脅かして悪かったな」

黒鎌竜だった。

水蓮竜は喜ぶ。

鬼川

「……大鎌が本体だったのか。その上、姿は化け物か」
水蓮竜

「そんなことないもん！カッコいいもん！あんななんかよりずっと
カッコいいもん」

黒鎌竜はフツと笑う。

鬼川

「ふん、糞ガキが。やれ！」

ガトリングマジニはガトリングガンを撃つ。

黒鎌竜は水蓮竜を抱えて、消える。

鬼川とガトリングマジニは驚く。

黒鎌竜

「どこを見てる？」

ガトリングマジニが振り向く瞬間、

ザシュ！

ガトリングマジニの首が切り落とされる。

黒鎌竜の片腕は大鎌になっていた。

黒鎌竜はこれで首を切り落としたのだ。

鬼川

「い、いつの間に！？しかも強化したハズのガトリングマジニの首を簡単に切り落とした！？」

黒鎌竜は更に口から青い炎を吐き出す。

青い炎はガトリングマジニを一瞬にして氷結させる。

黒鎌竜

「これで『プラーガ』とやらは出てこれねー」

水蓮竜

「凄い、お母さんの魔法みたいに凍らせちゃった」

黒鎌竜は水蓮竜を降ろす。

黒鎌竜

「次はてめーか？」

鬼川

「くっ…」

鬼川は武器デザートイーグルを構える。

鬼川

「行くぞ！」

鬼川はカンフー（体術）とデザートイーグルを使って、黒鎌竜を攻撃する。

黒鎌竜は避けずにすべての攻撃を受け止める。

水蓮竜

「黒鎌竜、なんで避けないの!？」

黒鎌竜

「避ける必要が無いからだ」

鬼川

「何だと!？」

鬼川は怒り、攻撃を激しくする。

しかし、黒鎌竜の体には傷一つ付かなかった。

鬼川

「な、何故だ!?!?!?!?!ハッ!?!」

鬼川はデザートイーグルにひびが入っていることに気づく。

黒鎌竜

「自慢じゃないが、俺の装甲は並みの攻撃じゃ効かないんだよ。それに魂じゃなく、ただの怒りの込めた攻撃じゃなおさら効かねーよ」

鬼川

「今度は……俺の番だな!」

黒鎌竜は片手の指を鎌に変え、鬼川の首を狙う。

鬼川

「なっ!?!」

『やられる』と思った。

しかし、黒鎌竜は寸前で手を止めた。

黒鎌竜

「……勝負はあつたな」

黒鎌竜は鎌の指を元に戻し、手を降ろす。

鬼川

「な、何故攻撃を止めた」

黒鎌竜

「……お前の怒りが少し感じたんだよ」

鬼川

「感じた？」

黒鎌竜

「否定された。わかつて貰えなかったという怒りだ。……よほど『ウロボロス・ウィルス』を否定されたことが許せなかったんだな」

鬼川

「当たり前だ！僕はアレで腐った世界を変えるんだ！なのに貴様のような奴に否定されて……」

黒鎌竜

「お前、世界に恨みがあるのか？」

鬼川

「……奴らは、僕から大切なものを奪ったんだ！だから、だから」

黒鎌竜

「……本当に憎いのか？」

鬼川

「なに？」

黒鎌竜

「憎いんなら、いちいち遺伝子によるウィルスじゃなく、人類を死滅させるウィルスのほうが良いんじゃないのか？」

鬼川

「…………それは」

黒鎌竜

「…………もう俺には関係無いか」

黒鎌竜の下に魔法陣が現れる。

水蓮竜は黒鎌竜に抱えられる。

黒鎌竜

「一つ教えてやる。復讐者が一番許せないものは何だと思っ？」

鬼川

「…………な、なんだ？」

黒鎌竜

「大切なものを守れなかった自分だ」

鬼川は驚く。

黒鎌竜と水蓮竜は消える。

鬼川は立ちつくすのだった。

【????】

黒鎌竜と水蓮竜は戻って来れた。

水蓮竜

「黒鎌竜」

黒鎌竜

「なんだ？」

水蓮竜

「それが黒鎌竜の本当の姿なの？」

黒鎌竜

「まあな」

水蓮竜

「なんで隠していたの？」

黒鎌竜

「『敵を欺くにはまず味方から』ってことわざ知っているか？」

水蓮竜

「知らない」

黒鎌竜

「……あんまり知られたく無いからだ」

水蓮竜は首を傾げる。

水蓮竜

「それじゃ、さっき言ったこともことわざ？」

黒鎌竜

「……ことわざかな。俺自身が考えた」

水蓮竜

「どーゆう意味？」

黒鎌竜

「わかりやすく言えば、仕返ししても自業自得ってことだ。お前も誰かに酷いことされても仕返しはするな。……やっても自分が傷つくだけだ」

黒鎌竜は水蓮竜の頭を撫でる。

水蓮竜

「……うん」

水蓮竜は頷くのだった。

【恋姫の世界】

ライアン

「鬼川、どこにいる！」

ライアンは現場に駆けつけるが、既に誰もいない後だった。

終わり

黒鎌竜と鬼川の闘い！（後書き）

ライアン

「ちよつと、俺の出番ってコレだけ!？」

黒鎌竜

「出れただけでもありがたいと思え」

水蓮竜

「おじさん、鬼川さんより影が薄いから」

ライアンはシヨックを受ける。

ライアン

「…………おじさん…………影が薄い…………」

というわけで龍の骨先生ゲスト出演ありがとうございました。

太ったことは、苦しみの序曲である。(前書き)

今回は青いタヌキ先生が待ち望んだことの始まりかもしれません。

太ったことは、苦しみの序曲である。

【????】

魔炎竜

「大丈夫か？」

寝ている氷刃竜を心配する。

氷刃竜

「…………おしっこ」

魔炎竜

「わかった、運んでやるよ」

魔炎竜はしゃがんで、氷刃竜は背中に乗った瞬間、

ズシッ…

魔炎竜

「うっ…」

魔炎竜はよろめく。

よく見れば、氷刃竜の身体全体が太っていた。

氷刃竜

「…………早く」

魔炎竜

「わ、わかった」

魔炎竜はよろめきながらも氷刃竜を背負って歩く。

白天竜

「……あのう、自分で歩いた方が良いですよ」

白天竜も身体全体が太っていた。

氷刃竜

「だって、動けないもん」

白天竜

「私もなんとか動いていますよ」

魔炎竜

「か、構わない……よ」

白天竜

「いや、つらそうなんですけど」

すると、

夜帝竜

「おーい、ご飯はまだか？」

夜帝竜も身体全体が太っていた。

白天竜

「まだ食べる気ですか!？」

夜帝竜

「腹が減ったんだよ」

白天竜

「食べるより動いて下さいよ!」

何故彼女達が激太りしたのかと言うと、どら焼きの大食いが原因で太ったのだ。

氷刃竜

「おしっこ」

夜帝竜

「ご飯」

白天竜

「絶対に痩せなければ」

黒鎌竜と光翔竜と水蓮竜はその様子を見て、

黒鎌竜

「……白天竜」

水蓮竜

「お母さん達、妊娠したの？」

光翔竜

「いや、違いますって」

水蓮竜

「でもお腹がおっきくなってるよ」

黒鎌竜

「よく見る。お腹の他に身体全体がおっきくなっているぞ」

水蓮竜はよく見る。

水蓮竜

「ほんとだ、お相撲みたいになっちゃった」

黒鎌竜

「ああ、あれでは満足に動けないな」

光翔竜

「そうですね。あれじゃみっともなさすぎ……！」

光翔竜は何かを閃く。

黒鎌竜

「どうした？」

光翔竜

「良いことを閃きました」

光翔竜は駆け出す。

黒鎌竜

「……………何を閃いたんだ？」

【どこかのお菓子屋】

メアリー

「パクパクパク……」

メアリーは山ほどあるシュークリームをパクパクと食べていた。

周りの客は驚く。

雅也はそんなメアリーに呆れる。

雅也

「……食べ過ぎだろう」

メアリー

「まだまだいけます。パクパク……」

雅也

「この前のどら焼きの大食いに影響されるなよ」

そうメアリーはあのどら焼きの大食いに影響され、自分はシュークリームの大食いに挑戦していた。

雅也

「ハアー、今頃臯月とマーブルも大食いか」

メアリーだけではなく、臯月とマーブルもお菓子の大食いに挑戦していた。

そしてヴィヴィオは……。

【ヴィヴィオの部屋】

ヴィヴィオ

「よい……しよ」

ヴィヴィオもどら焼きの食べ過ぎにより、白天竜達のように激太りになっていた。

身体全体の重さにより、思うように動けなかった。

ヴィヴィオ

「……おやつ」

こんな時でもおやつを求めて、ズシン、ズシンと歩きだす。

【雅也とメアリーのいるお菓子屋】

雅也

「言いたくないけど……ヴィヴィオの二の舞になるぞ」

メアリー

「大丈夫です。ユニゾンデバイスは太りません。パクパク」

雅也

「……あっ、そう」

雅也は雑誌を読む。

そんな二人の様子を見ていた怪しい奴が見ていた。

帽子にサングラスをかけたコートの男だった。

コートの男は小さなボウガンを構え、小さな矢（というより針）を放つ。

矢はメアリーのお尻刺さる。

メアリー
「！」

メアリーは気づき、針を抜く。

雅也

「どうした？」

メアリー

「……なんかお尻に針が刺さってました」

メアリーは針を見せる。

雅也

「誰だ、こんな悪質なことをしたのは？」

メアリー

「痛くなかったので平気です」

メアリーは再びシュークリームを食べる。

雅也

「……シュークリームに夢中で痛みは感じてなかったようだな」

雅也も再び雑誌を読む。

コートの男は二人を見て、笑いながらお菓子屋を出て行く。

雅也が雑誌を読み終え、メアリーを見る。

雅也

「…………あれ？」

雅也は目をこすり、再びメアリーを見る。

メアリー

「どうかしましたか？」

雅也

「…………いや、お前さつきより…………」

メアリー

「さつきより、なんですか？」

雅也

「その…………、違和感が感じるんだ」

メアリー

「違和感？」

雅也

「ああっ、お前の身体全体に」

メアリーの身体全体が激太りしていた。

雅也

「自分でも気づかないのか？」

メアリー

「いえ、シュークリームを食べるのに夢中でした」

メアリー自身は気づいてなかった。

雅也

「もうその辺で止めといった方が良いでしょう。なんかそんな気がする」

メアリー

「……はい」

メアリーが椅子から降りると、

ズシン！

店全体が揺れる。

雅也

「おい、やっぱり変だぞ」

メアリー

「私もそう思います。……なんだか身体が重く感じます。パクリ」

メアリーは片手のシュークリームをかじる。

雅也

「おい、シュークリームは置いて行け」

メアリー

「嫌です。シュークリームを持っていないと不安なんです」

メアリーは歩く度にズシン、ズシンと重く足音たてる。

メアリー

「ハアハア、辛いです」

雅也は見かねて、メアリーの前でしゃがむ。

雅也

「ほら、乗りなよ」

雅也はメアリーを背負っていくつもりだった。

メアリーは恥ずかしがるが、

メアリー

「すみません」

メアリーは雅也に乗る。

雅也

「ぬお！」

雅也はメアリーのあまりの重さに苦しむ。

メアリー

「大丈夫ですか？」

雅也

「……あまり、大丈夫じゃあ……」

雅也は持ちこたえながら歩くと、

メキメキ…バキーツ！ドーン！

床が割れ、雅也とメアリーは落ちる。

ちなみに、ここはお菓子屋の2階だった。

周りの客は驚く。

客

「だ、大丈夫ですか!？」

雅也

「……大丈夫に見える？」

【お菓子屋の外】

光翔竜

「クツクツクツ」

コートの男

「大成功ですね」

コートの男はコートを脱ぐ。

正体は竜弓兵だった。

光翔竜

「よくやったよ」

竜弓兵

「いいえ、光翔竜様のアドバイスに従っただけですよ。殺気を漂わせず、標的に当てること。確かに役立ちました」

光翔竜

「彼らは殺気とかに敏感だからね。しかし、今回は新型の実験が目だったからね」

竜弓兵

「結果は大成功でしたね、この『体脂肪増加プログラム』の」

『体脂肪増加プログラム』

それはユニゾンデバイスなどのデータで造られた存在の『体脂肪』を一気に暴走させるプログラム。

これで太ることの無い彼らを太らせることができる。

竜弓兵

「他の者達も成功しているとの連絡です」

光翔竜

「この調子で第一段階を成功させるのだ！」

竜弓兵

「了解です」

光翔竜

「クツクツクツ」

光翔竜は不適に笑う。

【雅也の部屋】

傷だらけの雅也は啞然した。

臯月とマーブルも身体全体が激太りしていたのだ。

さらにヴィヴィオとメアリーも加わって、雅也の部屋の中はもはや

暑苦しい相撲部屋だった。

雅也

「……臯月、どうしてこんな事に」

臯月

「……ケーキの食べ放題バイキングに行つて……」

雅也

「太つたと?」

臯月は恥ずかしながら頷く。

雅也

「……マーブルは?」

マーブル

「ヤーリーのチョコレート工場でたくさんチョコレートを食べちゃつて……」

雅也

「太つたと?」

マーブルは恥ずかしながら頷く。

雅也

「そしてメアリーはシュークリームを山ほど食べているうちに太つてしまった」

メアリー

「はい」

雅也

「あり得ねえな。ヴィヴィオはともかく、臯月、メアリー、マーブルが一日だけでこんなに太るなんて……。いくらたくさん食べても有り得ないだろう」

ヴィヴィオ

「あたしはどうしてともかくなの？（怒）」

雅也

「ヴィヴィオはどら焼きの大食いから太り始めただろう」

ヴィヴィオ

「うっ…」

ヴィヴィオは思い返す。

ヴィヴィオはどら焼きの大食い後、ベッドに眠り込んだ。

その後、フェイトや臯月などのヴィヴィオに甘い人達が甘いお菓子を差し入れ、ヴィヴィオはたくさん食べていた。

これを数日間行った為に太ったのだ。

これはお菓子なだけに可笑しくない自業自得である。

マーブル

「雅也、助けて！」

ズシン！

マーブルは雅也に飛び付く。

雅也

「ぐえっ！」

マールは雅也を押しつぶしてしまつ。

皐月

「あなた、何抜け駆けしてるのよ！」

ズシン！

雅也

「ぐおっ！」

次に皐月が飛び付く。

メアリー

「退きなさい！」

ズシン！

雅也

「おい！」

今度はメアリーが飛び付く。

ヴィヴィオ

「私も」

雅也
「やゝめろっ！」

雅也の制止を聞かずにヴィヴィオが飛び付いた瞬間、

バキバキ、ドカアアアアン！

四人の重さで床が割れ、落ちてしまう。

そして雅也は四人の下敷きになった。

【????】

竜弓兵

「光翔竜様、各地の女性キャラクターを見事に太らせました」

光翔竜

「よしよし第一段階の準備完了。第二段階を、白天竜さん達に例のことを伝えなさい」

竜弓兵

「わかりました」

竜弓兵は白天竜達のところに行く。

光翔竜

「では、味方を欺く計画の発動開始です」

光翔竜の計画とはいったい……。。

次回に続く。

太ったことは、苦しみの序曲である。(後書き)

遂に雅也達の活躍する時がきた!

あつ、雅也だけは撃沈だった。

ということでヴィヴィオ達の活躍する時がきた。

痩せたことは、苦しみの終曲である。(前書き)

ヴィヴィオ達がダイエットに挑戦!?

痩せたことは、苦しみの終曲である。

前回、ヴィヴィオ達は激太りした。
そこで……

【断食教会前】

此処は断食修行をさせる教会、【断食教会】。

ヴィヴィオ、皐月、メアリー、マーブルは痩せるためにやって来た。

【教会内】

教会内には沢山の太った女性が居た。

彼女達は修道女の服装を着ていた。

ヴィヴィオ達も着ていた。

ヴィヴィオ

「いっぱい居るね」

皐月

「私達だけじゃないんだ」

メアリー

「これだけ太っている者が居ると、世界中の食糧が不足しそうです

ね

マーブル

「果たして、生き残るのが居るかしら？」

マーブルは好物のチョコレートを食べる。

皐月

「あなたね、これから断食するのに何をチョコレートを食べているのよ」

マーブル

「私はしないわよ。私はね、あなた方の無様な姿を見に来たのよ。……それに、このお腹の膨らみはね、脂肪じゃないわ。……私と雅也君の『愛の結晶』が……」

ドガッ！

マーブル

「ぐう！」

皐月は蹴りを入れる。

マーブルの口からチョコレートが混じったゲロが吐き出された。

皐月

「まあ！ チョコレートのような赤ちゃんね！」

マーブル

「あ、あなたね（怒）」

すると、

夜帝竜

「よーっ」

ヴィヴィオ

「えっ？」

ヴィヴィオ達に近づいてきたのは、

夜帝竜、白天竜、氷刃竜の『竜の爪』の女性メンバーだった。

ヴィヴィオ

「あー、あなた達は『ドラ焼き早食い競争』に出ていた人達」

臯月

「あなた方も……」

白天竜

「……見事に太りました」

メアリー

「そうですか」

夜帝竜

「おかげで体が動きにくいし」

氷刃竜

「股の辺りが肉で埋もれてロクに旦那と合体……」

白天竜

「下ネタは辞めて下さい」

メアリー

「なるほど。確かに入れにくいですよ、肉……」

臯月

「こっちも下ネタはよしなさい！」

夜帝竜

「そーゆう訳で痩せに来たんだ」

????

「おや、皆さん」

ヴィヴィオ達は振り向くと、セイバーがいた。

しかし、太ってはいなかった。

ヴィヴィオ

「セイバーさん!？」

皐月

「此処に居るといふことはあなたも……」

メアリー

「……しかし、見たところ落とす脂肪が見当たらないスリムな様子
ですよね?」

セイバー

「落としてきたのは食欲です。メタナイトとドゥーエに食べ過ぎだ
から自重しろと言われて此処に送られました」

全員納得する。

????

「静粛に!」

太った司祭が大声をあげる。

太った司祭

「これより断食修行するが、あなた達にいいます。それは、私はあ
なた方のような輩は大嫌いです!己の欲を抑えず、本能のままに貪

り続け、何もせずただ無気力に過ごすから、醜い姿になるのです
！」

白天竜

「……司祭の姿に説得力無いんですけど」

太った司祭

「そんな醜い自分と決別儀式を行います！」

太った司祭は手鏡を見せる。

太った司祭

「この鏡に映った自分に唾を吐きかけ『××××！』と叫びなさい！これで決別するのです！それでは、まずはそのあなたから」

女性1

「は、はい」

女性1は手鏡の前に立つ。

女性1

「こ、この××××！、ぺっ……」

太った司祭

「もっと大きく！」

女性1

「この××××！、ぺっ！」

太った司祭

「次の方」

女性2

「この××××！、ぺっ！」

太った司祭

「もっと痰を絡ませて！」

女性2

「この××××！、ぺっ！」

次はメアリーだった。

太った司祭

「さっ、早くやりなさい」

メアリーはブツブツと呟く。

太った司祭

「何を躊躇っているのですか！？早く醜い自分と決別するのです！」

メアリー

「××××死ね、ぺっ！」

太った司祭に唾を吐く。

太った司祭

「……………今、私に言いませんでした？」

メアリー

「言ってますせん」

太った司祭

「なんで私に唾を吐くのですか？」

メアリー

「間違えました、すみません」

太った司祭

「唾を吐くのはコレ（手鏡）にです！コレを見て、唾を吐くのです

！」

夜帝竜

「うりゃあー！」

バキツ！

太った司祭

「ぐえっ！」

夜帝竜はいきなり太った司祭に殴りかかる。

夜帝竜

「この××××が！」

太った司祭

「ちよつと待て！何やってんの！？」

夜帝竜

「しまった、醜い自分と決別する為に勢い余ってやりすぎちゃった」

太った司祭

「どんな勢いだよ！？殴るんじゃなくて、唾を吐くの！」

セイバー

「わかりました」

次はセイバーだった。

セイバーは気を高める。

セイバー

「この××××が！！」

ドオウ！

太った司祭

「ぐおっ!!」

セイバーの吐き出した唾は手鏡をぶち抜き、太った司祭を吹き飛ばす。

太った司祭

「や、やりすぎだ」

【教会の中庭】

太った司祭

「それでは今から断食修行を始めます。問題は食べないということではありません。脂肪を燃焼させるために皆様には一週間、大嫌いな運動や此処の掃除をさせてもらいます。その間は食事は一切出しません!その代わりに、クッキー一枚を渡します。しかし、一週間にクッキーを食べた者は失格にします!」

「えっーーーーー!?!」

全員は驚愕する。

マ・ブル

「七日間でクッキー一枚で過ごすなんて……」

ヴィヴィオ

「待ってください!……イチゴ味にしても良いですか!?!」

皐月

「そーゆう問題じゃないでしょう!」

太った司祭

「何味でもありません」

メアリー

「ではクリーム味もありますか？」

梶月

「だからそーゆう問題じゃないでしょう！目の前に蜂蜜味があるのに食べてはいけないんですか!？」

メアリー

「さりげなく所望したよ」

梶月

「じゃあ何のために？一週間何も食べずに生き残れると思っているんですか？」

太った司祭

「……私は自分のを食べるなとしか言ってますよ」

全員、太った司祭の言葉の意味を理解する。

マーブル

（まさか、これはサバイバル戦!?)

白天竜

（他人のクッキーを喰らい）

氷刃竜

（一週間、生き延びると）

メアリー

（仲間同士で）

夜帝竜

（殺しあえと）

ヴィヴィオ

（……そんな）

太った司祭

「クッキーは自分の命と思い、大事にするように」

セイバー

「すみません！……私は、果物の王様『ドドリア』味で
太った司祭

「……………マニアックだな」

こうして断食修行が始まった。

志願者の半数が修行のつらさを知り、断念した。

始まって五日間。また志願者の半数が断念した。

空腹のあまり、クッキーに手を出してしまったからだ。

残ったのは、たったのヴィヴィオ達の八人だった。

彼女達は強い精神で空腹をねじ伏せた。

しかしこの五日間、ヴィヴィオ達の腹は限界にきていた。

そんな彼女達の生き残るすべは、

『誰かのクッキーを奪う』

だが、この五日間で八人の間に、友情に似た奇妙な連帯感が芽生えていた。

人は困難に陥ると、『絆』が生まれる。

仲の悪かった者同士でも。

ジヤイアン映画版の原理である。

そんな彼女達はクッキーを奪う正当な理由を欲していた。

【教会の敷地内】

一枚のクッキーが置かれていた。

茂みにはヴィヴィオが隠れて見張っていた。

これはヴィヴィオの作戦だった。

作戦内容は、クッキーに飢えた者がクッキーを見つけ、奪おうとした瞬間、

ヴィヴィオ

「それは私のクッキー!!」

倒した後にクッキーを奪うと言う作戦だった。

『クッキーを奪われそうだった』という正当防衛なら、誰も非難するものはいない。

しかし、一歩間違えば、自分のクッキーを失うリスクがある。

ヴィヴィオは一瞬たりとも眼を離さなかった。

すると、ヴィヴィオはあるものを見て驚いた。

それは、倒れていた者、白天竜だった。

ヴィヴィオ

(ゆ、百合さん！？まさか、すでにクッキー狩りの餌食に！？)

ヴィヴィオは動揺した。

いったい誰がこんなことを！？

あれだけの仲間意識が強かったはずだったのに。

いや、もしかしたら大きな勘違いをしていたのでは、と感じた。

この作戦は八人は大きな絆により動けないこと前提に立てた作戦。

だが、じつは動けなかったのではなく、動かなかつたのだとすれば。

あの仲良しこよしは芝居で、最初から仲間意識などない。クッキーを奪うための布石！！

すると、白天竜は笑った。

それを見たヴィヴィオは、

ヴィヴィオ

「しまった!!」

すぐに動こうとしたが、遅かった。

氷刃竜

「でかした!!」

飛び出てきた氷刃竜は瞬時にクツキーを奪う。

ヴィヴィオは気づいた。

一方は囷となり、一方はクツキーを奪うと言う、二人がかりの作戦だった。

白天竜

（私達を釣るなんて、百年早いわ!）

氷刃竜

（これも経験の差だ。悪く……）

ピキッ!

氷刃竜

「なっ!?!」

氷刃竜の足が凍った。

それはメアリーの魔法だった。

白天竜

「ええっ!?!」

白天竜の後ろに回りこんだ皐月は白天竜の懐に隠してあったクッキーを奪う。

メアリーも氷刃竜の懐からクッキーを奪う。

二人は三枚のクッキーを投げる。

三枚のクッキーを受け取ったのは、ヴィヴィオだった。

白天竜

(に、二段構え!?)

氷刃竜

(まさか、囷はクッキーじゃなく、ヴィヴィオ自身!? 私達が勝利を掴んだ時の隙を狙い、クッキーを奪う計算だったのか!!)

メアリー

(狩りは獲物を獲た瞬間が隙を作り出す。獲物が大きいほどに)

皐月

(よく覚えておきな)

メアリー

「ここは我々が食い止めます」

皐月

「ヴィヴィオは打ち合わせたところに」

ヴィヴィオ

「わかった!」

ヴィヴィオは走り出す。

グサグサッ！

ヴィヴィオ

「わっ！」

ヴィヴィオの目の前に数本のナイフが刺さる。

驚いたヴィヴィオはクツキーを落としてしまう。

ナイフを投げたのは、屋根の上に居た大理石だった。

彼女は『ナイフ使い』の異名を持っていた。

氷刃竜

「あんだ達が手を組むことくらいは予想していた。こちらは予想で
きない奴と手を組んだ」

ヴィヴィオ達は驚いた。

ヴィヴィオ

「な、なんで!?!」

大理石

「決まっているでしょう。あんだ達を蹴落とし、美しくなった姿で
雅也くんに会いに行きたいからよ」

ヴィヴィオ達は怒る。

白天竜

「…………恋する乙女に仁義なしか」

マーブルは降りる。

マーブル

「クッキー!!」

マーブルは落ちているクッキーを拾おうとするが、

?????

「うらあああああ!!」

マーブルが拾い上げる前に奪われる。

奪ったのは、セイバーだった。

白天竜達は驚く。

セイバーは激太りしていなかったなので、身軽に動けるのだ。

その上、飢えによって食欲の増したため、いつもより凄みも増していた。

すると、

?????

「ぬおおおおお!!」

セイバーが振り向くと、石像が飛んできた。

セイバーは石像にぶつかり、一緒に吹き飛ばされる。

その際、クッキーを落とす。

ドゴオオオオオン！！

メアリー

「セイバー！！」

皐月

「いったい誰が！？」

皐月達は石像が飛んできた方を見る。

投げたのは、夜帝竜だった。

夜帝竜

「…………クッキー…………」

夜帝竜は飢えていた。

今の夜帝竜は危険な状態だった。

もはや敵味方関係なく、クッキーを奪うつもりだった。

夜帝竜

「よこせー！！」

夜帝竜は走り出す。

ヴィヴィオ

「渡すか!!」

ガシィ!!

なんとヴィヴィオは石像をぶん投げた夜帝竜を取っ組み合いで喰い止めた。

今のヴィヴィオは飢えにより聖王の力を発揮させていた。

マーブル

「クッキー!!」

皐月

「させるか!!」

皐月とマーブルも取っ組み合いする。

マーブル

「よこせ愛に飢えた雌豚が」

皐月

「あんたにだけは言われたくないわ!!」

氷刃竜

「くそつ!!」

氷刃竜は走り出す。

メアリー

「させるか!!」

メアリーは手を掲げると、氷の塊が出来てくる。

クッキーの前にたどり着いた氷刃竜はそれに気づき、立ち止まる。

氷刃竜

「へー、あんたも氷の魔法が使えるのかよ!」

氷刃竜も手を掲げ、氷の塊を作り出す。

白天竜

「私も!」

白天竜はクッキーのもとに駆けつける。

ドガッ!

白天竜

「きゃあっ!?!」

白天竜は背後から何かに撃たれ、倒れる。

それは、吹き飛ばされたセイバーが力を込めて放ったつばだった。

セイバー

「誰にも渡しません！」

セイバーはよろよろになりながらも歩き出す。

白天竜

「ま、負けるか！」

這いずりながらも進む。

ヴィヴィオと夜帝竜の取っ組み合いはまだ続いていた。

ヴィヴィオ

「どりゃあああああ！！」

夜帝竜

「なっ！？」

ヴィヴィオは背負い投げをする。

臯月ノマール

「きゃあ！！」

二人は倒れる。

氷刃竜

「来い！！！」

メアリー

「ぬおおおおお！！！」

メアリーは氷の塊を持ったまま向かっていく。
セイバー

「クッキー!!」

白天竜

「させるか!!」

二人は同時に飛び掛る。

この八人のぶつかり合いが重なった。

ドカアアアアアン!!

八人のクッキーは高く飛ぶ。

八人は氷付けになった。

そしてクッキーはちょうど八人の中心に落ちた。

八人

「クッキー!!」

八人はクッキーに手を伸ばすが、氷付けにされているので、動けなかった。

しかし、氷は日の光で徐々に溶かされている。

氷が溶けた時がクッキーを取る瞬間だ。

彼女達はクッキーを取ろうと必死だった。

だが、これは演技だった。

ヴィヴィオ

（食べるなら、食べてもいいよ。私のイチゴ味には）

皐月

（私の蜂蜜味には）

メアリー

（私のクリーム味には）

マーブル

（私のチョコレート味には）

白天竜

（私の桃味には）

氷刃竜

（私のブルーベリー味には）

夜帝竜

（私のカツ丼味には）

セイバー

（私のドドリア味には）

（強力な下剤が仕込んであるんだよ、喰って衝天しやがれ!!!）

ヴィヴィオ

「ためにカツ丼味を」

皐月

「ブルーベリー味を」

メアリー

「桃味を」

マーブル

「蜂蜜味を」

白天竜

「イチゴ味を」

氷刃竜

「ドドリア味を」

夜帝竜

「チョコレート味を」

セイバー

「クリーム味を」

「いただきます！五日ぶりのクッキーの味を堪能させてもらいます！」

【司祭の部屋】

太った司祭

「いやあくたつぷり儲けさせていただきました」

太った司祭はクッキーを食べながら通信をしていた。

通信の相手は、

光翔竜

「それは良かったです」

光翔竜だった。

光翔竜

「私が彼女達を太らせ、」

太った司祭

「そして、私の教会で断食修行と言って、高い授業料を巻上げる。出費はクッキーだけでしかも、教会の雑用をやってももらえるとは本当に笑いが止まりませんよ」

光翔竜

「司祭さん、約束の分け前」

太った司祭

「解っていますよ、ちゃんと分け前は銀行に振り込んでおきますよ。本当にこんな儲け話を持ちかけていただき、感謝します」

光翔竜

「それで、初めての成果は

？」

太った司祭

「それが八人が見事に修了しました」

光翔竜

「そうですか」

光翔竜の計画は、彼女達を太らせ、太った司祭の教会で断食修行をさせることだった。

高い授業料を巻上げて大儲け。

その一部を貰うのが目的だった。

そして、修了した八人とはもちろん……、

【教会の入り口】

下痢で見事に痩せたヴィヴィオ達だった。

彼女達はげっそりと帰っていた。

終わり。

瘦せたことは、苦しみの終曲である。(後書き)

皆さんも太らないように。

銀翼の女神（前書き）

今回は【神曲奏界ポリフォニカ】の用語が含まれています。

詳しくは【神曲奏界ポリフォニカ】を読んで下さい。

銀翼の女神

【神曲奏界ポリフォニカ】

ここは【神曲奏界ポリフォニカ】の世界にある自然豊かな土地。

肥料と書かれた袋を積んだ荷車を牛に運ばせる農夫が道を進むと、

???

「あのう」

農夫

「はい、……………あつ」

尋ねてきたのは、二人の女性だった。

一人は水色で綺麗な長髪、金色の瞳の美しく優しそうな美女。

服装は大きな帽子とブラウス。

もう一人は銀色の長髪でサングラスをかけた男装の美女であった。

片手に大きなトランクを持っている。

農夫は水色の女性の方に見惚れた。

?????1

「この先に『レインボーハーブ』という村がありますか？」

農夫

「え、あつ、はい、私もそこにいく予定です！良かったら、荷車に
乗りますか！？」

?????1

「えつ、でも……………」

農夫

「だ、大丈夫です！うちの牛は力持ちですから！それに大きな荷物
を持つての歩きは大変そうですし」

?????2

「……………せつかく申し出です、乗りましょう」

?????1

「……………ありがとうございます」

二人の女性は荷車に乗る。

のんびりと荷車は進む。

農夫

「『レインボーハーブ』は良いですよ。いろんな色のハーブが虹の
ように咲いているので、『レインボーハーブ』と言われています」

?????1

「はい、そつらしいですね」

?????2

「中でも、一つのハーブに七色の花を咲かせたハーブがあるとか？」

農夫

「はい、『七色ハーブ』と言いまして、数十年に一度しか咲かない
ハーブですよ。今日はその咲く日ですよ、運が良かったですね」

?????2

「いえ、事前に調べました」

農夫

「ああっ、そうですね」

?????1

「それが目的でやって来ました。向こうに連れが先に来ているはず
です」

農夫

「そうですね……」

すると、

?????3

「はっ、はっ、はっ……」

コートを羽織った数人の男が走ってくる。

農夫

「な、なんだ？」

二人の女性は見てみると、

?????2

「あれは……」

一人が二人の女性に気づく。

?????3

「レイラ様！」

銀髪を『レイラ』と呼び、駆け寄る。

????3

「大変です!」

サングラスを外すと、正体は竜兵だった。

レイラ

「どうした?何かあったのか?」

竜兵1

「はっ!『レインボーハーブ』に『??機関』の幹部がやって来ました!」

レイラ

「何っ!?奴らも『七色のハーブ』を狙って来たのか?」

竜兵1

「はい、村長が断ると、そいつはバイオリンを取りだして怪物を出しました」

竜兵2

「おそらく聖唱竜様と同じ『神曲楽士』です!」

農夫

「む、村がどうした!?!」

驚いた農夫は竜兵に駆け寄る。

竜兵1

「あんたは?」

レイラ

「『レインボーハーブ』の方だ」

竜兵1

「……………あのう、戻らない方がよいよ」

竜兵2

「大変なことになっているよ」

農夫

「なんだって!？」

レイラ

「そんなに大変なのか？」

竜兵1

「たくさんの蝙蝠を出していました！」

レイラ

「……………聖唱竜様いかが致します?」

もう一人は聖唱竜と呼ばれる。

竜兵1

「聖唱竜様とレイラ様なら、ちょちょいのプーッとやっつけまじょう!」

竜兵2

「聖唱竜様の主制御楽器なら勝てますよ」

聖唱竜は悩む。

農夫

「お願いします!」

農夫は土下座をして聖唱竜に頼み込む。

農夫

「村には息子夫婦と孫が要るんです、お助けを!」

聖唱竜はしばらく考え、意を決する。

【レインボーハーブ】

色んな色が咲くハーブ畑。

しかし、人々は倒れていた。

「うつつ・・・」

一人一人の背中に蝙蝠が二匹ずつ引っ付いていた。

???

「ふつつつつ、いい響きだ」

一人の男が主制御楽器のバイオリンを引きながら笑う。

???

「さて、さつさと『七色のハーブ』を頂きましょう」

そう考えると、気配を感じる。

目の前に現れたのは、『竜の爪』メンバーの衣装を着た聖唱竜とレイラだった。

???

「その姿は・・・『竜の爪』ですか？」

聖唱竜

「はい、聖唱竜と申します」

レイラ

「副官のレイラだ」

「??？」

「これはごく丁寧に……………」

聖唱竜

「貴方は『??？機関』の者ですか？」

「??？」

「いかにも。僕は『闇翼のシャープ』です」

聖唱竜

「貴方は神曲楽士ですね？契約を結んだ精霊はこの蝙蝠達ですか？」

すると、蝙蝠達が一気に一点に集まる。

それは人の形になり、人そのものになる。

シャープ

「紹介致します、僕の精霊『ブラディアス』です」

ブラディアス

「よろしく。そしていただきます」

舌を動かして、聖唱竜に襲い掛かる。

レイラ

「てやあああああ！！」

バキッ！

レイラは襲い掛かるブラディアスを蹴り飛ばす。

ブラディアスは凄い勢いで跳ばされる。

レイラ

「ゲスが、聖唱竜様に触るな!!」

ブラディアスは起き上がる。

ブラディアス

「くつくつくつ、貴様も精霊か」

口から出る血を舐める。

ブラディアス

(レイラ………何処かで聞いたような)

聖唱竜

「この人達をどうしましたか？」

ブラディアス

「血を頂いたのさ。あまり美味しくなかった。しかし、君たちの血なら美味だろ」

レイラ

「………聖唱竜様、ご許可を」

聖唱竜

「その前にこの人達を」

レイラ

「はい」

レイラはトランクを聖唱竜に渡す。

聖唱竜がトランクを開けると、みるみる巨大化し形を変える。

トランクから『パイプオルガン』へと変形した。

シャープ

「ほーっ、貴女も神曲楽士ですか？」

聖唱竜

「はい、これが主制御楽器です」

レイラ

「そして……………ハアアアアアア！」

レイラが輝き出す。

シャープとブラディアスは目を閉じる。

輝きが消えると、レイラの姿は変わっていた。

顔付きはとても凛々しく美しかった。

そして銀色の甲冑姿に、大きな剣『グレードソード』を担いでいた。

レイラ

「私の真の姿だ」

ブラディアス

「……………ならば、私も真の姿を見せよう。……………むん
！」

筋肉を肥大化させると上半身の洋服が破れ、背中に六枚の翼を生や
す。

ブラディアス

「私の異名は『闇の吸血鬼』と呼ばれている」

レイラ

「……………むん！」

レイラの背中に輝く六枚の翼が現れる。

レイラ

「兵士達よ、天使達よ、召喚！」

レイラは『グレードソード』を地面に突き刺す。

すると、地面が光輝く。

その輝きから甲冑の兵隊や天使達が現れる。

シャープ

「他の精霊を、しかもこんなに召喚したと!？」

ブラディアス

「こんなの見たことがない」

レイラ

「安心しろ、こいつらは戦わない」

ブラディアス

「何？」

天使達は倒れている人々に魔法浴びせる。

すると、人々が安らいで行く。

そして兵隊は人々を担いで遠くに行く。

ブラディアス

「まさかこのために？」

聖唱竜

「ここにいると危険ですから」

シャープ

「……………お優しいですね。しかし同時に愚かだ！こんなことの為に無駄に神曲の力を消耗するとは！」

聖唱竜

「私はまだ大丈夫ですよ」

シャープ

「その余裕がいつまで続くかな？」

シャープはバイオリンを引き始める。

シャープ

「嵐のように激しく」

ブラディアス

「ダークトルネード」

ブラディアスは手から黒く激しい竜巻を放つ。

レイラは『グレードソード』を構える。

聖唱竜

「聖なる雷を」

聖唱竜は速く美しく鍵盤をひく。

『グレードソード』の刀身から電気が走る。

レイラ

「セイントサンダー！！」

レイラが思いつき振ると巨大な雷が放たれる。

『ダークトルネード』と『セントサンダー』がぶつかり合った瞬間、

ドカアアアアアアアン!!

大爆発をおこす。

竜兵1

「す、すげえー!!」

竜兵2

「流石は聖唱竜様とレイラ様だ」

竜兵3

「でも奴も精霊もできるぞ」

竜兵達は隠れて見守る。

シャープ

「かかったな、切り裂け！」

バイオリンを高くひく。

ブラディアス

「ハアッ！」

手を振り上げると同時に鎌鼬を放つ。

シャープ

（強力な攻撃の後が隙を作る！あの精霊は契約者「聖唱竜」に忠実
そうだから、後ろにいる奴を庇う筈だ！）

シャープはこれを狙っていた。

しかし、レイラは鎌鼬を避ける。

シャープ

（何、避けた！？馬鹿な、このままでは契約者「聖唱竜」に攻撃が
・・・）

鎌鼬は聖唱竜に向かっていく。

聖唱竜は難なく避ける。

シャープ

（何!?!）

シャープは驚いた。

シャープ

「それなら」

ブラディアスは高く飛ぶ。

シャープ

「これならどうだ!」

バイオリンを激しく引き続ける。

ブラディアス

「シャアアアアアア」

爪を鋭く尖らせ、引つ掻き続けると同時に無数の小さな鎌鼬を放つ。

無数の小さな鎌鼬は聖唱竜とレイラに向かっていく。

これを避けるのは困難だと思われた。

しかし、二人は避ける。

雨のように降る無数の小さな鎌鼬を避け続ける。

まるで踊るかのように避け続ける。

シャープ

「避けている！？」

ブラディアス

「そんな馬鹿な・・・」

ブラディアスが怯んだ瞬間、

レイラ

「ハアッ！」

レイラは『グレードソード』を投げる。

グサツ！

ブラディアス

「ぐあっ！」

ブラディアスの腹を貫く。

レイラはブラディアスのところにまで飛んで、『グレートソード』の柄を掴む。

レイラ

「一瞬の油断が命取りだ。自分の命は自分で守る。これは戦場の常識だ」

ブラディアスはレイラを見て、思い出す。

ブラディアス

「お、思い出した、貴様は戦場で恐れられた『銀翼の女神レイラ』！。そして、あの契約者（聖唱竜）は『血塗られた聖……』」

ザシユ！

レイラはブラディアスを一刀両断にする。

レイラ

「あの方を、彼女を侮辱するな」

ブラディアスは消滅する。

レイラは静かに怒る。

シャープ

「ひ、ひい……」

シャープは逃げようとする。

竜兵達

「「逃がすか!」「」

竜兵達はシャープを取り押さえる。

竜兵1

「レイラ様、やりました!」

竜兵2

「聖唱竜様見ましたか?」

竜兵3

「俺達、『??機関』の幹部捕まえました!」

二人は笑う。

レイラ

「……調子のいいやつらだ」

その後、『レインボーハーブ』の人々は天使達の魔法のおかげで回復しました。

聖唱竜は農夫や人々に大変感謝された。

そして……

竜兵達

「ええっ、『七色のハーブ』は置いていく!？」

聖唱竜

「村長さんの話では、精霊と人間の力を合わせて一生懸命に育てたハーブだそうです。そんな大変なものを取り上げたくないの」

竜兵1

「し、しかし……」

聖唱竜

「真王竜様には私が言っておきます」

竜兵1

「………? ? 機関」の幹部を捕まえて」

竜兵2

「たくさんのハーブを貰えたから」

竜兵3

「良しですよ、絶対!」

レイラ

「………真王竜様がいつも言っているではありませんか、君の判断を信じる』と。他のメンバーもそして私も信じてます」

聖唱竜

「………ありがとう」

聖唱竜達は帰還する。

聖唱竜。

メンバー内で優しい女性である。

続く。

銀翼の女神（後書き）

青いタヌキ先生、いかがですか？

レイラがセイバーかシグナムのライバルになりそうです。

男のロマンと健全な夢は女の胸に詰まっている。(前書き)

今回はすこしエッチです。

男のロマンと健全な夢は女の胸に詰まっている。

【倉庫】

水蓮竜

「うわー……………」

ここは『竜の爪』が集めてきた「ロストログア」をここで保管していた。

水蓮竜は数多く並べてあったロストログアを見渡す。

水蓮竜

「いつぱいだ」

真王竜

「結成以来集め続けたからな。では光翔竜」

光翔竜

「はい」

真王竜

「この電子ファイルを使って、使えるものを分けてくれ」

光翔竜

「わかりました」

光翔竜は電子ファイルを手渡す。

今回、一定に集めて貯まったロストログアを今後の為に必要なものと不要なものとは分けをするのだった。

真王竜

「水蓮竜、下手すれば怪我をするものもある。光翔竜も付けるが、充分に気をつけて扱うのだぞ」

水蓮竜

「はい、頑張ります！」

今回は水蓮竜の初めてのお仕事である。だから水蓮竜は張り切っている。

真王竜は水蓮竜の頭を撫でた後、立ち去る。

水蓮竜

「えーっと、これは……………」

水蓮竜は気になるロストログアをじっくりと眺める。

水蓮竜

「これは？」

光翔竜は電子ファイルのスイッチを入れると、センサーが現れる。

センサーをロストログアに当てる。

「勇者の石」

賢者の石と同格の魔法の石。
筋力・魔力を大幅に上げる特性を持つ。

水蓮竜

「凄いんだね」

光翔竜

「これはまだ使い時ではないと言ってやつですね。真王竜様にご相談しましょう」

水蓮竜

「うん、綺麗な石だからね」

水蓮竜は仕事を再開する。

水蓮竜

「あっ」

また気になるロストロギアを見つける。

水蓮竜

「壺もある」

光翔竜

「これは……」

「果汁酒の壺」

果汁と水だけで果汁酒ができる壺。

水蓮竜

「お酒好きな喰樹竜が喜ぶんじゃないのかな。そうすれば、威張らなくなるかもしれない」

光翔竜

「いやいや、あげたって威張りますよ。いや、酔っぱらってますます威張りますよ」

水蓮竜

「そつか……」

光翔竜

「呪血竜さんに頼んで、ジュースができるものを作って貰いましょう」

水蓮竜

「わーい」

光翔竜

「仕事を終わりましたらね。さっ、仕事しましょう」

水蓮竜

「了解」

水蓮竜はまた気になるロストログアを見つける。

水蓮竜

「色は変わっているけど、普通の杖にしか見えないけど……」

光翔竜

「これは」

「想像主の杖」

杖の先に当てたものの材質を別の材質に変える。

光翔竜

「これなら安い材質を高い材質に変えれますね」

水蓮竜

「それじゃ、採用だね」

水蓮竜は仕事を再開する。

水蓮竜は色んなロストロギアを見つける。

「灼熱獣のランプ」

あらゆる炎を吸い込み、その炎で『灼熱獣』という炎の魔物を作り出す。

炎によっては強力な灼熱獣ができる。

「記憶蘇生の帽子」

頭に被ると脳に回復魔法が当てられ、痴ほう症や記憶障害を防ぐ。

「進化の光」

細胞を新しく変貌させ、生物の進化を助ける。

「闇の粘土」

闇の力を注がれた粘土。

形を作れば命を宿し、主の言うことを聞く。

「鉄壁の盾」

どんな攻撃を防ぐ結界を作り出す。

「雷神の発電機」

無限に電気を発電する発電機。

「妖老酒」

特殊なやり方と長い年月を得てできた老酒。味は美味。

飲むと妖力をたちまち回復させ、大幅に高める。

「肉桃」

自分の貧乳を嘆き、巨乳の女を妬んだ仙女が作った禁断の果実。これを食べた巨乳の女をぶくぶく太り、ただの肉の塊になる。こ

水蓮竜

「太らせる桃か……いらないよね」

光翔竜

「いいえ、これは使えますね」

水蓮竜

「何に？」

光翔竜

「高町なのはという可愛い顔で巨乳なのに、かなりわがままで、逆らう者は容赦なく魔法を放つ別名『白い魔王』！そんな人は倒すよりぶくぶくに太れば良いのです。『白い雌豚』がお似合いです」

水蓮竜

「……なのはどうして人が嫌いなの？」

光翔竜

「いいえ、嫌いというより怖いんですよ。あの人本物の魔王ですから」

水蓮竜

「……怖いんだね。わかった、真王竜様と相談しよう」

光翔竜

「はい」

二人は仕事を再開させた。

水蓮竜

「あ、牛乳だ……腐ってないかな？」

光翔竜

「牛乳がこんなところにあるわけありませんよ。これは……」

「

センサーを当てる。

「妖精の聖乳」

貧乳から巨乳になりたい妖精が作り出した聖乳。飲めばたちまち貧乳から巨乳になる。

水蓮竜

「こんなのもあるんだね」

光翔竜

「こんなのもって、失礼ですね。おっぱいをおつきくする優れものなんですよ」

水蓮竜

「でもお母さん達はおっぱいおつきいよ」

光翔竜

「しかし、貧乳キャラクター達には喉から欲しがるものですよ」

水蓮竜

「……………おっぱいって、そんなに良いものなの？」

光翔竜は目を光らせる。

光翔竜

「その通りです！おっぱいは女性の象徴であり、男性の異性を目覚めさせる魅惑の果实！」

水蓮竜

「魅惑の果实？」

光翔竜

「あれには男の夢とロマンが詰まっています！手で揉んだあの柔ら

かな感触は、強く握っても引つ張っても壊れない特有の感触です！
さらに良い香り付きでさらに心地よい！」

水蓮竜

「そういえばあたしもお母さんのおっぱい枕気持ち良かったな」

光翔竜

「おっぱい枕ですか、良いですね〜。私もフェイトさんのおっぱい枕で眠りたいです〜」

フェイトのおっぱいで寝る妄想する。

水蓮竜

「おっぱいって便利で凄いなだね」

光翔竜

「……しかし、残念ながらそんな素晴らしいおっぱいも重
力には敵いません。歳をとるほど段々と垂れてしまっんです」

水蓮竜

「白天竜お姉ちゃんやお母さんのおっきいおっぱいも垂れちゃうん
だ」

光翔竜

「はい、残念ながら」

水蓮竜

「……あんなに柔らかい暖かくて柔らかいおっぱいが垂れ
ちゃうんだ」

光翔竜

「私もフェイトさんのおっぱいが垂れちゃうと思うと悲しいんです」

二人は落ち込む。

???

「そんなおっぱいを救うロストロギアがあるぞ」

光翔竜 / 水蓮竜

「えっ？」

後ろにいつの間にか真王竜が立っていた。

光翔竜

「し、真王竜様！？いつの間にかいたんですか！？」

真王竜

「様子を見に来てみると、おっぱいの話が聞こえてね。光翔竜、子供になんて話をしているんだ」

光翔竜

「す、すみません！」

真王竜

「……しかし、おっぱいに賭ける情熱はとても伝わったよ」
光翔竜

「は、はっ、恐縮でございます！」

水蓮竜

「それより、おっぱいを救うロストロギアって何？」

真王竜

「おっぱいを垂れさせる重力に抗うため作られたロストロギアその名は『聖乳の乳当て』！」

光翔竜

「聖乳の乳当て！？」

水蓮竜

「此処にあるの？」

真王竜

「残念ながら見つかっていないのだ。探す時間が……いや、探しにくいんだよ。特に彼女がいるから」

光翔竜

「確かにそのゆうロストロギアは我が組織、いや竜の爪の女性メンバーがかなり怒りますからね……………」

光翔竜は女性メンバーの軽蔑する眼差しを想像して、恐怖する。

真王竜

「だから諦めているのだ」

真王竜は肩を落とす。

すると、

水蓮竜

「……………私、行きます」

真王竜

「えっ？」

水蓮竜

「私、その乳当てを探しに行きます！」

真王竜 / 光翔竜

「ええっ!？」

水蓮竜

「私、お母さんとお姉ちゃん達のおっぱいが垂れちゃうのは嫌なの。お母さんやお姉ちゃん達のおっぱいを重力から守りたい!だから探させて!」

水蓮竜は必死に嘆願する。

光翔竜

「って、あのう……………かつこいいけど、言っていることに問題ありますね」

すると、真王竜は水蓮竜の肩に手を乗せる。

真王竜

「……………ありがとう。気持ちは嬉しいが、まだ君は幼い。もう少し大きくなってから許そう」

???

「いいえ、許しませんよ」

真王竜 / 光翔竜

「えっ？」

後ろには聖唱竜、白天竜、氷刃竜、夜帝竜の『竜の爪』の女性メンバーだった。

真王竜

「……………い、いつの間に？」

恐る恐る尋ねる。

聖唱竜

「あなたが『おっぱい』という言葉が聞こえました」

真王竜

「そ、そうなんだ……………」

真王竜は冷静をよそっていたが内心焦っていた。

氷刃竜

「水蓮竜、お母さんと話そうか」

氷刃竜は水蓮竜を抱えて出ていく。

聖唱竜

「お二方は……わかっていきますよね？」

真王竜と光翔竜は震えながらも頷く。

氷刃竜と聖唱竜は水蓮竜に『おっぱい』のことを話した。

そして、叱られた真王竜と光翔竜はいまだに女性メンバーから白い目で見られているのは、言うまでもない。

終わり

☆おまけ☆

光翔竜

「どうも、今回から始めました。『竜の爪』通信！」

光翔竜

「このコーナーは『竜の爪』のことを詳しく知ってもらいたく作つたのです！私が司会を務めます、よろしく」

パチパチパチパチパチパチ~~~~

光翔竜

「最初のテーマは『??機関の幹部』についてです！この物語に出
てきた??機関の幹部（作者のオリジナル）の紹介させて貰います
！」

【毒霧のポイズン】

CV 森田順平

「プロフィール」

組織内では『変態』と呼ばれているほどの殺人快楽者。自身の毒の
能力以外の毒の開発をしている。

暗殺の能力者だった時にスカウトされた。

「能力」

硫酸ガスの噴射（代償：体内の血を失う）

ダガー（毒ガス入り）

「出身」

DARKER THAN BLACK

【鋼鉄のアイアンド】

CV 石塚運昇

「プロフィール」

特定の人物を暗殺することを役目になっている。

普段は冷静だが、怒らせると怖い。

「能力」

鉄製の武器の錬成。

身体を鉄製に変える。

「出身」

NEEDLESS

【黒雷のヤイバ】

CV山路 和弘

「プロフィール」

元護廷十三隊の死神だったが、闘うことを選び、マーシャルの勧誘に乗る。

その後、かなりの功績を立てて幹部内実力者となる。

「斬パク刀」

『黒雷』

(闇と雷を合わせた破壊力抜群の斬撃)

【闇翼のシャープ】

CV高橋広樹

「プロフィール」

殺人、窃盗などの非合法的な仕事を引き受けるために免許を取り上げられた元楽士。

しかし、精霊の力と知識のおかげで『??機関』にスカウトされ、幹部にまで登りついた。

「能力」

主制御楽器『バイオリン』

【闇の吸血鬼ブラディアス】

CV成田剣

「プロフィール」

シャープと契約した闇の上級精霊。

血を、特に美人の血を大好物にしている。

「必殺技」

『ダークトルネード』

闇の力と風の力の強力技。通常の突風より激しい。

光翔竜

「いやゝなかなかの強者ばかりですね。しかし、みんな我がメンバ
ーに返り討ちにされました。やはり我が組織は強いということす
ね」

ウンウンと頷く。

光翔竜

「というわけで今回はここまで、またお会い致しましょう」

プツン！

男のロマンと健全な夢は女の胸に詰まっている。(後書き)

青いタヌキ先生、いかがでしたか？

今回出てきた『ロストロギア』と設立したコーナーなら青いタヌキ先生の執筆の助けになると思います。

元??機関のマーブルさん、最初のテーマの『??機関の幹部(作者のオリジナル)』を読んでいかがでしたか？

そして、なのはさんとフェイトさん。光翔竜の発言を聞いてどうでしたか?.....大体予想できますけど。

氷の魔剣フリーズレヴァンティン(前書き)

戦闘描写は難しく苦勞しました。

氷の魔剣フリーズレヴァンティン

とある吹雪舞う雪原。

ある二人組が歩いていた。

一人は黒いマントを羽織り、黒い大鎌を担いだ者、

白いマントを羽織り、二本の剣を携えた者だった。

黒鎌竜と白天竜である

二人がたどり着いたところは氷の城だった。

とても高い塔がいくつもあり、氷でできた外壁は大きかった。

黒鎌竜

「ここか？」

白天竜

「はい、この極寒地にあった古代ベルカの強国『ストロントロス』の居城「アイスロック」城です」

白天竜は扉の前に立ち、二本の剣（右手に『四聖獣剣』、左手に『魔吸剣』）を抜き二刀流を構える。

すると、二本の剣の刀身から炎が燃え上がる。

白天竜

「朱雀の翼！」

燃え上がった炎が鳥の形になり、放たれた。

ドカアアアアアン！

氷の扉が跡形もなく溶けて蒸発した。

白天竜は剣を納める。

黒鎌竜

「……………いつもより勢いが凄いな」

白天竜

「……………そうですか？」

白天竜はとぼけるが、黒鎌竜はあまり追求しなかった。

白天竜

「早く行きましょう」

白天竜はさっさと行く。

黒鎌竜はあとに付いていく。

【謁見の間】

白天竜と黒鎌竜が入ってきたのは、王や重臣達が来訪者と話をする謁見の間である。

白天竜

「……………何処にあるのかな」

黒鎌竜

「宝庫とかにあるんじゃないのか？」

白天竜

「成る程」

白天竜と黒鎌竜が立ち去ろうとすると、

床に魔法陣が現れる。

黒鎌竜は魔法陣の気配に気づく。

黒鎌竜

「誰だ？」

黒鎌竜は後ろに振り向くと、白天竜も振り向く。

魔法陣から現れたのは白いフード姿の人物だった。

?????

「貴様たち何奴だ？」

黒鎌竜

「名乗るんならそつちから名乗りな」

????

「……………生意気な。我は『ストロントロス』に支えし者だ」

黒鎌竜

「俺達はあるものを探しにきた」

支えし者

「あるもの？」

白天竜

「氷の魔剣『フリーズレヴァンティン』」

支えし者は驚く。

今回、白天竜と黒鎌竜がやって来た理由は『フリーズレヴァンティン』を奪いに来たのだ。

支えし者

「何故、その魔剣のことを」

黒鎌竜

「『ダークレヴァンティン』の継承者から聞いたのだ」

支えし者

「何！？あの『ダークレヴァンティン』に継承者が……………」

黒鎌竜

「その継承者の名は、『真王竜』」

支えし者

「真王！？……………まさか……………『大和の真王』か？」

白天竜

「……………そしてその『大和の真王』から直々にこれを学びました」

白天竜は二本の剣を構える。

支えし者

「……………なるほど、お墨付きを貰っているのだな」

支えし者は手から剣のアクセサリーを見せる。

柄は蒼く、刀身は水晶のように透けていた。

白天竜

「それがフリーズレヴァンティン？」

支えし者

「欲しければ試練を乗り越えることだ。我についてこい」

【街】

吹雪が激しいながら街の中は人々が賑わい暖かった。

【とあるレストラン】

《星のカービィ》のメタナイトと《絶対可憐チルドレン》の皆本が

カウンターで話していた。

皆本

「レヴァンティンの発展型？」

メタナイト

「レヴァンティンの属性は『炎』だ。発展型はもう一つ属性が加えられているんだ。その発展型は何本が存在している」

皆本

「その一本が……」

メタナイト

「竜の爪のリーダーと名乗った『真王竜』が使っていた『ダークレヴァンティン』だ」

皆本

「そしてこの地に眠るのが……」

メタナイト

「フリーズレヴァンティンだ。山奥にある城に封印されているらしい」

皆本

「それを我々が先に手に入れるのですね」

メタナイト

「しかし、手に入れるには試練を乗り越えなければならない。もし、失敗すれば……」

????1

「皆本はん」

????2

「メタナイトさん」

チルドレンの葵と紫穂が二人に駆け寄る。

皆本

「どつしたんだ？」

葵

「薫とセイバーはんを止めて！」

二人は嫌な予感を察した。

【地下のコロシウム】

とても屋根と地面が大きくすべて氷でできていたコロシウムだった。

白天竜と黒鎌竜は辺りを見渡す。

支えし者は魔法陣を浮かび上がらせ、あるものを召喚させた。

それは氷でできた甲冑の騎士だった。

支えし者

「この者を倒せば、フリーズレヴァンティンを渡そう。但し、本気で殺らなければ、死ぬぞ」

白天竜は考える。

黒鎌竜

「白天竜、辞めた方が・・・」

白天竜

「何を言ってるんですか！そんなこと出来るわけないでしょ！」

黒鎌竜

「白・・・百合」

『百合』とは《恋姫世界》の出身である白天竜の真名である。

白天竜

「私はいきます！」

強気な態度を示し、甲冑の騎士のところに行く。

心配する黒鎌竜には見守るしかできなかった。

甲冑の騎士は氷で作られた剣を構える。

白天竜も二本の剣を抜き、二刀流に構える。

支えし者

「・・・・・・・・始め！」

白天竜の刀身がいきなり炎を纏う。

白天竜

「朱雀の翼！」

白天竜はいきなり『朱雀の翼』を甲冑の騎士に目掛けて放つ。
放たれた『朱雀の翼』は甲冑の騎士に当たり、

ドカアアアアアン！

と大爆発する。

白天竜

「……………終わっ」

爆風から甲冑の騎士が飛び出てくる。

白天竜は驚く。

甲冑の騎士は斬りかかろうと一太刀を白天竜に当てようとした瞬間、白天竜は瞬時に跳んで後ろに下がって避ける。

支えし者

「言つたろう、本気で殺らなければ死ぬと」

しばらく考えた白天竜は一度剣を納める。

竜の仮面を外し、白いマントを脱いだ。

まだ幼さが残る顔付きだが、美しく、紺色の長い髪に銀色の瞳。

動きやすい軽装の白いミニスカートのチャイナ服姿だった。

ちなみにかなり豊満な胸だった。

白天竜

「作者、言わないで下さい」

すみません。

白天竜

「一気に終わるといふ甘さがあったことは謝ります。次は本気でやります！」

再び二本の剣を抜き、二刀流に構える。

甲冑の騎士も剣を構える。

白天竜

「はっ！」

掛け声と共に走り出す。

甲冑の騎士も向かっていくのだった。

【とあるレストラン】

皆本とメタナイトは啞然した。

バクバクバクバクバクバクバクバク

ズルズルズルズルズルズルズルズル

くくくくくくくくくくくくくくく

薫とセイバーは沢山並べである料理を食べていた。

二人は張り合うように食べていた。

皆本

「・・・・・・・・何があつたんだ？」

葵

「見ての通り、大食い競争や」

メタナイト

「そうではなく何でこんなことになったのだ？」

紫穂

「最初は美味しいものの取り合いだったんですけど、いつの間にか大食い競争に変わってしまったんです」

皆本

「やめる薫！腹を壊すぞ！」

メタナイト

「セイバー、もうそれぐらいにするんだ！」

皆本とメタナイトの制止も聞かないでセイバーと薫は食べ続ける。

しかし、

薫

「・・・・・・・・もう駄目だ」

薫は倒れる。

葵／紫穂

「ちゃん薫!!」

葵と紫穂は薫に駆け寄る。

皆本

「お、終わった」

メタナイト

「いや、まだ終わっていない」

皆本

「えっ？」

薫が倒れたにも関わらずセイバーはまだ食べていた。

皆本

「な、何でまだ食べるんだ!？」

メタナイト

「彼女は底無しの胃袋の持ち主だ。……そして以前より強力になった食欲」

皆本

「強力になった食欲？」

メタナイト

「セイバーに食欲を抑えてもらう為に断食修行に行かせたのだ。一週間後に帰ってきた彼女はかなり痩せていた。そして」

皆本

「以前より食欲が強力になっていた」

メタナイト

「相当凄まじい断食だったのだろう。……行かせたのが間違っていた」

メタナイトは思い出すだけで後悔した。

皆本は同情する。

すると、ドゥーエが駆け込んで来る。

ドゥーエ

「大変よ！『竜の爪』が動き出したわよ！」

皆本

「何!？」

メタナイト

「やはり来たか」

皆本

「薫は倒れているから留守番だ！葵と紫穂で、『ザ・チルドレン』出動だ！」

葵／紫穂

「了解!」「」

メタナイト

「案内してくれ！」

ドゥーエ

「わかったわ！」

レストランから飛び出ようとしたその時、

「待て！」

レストランの主人が止める。

皆本

「退いて下さい！急いでいるんです！」

主人

「その前にお代を払って下さい！」

メタナイト

「後で支払う！」

主人

「いいえ、後払いは受け付けません。今すぐ払って下さい」

主人は領収書の束を見せつける。

〈 領収書 〉

ローストビーフ

ターキー

トムヤンクン

煮込みラーメン

サーロインステーキ

寄せ鍋

おでん

肉まん

鍋焼うどん

パエリア

特上寿司

船盛り

各種ケーキ

他多数

合計¥999999

~~~~~

皆本とメタナイトは驚愕する。

主人

「特上寿司と船盛りはわざわざ出前を取らしたんです。お支払いを  
皆本は財布を確認する。」

皆本

「……………全然足りない」

主人

「では、働いて下さい」

こうして皆本達は現場に行けなかった。

セイバー

「モグモグ、おかわりを」

そしてセイバーはまだ食べ続けていた。

【地下のコロシウム】

ガキーン！ガキーン！ガキーン！

白天竜と甲冑の騎士の剣が激しくぶつかり合う。

黒鎌竜は平然していたが、

黒鎌竜

（……………百合）

心配しながら見守る。

左斜め下から魔吸剣が襲い掛かるが、甲冑の騎士の剣が防ぐ。

そして右横から四聖獣剣が襲い掛かる。

しかし、甲冑の騎士は魔吸剣を尻ぎ払い、四聖獣剣の攻撃を防いだ。

防いだ後、瞬時に白天竜の腹部に蹴りを入れて吹き飛ばす。

白天竜

「くっ……」

白天竜は二本の剣を突き刺し、飛ばされる勢いを減少させる。

止まると、すぐに向かっていく。

四聖獣剣と魔吸剣を重ねながらの突進すると、甲冑の騎士は剣を立てて防いだ。

白天竜

「はっ！」

力押しで甲冑の騎士を押し出す。

左斜め上に魔吸剣を降り下ろし、右斜め上から四聖獣剣を降り下ろすが、甲冑の騎士はそれを剣で弾き、白天竜を突き刺そうとすると、白天竜は左に避けて、右横から四聖獣剣で斬りつける。

ガキーン！

しかし、傷は付かなかった。

白天竜は驚き、後ろに下がる。

白天竜

「やはり甲冑だから硬いか……」

すると、どういう訳か甲冑の騎士は剣を下ろす。

白天竜は当然驚く。

「何故、剥きになる？」

甲冑の騎士から声が発した。

甲冑の騎士

「貴女の剣には焦りが感じる。勝ちたい、力が欲しいという想いが伝わる」

白天竜は驚く。

黒鎌竜

（……………やっぱりな。いつもより攻撃が激しいと思ったら……………）

黒鎌竜は薄々気づいていた。

白天竜

「べ、別に剥きになってなんか……」

甲冑の騎士

「自棄になった勢いでは、せつかくの剣術が発揮しない」

白天竜は昔のことを思い出す。

### 【過去】

白天竜

「きゃっ！」

当時幼かった白天竜は木刀を手放して倒れる。

素顔の真王竜が白天竜に稽古をつけていた頃だった。

白天竜

「痛い」

真王竜

「無闇に突っ込むなよ。よく考えて剣を動かせ。闘いで冷静を失えば、良的になる。よく覚えるんだ」

白天竜

「は、はい」

### 【現在】

白天竜

「……………いけない、私は大事なことを忘れていた」

白天竜は反省した。

白天竜

「アイツに、クロ・アスタリスクに負けた悔しくなっていたからな」

クロ・アスタリスク

聖王教会で彼と闘い、敗北してしまった。

敗北した後、

クロ

「……………こんな小娘でもメンバーになれるんなら、竜の爪も  
たいしたことはないな」

と言われたからだ。

その時、白天竜は悔しかった。

自分のことを、自分の所属する組織を侮辱されたからだ。

黒鎌竜

「……………そうか」

甲冑の騎士

「そんなに悔しいのか？」

白天竜

「当たり前よ！あの組織は、あの人達は私を助けてくれて、家族の暖かみをくれた。そんな人達を侮辱されて、怒らないわけないですよ！」

甲冑の騎士

「……………では、貴女が闘う理由は」

白天竜

「その人達への恩返しよ」

甲冑の騎士

「ならば、その想いを私にぶつけるのだ」

甲冑の騎士は剣を垂直に構える。

白天竜も四聖獣剣と魔吸剣を垂直に構える。

両者はしばらく動かなかった。

白天竜

(……………想いをぶつける)

白天竜はまた過去のことを思い出す。

### 【過去】

白天竜と真王竜は座る。

真王竜は一本の剣を掲げる。

真王竜

「白天竜、剣はな誰かを斬ってしまうものだ。その剣を持つのは何のためだと思う?」

白天竜

「……………戦うため?」

真王竜

「そうだ、戦うためだ。ならば、何故戦う?」

白天竜

「……………わからない」

真王竜

「じゃあ、なんで白天竜は剣を持ちたいと思ったんだ?」

白天竜

「……………強くなりたいから。大切なものを護りたいから」

真王竜は白天竜の頭に手を置く。

真王竜

「それで良い。君の道は君で決めるんだ」

【現在】

白天竜

(私の道は……………)

白天竜は目を閉じる。

甲冑の騎士は動き出した。

白天竜に斬ろうと、垂直に構えた剣を振ろうとする。

黒鎌竜

「百合！」

その時、白天竜は目を開く。

白天竜

「私が決める！」

白天竜は剣技が動く。

魔吸剣で甲冑の騎士の剣を受け止め、そのまま砕く。

甲冑の騎士は驚いた。

そして、四聖獣剣は甲冑の騎士の胸の中心を貫いた。

決まった。

白天竜の勝利だ。

甲冑の騎士

「貴女の熱い想い、伝わりました」

甲冑の騎士は粉々に砕け、フリーズレヴァンティンが現れた。

白天竜は驚いた。

支えし者

「お見事」

支えし者は白天竜に歩み寄る。

支えし者

「フリーズレヴァンティンからの試練をよく乗り越えた」

白天竜

「フリーズレヴァンティン自らが」

支えし者

「フリーズレヴァンティンはそんじょそこら奴には扱えず、凍らせてしまう氷の魔剣。扱うには凍らない熱い心の持ち主でなければならぬ。ストロントロスの『騎馬王』も熱き心で使っておった。お主の熱き想いがフリーズレヴァンティンを氷を溶かした。お主のよくな熱き心の持ち主なら、凍らされることはない」

白天竜

「それじゃ」

支えし者

「おめでとう、貴女はたった今継承者になった」

黒鎌竜は喜ぶ。

こうして、白天竜はフリーズレヴァンティンの継承者となった。

【山道】

吹雪が止んだ夜。

白天竜と黒鎌竜は帰る途中だった。

黒鎌竜

「……………百合」

白天竜

「はい」

黒鎌竜

「恩返ししたいって、言ったな」

白天竜

「はい」

黒鎌竜

「危険な仕事に身を置いてまでやることか？」

白天竜

「それは……………」

黒鎌竜

「やたらと『恩返し』とか使うな」

白天竜

「えっ……………」

黒鎌竜

「……………俺がお前を救ったのは、恩返しさせて欲しいからじゃない。だから『恩返し』とか言うな」

白天竜

「……………すみません」

白天竜は落ち込む。

黒鎌竜

「……………さて、湿っぽいことはおしまいだ。祝いになんか食うか」

白天竜

「は、はい…」

白天竜は元気を取り戻す。

そして、黒鎌竜をせかして山を降りるのだった。

### 【とあるレストラン】

黒鎌竜

「何、材料が無いから料理が出来ない？」

主人

「大変申し訳ありません。あの金髪の女性がすべて食べ尽くしまし  
て……………」

主人が店内の奥で働いている金髪の女性、セイバーを指す。

そして皆本、チルドレン、メタナイト、ドゥーエが働いていた。

セイバーは出す料理をつまみ食いしていた。

主人

「こら、また食べてる！」

白天竜と黒鎌竜は啞然して、出ていく。

皆本達が青いタヌキ先生のところに登場する頃には、働き終えた後ですね。

終わり。

～おまけ～

光翔竜

「・・・・・・・・くふっ」

光翔竜はアニメ系のエロチックな本、略して《エロ本》を読んでいた。

本に掲載内容アニメは・・・

『それのおとしもの』、『リリカルなのはStrikerS』、『けんぷファー』、『真・恋姫†無双』、『サムライガールズ』などのセクシーアニメである。

光翔竜

「良いね〜……………って、始まってますか！？すみません！」

光翔竜は慌てエロ本を隠す。

光翔竜

「さて、今回のテーマは『レヴァンティンシリーズ』についてです  
！」

パチパチパチパチパチパチパチ

光翔竜

「そもそもレヴァンティンとは、爆乳剣士シグナム様のデバイスで  
す」

光翔竜は『レヴァンティン』の映像を見せる。

光翔竜

「レヴァンティンとは炎の属性を持つ魔剣です。『レヴァンティン  
シリーズ』とは、そんなレヴァンティンを元に造り出された発展型  
なのです。……………えっ、元となったレヴァンティンとどう違  
うのかですって？それは……………真王竜様の『ダークレヴァン  
ティン』で実証済みじゃありませんか！」

「ダークレヴァンティン」

黒で基調された魔剣。

『闇』と『炎』の属性で合わせられた『邪炎』を発する。

『邪炎』は水や風等では消せない。悪の心を持つ者に燃え付くと、

悪に反応して燃え続ける。

消す方法は、聖なる水や光の力で消せる。

かなり高い魔力を持つが、並みの剣士や魔導師では扱えない。逆に邪炎で燃やされる。

光翔竜

「……………素晴らしい。そんな恐ろしい魔剣を使うとは、流石ですね。では次は、白天竜さんが手に入れた『フリーズレヴァンテイン』です」

ハフリーズレヴァンテイン

蒼で基調された魔剣。

『氷』と『炎』の属性で合わせられた『凍炎』を発する。

燃やすのではなく、凍らせる炎である。凍りついたら炎などでは溶かせない。熱い想いが込められた攻撃ではないと溶かせない。

心の暖かい者が使わなければ、自信が凍りつく。

光翔竜

「なるほど、白天竜さんは心の優しきお方ですからね……………」  
「それでは最後の一本の説明します」

ハセントレヴァンテイン

金色に基調された魔剣。

『聖』と『炎』の属性を合わせられた『浄炎』という炎を発する。邪悪な魂や呪いの力を燃やす。

『ダークレヴァンティン』と同等の魔力を持つが、正義を想う者にしか使えない。

光翔竜

「……………なんか、アニメキャラクター達が手に入れそうな剣ですね……………。しかし、在処がわかっていないから安心です」

(これは青いタヌキ先生に任せちゃおうかな)

光翔竜

「ちなみに白天竜さんの剣はこんな剣です」

〔四聖獣剣〕

四聖獣と呼ばれている青龍、白虎、朱雀、玄武が宿していると云われている宝剣。

〔魔吸剣〕

魔法や魔導師の魔力を吸収し、自分の魔力にできる魔剣。

光翔竜

「白天竜さんの剣も凄いですね。それではここまで。ではでは」

プツン！

光翔竜は再びエロ本を読む。

光翔竜

「なのはさんスタイル抜群ですね。歳と性格があれなのに」

終わり

氷の魔剣フリーズレヴァンティン（後書き）

青いタヌキ先生に注文してしまったことをお詫びします。

いかがでしたか？

**就職活動も戦いの一つだ(前書き)**

打って変わって、ギャグ編です。

## 就職活動も戦いの一つだ

### 【何処かの世界】

変装した竜兵二人はこそこそと話し込んでいた。

竜兵 1

「?? 機関が潰れたらしいな」

竜兵 2

「そうらしい。何でも総帥のマーシャルは青い死神に呆気なく倒されたらしいな」

竜兵 1

「いや、正確には捕まったらしい」

竜兵 2

「どつちにしろ、呆気なかった事には変わりはないだろう」

竜兵 1

「ああつ。組織が潰れてしまったから、残った奴等は後が大変だな」

竜兵 2

「再就職がか？」

竜兵 1

「もしかしたら、竜の爪つちに就職してきたりして」

???

「……おい」

「「えっ?」「」

振り向いてみた竜兵二人は驚愕した。

声をかけてきたのは、??機関の幹部だった、フレイムだった。

フレイムの後ろには、スイレーヌとサンダナもいた。

フレイム

「貴様ら、竜の爪だな？」

しばらく間を空けて、

「「??機関!?!?!」」

竜兵二人は身を寄せあつて恐がる。

「「悪く言つてすみませんでした!?!」」

泣きながら命乞いの謝罪する。

フレイム

「いや、そんなことより頼みがあるのだ」

竜兵1

「た、頼み?」

竜兵2

「き、聞きますから、命ばかりは!」

フレイム

「命など要らん!我々が欲しいのは………職だ」

「「へっ?」」

竜兵二人は首を傾げる。

フレイム

「……………貴様らの組織に入れてくれ！」

フレイムとスィレーヌとサンダナは頭を下げる。

「「はい？」」

竜兵二人は啞然する。

“ 数時間後 ”

竜兵二人の前にある人物がやってくる。

それは……………、

夜帝竜

「つつす！」

夜帝竜だった。

「「お待ちしてました」」

夜帝竜はフレイム達を見る。

夜帝竜

「あいつらか、竜の爪つちに入りたいたってのは？」

竜兵 1

「はい」

竜兵 2

「前に勤めていた組織が潰れてしまったので、就職したいと」

夜帝竜

「……………ふーん」

夜帝竜が近づく。

フレイム

（あれは確か……………）

スイレ→又

（夜帝竜！！）

サンダナ

（あのアイアンドを倒した奴かよ！！）

フレイム達は夜帝竜のことを知っていたので、内心緊張する。

夜帝竜はフレイム達を見つめる。

夜帝竜

「就職したいのか？」

フレイム

「……………ああっ」

夜帝竜

「此処じゃあなんだから、別の場所で話そう」

フレイム達は頷く。

【その辺の食堂】

夜帝竜と竜兵二人が先に入り、フレイム達も入る。

フレイム

（此处で話すのか？）

夜帝竜は席に座り、

夜帝竜

「すいません、カツ丼五杯！」

と注文する。

スイレエヌ

（カツ丼を五杯も注文したよ！？）

サンダナ

（まずは腹ごしらえか？）

フレイム達は夜帝竜の向かいの席に座る。

フレイム

「そ、それでは、我々を竜の爪に入れてくれないか？」

夜帝竜

「おいおい、出すもんを出せよ」

夜帝竜は手を差し出す。

フレイム

「だ、出すもん？」

フレイム達は困惑する。

夜帝竜

「決まってるだろ、履歴書だよ」

「……り、履歴書！？」「……」

夜帝竜の要求したものでさらに困惑する。

夜帝竜

「就職するなら、履歴書が必要だろ？」

フレイム

「あつ、いや、そんなものは用意してないんだけど」

夜帝竜

「おいおい、会社の面接には履歴書が必要不可欠だぜ」

フレイム

（会社！？竜の爪は会社だったのか！？）

スイレエヌ

「す、すみません……」

サンダナ

「履歴書って、悪の組織に必要なのかよ？」

夜帝竜

「就職の手順は面接。面接には履歴書が必要だろ」

フレイム

「あ、いや、俺達は履歴書は無いが、やる気はある！俺達を入れたら必ず役に立つ！幹部を務めていた！」

サンダナ

「失敗もしていたけどな」

スイレエヌ

「余計なことを言わない！」

夜帝竜

「……………ハアア」

ため息つくくと、

店員

「お待たせしました」

店員がカツ丼五杯を持ってきて、テーブルに置く。

夜帝竜

「あんがとう」

夜帝竜はカツ丼を食べ始める。

夜帝竜

「あのさ、学歴が良ければ良いんじゃない。いいか、仕事するのはやり続ければ慣れるもんだよ」

フレイルム

「は、はあ……………」

夜帝竜

「それに面接が始まったのに面接官がまだ何も言っていないのに椅子に座るなよ」

フレイルム

「えっ、面接もう始まっていたの？」

夜帝竜

「入って来たら、もう面接が始まってんだよ！」  
サンダナ

「そうなのか？」

夜帝竜

「練習してこなかったのか？いや、練習以前に常識を持って」

夜帝竜はため息をついて、カツ丼を食べる。

フレイム

（いや、カツ丼を食べながら面接するあんたに言われたくないって  
！）

スイレエヌ

（悪の組織なのに常識にこだわるの！？）

心の中で突っ込む。

サンダナ

「悪の組織に常識は無いだろう？」

サンダナがカツ丼に手をつけようとした時、

夜帝竜

「コラ！」

《バキッ！》

サンダナ

「はぶしっ！？」

サンダナは夜帝竜に殴られ、倒れる。

夜帝竜

「面接官の食べるカツ丼に何手をつけているんだ！本当に常識が無いんだから」

フレーム

（それ、全部食う気が！？）

スイレエヌ

（カツ丼を食べながら面接する面接官こそ、常識無いでしょ！）

二度目の突っ込みを入れる。

サンダナは起き上がる。

サンダナ

「一つくらい良いだろうが！？」

サンダナは武器を取り出す。

フレーム

「止めるサンダナ！」

スイレエヌ

「あたし達は今面接しているのよ！面接官を怒らせたら就職出来ないわ！」

サンダナ

「あ、そっか」

サンダナは武器をしまう。

しかし、夜帝竜は不機嫌な顔になる。

フレーム

（まずい、完全に最悪の印象を与えてしまった）

スイレエヌ

(これは確実に不合格だわ……………)  
サンダナ

(……………カツ丼、喰いて〜)

しかし、夜帝竜は黙々とカツ丼を食べる。

フレイム

(ど、どうしたんだ?)

スイレエヌ

(何も言わないわ)

サンダナ

(カツ丼、喰いて〜)

しばらくして

夜帝竜

「ふーっ」

五杯のカツ丼を平らげてしまった。

フレイム

(本当に全部食べた!?)

スイレエヌ

(カツ丼を五杯食べてしまう人こそ、常識無いでしょ!)

サンダナ

(カツ丼、喰いたかった〜)

夜帝竜

「……………とりあえず終了だ。連れて行け」

竜兵1

「ハッ！」

夜帝竜

「勘定を頼む」

竜兵2

「ハッ！……………つて、ええッ!？」

フレイム達は竜兵1に連れられる。

フレイム

(……………面接つて、本当に顔を合わせるだけみたいだな)  
スイレース

(そうよね。一般企業じゃないんだからね)

サンダナ

(……………腹減ったな)

フレイム達が連れていかれたところは……………。

### 《竜の爪採用試験》

竜の爪採用試験会場だった。

フレイム

(採用試験!?)

スイレエヌ

(これじゃ、一般企業と変わらないじゃないのよ!?)

フレイム達以外にも何人が来ていた。

フレイム

(悪の組織に入るのに、こんなに大変なのか!?)

それぞれ試験用の参考書や辞書等を読んでいた。

スイレエヌ

(皆、勉強している。やばいわ、勉強なんかしていないわ。……  
……って言うか、どんな勉強をすればいいのよ)

サンダナ

「やばいよ。筆記試験、苦手なんだよ」

フレイム

「いや、悩むところが違うだろ？」

????

「筆記試験、苦手なんですか？僕もなんです」

サンダナの隣に居たのは、

「「「シャープ!?!?!」」」

聖唱竜とレイラに負けた『闇翼のシャープ』である。

シャープ

「フレイム！スイレエヌにサンダナ、ひさしぶりだな」

フレーム

「『ひさしぶりだな』、じゃない！なにやっているんだ！？」

シャープ

「なにつて、試験受けにきたんだけど」

スイレエヌ

「そうじゃなくつて、なんで試験に参加しているのよ！？」

シャープ

「そりゃ………此処（竜の爪）に就職するためさ」

サンダナ

「受けるつて、お前を返り討ちにした組織にか？」

シャープ

「だからだよ。下手に逆らうより、強い方についた方が得になる。

それに戻るべき』??機関』は壊滅したからね。君たちもそうなん

だろ？」

凶星を言い当てられたフレーム達は黙り込む。

《パンパン！》

夜帝竜

「はい、静かにしろ。今から試験を始めるから教科書しまえ」

フレーム

（教科書つてなんだよ？）

夜帝竜

「今からモニターに出てくる問題を一問ずつ出す。自分の机にある電子ボードに答えを書くように」

一人一人の机に電子ボードとペンが置かれてあった。

夜帝竜

「三問正解したら筆記試験合格だ」

サンダナ

「えっ、三問だけで良いのか？」

夜帝竜

「それじゃ、第一問」

『「新機動六課」この漢字の振り仮名を書きなさい』

フレ임

（なんだ簡単ではないか）

スイレエヌ

（これなら余裕ね）

フレ임達は答えを書く。

夜帝竜

「正解は・・・」

新機動六課「カス」

フレ임

（カスってなんだよ！？）

夜帝竜

「これは竜の爪つちでの常識だ」

スイレエヌ

(どこの星の常識よ!?)

夜帝竜

「他に馬鹿やクズって書いても正解だ」

サンダナ

「よっしゃ!」

フレイム

(正解出来たのか、サンダナ!?)

スイレエヌ

(普通に書かなかったの!?)

夜帝竜

「次は第二問」

『“真王竜”この漢字の振り仮名を書きなさい』

フレイム

(こりゃ、ゝしんおつりゆうって書くのが常識だが、彼らの常識ではそうは読まない)

スイレエヌ

(これは愛称だわ)

フレイム達は答えを書く。

フレイムはゝリーダー

スイレエヌはゝ真王竜様

サンダナはゝ真ちゃん

ちなみにシャープは「カッコいい真王竜様」

夜帝竜

「正解は……」

「山寺宏一」

フレーム

（山寺宏一！？って言うか、振り仮名の中に漢字入るか！）

夜帝竜

「真王竜のCV（イメージ的のキャラボイス）は山寺宏一だ。覚えておけ」

スイレーヌ

（常識というより、設定でしょ！）

サンダナ

「……真ちゃんじゃなかったのか」

フレーム

（お前はどんな答えを書いたんだ！？）

夜帝竜

「ああつ、そういえば。フレーム、スイレーヌ、サンダナだったな？お前らのCVは？」

フレーム

「い、いや、ないけど……」

夜帝竜

「……気になるな。次回までにCVを教える。これを宿題にする」

フレーム

(宿題!?)

スイレエヌ

(採用試験に宿題出すの!?)

サンダナ

(.....青いタヌキに聞くか)

夜帝竜

「次は第三問」

『青い死神こと秋本優太の秘密を書け』

フレイム

(こ、これはどう書けば良いんだ?)

スイレエヌ

(し、知っている情報を書きましょう)

フレイム達は知っている情報を答えとして書く。

夜帝竜

「正解は.....」

ハ未だに童貞

フレイム

(秘密ってそれかよ!?)

スイレエヌ

(別に知りたくない秘密じゃない!!--)

サンダナ

「マーシャルを倒した凄い奴じゃないか」

フレイム

（それは秘密じゃなく表現だよ！）

夜帝竜

「これはかつて作者（烈火竜）が『世界大戦争』で仕入れた情報だ」  
スイレエヌ

（何を仕入れたのよ、作者（烈火竜）！？）

夜帝竜

「次は第四問」

『優太の恋人である榊原綾華の秘密を書け』

フレイム

（知っている情報はあてにならない）

スイレエヌ

（………適当に書こつ）

フレイム達は答え書く。

フレイムは「見かけによらずかなりの年増」

スイレエヌは「体重はかなり重い」

サンダナは「料理が美味い」

ちなみにシャープは「下着は黒いTバックパンツ」

夜帝竜

「正解は……」

「料理が美味しい」

サンダナ

「やった、正解だ！」

フレイム

（しまった、引っかけだったか!?!）

夜帝竜

「しかし、どの答えも面白いから、全員正解だ」

「……やった!」

スイレエヌ

（えっ、面白って理由で全員正解にしたの!?!）

フレイム

（それ、問題の意味無いだろ!）

夜帝竜

「次は第五問」

『高町なのはとフェイト・T・ハラオウンの異名を書きなさい』

フレイム

（……………これは正しく書いた方がいいかな）

スイレエヌ

(高町なのはの異名って、『白い悪魔』か『白い魔王』ね)  
サンダナ

(フェイトは………適当でいいかな)  
シャープ

(フェイトさんって確か………)

それぞれ答えを書く。

夜帝竜

「正解は………」

高町なのははもう30にもなるのにまだ『魔法少女』をやっているのかよ。いい加減結婚した方が良く、わがままで頑固な上に、逆らえば容赦なく叩き潰すという性格なので未だに独身。シングルマザーならぬ魔王マザー」

フェイト・T・ハラオウンは光翔竜の恋人であり婚約者」

フレイム

(それ異名じゃあねえーよ！ただの悪口だよ！)

スイレエヌ

(光翔竜って、誰よ!?)

サンダナ

「白い魔王は駄目か？光翔竜って、誰だ？」

夜帝竜

「白い魔王はもうワンパターンだから駄目だ。光翔竜はうちのメン

バーの一人だ。アイツはフェイトの熱狂的な大ファンだ」  
スイレエヌ

(嘘かい！向こうの望みかよ！)

夜帝竜

「次は映像問題だ。何をやっているのかを当てるんだ。少しでも合っていたら、正解にする。それじゃ、スタート」

雅也は顔をにんまりとしながらソファアに座り、メアリーは《クチヤクチャ》と音をたてながら、雅也の股間に顔を埋めていた。

夜帝竜

「これは何をやっているんでしょうか？」

フレーム達は絶句した。

フレーム

(当てるって、この場面をか!?)

スイレエヌ

(明らかな淫乱行為じゃないの!?)

サンダナ

(さ、流石にこれは……………)

フレーム達は余りにいけないことだと思い、答えを書けなかった。

夜帝竜

「……………書いたのは一人だけか？それじゃ、答えを見せるぞ」

映像が横に動く。

雅也は好きなCDを聴いてソファーに座り、メアリーは呆れながら好物のシュークリームを食べながら正座をしていた。

夜帝竜

「答えは、にんまりとCDを聴いている雅也に呆れながらメアリーはシュークリーム食べていたでした」

《ズコーーーーーーッ!》

フレ임達はずつこける。

フレ임

「い、一点透視遠近法の問題だったか」  
スイレエヌ

「解りませんよ、そんなの!」  
シャープ

「…………… エラじゃなかったか」  
サンダナ

「書いたのか!？」  
夜帝竜

「解らなかつたか?次は解りやすいのにするな」

次に流された映像は、

服を脱いで、風呂場に入る雅也。

そこへマーブルが入ってくる。

雅也のパンツを掴んで顔を近づける。

そして映像が止まる。

夜帝竜

「さて、ここから何をするでしょうっ？」

フレ임達はまた絶句する。

フレ임

(パンツを掴んで顔を近づけるって)  
スイレエヌ

(ま、まさか……………)  
サンダナ

(汚れのチェックか?)

フレ임達は迷ったが、答えを書く。

夜帝竜

「それじゃ、正解は……………」

映像が動く。

マーブル

「……………雅也のパンツ」

マーブルは恥ずかしながらも、匂いを嗅ごうとしたその瞬間、

雅也

「……………何やってんだ？」

いつの間にか雅也がいた。

雅也はパンツを持ったままのマーブルに唾然する。

マーブル

「……………い、いやー！」

《バキッ！》

雅也

「グハッ！」

マーブルは揉み消したいあまり雅也を殴り飛ばす。

《ハラリ》

その瞬間、腰に巻いていたタオルが取れてしまい、マーブルは雅也のアソコ、全裸をばっちり見てしまい、

マーブル

「いやあああああああ！……！」

叫びながら出ていってしまう。

夜帝竜

「答えは、雅也のパンツを嗅ごうとしたところを雅也本人に見つかり、殴ってしまった上に雅也のアソコを見て、逃走したでした」

フレイム

（なんだよ、その長ったらしい答え！？）

スイレエヌ

（……マールも何やってんのよ）

サンダナ

「……パンツ嗅ごうは駄目か？」

夜帝竜

「最初の辺りは合っていたから正解にする」

「「「よっしゃ！」「」」

夜帝竜

「次はこの後の続きだ」

雅也

「い、いってえ」

雅也は殴られたところを抑えながら外に出ようとする。

皇月

「雅也、どうしたのその顔？」

雅也

「臯月」

すると、巻き直したタオルがまた取れてしまい、

臯月

「……………このド変態!!」

《ドガバキドガバキドガバキドガバキドガバキドガバキ……………》

雅也

「……………ガクッ」

雅也は倒れる。

臯月

「しまった、やり過ぎた！」

夜帝竜

「問題、この臯月は何発殴った？」

フレイルム達は啞然する。

フレイルム

(は、速すぎてわからなかった)  
スィレーヌ

(ええい、ままよ)

サンダナ

(・・・ふっ、答えは)

フレイム達は答えを書く。

夜帝竜

「答えは・・・・・・・・」

「100発」

フレイム

(そんなに殴ったのか!?)

スイレーヌ

(嘘でしょ!?)

夜帝竜

「正解したのは・・・・・・・・サンダナだ。サンダナは三問正解したから合格!」

サンダナ

「よっしゃ!私の眼は正しかった!」

フレイム

(こいつが合格しやがった!?)

スイレーヌ

(・・・・・・・・天然で勝ち残った)

夜帝竜

「そんじゃ、いよいよ最後の問題だ」

フレイム

(あと一つ正解出来なければ)

スイレーヌ

(不合格ね)

夜帝竜

「それじゃ、スタート」

ボロボロになってしまった雅也がベッドで眠っている。

そこへヴィヴィオが入ってくる。

ヴィヴィオ

「雅也君、災難だったね」

ヴィヴィオは辺りをキョロキョロ見たあと、雅也の顔に近づく。

夜帝竜

「この後、どうなる?」

フレイム、スィレーヌ、そしてシャープは黙々と書く。

夜帝竜

「それでは正解は……」

ヴィヴィオが雅也にキスをしようとするよ、

「」「」「あああああ!」「」「」

ヴィヴィオは驚き、雅也が目覚める。

メアリー、マール、皇月がいつの間にか立っていた。

マール

「ちょっと、抜け駆けしないでよ！」

マールは雅也に駆け寄る。

皇月

「あんなこそ抜け駆けしないでよ！」

皇月も駆け寄る。

メアリー

「怪我を負わせた貴女達に近づく資格は無い！」

メアリーも駆け寄る。

ヴィヴィオ

「止めて！雅也君は重傷なんだよ！」

マール

「そう言っつて、治療と称して、キスをしようとしたでしょう！」

メアリー

「だったら私が！」

皇月

「何であんたよ！私よ！」

ヴィヴィオ

「ヴィヴィオが一番だよ！」

マールブル

「早い者勝ちよ！」

メアリー

「パートナーの私が優先だ！」

皐月

「幼なじみの私に決まっていますでしょう！」

《ドガバキドガバキドガバキドガバキドガバキ……》

雅也

「痛い痛い痛い！人の上で暴れるな！！」

夜帝竜

「雅也はキス争奪戦に巻き込まれ、さらに重傷を負ってしまった」

フレイム達は「やっぱり」と思った。

夜帝竜

「……おっ、三問正解出来たのは、フレイム、スィレーヌ、シャープだ。三人は合格だ。おめでとう！」

《パチパチパチパチ》

他の者も拍手する。

フレイム

(や、やった)

スィレーヌ

(これで就職できる)

シャープ

(・・・長かった)

フレイム達は思わず泣く。

夜帝竜

「次は、実技試験な」

「・・・まだやるのかよ!?!」「」「」

果たして無事に就職できるだろうか？

次回に続く

## 就職活動も戦いの一つだ(後書き)

さあして、この筆記試験は青いタヌキ先生や優太達はどっ思うんでし  
ようかね……………。

特になのはとフエイトは……………。

仕事は時に非情である。(前書き)

今回も下ネタあります。

仕事は時に非情である。

【筆記試験会場】

夜帝竜

「そんじゃ、実技の試験官を呼ぶぞ。ドラゴン隊長」

フレイム達は息を呑んだ。

……しかし、なかなか入室してこないの、おかしいと思  
っていた。

その時、

《ドカッ！》

突然壁が崩れて、

「あらつよと！ー！」

と言いながら転がってくる人がいた。

フレイム達は驚愕した。

それは、なんとジャッー・チェンだった。

夜帝竜

「試験官のドラゴン隊長だ」

ドラゴン隊長

「どうも、ドラゴン隊長です！」

フレイム

「あ、あのう……もしかして、あのアクションスター」

ドラゴン隊長

「違う、ドラゴン隊長だ！」

フレイム

「す、すみません」

ドラゴン隊長

「一つ言っておく！潜入する際に一番大事なものを守らなければならぬものがある。それは何だと思う？」

フレイム

「な、何ですか？」

ドラゴン

「それは……『鼻』だ！人間には色々な急所がある。特に金的だと言われているが、それは間違いだ！一番の急所は、鼻なのだ！これをよく覚えておくように」

鼻息を荒くして、フレイムに迫る。

スィレーヌ

(……何故鼻なの?)

スイレール又はもの凄く唾然する。

ドラゴン隊長

「実技試験は、あるところに行き、それぞれに渡されるミッションをやって貰う。ミッションを成功させれば、合格だ！」

サンダナ

「ほ、本当か!？」

ドラゴン隊長

「本当だ！」

夜帝竜

「そんじゃ、プロジェクト『鼻計画』開始だ！」

スイレール

「鼻計画って何!？」

### 【最終試験会場】

そこは………、

アニメキャラクターが本拠地になっている『新機動六課』である。

一台のワゴン車がやって来て、新機動六課の手前に停車する。ワゴン車からフレーム達が出てくる。

フレーム達は何故か黒いウェットスーツを着ていた。

サンダナ

「何でわざわざ車で行くんだよ？」

フレーム

「直接此処に次元移動をすれば、警報器に気づかれるだろ」

スィレーヌ

「なるほどね」

ドラゴン隊長

「それでは審査員を紹介します」

審査員とは……………

光翔竜

「どうも、審査員を務めます、光翔竜と申します」

トラブルメーカーの光翔竜だった。

光翔竜

「皆さん、筆記試験、合格おめでとございます。いやあ、あれを合格するなんて。作った私、本人もびっくりドンキー、なんちやって！」

お茶目なことを言う光翔竜に、フレーム達はというと……………、

フレーム

(……………あの変な問題作ったのはお前か!?)

スィレーヌ

(……………作った本人もふざけてる!?)

サンダナ

(・・・変わった奴だな)  
シャープ

(・・・さすがに、あの人の下は嫌だな)

と啞然する。

ドラゴン隊長

「それでは、君達一人一人にミッションをこなしてもらおう」

ドラゴン隊長は4枚の紙を差し出す。

フレ임達は嫌な予感しながらも、一枚ずつ取る。

開いて読んでみると、驚愕した。

嫌な予感的中したようだ。

☆ミッション内容☆

フェイト・T・ハラオウンの脱ぎたてパンティを盗め  
「フレーム」

雅也の全裸を写真に写せ。

「スィレーヌ」

『1』の・・・『

この書かれた悪口を高町なのはにいい放ち、無事に逃げ切れ。

「シャープ」

カービィの唄を録音せよ。

「サンダナ」

であつた。

光翔竜

「これも、僕が考えたミッションです」

自信有りに答える光翔竜。

フレイム

（なんだよ、このミッションは！？脱ぎたてのパンティを盗め！？  
そんな下品なことできるか！！）

スイレエヌ

（全裸を撮れるわけないでしょ！！恥ずかしいじゃない！！）

シャープ

（嫌だ。こんなことを言ったら確実に殺される………）

サンダナ

（ラッキー！カービィの歌が聴ける）

サンダナ以外は拒否したり絶望したりと冷や汗かいた。

光翔竜

「皆さんのお気持ちは察します。辞めても構いません。しかし、見

事に合格できればメンバーの補佐という高い地位を与えます!どうします?」

フレイム達は『高い地位』という言葉に驚く。

しばらく考えた末は……、

「やります!」

だった。

光翔竜

「それではこれを差し上げます」

光翔竜があるものを差し出す。

人数分の腕輪と禍々しい手のひらサイズの玉だった。

光翔竜

「腕輪は、姿を消すことができる『見えなくなる輪』。玉は『怨魂』です」

サンダナ

「怨魂?」

光翔竜

「戦争に巻き込まれた人々の魂を封じ込めた玉です。これを何かに当てれば、融合してモンスターにできます。簡単に言えば、『プリキュアシリーズ』のザケンナーやホシイナーと同じです」  
スィレーヌ



そんな最中、

《ブウウウウン》

フレームが姿を現す。

『見えなくなる輪』を使って、侵入に成功し、シャワールームの脱衣場にやってきた。

フレームはシャワーの音とフェイトの声を聞き、赤くなる。

フレーム

「………べ、別に下心があるわけじゃない！これは仕方ないからな」

籠に入ったフェイトの制服を見つけ、物色する。

フレーム

「こ、これが」

フレームはフェイトのパンツを見つけ、手に取る。

「やはり黒ですね」

フレーム

「うむ、しかも………ティーバックだ」

「この細いのが、フェイトさんの美尻に挟まれているんですね」

フレーム

「想像するだけで鼻血が………って、誰だ!」

「静かにしてください!」

光翔竜だった。

フレイム

「………何をしているんですか?」

光翔竜

「フェイト様のシャワーシーンを覗きに来たのです! ついでに貴方が上手くやっているのか、様子を見に来たのです」

フレイム

「ちよつと待て、逆だろう!?! そっちの方が本来の目的で、覗きはついでのハズだ」

光翔竜

「私にとってはフェイト様の美しい裸体を眺めるこその方が本命なんです!」

フレイム

「おおい、良いのかそれで!?! ……っていつか、わざわざミッションにしなくても、自分で盗れるんじゃないのか? こうやって見事に忍びこれたんだから!?!」

光翔竜

「いや、そんなことをしたら嫌われますよ」

「覗くことも嫌われますよ」

フレイム

「そりゃそうだ………って、あつ………」

フレイムは恐怖した。

光翔竜も後ろを振り向いて、恐怖した。

そこには、怒れるフェイトが立っていた。

ちゃんとバスタオルで身体を隠していた。

フェイト

「人のパンツで何をしているのかな？」

光翔竜

「……フレ임君、帰るまでがミッションですから、しっかりそれ（パンツ）を持って帰るように。では、シャイニングワーブ！」

光翔竜は光のように消える。

フェイト

「……覚悟は良い？」

フレ임

「し、失礼しました!!」

フレ임はパンツを片手に疾走した。

フェイト

「待ちなさい！」

フェイトは追いかける。

【通路】

恐怖しながら歩くシャープ。

シャープ

「あの高町なのはに悪口を言えだど？……無理だ！！……  
……この場でばったり会ったらどうしよう……」

「あのお、どちら様ですか？」

シャープ

「えっ？」

言っているそばから高町なのはに出会ってしまった。

シャープ

「いきなり会っちゃった！？  
なのは

「どうかしました？」

シャープ

「え、えーっと……」

「さあー、言うのだ」

いつの間にか、ドラゴン隊長がいた。

シャープ

「た、隊長！？何で此処に……」

ドラゴン隊長

「様子を見に来たのだ。さあー、勇気を出してあの悪口を言うのだ」  
シャープ

「い、いや、まだ心の準備が……」

ドラゴン隊長

「ミッション開始した時点で決まっているのだろー！ミッションとは既に命懸けなのだ！迷いがあれば死ぬぞ！さあー、勇気を出して！  
（親指を立てる）」

シャープ

「ラ、ラジャー！（親指を立てる）」

決意を決したシャープはなのはの方を向く。

なのはは首を傾げる。

シャープ

「……この雌豚！いつも物凄く魔力を溜め込んでいやがって！その上欲しいものは容赦なく奪うんざ、まさに豚！今日からお前は高町なのは辞めて、豚町なのはと改名しやがれ！それに三十路の癖に魔法少女ぶりやがるなよ！16歳の娘がいるんだから潔く若作り辞めやがれ、このなのはママならぬ、なのはババ！」

シャープは精一杯に言い切った。

ドラゴン隊長

「逃げるぞ！」

シャープ

「はい！」

二人は疾走する。

そしてなのはは……………、

なのは

「（裏声で）……………ぶっ殺す！」

エクセリオンモードになり、追いかける。

### 【雅也の部屋】

雅也は「すーすー」と寝ていた。

忍び込めたスイレーヌは雅也の寝間着に手をつけるが、戸惑った。

スイレーヌ

「べ、別に下心があつてやる訳じゃあ無いんだからね」

スイレーヌは意を決して雅也の寝間着を脱がせた。

そして下着を脱がして、スイレーヌは雅也のアレをバッチリ見てしまった。

スイレーヌ

「い、意外にデカイ……………見とれている場合じゃないわ、

撮らなきゃ」

カメラで雅也の全裸を撮った。

スイレーヌ

「……………さっ、帰……………」

「「「ああああああ！！」「」」

スイレーヌは驚いた。

そこに、皇月とメアリーとマーブルが居た。

スイレーヌ

「な、何であんた達が此処に！？」

メアリー

「マスター（雅也）の添い寝をしようと忍び込みマスター、なんちやって」

皇月

「洒落を混ぜて説明するな」

マーブル

「……………スイレーヌ、貴女にそんな趣味が……………」

スイレーヌ

「待つて、これには深い理由が……………」

雅也

「ヘックシユン！うん……………」

雅也は目覚めた。

そして、皇月達と自分が全裸になったことに気付く。

雅也

「わーっ、何だ!?!」

その時、皐月達は雅也のアレをバッチリ見てしまった。

マールブル

「ま、雅也君、凄い(ポッ)」

メアリー

「……………見事です」

皐月

「この、ド変態!」

《バキッ!》

雅也

「ぐはっ!?!」

スィレーヌはこの隙に逃げた。

【カービィの部屋】

カービィ

「あーん、モグモグ」

ヴィヴィオ

「美味しいね」

カービィとヴィヴィオはおやつを食べていた。

それもかなりの量で。

また太るぞ、ヴィヴィオよ。〔作者〕

ヴィヴィオ

「だって断食修行から帰ってきてから、物凄くお腹が空くんだもん」

そう、断食修行から帰ってきたヴィヴィオや臯月達は常に腹を空かしていたのだった。

すると、サンダナが入ってくる。

ヴィヴィオ

「あ、あなた!？」

カービィ

「ポヨ!？」

ヴィヴィオとカービィは警戒する。

サンダナ

「あ、あのう………あんたの歌はとても良かった。だから、もう一度歌を聴かせて下さい!」

カービィにマイクを差し出す。

ヴィヴィオ

「えっ!?!」

ヴィヴィオは驚愕し、カービィは……………、

カービィ

「喜んで!」

カービィはマイクを受け取る。

ヴィヴィオ

「ええっ!?!」

ヴィヴィオは恐怖した。

カービィ

「スーッ、ホゲェ」

ヴィヴィオは倒れ、サンダナは感動した。

カービィの部屋から歌が木霊するのだった。

## 【通路】

フレイム

「はっ、はっ、はっ、はっ……」

フレイムは必死に逃げている。

怒るフェイトから。

フェイトはバルディッシュ・ライオットザンバーを構えていた。

それだけ本気で怒っているからしょうがない。「作者」

フレイム

「そっだ、怨魂だ！」

フレイムは怨魂を取り出し、消火器に目をつけた。

フレイム

「行け、怨魂！」

怨魂を消火器に当てる。

すると怨魂と消火器は融合し、モンスターになる。

フレイム

「奴を足止めしろ！」

フレイムは消火器モンスターにあとを託し、逃走する。

消火器モンスター

「ウラन्दール！」

フェイトは驚く。

消火器モンスター

「ウラन्दール！」

《ブシャアアアアアアアア！！》

消火剤を噴射させ、フェイトに当てる。

フェイト

「キャアアアアアア！」

《バサツ！》

身体に巻いていたタオルを吹き飛ばされる。

光翔竜

「うおおおおおおお！！」

いつの間にか、光翔竜がいた。

光翔竜

「フェイト様の生裸！！」

光翔竜は庇うようにフェイトの前に立ち、噴射される消火剤を受ける。

しかし、苦痛はなかった。

目の前にフェイトの裸があるから。

フェイト

「あ、あなた!？」

光翔竜

「我に力が、フェイト様の生裸が我に力を与えている!！」

フェイトは唾然するのだった。

### 【別の通路】

シャープ

「はっ、はっ、はっ、はっ……」

シャープはドラゴン隊長と逃げていた。

なのは

「待てやコラーツ！」

魔王化した豚町……

なのは

「ああん？」

失礼しました！

美しくピチピチな美少女なのはから逃げていた。

ドラゴン隊長

「いいか、こんな風に窮地に陥っても守ることがある。それは……」

なのは

「スターライトブレイカー！」

《ドカアアアアアアアアアアア》

ドラゴン隊長

「グオツ！？」

ドラゴン隊長はもろに『スターライトブレイカー』を受ける。

その時、鼻を守った。

《バコン！》

そして、壁にぶつかる。

ドラゴン隊長

「は、鼻を守れ……ガクッ」

ドラゴン隊長は気絶する。

シャープ

「鼻よりも自分の身を守れ!!」

なのは

「次は、貴様だ」

レイジングハートを構える。

シャープ

「ゆ、許して………（泣）」

なのは

「死んで詫びな」

シャープ

「もうダメ………（泣）」

その時、シャープは思い出した。

シャープは懐から怨魂を取り出し、天井に取り付けてある火災報知器に目をつけた。

シャープ

「助けて、怨魂！」

怨魂を火災報知器に当てる。

怨魂と火災報知器は融合し、モンスターになった。

なのはは驚く。

火災報知器モンスター

「ウランダル―！火事です！ウランダル―！火事です！」

五月蠅く騒ぎ、なのはは耳を塞ぐ。

この隙に、シャープは気絶するドラゴン隊長の肩を持って、逃走した。

そこへ、スイレエヌと出会う。

スイレエヌ

「シャープ！」

シャープ

「スイレエヌ！ちょうど良かった、一緒にドラゴン隊長を運んでくれ」

スイレエヌ

「わかったわ」

スイレエヌも肩を貸し、逃走する。

## 【通路】

サンダナ

「いや、満足満足」

サンダナはカービィの歌が聴けて満足していた。

そこへフレイムと出会う。

サンダナ

「よう、フレイム」

フレイム

「サンダナ、一緒に逃げよう」

サンダナ

「おう」

フレイムとサンダナは逃走する。

### 【新機動六課の外】

光翔竜

「皆さん、よく頑張りました」

消火剤まみれの光翔竜は誉める。

スイレーヌ

「どうしました？」

光翔竜

「憧れの人を守った名誉ある証です」

スイレーヌ

「ハ、ハァー……………」

ドラゴン隊長

「……………本来、スパイは仲間を見捨てても任務優先しなければならぬ。助けてしまうのは、スパイとして、失格だ」

シャープ

「……………はい」

ドラゴン隊長

「しかし、人としては合格だ」

シャープ

「はい！」

光翔竜

「それでは……………」

《ドカアアアアアアン！》

突然の爆発に光翔竜達は驚く。

振り向いてみると、怒るなのはがやって来た。

光翔竜達は恐怖した。

なのは

「うふふ、見つけた」

なのはは迫ってきた。

スィレーヌ

「……………怨魂！」

スイレーヌは怨魂を投げた。

投げた先はワゴン車だった。

ワゴン車はモンスターになった。

スイレーヌ

「奴を倒せ！」

ワゴン車モンスター

「ウランダル！」

ワゴン車モンスターはなのはに襲い掛かる。

スイレーヌ

「この隙に退却しましょう！」

光翔竜

「皆さん、私に捕まって下さい！」

フレイム達は光翔竜に捕まる。

光翔竜

「シャイニングワープ！」

光翔竜達は消える。

《ドカアアアアアアアアアアア》

そして、なのはワゴン車モンスターを葬った。

なのは

「チツ、逃げられたか」

こうして無事に試験に合格したフレーム達は約束通り、幹部待遇で就職出来ました。

終わり。

仕事は時に非情である。(後書き)

さて、前回の筆記試験と今回のミッションを考えたのが光翔竜となのは達が知ったら・・・・・・・・。

そして就職したフレーム達はどつなるでしょ？

**過去編 魔炎と氷刃の出会い（前書き）**

メンバーの過去が明らかになる過去編スタートです。

## 過去編 魔炎と氷刃の出会い

### 【竜の爪のアジト内】

魔導書を読んでいた魔炎竜はカレンダーに書かれてある赤い丸印を見て、思い出した。

魔炎竜

「そっか、今日はアイツとの初めての・・・」

魔炎竜は過去を振り返った。

### 【森の道】

とてもくらい夜の森。

そんな森を一人で歩く者がいた。

その者は、黒い装束を着込んでいた。

そんな時、無数の山賊が武器を構えて取り囲んだ。

山賊

「へっへっへっ、金目の物を出しな」

???

「……………あるように見える?」

山賊

「……………無さそうだな、その本以外は」

???

「この本が欲しいの?」

山賊

「ソイツは魔導書だろう?高値で売れそうだ」

???

「これを魔導書と見抜いたということは、あんたも魔導師か?」

山賊魔導士

「あんたもってことは、お前もか?」

???

「ああつ。同じ魔導師のよしみで、ここを通して……………」

山賊魔導師

「ソイツは無理な相談だ。金目の物を見過ごす訳にはいかねえな!」

《ピカッ!》

山賊魔導師はいきなり魔法を放つ。

《ドカン!》

見事に黒い装束に命中した。

しかし、彼は無傷だった。

山賊魔導師

「な、何だと!？」

他の山賊達も驚愕した。

???

「……魔法、ごちそうさま」

黒い装束の両方の瞳から、紅い十字の紋章が浮かび上がっていた。

山賊魔導師

「そ、それは、『魔眼』!？」

???

「正解」

手下の山賊1

「隙あり!」

手下の山賊は剣で斬りかかろうと襲い掛かる。

山賊魔導師

「よ、よせ！」

《シュン！》

手下の山賊1

「えっ？」

いつの間にか、黒い装束が手下の山賊の近くにいた。

?????

「うりゃあ！」

《ドカン！》

手下の山賊1

「うわっ！」

手下の山賊は遠くに吹き飛ばされる。

手下の山賊2

「い、いつの間！？」

手下の山賊3

「か、頭、こいつは！？」

山賊魔導師

「……………『魔眼の保持者』だ」

手下の山賊2

「魔眼の保持者って、あの化け物!？」

手下の山賊3

「……………こいつが」

山賊達は黒い装束を恐れ始める。

???

「……………その通り。しかも、魔眼で一番の『殲滅の眼』のだ」

山賊魔導師

「せ、殲滅の眼!？」

『殲滅の眼(イーノ・ドゥーエ)』

この世界の魔道学における気の流れ、もしくは精霊と言われているものを吸収することにより超人的な身体能力を得ることができる。さらに魔法や人体を直接喰って吸収することもできる。

山賊魔導師

「さっきのは効かなかったじゃなくて、吸収したのか!？」

???

「その通り。……………さっきの魔法だけじゃあ、足りないな。……………ここにいるお前らを喰っちゃおつかなく(ぺろり)」「

山賊魔導師

「に、逃げる！喰い殺されるぞ！」

手下の山賊2

「わあああああああ！」

手下の山賊3

「ば、化け物だ！」

山賊達は武器を捨てて、一目散に逃げた。

黒い装束は一度閉じて開くと、瞳の紋章が消える。

魔眼の発動を止めたのだ。

???

「……………化け物だよな、俺って」

悲しく呟き、再び歩き出す。

木の上の枝に白い装束の人物が現れる。

白い装束

「やっと見つけたわよ、フレア」

黒い装束のことを『フレア』と呼んだ。

【森の外】

フレアは木の下に座り込み、覆面を脱いだ。

黒髪、黒い瞳の若者らしい顔立ちだった。

長い後ろ紙は一本にまとめていた。

フレア

「ふっ……」

溜め息を吐いて、月を見上げた。

そんな様子を、遠くの茂みから見ていた白い装束はあるものを取り出した。

それは刀身の無い短剣だった。

白い装束は呪文を唱えると、短剣から氷が出てくる。氷が短剣の刀身となった。

立ち上がり、投げる構えを取る。

???

「いつけえ！」

短剣を投げたと思ったら、短剣ではなく、鋭く尖った氷の塊だった。

氷の塊はフレアに向かっていく。

《がきん！》

フレアは指先で魔方の結界を作り出し、氷の塊を弾いた。

弾かれた氷の塊は、白い装束の元に飛んでいく。

???

「……………くそっ！」

短剣を下に持ちかえると、短剣からまた氷が出てくる。  
今度は長く太かった。

《ピキピキッ！》

氷の塊は吸収された。

フレア

「……………殺気でバレバレだぞ、フローズ」

白い装束を『フローズ』と呼んだ。

フローズは覆面を取った。

長めの青髪、赤い瞳の十代の少女だった。

フローズ

「……………殺る気が無きゃ、当たらないからしょうがないですよ」

フレア

「……………あつ、そう」

フレアは呆れながら立ち上がり、素早く逃げる。

フローズ

「あつ、待て！」

フローズは追いかける。

このフレアは後の『魔炎竜』、

フローズは後の『氷刃竜』である。

【森の道】

フローズ

「待ちなさい！」

《ビュン！ビュン！ビュン！》

フローズは氷の刃を次々と投げつける。

フレア

「待たないよ！」

《ヒョイヒョイ、ガキーン！》

跳んで避けたり、魔法の結界で防いで走り続けた。

フローズ

「おとなしく殺されろ、フレア！」

フレア

「そんなの嫌だよ」

フローズ

「いつまで逃げ続ける気よ？」

フレア

「俺の暗殺を諦めるまで！」

フローズ

「無理な相談ね！」

《ビュン！ガキーン！》

返事と共に氷の刃を飛ばすが、魔法の結界で弾かれる。

すると、雨が降りだした。

フレア

「しまった！」

フローズ

「チャンス」

フローズはフレアに向けて手をかざすと、フレアを湿らした雨が凍てつき、フレアの動きを止めてしまう。

フローズはフレアに氷で造り出した剣を向ける。

フローズ

「こっちは命令に従わなきゃならないの！従わなきゃ、こっちが殺されるの！」

フレア

「……………わかったよ。もう、『諦める』って言わないよ」

フレアはわずかに動く手を動かす。

フロース

「そう、わかってくれたみたいね」

フレア

「………けど、死ぬつもりは無い」

フロース

「えっ？」

フロースが首を傾げた瞬間、フレアの指先が魔法陣を作り出し、雷を放った。

《ビリビリビリビリビリビリビリ!!》

フロース

「キャアアアアアアアア!!」

フレア

「くっ!!」

フロースと魔法を放ったフレア自身も痺れてしまう。

そしてフロースは倒れ、フレアは踏みとどまる。

フレア

「さ、流石にきつかったな」

フレアはなんとか正気を保ち、倒れるフロースを見てフレアは……

【?????】

フローズ

「う……うん……」

目覚めたフローズの目に入ったのは、屋根裏だった。

さらに自分がベッドの上に眠っていることと、家の中にいることに気づいた。

そして辺りを見渡すと、隅で眠るフレアに気づき、間をおいた。

フローズ

「……………ええっ!?!」

正気を取り戻したフローズは大声をあげると、フレアは目覚める。

フレア

「起きたか」

フローズ

「『起きたか』じゃないわよ!何であんたが此処に、と言うか、此処は何処なのよ!」

フレア

「此処は空き家だよ」

フローズ

「な、何で空き家にいるの!?!?.....はっ!?!」

フローズは下着姿だった。

フレア

「え、え〜と.....濡れていたなので脱がせました」

フローズ

「.....このド変態(怒)!!」

魔法を放とうとする。

しかし、手から魔法陣すら出てこなかった。

フレア

「用心の為に、魔法を封じる魔法をかけさせてもらったよ。そして君の武器も預かっている」

フローズ

「卑怯者!」

フレア

「その卑怯者に助けられているのはどこのどなた?」

フローズは赤くなる。

フローズ

「た、頼んだ覚えは無い！何で助けたんだ？お前を殺そうとしたんだぞ！」

フレア

「……………何でかな。今まで俺を殺そうとした刺客や殺し屋は返り討ちした。……………けど、君は放っておけなかった。君の引けない理由を聞いたら」

フローズ

「……………同情しているのか？」

フレア

「かもしれないな。俺も同じだったから」

フローズ

「同じ？」

フレア

「……………もう寝とけ、お互い体力を消耗しきっているんだ。……………今回だけだから」

フレアは再び座り込んで眠る。

フローズは睨むが、確かに体力が消耗しているので思うように攻撃はできそうに無い。

仕方なくベッドの上に眠る。

(翌朝)

フレア

「うん……」

フレアが目覚めると、ベッドにフロースがないことに気づく。

辺りを見渡すが誰もいなかった。

フレア

「……まさか」

懐を探ると、取り上げた筈のフロースの武器が無いことに気が付いた。

そして、あることにも気が付いた。

フレア

「……何で俺を殺らなかったんだ？」

フレアが考えると、テーブルに置いてある『パン』と『団子』と敷いてある紙に気づく。

フレアは紙を取り、書いてある文字を読む。

「これで借りは無しだ。毒はない。ローランドの団子屋で買った特  
性団子だ」

フレア

「……………アイツ……………。あん」

フレアは団子から食べる。

### 【空き家の外】

フローズは窓から、団子を食べるフレアの様子を見ていた。

フローズ

(……………これで借りは無しだから)

フローズは消え去る。

### 【それから……………】

街に入ったフレアは稼ぐ為にお店で働く。

フローズはその様子を、隠れながら見つめる。

フローズとは別の刺客達がフレアに襲い掛かる。

フレアは魔眼を発動させ、刺客達を喰い尽くし返り討ちにした。

遠くから眺めていたフローズは恐怖する。

一軒の民家に立ち寄り、家の人から食べ物を分けてもらい、深々と感謝するフレア。

木に隠れて様子を伺ったフローズはフレアを見て、考える。

再びフレアとフローズは対決する。

結果はフレアが勝利して、フローズは倒れる。

フレアはトドメを刺さずに立ち去る。

フローズは倒れながらフレアを見送る。

そしてフローズはある疑問を持った。

「コイツ、何なんだ」と。

### 【泉のある丘の上】

広々とした青空の下にはとても綺麗な泉がある。

フレアはその泉にある丘で寝そべっていた。

そこへフローズが現れ、フレアに近づく。

フレア

「また殺しに来たのか？」

フローズ

「今日は違う」

フローズはフレアの隣に座る。

しばらく経つが、何も起こらなかった。

フローズからは殺気が感じなかった。

フレア

「………何もしないのか？」

フローズ

「………聞きたいことがある。………お前は何者なんだ？」

フレア

「………皆から恐れられている魔眼保持者だよ」

フローズ

「………何で魔眼保持者なんだ？」

フレア

「いや、そんなこと言われても……」

フローズ

「……ずっとお前を見ていた。呑気なのか、化け物なのか判らなくなった。だから聞く。……お前は何者なんだ？」

フレア

「……俺にもわからない。存在しなきゃいけないと思っていても、死にたくないんだ」

フローズ

「……そっか」

またしばらく経つ。

フレア

「聞いて良いかな？……俺の殺すように命じたのは誰だ？」

フローズ

「……うちの頭領」

フレア

「暗殺のか？」

フローズ

「“ある国”の大臣がうちの頭領にお前の暗殺を依頼したんだ」

フレア

「……………大臣って、まさか……………」

フレアには思い当たる節があった。

フローズ

「殺される覚えがあったか？」

フレア

「ある……………俺を用済みに始末することだ」

フローズ

「えっ？」

フレア

「お前の頭領と大臣は『エスタブル』のか？」

フローズ

「!？」

フレア

「ということは、お前は『エスタブル』の魔導騎士団の一員か？」

フローズ

「……………正解だ」

フレア

「……………けど、お前は居たかな？」

フローズ

「それはどういう意味だ？」

フレア

「俺は………エスタブールの戦争兵器だった」

フローズ

「戦争兵器？」

フレア

「俺は赤ん坊の時に、父親が俺をエスタブールに売り渡したんだ」

フローズ

「………なんで？………」

フレア

「………自分の妻を、母親を殺した子供なんていらぬに決まっている」

フローズは言葉を失う。

フレア

「殲滅の眼の保持者として産まれる子供は………母親の腹を喰い破るんだ。そう聞かされた」

フローズは黙って聞く。

フレア

「その後、エスタブール独自の教育を受け、わずか10歳で戦場に行かされた。俺は恐怖のあまり殲滅の眼を発動して、敵を喰い殺した。戦争が起きる度に戦場に行かされ、あらゆる敵を喰い殺し続け

た」

フローズ

「……………そうか……………」

フレア

「けど、俺はただ兵器になりたくなかった。独学で魔法を学んで、  
国一の魔導士になって、出世しよう頑張った」

フローズ

「その結果、色んな魔法を習得したのか」

フレア

「その上、魔眼の能力で魔力の消費がかなり減少できて、まさに最強の魔導士になれるはずだと思ったんだけど……………認めて貰えなかった。化け物になる資格は無いって」

フローズ

「……………残念だったな」

フレア

「ああつ、通り名は『魔炎の竜』って考えていたんだけど」

フローズ

「魔炎の竜？」

フレア

「炎の魔法が得意で、竜を付けたらカッコいいなあと思ったんだけど……………」

フローズ  
「・・・・・・・・そっか」

またしばらく経つ。

フローズ  
「・・・・・・・・同じだな・・・・・・・・」

フレア  
「えっ？」

フローズ  
「私も親はいない。親は国に税が払えなくて殺された。私は親のおかげで逃げ延びた。その後頭領に拾われて、暗殺者として育て上げられた。氷の魔法と氷の刃を使うことで『氷刃』と呼ばれている」

フレア  
「・・・・・・・・そっか・・・・・・・・」

すると、フレアはあるものを懐から取り出した。

包みに入った団子だった。

フレア  
「食べる？」

フローズ  
「・・・・・・・・うん・・・・・・・・」

フレアとフローズは黙々と団子を食べるのだった。

【その後・・・・・・・・】

フローズのフレアを見る目が変わった。

フレアが木の影で眠るのを微笑ましく見守るフローズ。

フレアが腹を空かせると、目の前に手作りの料理が置かれる。

フレアはおそろおそろ食べると、旨かったらしく食べる。

フローズはそれを見て喜ぶ。

フレアが別の刺客達と戦う。

フレアが不意を突かれそうになると、フローズは氷の刃で斬り殺して倒す。

その後、フレアとフローズは背中合わせで戦う。

フローズは隠れることなく、フレアと同行する。

そして………、

満月をバックに二人は口づけを交わす。

しばらく経ち、フレアが妊婦となったフローズを連れてみると、真王竜と出会う。

最初は警戒するが、徐々に解いていく。

真王竜は「我が組織に入らないか？」と誘い、次元の入り口を開く。

フレアとフローズはおそろおそろ入る。

二人はメンバー達やアジト内を見て驚く。

二人は真王竜の誘いに応じ、メンバーになることを決める。

こうして、フレアは魔炎竜に、

フローズは氷刃竜になった。

その後、フローズは女の子（水蓮竜）を出産する。

フレアはもちろん、他のメンバーも祝福してくれた。

両親とメンバーに見守られながら水蓮竜はすくすくと育った。

【現在】

魔炎竜はホッとすると氷刃竜が現れる。

魔炎竜

「どっしたの？」

氷刃竜

「水蓮が見当たらないの」

魔炎竜

「わかった、探そう」

魔炎竜も水蓮竜を探しに行くのだった。

終わり。

過去編 魔炎と氷刃の出会い（後書き）

青いタヌキ先生、いかがですか？

これを読んだ、恋にうつるさいヴィヴィオ達はどんな反応するでしょうね。

過去編 百合、桃香と友となるのこと（前書き）

過去編第二弾、始まります。

過去編 百合、桃香と友となるのこと

【竜の爪のアジト内】

黒鎌竜と白天竜が魔法陣から現れる。

黒鎌竜と歩きながら、白天竜は手にあるものを持って、見つめていた。

それは黒鎌竜が、竜兵達を使って見つけてくれた、お守りだった。

白天竜はとても嬉しかった。

そして、昔の事を思い出していた。

・・・・・・・・あれから幾年経ったのだろう。

白天竜は幼い時のことを思い出す。

「数年前」

【恋姫】世界。

劉備や関羽などの恋姫が、幼い子供であった時代である。

そして、ここは都の洛陽で、朝廷の城『洛陽宮殿』である。

【倉庫の中】

「ひっく、ひっく」

何処からか泣き声が聞こえてきた。

重ねて置いてある綴の陰に紺色の髪をした少女が膝に顔を埋めて泣いていた。

すると倉庫の扉が開き、誰かが入ってきた。

それは紅い色の髪をした少女だった。

紅い髪の少女は泣き声のする方に近づいていく。

「見い〜つけた」

明るい笑顔を紺色の髪の少女に向ける。

紺色の髪の少女は気付いて、顔を挙げた。

「……………紅蓮姉様」

「また怒られたの、百合？」

紅い髪の少女は『紅蓮』姉様と呼ばれ、紺色の髪の少女を『百合』と呼ばれた。

百合

「……………父上にこれを見せたかったの」

百合は紙を姉に見せた。

それは漢字で『百合』と書かれたものだった。

紅蓮

「……………百合、凄じじゃないの!」

百合

「きゃあ!？」

紅蓮は思わず、百合を抱きしめる。

紅蓮

「上手に書けているじゃない！いつ書けるようになったの？」

百合

「……………昨日。盧植先生に教わったの」

紅蓮

「流石は盧植先生ね」

「いえいえ、協太子様の呑み込みが早いのです」

一人の女性が入ってくる。

紅蓮

「盧植先生」

百合

「先生」

女性は『盧植』先生と呼ばれた。

盧植

「弁太子様が先に見つけられましたのね」

紅蓮は『弁太子』と呼ばれた。

紅蓮

「先生、三人だけの時は真名で呼んで下さいと言いましたわよね？」

盧植

「申し訳ありません、紅蓮様に百合様」

三人は微笑む。

\*

姉は弁太子。

真名は『紅蓮』である。

妹は協太子。

真名は『百合』である。

\*

百合

「先生」

盧植

「はい」

百合

「父上にこれを見せたいのです。でも、追いつかせられました」

盧植と紅蓮は哀れみの顔になる。

百合

「……………代わりに父上に見せてくれませんか？」

盧植

「わかりました」

盧植は百合から紙を受け取る。

盧植

「書簡を届ける際に、お見せします」

百合

「ありがとう」

【渡り廊下】

盧植が書類を持って、【皇室】に向かうところ、数人の衛兵に囲まれる、派手な着物を着込んだ女性と鉢合わせる。

盧植

「これはこれは、何皇后様」

女性を『何皇后』と呼んだ。

\*

『何皇后』

靈帝の妻であり、紅蓮の実母である。  
靈帝の次に権力を持っている。

\*

何皇后

「盧植か、書類を陛下に見せに来たのか？」

盧植

「あつ、はい」

何皇后

「書類仕事は『十常時』の役目であろう？」

盧植

「陛下に直に見てもらおうと思ひまして・・・」

何皇后

「陛下は別件で忙しいのじゃ！そんなことで手を煩わせるな！」

盧植

「し、しかし・・・」

何皇后

「低い身分の分際が、立場をわきまえ！」

盧植

「……………申し訳ありません」

何皇后

「わかつたら、その書類を『十常時』に渡すのだ。……………むっ！」

盧植の懐にしまっている百合の書いた習字紙に気付く。

何皇后

「なんじゃ、それは」

習字紙を取り上げる。

盧植

「そ、それは……………」

《びりっ！》

何皇后は習字紙を見たあと、破り捨てる。

盧植

「な、何をなさいますか！？それは百合様の、協太子様書いた……………」

何皇后

「あの小娘の名を出すな！小娘の書いたものなど見せる必要は無い！（怒）」

盧植

「しかし・・・」

何皇后

「口答えするな！」

何皇后は衛兵に命じ、盧植から書類を取り上げて去る。

盧植は破られた習字紙を拾い上げる。

盧植

「・・・・・・・・酷い、あんまりだわ・・・・・・・・」

\*

百合は紅蓮の妹であり、靈帝の実子であるが、妾の娘である。

そのため、正室であり紅蓮の母である何皇后に疎まれている。

さらに後継ぎは紅蓮で決まっております、百合は期待どころか必要とされていなかった。

産みの母は物心つく前に亡くなっており、父である靈帝も会ってはいくれなかった。

唯一の味方は、姉の紅蓮と下級の文官である盧植である。

\*

盧植

「……………無力で申し訳ありません、百合様」

盧植は自分の無力差に落ち込む。

盧植は高い能力を持っているが、欲が無いため出世しようとしなないのだ。

《その夜》

とある小さく何も無い部屋。

そんな部屋に百合は布団に眠っていた。

紅蓮は優しく百合を撫でた後に、部屋に出る。

紅蓮が出たのは、王宮より離れた小さな家である。

\*

何皇后は百合を王宮に住まわせず、王宮から離れたところに住まわせていた。

紅蓮は何皇后の目を盗んで、こっそり百合と会っていた。

\*

紅蓮

「……………一度でいいから、百合と寝たいな……………。百合は何も悪く無いのに」

純粋な願いも叶わないこと、妹と暮らせないことで悲しんでいた。

### 【何皇后の部屋】

何皇后は酒を飲んでた。

何皇后

「……………忌々しい小娘が……………」

百合のことで苛立っていた。

「やけ酒は体に毒ですよ」

何皇后は驚き、立ち上がる。

何皇后

「その声は……………魔王竜か？」

何皇后は声の主を、『魔王竜』と呼んだ。

何皇后が振り向いて驚いた。

後ろに血のように赤いマントを羽織り、悪魔を象った仮面を被った怪しい者が立っていた。

この者が“魔王竜”である。

何皇后

「何しにきたんじゃ？」

魔王竜

「とぼけないで下さいよ。貴女を霊帝様の妻、姉君を大將軍にした時の報酬です」

何皇后

「そつじやったな」

何皇后は机のところに行き、引き出しからある書簡を手渡す。

魔王竜

「これが『呪霊剣』の記した古文書ですね。確かに受け取りました。では……」

何皇后

「もう一仕事しないか？」

魔王竜

「……まだ何かしてほしいのですかな？」

何皇后

「我が娘を、皇帝にしてほしいのじゃ」

魔王竜

「確実になれるのでは？」

何皇后

「それに反対する者がある。その証拠に、協太子が産まれた」

魔王竜

「ああつ、あなたが殺した妾の娘でしたね」

何皇后

「そつじや。反対する者と協太子を消せば……」

魔王竜

「大袈裟な……」

何皇后

「ならば、このまま捨て置けと？」

魔王竜

「いや、なんとかしましょう。その代わり……ある家宝を下さりますか？」

何皇后

「ある家宝？」

魔王竜

「あるでしょうか？『四聖獣の剣』が」

《バンツ！》

何皇后

「馬鹿を申すな！あれは朝廷に伝わる宝剣じゃ！いくらなんでも、それは無理な相談じゃ！」

魔王竜

「……わかりました、ならば自分で何とかしてください」

魔王竜は消える。

(ならば、別の方法で手にいれるか)

その時、紅蓮が入ってくる。

何皇后

「おおつ、紅蓮」

何皇后は紅蓮を抱き締める。

何皇后

「何処に行っておったのじゃ？」

紅蓮

「……………書物を読みに行っておりました」

何皇后

「そうかそうか、勉強熱心じゃのう」

\*

紅蓮は嘘をついた。

何皇后は百合のことを忌々しく思っていることを知っていた。

百合のところに行ったと知れば、責めは百合に降りかかるので、あえて嘘をついたのだ。

\*

何皇后

「ところで紅蓮」

紅蓮

「はい」

何皇后

「そろそろ物事の解る年齢になった。だから、皇帝になる為の勉強と稽古をしなければならぬ」

紅蓮

「えっ、それでは……」

何皇后

「あまり自由にできるゆとりが無くなるのじゃ。辛いと思つが……  
……仕方がないのじゃ」

紅蓮は思い悩む。

もう百合に会うどころか、味方することは出来なくなると。

紅蓮

「少し時間をくださいますか？」

「翌日」

【盧植の部屋】

盧植

「まあ、皇帝になる為に？」

紅蓮

「……………そうならば、百合が辛い日々を送らせてしまいます」

盧植

「……………私の力でも、助けることはとても……………」

紅蓮

「どつすれば良いでしょう？」

盧植

「……………方法は無いことはありません」

紅蓮

「何ですかそれは？」

盧植

「……………しかし、この方法を使えば紅蓮様とは……………  
会えなくなります……………」

紅蓮

「……………聞かせて下さい……………」

盧植

「……………実は……………」

【何皇后の部屋】

紅蓮は返事を言つたために何皇后の部屋に訪れる。

何皇后

「決心はついたかえ？」

紅蓮

「……………受けます……………その代わりにお願いを聞いてくれませんか」

何皇后

「構わんぞよ。で、お願いとはなんじゃ？」

紅蓮

「盧植殿が故郷の『楼桑村』に休養することになります」

何皇后

「それで？」

紅蓮

「……………百合を、盧植殿と一緒にさせて貰えないでしょうか」

「？」

何皇后

「なんじゃと、なぜじゃ!？」

紅蓮

「……………気がかりを無くさせて欲しいのです……………」

何皇后

「……………そんなに気がかりかえ?……………」

紅蓮

「……………はい……………」

何皇后は考えた。

何皇后

「わかった、それくらいはお安いことじゃ」

紅蓮

「……………ありがとうございます……………」

\*

盧植の考えた方法とは、百合を宮殿により、自分の故郷につれて行く。

宮殿では助けることができないからである。

\*

【洛陽宮殿の城門前】

盧植は馬車に乗って、百合を待っていた。

百合は紅蓮と別れの交わしていた。

紅蓮

「……………しばらく会えなくなるわね」

百合

「……………紅蓮姉様!!」

泣く百合は紅蓮に抱き付く。

紅蓮

「……………仕方がないのよ。貴女を守るにはこれしか無かったのよ」

百合

「……………いつまた会えるのですか？」

紅蓮

「……………皇帝になったら、貴女と暮らせるようにするわ」

百合

「いつなれるの？」

紅蓮

「……………わからない。けど、早くなるように頑張るわ」

百合は泣き止みそうに無かった。

すると、紅蓮は懐からあるものを取り出す。

それは『お守り』である。

百合

「これは？」

紅蓮

「私が作ったお守りよ。これを私だと思ってね」

百合

「……………はい」

百合は涙ながら受け取る。

そして、姉妹は優しく抱擁を交わす。

そんな姉妹を遠くから見ていた盧植も、城門の門番も思わず泣いて

しまつ。

そして・・・、

《バシッ、ヒヒーン!》

盧植の馬車は行く。

百合は馬車の後ろから手を振る。

紅蓮も手を振る。

馬車が見えなくなるまで手を振った後、紅蓮は城門に入る。

城門に入ってすぐに・・・、

「うつつ」

紅蓮は涙を流す。

「・・・・・・・・百合・・・・・・・・げめんね・・・・・・・・」

その様子を見た門番はさらに涙ぐむ。

「数週間後」

【楼桑村】

此処『楼桑村』は、とても小さな村である。

【塾】

小さな塾の内には、たくさんの子供達が机の前に座って、楽しくおしゃべりをする。

その中に桃色の小さな女の子“桃香”（後の劉備）と影の薄い残念な子“白蓮”がいた。

白蓮

「・・・あれなんだろう、今とても腹がたつことを言われたような・・・」

桃香

「どつしたの、パイパイちゃん」

白蓮

「“白蓮”だ！」

すると、盧植が入ってくる。

盧植

「はい、静かにしてください」

子供達は盧植の言葉に従い、静かにする。

盧植は教卓に立つ。

盧植

「今日から皆にお勉強を教える、盧植です。『先生』と読んでください」

「はい」

盧植

「さあー、入って来て」

百合はこっそり顔を出して様子見をした後、入ってくる。

盧植

「この子は“百合”と言います。皆仲良くして下さい」

「はいー！」

盧植

「あなたの席は・・・」

「先生！」

桃香は手を上げる。

桃香

「ここ空いています」

盧植

「わかりました。百合」

百合

「はい」

百合は桃香の隣の席に行き、座る。

桃香

「よろしくね」

百合

「は、はい」

盧植

「それでは授業を始めます」

百合は戸惑いつつも、初めて多くの子供達と読み書きをする。

そして何より……

桃香

「こうやって……こうするんだね」

明るく書く桃香に、不思議と魅力を感じてしまう。

百合

「……今の書き方、間違っているけど」

桃香

「えっ、こうじゃないの？」

自分の書いた漢字をもう一度書いて見せる。

百合

「いや、こう書くんだけど」

正しい書き順を見せる。

白蓮

「……百合が正しいな」

桃香

「そんな〜」

他の子供達は「あっはっはっ」と笑う。

盧植

「これからはそう書くようにしてくださいね」

桃香

「はい」

百合は不思議に思った。

「なんて切り替えが良いのだろう」と。

【塾の外】

休み時間になり、子供達は元気良く遊ぶ。

しかし百合は木の下に座り込み、寂しくお守りを眺めていた。

百合

「・・・姉様・・・」

「何しているの？」

桃香が百合の顔を覗き込む。

桃香

「綺麗なお守り・・・」

百合

「駄目！」

桃香がお守りを触るとすると、百合は思わず隠す。

百合

「……………大切なものの……………」

桃香

「……………そうなんだ……………」

桃香は百合の隣に座る。

桃香

「皆と遊ばないの？」

百合

「……………遊んだこと無いの」

桃香

「なんで？」

百合

「……………何処に行っても追いつ返されるの……………だからいつもお部屋にいるの」

桃香

「……………寂しく無いの……………」

百合

「……………姉様がいつも会ってくれた。けど……………今は会えないの……………」

桃香

「寂しい?」

百合は頷く。

すると、桃香は百合の手を握る。

桃香

「遊ぼ」

百合

「えっ?」

桃香

「辛いことがあるときは笑おうよ」

百合

「……………でも、遊んだことは無いの」

桃香

「私が教えてあげる」

桃香は百合を引っ張り、他の子達のところに行く。

桃香は百合に遊び方を教える。

白蓮と他の子達は百合と遊ぶ。

百合は戸惑うが、徐々に笑う。

盧植はその様子を見て笑う。

「その後」

百合は桃香にあや取りを教わる。

逆に桃香は百合に漢字を教わる。

皆とかくれんぼしたりした。

この時、存在感の薄い白蓮は忘れられて泣いてしまう。

百合は楽しい日々を送った。

\*

百合

「ああっ！」

百合は大切なお守りを崖に落としてしまう。

桃香

「私に任せて」

桃香は崖を降りる。

百合

「危ないわ、止めて！」

桃香

「大丈夫だよ」

桃香はゆっくりと降りて、お守りを掴む。

桃香

「やった！」

安心したその時、

《ガラッ！》

桃香

「あっ！」

掴んでいた岩が剥がれ、桃香は落ちる。

百合

「桃香！！！」

百合が叫んだその時、

《ビュウウウウウウウウ、シュン！》

黒い影が崖を駆け降りて、桃香を捕まえて空まで駆け上がる。

《シュタ！》

そして、百合の前に着地する。

百合は驚く。

それは“黒鎌竜”だった。

黒鎌竜は桃香を降ろして、

「何考えてんだバカヤロー（怒）！！！」

と怒鳴る。

桃香と百合は驚く。

黒鎌竜

「命綱を着けずに崖を降りるな！もう少しで死ぬところだったんだぞ！」

桃香

「ごめんなさい！」

百合

「待って、桃香は私の大事なお守りを拾おうとしたんです！だから・  
・・」

すると、黒鎌竜はしゃがみこみ、百合と桃香の頭を撫でる。

黒鎌竜

「ダチ（友達）の為に頑張るのは良いことだが、死んじまったら悲  
しむ奴がいるだろ？」

桃香と百合は気づく。

黒鎌竜

「・・・・・二度と危険なことをするな」

《ふっ！》

黒鎌竜は消える。

桃香と百合は驚く。

これが百合と黒鎌竜との初めての出会いだった。

\*

「さらにその後」

突然、百合が洛陽に戻るようになった。

しかも、盧植の同行無しで。

百合と桃香は向き合う。

百合

「……………桃香」

桃香

「……………良かったね」

百合

「えっ？」

桃香

「大好きなお姉ちゃんに会える」

百合

「……………うん……………」

桃香

「だから、元気出してね」

百合

「……………また会える？」

《ぱふっ》

桃香

「もちろん」

桃香は抱き付く。

百合も手を回して抱き締める。

二人は別れを告げる。

\*

だが、不幸は始まった。

迎えにきた兵士は刺客で、百合は命を狙われる。

しかし、百合は命からがら逃げる。

この時、お守りを落としてしまう。

そのあと洛陽を目指し、歩く。

たくさん辛い思いをしながらも百合は紅蓮に会いたい一心で歩き続ける。

黒鎌竜は百合をこっそりと助けたり、見守ったりする。

やっこのことで洛陽に着くが、紅蓮はいなかった。

百合は絶望する。

そんな時、『四聖獣の剣』を持っていた黒鎌竜が手を差し伸べた。

「一緒に来るか」と。

百合は黒鎌竜の優しさに気づき、ついていくと決める。

その後、白天竜は修行してメンバーになった。

「現在」

黒鎌竜

「何している、行くぞ」

白天竜  
「はい」

白天竜の心には黒鎌竜と桃香がいる。

終わり

過去編 百合、桃香と友となるのこと（後書き）

青い夕又キ先生、感動しましたか？

呪われし血『呪血』(前書き)

現在に戻ります。

呪われし血『呪血』

カチャカチャ・・・・・・・・。。。

スイレエヌはコンピューターのキーボードを動かす。

「お茶をどうぞ」

紫色の竜兵、『竜騎兵』がお茶を差し出す。

スイレエヌ

「ありがとうございます」

スイレエヌはお茶を受け取る。

竜騎兵

「慣れました？」

スイレエヌ

「ええっ、前にいた所（??機関）より居心地良いです」

竜騎兵

「前にいた所（??機関）は良くなかったのですか？」

スイレエヌ

「はい、マーシャルって奴は失敗者には仕置きをするんです」

竜騎兵

「厳しいですね」

スイレエヌ

「それに比べ、真王竜様はお優しくカリスマが高いです」

竜騎兵

「その代わり、巨乳好きですよ」

スイレエヌは思わず赤くなる。

竜騎兵

「誰だって、欠点の一つや二つはありますよ。真王竜様も自ら仰っています」

スイレエヌ

「は、はあ……」

「おっほん」

「「！」「」

二人の後ろに呪血竜が立っていた。

呪血竜

「データの整理は出来たかね、新入り？」

スイレエヌ

「は、はい！」

呪血竜にデータ（コンピューター）を見せる。

\*

『竜兵』

力：35

早さ：42

耐久性：29

魔力：50

「技」

斬りつけ「打撃」

突き刺し「打撃」

魔力弾「攻撃魔法」

『竜騎士』

力：67

早さ：57

耐久性：43

魔力：87

「技」

斬撃「打撃」

魔力弾「攻撃魔法」

火炎放射「火魔法」

### 【大竜兵】

力：102

早さ：62

耐久性：207

魔力：190

「技」

引っ掻き「打撃」

大魔力弾「攻撃魔法」

火炎放射「火魔法」

「怨魂」

力：0

早さ：100

耐久性：0

魔力：0

「技」

寄生「特殊」

\*

呪血竜

「………次、例のアレの開発をしますので、手伝つ準備を」

スィレーヌ

「は、はい」

呪血竜は【工房】に入る。

スイレエヌ

「……………今度は何も言われなかったな」

竜騎兵

「慣れた証拠ですね」

\*

配属されたばかりのスイレエヌは散々嫌味を言われ続けていた。

「新入りは雑用して覚えていくのです、常識でしょ？」

「しっかりしないと、泣きを見るのは君だよ」

「いちいち過去の経歴に囚われるとは、愚かですね」

\*

スイレエヌ

「……………思い出すだけで、嫌な気持ちになります」

竜騎兵

「あ、あの方はあの方なりに教えているつもりなんです。ただ、不器用なんです」

スイレエヌ

「付き合い長いのですか？」

竜騎兵

「竜兵の頃から仕えていました。厳しく指導され、命令に従いました」

スイレエヌ

「そうですね・・・」

竜騎兵

「研究以外にも組織の幹部をも務めていますから、事実上のナンバー2です」

スイレエヌ

「・・・確かに、ナンバー2ですね」

スイレエヌはあることを思い出す。

\*

「配属されて、数日後の出来事」

「わ、わあああああああ！！」

《ガシツ！》

『竜の爪』のメンバーの一人、呪血竜が右手で一人の研究員の首根っこを掴み、そのまま持ち上げる。

呪血竜

「……すみませんねえ、『ヴァルキュリア人』のサンプルを頂きたいのですが……」

研究員

「す、既に炎を貰った筈だ！」

《ギユウウウウウ……》

「ぐえ……」

呪血竜

「口の聞き方に気を付けなさい、屑が」

\*

呪血竜とスイレエヌがいるのは、「戦場のヴァルキュリアの世界」  
で、『東ヨーロッパ帝国連合（通称：帝国軍）』の【研究施設】で  
ある。

\*

研究員

「そ、それがもう無いんです。全て使い果たしました・・・」

呪血竜

「『ヴァルキュリア人』を捕まえれば早いでしょう？」

研究員

「か、簡単に言わないで下さい。見つけるのは大変なんです」

《ギユウウウウウウ・・・》

研究員

「ぐえ〜・・・」

「じゅ、呪血竜様・・・」

スイレエヌは制する。

スイレエヌ

「そ、それくらいにした方が・・・」

呪血竜

「黙りなさい。さもないと・・・」

《バババババババババババ》

呪血竜は突然、背中を撃たれる。

「なんだ貴様らは！」

撃つたのは、『帝国軍』の兵士数人だった。

「・・・・・・ふっふっふっ」

《ぼろ、ぼろ、ぼろ・・・》

撃たれた痕から、弾丸が出てきて、一個一個と落ちてゆく。

「な、なんだこいつは!？」

兵士達やスィレーヌも驚愕する。

撃たれた痕から紫色の血が噴き出す。

呪血竜

「背中から撃つとは……万死に値します！」

《ビュルルルルルル》

「なっ!？」

流れる紫色の血が生きてるいるように動き出し、

《ビチャ!》

「ぐわっ!」

兵士達の顔にかかる。

「ぐわっ……」

「く、苦しい……」

「か、体が……」

兵士達は悶え苦しむ。

スィレー又は恐怖する。

兵士達の体が紫色に変色し、兵士達は息絶える。

スイレーヌ

「そ、その血はいつたい？」

スイレーヌは怖がりながらも尋ねる。

呪血竜

「『呪血』。私の体内で造り出された、呪われし血です。他の生き物が取り込めば、苦しみながら死を迎えます」

スイレーヌ

「……………呪われし血……………」

スイレーヌは恐怖する。

研究員

「あ、ああ……………」

呪血竜

「さて、サンプルはどうしましょうかね？」

《ドカアアアアアアアアアアアアーン！》

「？」

壁が突然爆発し、呪血竜とスィレー又は驚く。

壁の穴から一人の青年が出てくる。

その青年はランス（槍）と盾を身に付け、青白い炎を纏っていた。

「……………お前も、俺を利用しに来たのか？」

呪血竜

「……………『人造ヴァルキュリア』ですか？」

《ガバツ、ドサツ！》

研究員を手放し、青年を『人造ヴァルキュリア』と呼んで、向かい合う呪血竜。

呪血竜

「ちよつど良いです。君を連れていけば、良いヴァルキュリアの研究になるでしょう」

人造ヴァルキュリア

「ふざけるな！（怒）」

呪血竜にランスを向けると、ランスから青白い炎が纏う。

人造ヴァルキュリア

「死ねえ！」

《ゴオオオオオオオオオ！》

青白い炎が呪血竜に遅いかかる。

呪血竜

「ふん」

《メキメキ！ボカアアアアアア》

呪血竜の回りに突如、呪血が覆い、一瞬で固まって青白い炎を防いだ。

人造ヴァルキュリアとスイレーヌは驚く。

呪血竜

「流石の『ヴァルキュリアの炎』といえども、私の『呪血』は打ち消せませんか」

《ダラダラ〜・・・》

左上腕から『呪血』が流血してくる。

《ピキン！》

瞬時に固まり、左上腕は鋭い刃と化した。

呪血竜

「少し、痛めつけましょうか」

《シュ、ガキイイイイイン！》

呪血竜の剣と人造ヴァルキュリアのランスがぶつかり合う。

《ガキイン！ガキイン！ガキイン！》

呪血竜は剣と人造ヴァルキュリアのランスと盾は激しく打ち合う。

スイレーヌ

「す、凄い！」

呪血竜の速い刃のさばきに驚く。

人造ヴァルキュリアは苦戦する。

人造ヴァルキュリア

「強い！……だが、負けない！勝って、自由を掴むんだ！」

呪血竜の速さを見切り、渾身の力を振り絞って、ランスを呪血竜の顔に突き刺そうとするが、

「はっ！」

呪血竜は瞬時に頭を下げる。

《ピキッ！》

直撃はかわすが、避けきれずに仮面にヒビが入ってしまい、

《パリン！》

仮面が割れてしまう。

「はっ！？」

呪血竜の素顔を見た人造ヴァルキュリアは驚愕し、恐怖した。

スイレエヌ

「ああっ!?!」

離れて見ていたスイレエヌも驚愕し、恐怖した。

呪血竜の素顔は……とてもおぞましきものだった。

人の皮がなく、紫色の筋肉が剥き出していたものだった。

呪血竜

「……見たな?」

人造ヴァルキュリア

「ば、化け物!」

《ガシッ!》

呪血竜は瞬時に左手で人造ヴァルキュリアの口元を掴む。

呪血竜

「化け物と、言うんじゃねええええええええ!」

《ジョボボボボボボボ!》

「アバババババババババ！！」

左手から大量の『呪血』が流し込まれる。

人造ヴァルキュリアは即死した。

呪血竜は人造ヴァルキュリアを離し、スイレエヌの方を見る。

呪血竜

「貴様も見たな？」

スイレエヌ

「い、いえ……」

呪血竜は近づいてくる。

呪血竜

「この顔のことを喋るな。喋ったら……」

《ガシッ！》

研究員

「むぐっ！」

右手で研究員の口元を掴む。そして……、

《ジュウウウウウウウウ……》

研究員

「ぐわああああああ……」

研究員は干からびていく。

スイレエヌはさらに恐怖する。

《ドサツ》

完全に干からびた研究員を離す。

呪血竜

「こつする、わかったか？」

スイレエヌ

「は、はい！」

泣きながら承諾する。

【現在】

スィレーヌはゾツとする。

竜騎兵

「どうかしましたか？」

スィレーヌ

「な、何でもありません！」

竜騎兵は首をかしげる。

「まだですか？」

呪血竜が呼ぶ。

竜騎兵

「早く準備を！」

スィレーヌ

「は、はい！」

バタバタと慌てて準備をする。

【工房】

呪血竜はある設計図とパソコンを見比べていた。

スイレエヌは『怨魂』が入った装置を観察していた。

しかし、内心は緊張と恐怖していた。

しばらく経ってから、

呪血竜

「新入り」

スイレエヌ

「は、はい」

呪血竜

「『アーマーシリーズ』とは、実に興味深いですね」

スイレエヌ

「はい、よく使っていました」

呪血竜

「アーマーとは『鎧』という意味。中身を入れればある意味強化される筈です」

スイレエヌ

「中身を入れる？」

呪血竜

「『怨魂』を入れます。これで『アーマーシリーズ』に新たな力を与える事ができます。その名は、『グラッジアーマー』！」

スイレエヌ

「『怨魂』とはそんな能力もあるんですか？」

呪血竜

「戦争に巻き込まれた人間の怨念の塊です。怨みの力は絶大です」

スイレエヌ

「な、なるほど」

呪血竜

「是非協力して下さい」

スイレエヌ

「も、もちろんです」

しばらく沈黙が続く。

スイレエヌ

（か、会話した方が良いかな・・・）

呪血竜

「君に言いたい事があります」

スイレエヌ

「な、何ですか？」

呪血竜

「……………あの時はすみませんでした」

スイレーヌ

「えっ？」

呪血竜

「あの素顔は誰にも見られなく無かつたんです。自分でも醜いと自覚しているのです。あの姿になった時から忌まわしき過去が始まりましたから」

スイレーヌは黙って聞く。

呪血竜

「私は元は『人間』でした。同じ『人間』に自分の研究を奪われた上に、実験体にされて、このような力と姿を得てしまったのです。だから人間嫌いになりました」

スイレーヌ

「……………そうでしたか……………」

呪血竜

「ですから人間である君を信用できません……………申し訳ありません」

スイレーヌ

「……………事情はわかりました……………ですが」

呪血竜

「？」

スイレージュ

「新入りとはいえ、助手になった以上はあなたの手伝いをさせていただきます。あと、“スイレージュ”と呼んで下さい」

呪血竜は再び作業に戻ると、

呪血竜

「……………作業を続けましょう、スイレージュ」

スイレージュ

「……………はい……………」

そんな二人の様子をこっそり見ていた竜騎兵は微笑むのだった。

「おまけ」

光翔竜

「お久しぶり、おまけコーナー『竜の爪通信』！」

《パチパチパチパチパチパチ》

光翔竜

「呪血竜さんにあんな秘密があったとは知らなかった……  
スイレー又さんと上手くやってほしいですね。さて、今回のテーマ  
は『他の元？？機関メンバーは？』です。他の皆さんは、スイレー  
又さんと同じように幹部の仕事をしています。それでは、様子を見  
せましょう」

「シャープ」

く

く

綺麗な音色を紅いヴァイオリンで奏でるシャープ。

聖唱竜は静かに聴く。

レイラは厳しくシャープを見る。

演奏が終わる。

聖唱竜

「……………見事でした」

シャープ

「ありがとうございます」

レイラ

「その演奏を、やっとマスターしたな」

シャープ

「はい、レイラ様が厳しくご指導なさってくれたおかげです」

聖唱竜

「シャープ、貴方には才能があるわ。だからこそ、伸ばさなきゃいけないわ」

シャープ

「はい、『天才』と誇って、他人を見下していた自分が恥ずかしいです」

レイラ

「………良い顔になったな」

聖唱竜

「それじゃ、お茶にしましょう」

聖唱竜はケーキと紅茶を運んでくる。

シャープ

「はい、いただきます!」

\*

光翔竜

「聖唱竜さんの元で、『神曲楽士』として一からやり直しています。  
次は・・・」

〔サンダナ〕

《ドカアアアアアアアアン！！》

「ぐわあああああああ！！」

サンダナ

「道は開いた、進むぞ！」

「」「おおっー！！」「」

先陣を務めるサンダナは竜兵達を従え、乱れる敵陣を突き進む。

ちなみに戦っている相手は【伝説の勇者の伝説】のエスタブルの  
魔導騎士軍団である。

夜帝竜

「生き生きしてんな、サンダナの奴」

夜帝竜は、サンダナの勇姿に感心する。

夜帝竜

「これで気楽にカツ丼が食える。モグモグ……」

\*

光翔竜

「元気良く、夜帝竜さんの配下をやっています。……っていつか、夜帝竜さん、働いて下さいよ。最後に……」

〔フレイム〕

「真王竜様」

フレイムは真王竜を呼び止める。

フレイム

「ロストロギア『虹の真珠』を手に入れたと報告がありました」

真王竜

「わかった。では解析に回して、報告するようにと伝えてくれ」

フレイム

「わかりました」

真王竜

「それと、慣れたかね？」

フレイム

「はい、とても充実できています」

真王竜

「そうか。真面目な配下が多いのは助かるよ」

フレイム

「ありがとうございます」

真王竜

「近々、活躍できる任務を与えるよ」

フレイム

「有り難き幸せです」

深々と敬服する。

真王竜

「……マールシャルも目標ばかりではなく、君たち配下にも  
気かければ、末路が変わっていたかもしれんな」

フレイルム

「はい、そうかもしれません。しかし、私は感じています」

真王竜

「何をだい？」

フレイルム

「貴方には、王の風格とカリスマ性。そして、何か大きなモノを背負っている感じがします」

真王竜

「……………私が悪の組織のリーダーでもかね？」

フレイルム

「悪の組織のリーダーというより、一国の王に感じます」

真王竜

「……………わかった。ならば王として恥ずかしくない振る舞いをしよう」

フレイルム

「はっ、付いていきます」

フレイルムは深々と頭を下げる。

\*

光翔竜

「すっかり心酔しました。そろそろ終わりの時間ですが、久しぶりのおまけコーナーなので、プレゼントをご紹介します。プレゼントとはコレです！」

「ブヒッ」

『高町なのは』のコスプレをした豚のぬいぐるみだった。

光翔竜

「あの噂の『白い魔王』を豚さんにイメージしたぬいぐるみ「豚町なのは」です。使い方はこうです」

『豚町なのは』を置いて、

「この腹黒の雌豚！三十路過ぎてる癖に、まだ魔法少女気取っているのかよ！？正直無理あるだろう！あんたは年齢以前に傲慢な性格だから、結婚出来ないんだよ！三十路になってからますます傲慢な女になりやがって！あんたフェイト様の親友だろ！あんたの悪評が広がれば、フェイトの評判が悪くなるんだよ！わかっているのかよ、ふてぶてしい雌豚！白豚の魔王！」

『豚町なのは』を蹴り続ける。

光翔竜

「はぁーはぁーはぁー……とまあ、こんな具合にストレス解消になります。欲しい方はご感想でご応募下さいね。それでは、ご機嫌よう」

《プツン!》

終わり

呪われし血 『呪血』 (後書き)

久しぶりに『竜の爪通信』やりました。

「決してなのはさんのことではありませんよ」笑

## 伝説の騎馬（前書き）

あの懐かしいキャラクターが登場します。



《ブシャアアアアアアアア！！》

叫びと共に何かが踏み潰される。

踏み潰したのは、

「ヒューン！」

紅蓮のごとく紅い装甲でできていた機械仕掛けの馬だった。

そんな機械仕掛けの馬を大勢のある者達が囲んでいた。

それは植物でできた植物人間だった。

そして、その様子を苦々しく見ていたのは、竜の爪メンバーの一人  
“喰樹竜” だった。

喰樹竜

「馬の分際でこのワシに逆らうとは、忌々しい……」

「しよ、喰樹竜様」

長い槍を持った竜兵、“竜槍兵”が駆け寄って来る。

竜槍兵

「あの馬、我々の手では終えません！何とぞお力をお貸しください！」

喰樹竜

「やかましい！（怒）」

《バキッ！》

「ぐはっ！」

苛立つ喰樹竜のマントから太い蔓が飛び出し、竜槍兵を叩く。

喰樹竜

「貴様の指揮の無さが馬ごときを捕まえることができないんのじゃ！頭を使え、頭を！（怒）」

竜槍兵

「は、はい！」

逃げるように馬の元に戻っていく。

喰樹竜

「まったく！（怒）」

馬の元に戻った竜槍兵は、

「どひどひ」

となだめる。

「ブルルーン！ブルルーン！」

馬が少し動きを止めた瞬間、

「今だ！」

《ビュルルン、バシッ！》

植物人間達が腕を蔓に変えて、馬の前足や首を縛り付ける。

竜槍兵

「や、やった！」

喜んでいると、馬の様子がおかしくなる。

《プスプス〜・・・ボワツ！》

馬はたちどころに炎に覆われる。

《ゴオオオオオオオオオオ！！》

「ぎゃあああああああああ！」

炎は蔓に伝わり、植物人間達は燃えてしまつ。

竜槍兵

「ええっ!？」

「ヒヒーン!」

馬は燃えながら走り、竜槍兵を越して高く跳ぶ。

《ドカン!》

そしてそのまま走り去ってしまい、喰樹竜は啞然してしまつ。

喰樹竜

「な、何をしておる!早く追わんか!」(怒)

竜槍兵

「む、無茶を言わないで下さいよ!相手は馬ですよ!」

喰樹竜

「つべこべ言わずに追え!」(怒)

竜槍兵

「は、はい!」

竜槍兵は全力疾走して追いかけるが、やはり馬なので追いつかなか

った。

喰樹竜

「まったく、『??機関』め！壊滅したと思ったら、余計な仕事を増やしよって！（怒）」

さて何故喰樹竜が、『竜の爪』があゝの馬を捕まえようとしているのか？

それは、『??機関』のボス“マーシャル”が『黒き神』を出現させた時にさかのぼる。

\*

「はあー！」

《ザシユー！》

「うー！」

《バキッ！》

「てりゃー！」

《グサツ！》

とある場所にやって来てしまった『恋姫十無双』の蜀の武将である  
“関羽”“張飛”“趙雲”は『???機関』の召喚した魔獣・アーマ  
ードと戦闘員達と戦闘を繰り広げていた。

しかし、彼女達の攻撃は全て両腕に覆われるアームで防がれる。

関羽

「駄目だ、まったく効かない！」

張飛

「堅すぎるのだ！」

趙雲

「それに、他の敵も厄介な数だ！」

戦闘隊長

「怯むな、押し返せ！」

戦闘員達

「オオッ！」

戦闘員達は三人に襲い掛かる。

戦闘隊長

「さて、俺はこいつを」

後ろに控える劉備に狙いを定める。

戦闘隊長

「倒せば、幹部に昇格だ」

劉備

「私だつて」

劉備は剣を抜き、

《ガキーン!》

劉備

「戦えるんだから!」

戦闘隊長と刃を交える。

戦闘隊長

「ふん、その程度・・・」

《ビュン!》

戦闘隊長

「なっ!」

劉備

「油断大敵だよ」

劉備は隙を突き、戦闘隊長の頬に傷をつける。

戦闘隊長

「くっ！アーマード、この女を叩き殺せ！」

アーマードは劉備に迫っていく。

関羽

「姉上、逃げて下さい！」

関羽は叫ぶが、アーマードはすでに劉備のところまで来ていた。

戦闘隊長

「殺れ！」

アーマードの振り上げた拳は劉備に襲い掛かるとした瞬間、

「危ない！」

《バキッ！》

劉備

「！！！」

張飛は身を呈して劉備を庇って、アーマードの拳を受けてしまう。

《ガバツ!》

劉備

「鈴々ちゃん!」

劉備はすぐに張飛を抱き抱える。

戦闘隊長

「アーマード、今度こそ殺れ!」

関羽

「やめろ!」

関羽が叫んだその時、

《キラァーン、ドカァァァァァァン!》

空から四つの光が現れ、地上に降りてくる。

すべての者達は驚愕する。

光から現れたのは、四匹の機械仕掛けの馬だった。

一匹目は、あの紅い馬。

二匹目は、黒く分厚い装甲の大きな馬。

三匹目は、白く背に翼を生やした馬。

そして四匹目は、翠色の馬だった。

関羽

「な、何だ!？」

《ドスン、ドスン、ドスン》

黒い馬は戦闘隊長に近づく。

黒い馬は、大人である戦闘隊長より遥かに巨大だった。

戦闘隊長

「な、なんだ!？」

次の瞬間、黒い馬は前足を上げて、

《グシャア!!》

戦闘隊長の頭を踏み潰した。

戦闘員達

「隊長!!」

戦闘員達だけではなく、関羽や劉備も恐怖する。

そんな劉備に、翠の馬が近づく。

翠の馬は鼻息を張飛に吹き掛ける。

《ポワアアアアアッ》

張飛の体は優しそうな翠色の光に包まれる。

さらに傷が一瞬にして癒えてしまう。

劉備

「傷が治っていく!?!」

張飛

「あれ、痛くなくなったのだ!」

劉備

「鈴々ちゃん大丈夫!?!」

張飛

「うん」

劉備と張飛は、翠の馬の方を向く。

劉備

「もしかして、助けてくれたの？」

翠の馬は頷く。

張飛

「ありがとうなのだ！」

「ゴオッー！」

アーマードが劉備と張飛に襲い掛かるとした瞬間、

《ビュウウウウウウウ》

白い馬は翼を広げ、高速に飛ぶ。

翼は光輝き出し、魔力の刃となる。

《ザシユ！》

白い馬はアーマードの両足を切断した。

《ドン！》

そして、アーマードは倒れる。

「ヒヒーン！」

黒い馬は高く跳び、

《グシャアアア！！》

アーマードの上に着地した。

《ドカン！ドカン！ドカン！》

黒い馬はアーマードを踏み潰していく。

「グオツ・・・」

そしてアーマードは息絶える。

戦闘員1

「ア、アーマードも倒された！」

慌てる戦闘員達に紅い馬が近づきながら炎に覆われる。

戦闘員2

「こいつも俺達を殺す気だ！」

戦闘員1

「に、逃げる！」

戦闘員達は一目散で逃げていく。

そして、

《パカラパカラパカラ・・・》

紅い馬と黒い馬と白い馬は何処かに走り去ってしまい、劉備達と翠の馬は取り残される。

関羽

「な、何だったんだ？」

趙雲

「わからん。しかし、あの馬達は何処へ行ったのだ？」

『主を探しに行ったのです』

関羽

「何か言ったか、鈴々？」

張飛

「何も言ってないのだ？」

関羽

「姉上ですか？」

劉備

「うづん」

関羽

「では、誰が……」

『私です』

「えっ？」

喋っていたのは、翠の馬だった。

「………喋った!？」

『喋ってはいけませんか?』

趙雲

「いや、驚いているのだ」

『驚くことですか?ベルカ世界では当たり前ですよ』

劉備

「ベルカ？」

『………どうやらここはベルカではなさそうですね。順序良く説明しましょう。我が名は『翠林』。徐かなること林の如く”

の騎馬です』

翠林はまず自分たちの説明をした。

\*

紅い馬は“ 侵し涼めること火の如く” 紅火

白い馬は“ 疾きこと風の如く” 白風

黒い馬は“ 動かざること山の如く” 黒山

この馬達は『風林火山』の元に造られた魔道具『魔導騎馬』である。

\*

劉備

「そつなんですか」

関羽

「世界とは広いのだな」

翠林

『いえ、【ベルカ】とは異世界のことなのです』

張飛

「異世界？」

翠林

『海に渡っても無い世界です。………と言いたいところですが、この世界は異変に満ちていますね』

関羽

「その通りです」

趙雲

「一体何がどうなっているのかわからん」

翠林

『なにやら強力な力が目覚め、多くの世界を融合させたようです。その強力な力のおかげで我ら『魔導騎馬』の封印まで解けてしまいました』

劉備

「そつえば、他の馬さんは何処かに行っちゃいましたね」

翠林

『自分にふさわしい主を探しに行きました。騎馬は乗り手がいてこそ価値があるのです』

劉備

「あなたは行かないんですか？」

翠林



張飛

「鈴々の命の恩人ーいや、恩馬の頼みを聞いてあげてほしいのだ！」

劉備は考える。

劉備

「わかりました」

翠林

「ありがとうございます。私の額に手を当てて下さい」

劉備は言われる通り、翠林の額に手を当てる。

《ピキイイイイイイーン！》

翠林が翠の光を輝き、劉備の手の甲には紋章が浮かび上がる。

翠林

『これで契約が済みました』

翠林が仲間になった。

趙雲

「さて、これからどうする？」

関羽

「……異世界といえば、カービィ殿もそうであったな」

趙雲

「ああつ、蟹の化け物を退治したという不思議な生き物か？」

関羽

「うむ、他の者もそうであったな。もしやこの異変について何か知  
っているかもしれん」

張飛

「会いに行くのだ！」

趙雲

「会えるか？」

翠林

『多くの世界が融合したのです。会える見込みはあると思います』

劉備

「それじゃ、出発！」

張飛

「オオーツなのだ！」

関羽

「うむ、今度はこちらが恩を返す番だ！」

趙雲

「異世界の旅も面白い」

こうして劉備達は翠林と共に旅立った。

【竜の爪のアジト】

真王竜

「『魔導騎馬』?」

呪血竜

「はい、これが調べた結果です」

黒鎌竜

「どうする?」

真王竜

「捕まえる。我々を選ぶかどうかを試したい」

呪血竜

「もし、選ばなかったら?」

真王竜

「お前の研究に使える」

呪血竜

「御意」

これが、『竜の爪』の理由である。

\*

他の『魔導騎馬』達の行方は？

終わり

伝説の騎馬（後書き）

青いタヌキ先生、『魔導騎馬』気に入っていつてくれましたか？

劉備達のその後を書きましたが、いかがですか？

喰樹竜、覚えていますか？

聖なる三弦（セイント・スリーストウリング）（前書き）

今回は『神曲楽士』の登場です。

## 聖なる三弦（セイント・スリーストウリング）

空の暗雲が濃く、荒れ果てた大地。そんな中心にジャングルがあった。

しかし、ジャングルの植物はとても禍々しい形に血のような真っ赤な色に染まっていた。

そんなジャングルの奥地に大樹に覆われた砦があった。

その名は『地獄の大樹』。

### 【『地獄の大樹』内】

「ガフーン、ガフーン、ガフーン！」

激しくと鼻息を荒立てる者が歩く。

喰樹竜だ。

『謁見の間』らしい部屋で、竜槍兵は頭を下げながら震える。

喰樹竜

「逃がしただと？」

竜槍兵

「申し訳ありません！」

喰樹竜

「この愚か者！」

「ぐわっ!!！」

喰樹竜は怒り任せに竜槍兵を蔓で叩き付ける。

喰樹竜

「馬一匹に戸惑った拳げ句に取り逃がすとは何事だ！」

竜槍兵

「すみません！ すみません！ すみません！」

泣いて謝るが喰樹竜は許さず、蔓を叩き続ける。

喰樹竜

「まったくどいつもこいつも役立つが！」

文句を呟いたところで、蔓を納める。

竜槍兵は傷だらけになる。

「失礼します」

『喰樹竜親衛隊』の一人“ウッドボディ”が入ってくる。

ウッドボディは傷だらけの竜槍兵に気付き、仕置きを受けていたと察する。

喰樹竜

「どつした？」

ウッドボディ

「聖唱竜様の直属の『聖なる三弦（セイント・スリーストウリンク）』が喰樹竜様に面会を求めています」

喰樹竜

「聖唱竜のあの小娘共がか？」

ウッドボディ

「いかがいたします？」

喰樹竜

「珍しいな……良いだろ、通せ」

ウッドボディ

「ははっ」

喰樹竜

「それから、その役立ずを連れていけ」

ウッドボディ

「……わかりました」

ウッドボディは竜槍兵を担ぐ。

竜槍兵

「す、すみません」

ウツドボディ

「気にするな」

ウツドボディと入れ違うように、三人の女性が入ってくる。

赤、黄色、青と三人の色は違うが、楽土に相応しい礼服を着込んでいた。

「お目通り感謝します」

喰樹竜

「貴様は、確かリーダー格の……」

「『雷光のユリア』です」

黄色の少女は“ユリア”と名乗る。

「『氷翼のマミヤ』です」

青の女性は“マミヤ”と名乗る。

「『赤き風のリン』です」

赤の少女は“リン”と名乗る。

「『我ら』聖なる三弦「セイント・スリーストウリンク」で」

「致します」「」

喰樹竜

「それで何用か？」

ユリア

「視察です」

喰樹竜

「視察？」

マミヤ

「『？？機関』が復活させてしまった黒き神の影響により、各異世界は融合してしまいました。喰樹竜様の支配なさっているこの世界も例外ではありませんので」

喰樹竜

「それで視察か。それをするのは貴様達だけか？」

ユリア

「はい」

喰樹竜

「融合したとはいえ、各異世界は多いぞ」

ユリア

「これも仕事です。それに視察だけです。大変ではありません」

喰樹竜

「そうか。まあ、ゆっくりしておけ」

ユリア

「ありがとうございます」

「ギヤアアアアアアアアア！」

突然の叫びにユリア達は驚く。

喰樹竜

「気にするな。あれは食材の叫びだ」

リン

「食材の叫び？」

喰樹竜

「ワシは良い叫び声を聞きながら、食事をとるのだ」

そう言いながら、人体の一部（腕）を蔓で掴んで、口（仮面の口の部分を開いて）に入れる。

ユリア達は吐き気がするほど恐怖する。

喰樹竜

「クチャクチャ……食べるか？」

ユリア達は首を横に振る。

喰樹竜

「そうか。それよりどうだ？」

ユリア達に窓の方に顔を向けさせる。

「助けてくれ！」

「死にたくない！」

「い、痛い〜」

叫びと肉を斬る鈍い音がやむことなく聞こえてくる。

喰樹竜

「良い曲だろうか？『神曲楽士』である貴様達に聞きたい」

ユリア達は恐怖のあまり何も言えなかった。  
特にリンは酷かった。

喰樹竜

「どうなんだ？」

マミヤ

「な、なかなか独創的です」

喰樹竜

「そうかそうか、ゆっくりしていけ」

ユリア

「は、はい……」

【控え室】

ユリア

「酷かった！」

ソファアーに座り、思い切り嫌気を吐き出す。

マミヤもリンも同じ気持ちであった。

マミヤ

「喰樹竜は人間を喰うと聞いていたが、本当だったな。実際に見ると吐き気がする」

リン

「……叫びも嫌だった……」

突如、誰かが扉をノックがする。

「失礼して良いか？」

マミヤ

「どつぞ」

入ってきたのは、ウッドボディだった。

マミヤ

「これはウッドボディ殿」

ウッドボディ

「……その様子だと、嫌な思いをさせたな」

ユリア

「まったくだ。あんな光景を見せられて、気分を悪くしない方がど  
うかしている」

ウッドボディ

「その通りだ、すまなかった。ちょうど食事時だったのだ」

マミヤ

「いつもあんな食事を？」

ウッドボディ

「ああっ」

マミア

「いつの間にあれだけの人間を？」

ウッドボディ

「任務のついでだ」

ユリア

「こんなこと『竜の爪』は、真王竜様は許可していないぞ」

ウッドボディ

「だが、“殺すな”とは言われていない。手向かってきたという理由で倒し、捕まえている」

リン

「止めさせないの？」

マミヤ

「それは流石に無理だ。止めれば手打ちに合う」

ウッドボディ

「最近では私ではなく、彼に手打ちをするようになった」

ユリア

「彼？」

「私です」

身体中に包帯に巻かれた竜槍兵が現れる。

竜槍兵

「私がへマをすれば、ウッドボディさんが酷い目に合わされるんです」

ユリア

「なんて酷い」

竜槍兵

「喰樹竜様は人肉だけではなく、『怨差』という人間の負をも食します」

ウツドボディ

「『怨差』を得ることで、あの方の体内に持つ『地獄の植物』は生きることができるのだ」

ユリア

「…地獄の植物…」

マミヤ

「…それが喰樹竜の力の源か…」

ユリア達は喰樹竜の事を恐怖し、警戒する。

すると、リンは竜槍兵の前に立つ。

竜槍兵

「な、何か？」

リン

「治してあげる」

リンは主制御楽器「二胡」を取り出し、演奏し始める。

とても優しい曲だった。

そんなリンの横に契約精霊の『烈風』が現れる。

烈風

「はっ！」

烈風の手から優しい風が吹く。  
その風は竜槍兵の傷を癒してしまう。

竜槍兵

「な、治った！ 痛くない！」

烈風

「リン様の曲と俺様の力で治してやったのだ。 感謝しろ」

竜槍兵

「あ、ありがとうございます！」

竜槍兵の笑顔を見たリンは微笑む。

ウッドボディ

(これが『赤き風のリン』の、神曲楽士の力か)

リンの神曲楽士としての能力を目の当たりして、驚く。

「ちよつとあなた？」

そこへ『喰樹竜親衛隊』の一人“ブラッドローズ”が現れる。

ブラッドローズ

「あなたね、下手な曲を弾いていたのは？」

ユリア

「貴様は？」

ブラッドローズ

「『喰樹竜親衛隊』の一人のブラッドローズ。困るのよね、『地獄の大樹』でそんな曲を流すのは大変迷惑よ」

竜槍兵

「ブラッドローズさん、この方は私を」

ブラッドローズ

「あなたには聞いていないわよ！」

竜槍兵を殴る。

リン

「あっ！」

リンは駆け寄る。

リン

「大丈夫？」

竜槍兵

「だ、大丈夫です」

ウッドボディ

「ブラッドローズ！」

ブラッドローズ

「勝手に割り込んだからよ。それより、余計な事をしないでくれる？ 此処では癒しがあつてはならないのよ。だからそんな曲を奏でないでほしいのよ、わかった？」

リンはブラッドローズを睨む。

ブラッドローズ

「何、その目は！」

リンを叩こうとする。

「止める！」

ユリアは怒鳴る。

ユリア

「リンに手を出すなら、私が相手になってやる！」

マミヤ

「ユリア！」

ブラッドローズ

「面白いじゃない」

ユリアとブラッドローズは一触即発状態になる。

「待て！」

ウツドボディが止めに入る。

ウツドボディ

「戦うなら、外でやってもらおう」

【外】

ユリアとブラッドローズは対立する。

ユリアの隣に契約精霊『雷牙』が立っている。

そして主制御楽器「エレキギター」を展開させる。

マミヤとリンはユリアを見守る。

竜槍兵

「よろしいんですか？」

ウツドボディ

「……この目で『神曲楽士』の力を見たいのだ」

ブラッドローズはサーベルを構える。

ブラッドローズ

「後悔させてあげるわ。親衛隊一の実力者の恐怖をね」

ユリア

「能書きはいいから、早く始める」

ブラッドローズ

「……殺す」

ウッドボディ

「始め！」

ブラッドローズ

「シャッ！」

ブラッドローズは瞬時にユリアに斬ろうとする。

「！」

雷牙は指二本でサーベルを受け止める。

雷牙

「悪いが、終わらせてもらおう」

ユリアはエレキギターを激しく弾く。

「ぎゃあああああああー！」

雷牙は激しく雷を発して、ブラッドローズを感電させる。

雷牙から電気が止むと、ブラッドローズは気絶して勝負は決まる。

ユリアの勝利である。

ウッドボディ

「っ、強い……」

ウッドボディは改めて『神曲楽士』の凄さを知る。

【竜の爪アジト】

レイラ

「派手にやってくれたな」

ユリア

「申し訳ありません」

レイラ

「視察で喧嘩をおこすとは何事だ。だいたいお前は……」

ユリアは副官のレイラにお説教を受けていた。

聖唱竜

「まあまあ、それくらいにしてレイラ。全てはリンを救うためにしたことなんですから」

レイラ

「……わかりました」

聖唱竜

「仲間の為に行動するのは良いことです。ただ手段を冷静にえらびましょうね」

ユリア

「はい」

聖唱竜

「それでは、今後の任務について話します」

ユリア達は話を聞く体勢になる。

聖唱竜

「新機動六課は一部隊は【神曲奏界ポリフォニカ】に向かったそうです」

ユリア

「我々の世界ですか？」

聖唱竜

「そこへ行き、彼らと“ある人物”の接触を防がなければなりません」

マミヤ

「ある人物？」

聖唱竜

「精霊『コーティカルテ・アバ・ラグランジェス』とその契約者タラ・フォロン君です」

リン  
「フォロンって確か…」

聖唱竜  
「私が孤児院のシスターをしていた時に本当の弟のように可愛がったフォロン君です」

ユリア  
「なんと皮肉な…」

聖唱竜  
「あの子のことはよく知っています。もしも、彼ら（新機動六課）の事情を知れば、協力するはずですよ。フォロン君は心の優しい子ですから」

マミヤ  
「もし、そうなれば……」

リン  
「聖唱竜様と戦ってしまう。そんなのは悲しい」

聖唱竜  
「そうならない為にも、私がフォロン君を喰い止めます。あなたは彼ら（新機動六課）を喰い止めて下さい」

ユリア  
「……わかりました」

マミヤ  
「我らは『聖なる三弦〔セイント・スリーストウリング〕』は」

リン

「聖唱竜様の為に戦う者です」

「「「謹んでお受けいたします」「「「

すると、竜騎士や竜兵達も現れる。

「「「我らも力になります！」「「「

レイラ

「無論、私も戦います」

聖唱竜

「……皆、ありがとう」

こうして、聖唱竜の部隊は動いた。

☆おまけ☆

光翔竜

「はい、『竜の爪通信』始まりました！」

盛大な拍手が送られる。

光翔竜

「今回のテーマは『聖なる三弦（セイント・スリーストウリンク）』  
についてです。」

この三人の女性達は聖唱竜さんの直属部隊で、彼女に忠誠を誓って  
いる『神曲楽士（ダンティスト）』です。

ちなみに『神曲楽士（ダンティスト）』とは、神曲を演奏して精霊  
の力を使役する特殊能者です。

それでは紹介します。まずはこの人」

『雷光のユリア』

イメージCV：平田宏美

「特徴」

髪の色「海老茶色」

瞳の色「黄色」

《プロフィール》

勝ち気な少年に見えるが、れっきとした女の子。

見た目の通り勝ち気だが、真面目で仲間を思いやる気持ちを持っている。

昔は荒れた生活を送っていたが、聖唱竜と出会って、『神曲楽士』  
の才を見出だされてロックミュージシャンとなる。自分を救ってく  
れた聖唱竜に強い恩義により忠誠を誓う。

・主制御楽器「エレキギター」

『精霊：雷牙』

イメージCV：安元洋貴

幼い頃からユリアと暮らしている狼を象った黄色い精霊。

雷の攻撃を得意とする。

光翔竜

「ロックミュージシャンとはカッコいいですね。次はこの人です」

『氷翼のマミヤ』

イメージCV：吉田愛理

「特徴」

髪の色「アジサイ色」

瞳の色「焦げ茶色」

《プロフィール》

好んで男装する神曲楽士。

常に冷静沈着で神曲奏界に関する知識を持つ参謀的存在。

貧困の生まれで、聖唱竜の援助により神曲楽士なれた。

以後彼女に恩義と同時に彼女の信念に共感して忠誠を誓う。

・主制御楽器「チェロ」

『精霊：ホワイトクロウ』

イメージCV：小野友樹

氷と幻術を操る鴉を象った白い精霊。

聖唱竜の計らいでマミヤと契約を交わす。

光翔竜

「クールですね。最後はこの子です」

『赤い風のリン』

イメージCV：萩原えみこ

「特徴」

髪の色「桃色」

瞳の色「水色」

《プロフィール》

幼いが神曲楽士の才を開花させた天才。

戦災で両親を亡くし、悪人に連れていかれそうになったところを聖唱竜に救われる。

以後、恩義と親愛にて忠誠を誓う。

因みに歳の近い水蓮竜とは仲が良い。

・主制御楽器「二胡」

『精霊：烈風』

イメージCV：矢部雅史

リンのボディーパーガード兼武将でもある。

風と体術を扱う。

光翔竜

「うーむ、どの子も個性豊かで色んな事情を抱えているんですね。

しかし聖唱竜さんに対する忠誠心は高いです！期待できますね。それでは！」

《プツン！》

終わり

聖なる三弦（セイント・スリーストウリング）（後書き）

青いタヌキ先生気に入りましたか？

彼女達の名前は『北斗の拳』のヒロイン達の名前を使いました。

光翔竜の實力（前書き）

あの光翔竜が活躍します。

## 光翔竜の実力

【アスラクラインの世界】

ある一台の軽量トラックが走っていた。

「この世界のどの辺りっすかね？」

「人気のない場所って言っていたが・・・」

すると、怪しいコート姿の不審者がトラックに近づく。

「あん？」

「高町なのは」は？

「えっ？」

突然の問いかけに首を傾げる。

「高町なのは」は？

「ああっ！『白い魔王』の異名を持つ年増の腹黒女」

問いかけの意味に気づき、慌て答える。

「よし、合っている」

どつちやら、『合言葉』らしい。

「案内する」

コート姿の不審者は乗り込む。

そして、トラックは動き出す。

《うそうそ》

トラックの荷台の中で何かが動く。

### 【廃棄の教会】

トラックは、誰もいない廃棄された教会に着く。

コート姿の不審者と男性二人は降車する。

すると、教会の扉が開き、光翔竜が出てくる。

光翔竜

「お待ちしていましたよ、元『？？機関』の“爆殺のウォリアー”さんと“狩人のパンサー”さん」

この二人は壊滅した『？？機関』の元幹部である

光翔竜

「お約束のモノを」

ウォリアー

「おお。パンサー」

パンサーはトラックの荷台からある袋を二袋を担ぐ。

パンサー

「そらよ」

二袋を投げ付ける。

『痛い！』

二袋から声が聞こえる。

コート姿の不審者は袋を開ける。

「プハッ」

「痛かった〜」

袋から出てきたのは、

【ストライクウィッチーズ】の“宮藤芳佳”と“リネット・ビシヨ  
プ”だった。

光翔竜

「おおつ、間違いありません！」

「本物だ!!!」

コート姿の不審者は興奮のあまりコートを脱ぐ。

正体は、竜弓兵だった。

どうやら、彼女達で取引をるところらしい。

因みにあの合い言葉は、もちろん光翔竜が考えたものである。

ウォリアー

「さあー、そつちも約束のモノを・・・」

光翔竜

「あれ? 『ストライカーユニット』はどうしました?」

パンサー

「ああっ、厄介だから棄ててきたよ」

光翔竜

「棄てた！？なんてことをするんですか！！あれも必要不可欠なんですよ！！」「ウィッチ」と『ストライカーユニット』があつてこそ、『ウィッチーズ』なんです！」

竜弓兵

「というわけで、取り引きは中止にします！」

ウォリアー

「ち、ちよつと待てよ！」

パンサー

「こいつらを捕まえるのに苦労したんだぜ！」

すると、芳佳は起き上がる。

芳佳

「何を言っているんですか！子供を人質にたくせに」

芳佳とリネットが捕まったのは、ウォリアーとパンサーが子供を人質にしたので、やむ得ず捕まったのだ。

パンサー

「うるせえ！」

《ばきっ！》

芳佳

「あっ！」

パンサーは芳佳を蹴る。

リネット

「芳佳ちゃん！」

光翔竜

「ちよつとちよつと、乱暴は止してください！」

光翔竜は芳佳を抱き上げると、ウォリアーはリネットを抱える。

ウォリアー

「とつとブツを渡さねえと、こいつをぶっ飛ばせ」

ダイナマイトを取りだし、リネットに突きつけながら脅す。

《シュン》と光翔竜は消え、ウォリアーは驚く。

「あんまり調子に乗られたら困りますね」

ウォリアーの真後ろに光翔竜が立っていた。

しかも、鋭い指先を首の根元に突き立てていた。

光翔竜

「・・・とつと離せ」

ドスのかかった声をウォリアーの耳元に呟く。

ウォリアーは怯えて、言われた通りにリネットを離す。

芳佳

「リネットちゃん！」

芳佳はリネットに駆け寄る。

光翔竜

「これでも、『竜の爪』のメンバーをやっているんでね。いつでも貴様らを殺せる。従って生き延びるか、歯向かって死ぬか、どっちが良い？」

ウォリアーとパンサーは光翔竜から放たれる威圧感に怯える。

ウォリアー

「わ、わかりました。取ってきます！」

慌ててトラックに乗り込み、逃げるようにウォリアーとパンサーは立ち去る。

光翔竜

「………さて、宮藤芳佳さんとリネット・ビショップさん」

芳佳

「は、はい」

光翔竜

「……………サイン下さい！」

竜弓兵

「わ、私にも下さい！」

芳佳とリネットは啞然する。

しばらくして

芳佳

「へえー、悪の組織も大変なんですね」

リネット

「って、悪の組織に感心しない方するのは良くないよ」

【教会の中】で芳佳とリネットは光翔竜とのんきにお茶を飲んで  
いた。

光翔竜

「確かに正論ですね」

芳佳

「あの人達が私たちの世界……ううん、色んな世界を一つにして  
しまった原因を作った『??機関』っていう組織の幹部なんですね」

光翔竜

「はい。ですが、組織は壊滅しちゃいました」

リネット

「そうなんですか？」

光翔竜

「青い死神と愉快な仲間達に壊滅させられました」

芳佳

「青い死神？」

光翔竜

「正義の味方ですかね。我ら『竜の爪』にとっては宿敵ですけど」

芳佳

「へえー」

光翔竜

「会えば、この世界の融合に関する問題が解けるかもしれません」

芳佳

「じゃあ、私達会いに・・・」

光翔竜

「ああっ、駄目です」

芳佳

「ええっ」

光翔竜

「君達はこれから我が組織に連れていく予定なんですよ」

芳佳

「ええっ!?!」

リネット

「私達をどうするつもりなんですか?」

光翔竜

「君達のデータ・・・つまり能力を分析して、我が組織でも『ウィッチ』の力を開発するのですよ」

リネット

「待ってください! 『ウィッチ』は女性にしか持つことが出来ないんです」

光翔竜

「知っています。しかし、異世界の科学力を利用すれば、男性でも使えることができますはずですよ」

芳佳

「・・・もし、できるようになったらどうするつもりなんですか?」

光翔竜はどう答えるべきか、迷ってしまう。

すると、

竜弓兵

「光翔竜様、奴らが来ました!」

芳佳

「ええっ、もう!？」

リネット

「早すぎない？」

光翔竜

「……………わかりました」

### 【教会の外】

ウォリアーとパンサーのトラックが停まる。

ウォリアー

「旦那、約束のモノを持ってきやしたぜ」

光翔竜を呼んで、箱を運んでくる。

光翔竜

「ずいぶん早いですね」

ウォリアー

「なんせ、急ぎましたから」

パンサー

「ささっ、中身を確かめて下さい」

光翔竜は箱に近づくと、ウォリアーとパンサーはすぐに離れる。そして、ウォリアーは懐からリモコンを取りだして、スイッチを押すと、

《ドカアアアアアアアアン！！》

箱は爆発する。

ウォリアー

「やったぜ！」

パンサー

「ざまーみるー！」

ウォリアーとパンサーは歓声を上げる。

パンサー

「野郎共、出てきやがれ！」

「「「オオッ！！」「」」

トラックの荷台から、獣人型のドーターが出てくる。

ウォリアー

「悪いが、あんたを倒した手柄で『新機動六課』に就くぜ」

パンサー

「へっへっへっ。悪の組織の『竜の爪』の下に就くより、評判の良  
い『新機動六課』に就いた方が得だぜ」

ウォリアー

「ついでにあの小娘達を手土産にすりゃあ、喜んで俺達を入れてく  
れるはずだ」

パンサー

「野郎共、小娘達を捕まえてこい！」

「『オオツー！』」

ドーター達は教会の方に向かう。

「やれやれ、忠告したはずですよ」

ウォリアー達は突然の声に驚く。

ウォリアー

「ああっ!?!」

教会のてっぺんに光翔竜が立っていた。

光翔竜

「従って、生き延びるか、歯向かって、死ぬか。ってね」

パンサー

「ば、馬鹿な！？跡形もなくぶっ飛んだんじゃ！？」

ウオリアー

「どうやって助かりやがった！？」

光翔竜

「知る必要はありません。何故なら・・・」

光翔竜は飛んで降りる。

光翔竜

「此处で死んで貰うからな」

光翔竜の両腕は銀色に輝く。

ウオリアー

「や、殺れ！」

「「「シャアアアアー！！」「」」

ドーター達は爪を立てて、一斉に飛び掛かる。

《ジャキン！》

しかし、光翔竜は消えた。

ドーター達は驚き、光翔竜を探す。

消えた光翔竜はドーター達の背後に現れ、両手を構える。

光翔竜

「シャイニングバースト！」

《ピカアアアアアアアアアアアア！》

「ギヤアアアアアアアアアア……」

光翔竜の両手から放たれた強大な光はドーター達を消滅させる。

ウォリアーとパンサーは驚愕する。

\*

芳佳

「す、凄い！」

芳佳とリネットは竜弓兵と共に教会の窓から様子を伺っていた。

竜弓兵

「流石は光翔竜様。伊達にメンバーをやっではいませんね」

芳佳

「光翔竜さんの他にも凄い人がいるんですか？」

竜弓兵

「はい。メンバーの方々は相当の実力者です」

芳佳

「そうなんだ」

\*

パンサー

「ち、チキショー！」

パンサーは両手にクロー（爪）を取り付ける。

パンサー

「いくぜ！」

パンサーはウォリアーの影に入り込む。

光翔竜が驚くと、

「つりゃー！！」

光翔竜の影からパンサーが飛び出て、クロー（爪）で引っ掻こうとする。

《ヒョイ》

しかし光翔竜は難なく顎を上げて避ける。

同時に光翔竜とパンサーは着地する。

光翔竜

「契約者ですね」

パンサー

「その通りだ。人影から人影に移動するのが俺の能力だ」

そう言いながら、クロー（爪）で頭の毛を剃る。

光翔竜

「それが代償ですね」

パンサー

「ああっ、あんまり使いたくないが仕方がない。だから、とっと終わらせてもらおう！」

光翔竜

「わかりました。ご希望通りに終わらせませす」

そう言うと、光翔竜の体が輝く。

パンサー

「な、なんだ!?!」

光翔竜

「シャイニング・イリュージョン!」

《ピカアアアアアアアアアア!》

光翔竜は一気に強く光り出す。

パンサー

「うわあああああああつ!」

思わず目を閉じる。

パンサーはおそろおそろ目を開けると、

パンサー

「な、なんだこりゃ!?!」

なんと、光翔竜が沢山いた。

「「「さて、問題!本物はどーれだ?」「」

パンサー

「くそっ!」

パンサーは怒り任せに斬りかかるが、どれも幻で斬れなかった。

「くくぶーっ！時間切れ！正解は……」

《グサツ！》

光翔竜

「こつちでした」

分身が消えると同時に光翔竜はパンサーの背後から、光り輝く剣を突き刺した。

光り輝く剣を引き抜くと、パンサーは絶命する。

ウォリアー

「パンサー！」

光翔竜

「……………さて、次はあなたでしたね？」

ウォリアー

「ま、待ってくれ！」

ウォリアーは尻餅を付いて、後ろに下がる。

ウォリアー

「悪かった！もう二度と逆らわないから許してくれ！」

許しを乞いながらウォリアーは下がる。

その一瞬、片手を後ろに回すと、手のひらから爆弾が現れる。

ウォリアー

「頼む……よ！」

爆弾を投げようとした次の瞬間、

《グサツ!》

ウォリアー

「ぎゃあ！」

後ろからナイフが投げられウォリアーの腕に刺さる。  
あまりの痛さに爆弾を落とす。

ウォリアー

「だ、誰だ!？」

ウォリアー

「だ、誰だ!？」

「相変わらず汚いことをするわね」

ナイフを投げたのは、マーブルだった。

そしてヴィヴィオ、雅也、皐月、メアリーもいた。

ウォリアー

「マ、マーブル!？」

マーブル

「騙し討ちはあなたの得意分野ね」

ウォリアー

「ま、待ってくれ！俺はこの『竜の爪』の幹部を倒して、お前らの仲間に入ろうと・・・」

光翔竜

「その前に、あの子達を引き渡して、これを頂こうとしたんでしょ？」

外に出た芳佳とリネットを指差し、CDを取り出す。

ヴィヴィオ

「それなに？」

光翔竜

「あらゆる企業のデータベースを一瞬にして我が物にできるハツカ―システムです。これでお金を横取りすることができますよね」

雅也

「金のためか」

マーブル

「あんととパンサーはいつも金の為に、横流しに命令以外の暗殺、

そして子供の誘拐もしていたわね」

光翔竜

「そういえば、子供も人質にとっていたんでしたっけ？」

芳佳に尋ねる。

芳佳

「はい、爆弾を取り付けていました」

皐月

「最低」

メアリー

「そんな貴様が『新機動六課』に入るのは言語道断だ」

光翔竜

「うちもお断りです」

ウォリアー

「ち、チキショー！」

ウォリアーは逃げ出す。

《シュン！》

逃げるウォリアーの前に、突然黒鎌竜が現れる。

《チャキン！ズバツ！》

ウォリアーとすれ違う瞬間、黒鎌竜は大鎌を振る。  
そしてウォリアーは森の奥に逃げてしまう。

光翔竜

「あらあら黒鎌竜さん。来ていたんですか？」

黒鎌竜

「貴様の實力を前から見ておきたかったから、様子を見に来たのだ」

光翔竜

「いや、見ていたんですか？ 恥ずかしい」

黒鎌竜

「ただのお調子者かと思っていたが、相当の實力を持っているな」

光翔竜

「いや、出身地だから張り切っちゃいました」

黒鎌竜

「お前の出身地は此処か？」

光翔竜

「はい。それより、アイツを逃がして良かったんですか？」

黒鎌竜

「心配する」

《ザバツ！》

森の奥から物音が聞こえる。

黒鎌竜

「首を斬っておいた」

光翔竜

「お見事」

黒鎌竜はメアリーを見て、

黒鎌竜

「貴様がキャリバーンか？」

メアリーは驚く。

キャリバーンとは、メアリーの昔の名だ。

黒鎌竜

「そして、貴様が主か？」

雅也

「ああっ」

黒鎌竜

「……………いつか、貴様と闘う時が来よう」

黒鎌竜は後ろに下がる。

光翔竜

「……………さて、取引はなくなった今、どうしましょう？」

黒鎌竜

「お前に任せる」

光翔竜は雅也達と芳佳達を交互に見て考える。

光翔竜

「芳佳さん、彼らが『新機動六課』の方々です」

芳佳

「ええっ!？」

光翔竜

「ですから、この方々に付いて行って下さい」

竜弓兵

「光翔竜様、何を言っているんですか!？」

光翔竜

「だって、この子が私を助けてくれましたから」

竜弓兵

「しかし・・・」

光翔竜

「借を作ったままではこの先支障に関わります。責任は私が取りま  
す」

黒鎌竜

「本人がそう言うんだ。そうしとけ」

竜弓兵は渋々、芳佳とリネットを雅也達に引き渡す。

光翔竜

「それでは退散します。ヴィヴィオちゃん、フェイト様に伝えて下  
さい」

ヴィヴィオ

「はい？」

光翔竜

「『光翔竜はフェイト様の永遠のファンです！怪我をしないように  
！』と伝えてください」

ヴィヴィオ

「・・・・・・はい」

光翔竜

「それから、なのはさんには・・・もう三十路ですから無理しな  
いで下さい」と伝えてください」

雅也

(うわっ、それは禁句だ！)

皇月

(フェイトさんとは全く違う気遣いだわ)

メアリー

(確かフェイトさんも三十路・・・)

マーブル

(言わないほうが良いつて！)

念話で話す雅也達。

ヴィヴィオ

「それは言えません。本人が気にしていますから」

黒鎌竜

「いや、そこは『うちのママはとても若いもん』って言ってやれ。ママ悲しむぞ」

ヴィヴィオ

「はい」

黒鎌竜と光翔竜が揃つと、足元に魔法陣が現れる。

竜弓兵も魔法陣に入る。

光翔竜

「それでは」

光翔竜と黒鎌竜と竜弓兵は姿を消す。

メアリー

「……………あの黒鎌竜、私と同じ力を感じます」

雅也

「それにただ者じゃないな」

雅也達は黒鎌竜を警戒する。

その後、芳佳とリネットは『新機動六課』に保護された。

（おまけ）

光翔竜

「始まりました、『竜の爪通信』」

《パチパチパチパチパチパチパチパチ！！》

光翔竜

「いかがでしたか、私のカッコイイ活躍は？僕だって、『竜の爪』のメンバーですから。それでは、今回出てきてやられたウォリアーとパンサーについてです」

『爆殺のウォリアー』CV石野竜三

「プロフィール」

勝つためなら手段を選ばない卑劣な男。パンサー以外の他の幹部とはそりが合わなかった。

エスパーの力で爆弾を操ることを得意としている。

『狩人のパンサー』CV宇垣秀成

「プロフィール」

ウォリアーと同じ考えを持つ男。

『人影から人影に移動する』能力で多くの標的を葬った。

光翔竜

「うーん、『新機動六課』に入らなくて良かったですね。こいつらが入れば、フェイト様に毒牙がかかっていましたよ」

光翔竜は自分で納得する。

光翔竜

「それより青いタヌキ先生、東北の大地震の際、ご無事で良かったですね。しかし、後が大変ですよ。そんなあなたに労いとして、これを送りましょう」

光翔竜が取り出したのは、

光翔竜

「『フェイト・フィギュアシリーズ第一弾「ストライクウィッチーズ」』！」

そのフェイトのフィギュアは上に軍服は着ていたが、下はパンツとニーソしか履いてなかった。

光翔竜

「パンツやストッキングしか履かない『ウィッチーズ』を参考に作ったフェイト様のフィギュアです。色っぽいドレスと真ソニックフォームはあっても、パンチラの無かったフェイト様の姿を、フィギュアで実現しました！青いタヌキ先生、これで元気を出してください！そして被災者の皆様方、アニメキャラクターのように強く生きてください！」

終わり

光翔竜の実力（後書き）

青いタヌキ先生、元気出してくださいね。

(ネタ提供を込めて)新たな兵器ハヴァルキュリアーゴレムアーマー(前書

『竜の爪』が強力な敵を作りました。

(ネタ提供を込めて) 新たな兵器「ヴァルキュリアーゴレムアーマー」

【工房】

《カンカン！ジジーイ！ギリギリ》

多くの竜兵達は工具を使って何かを組み立てる。

それは大きな人型だった。

頭は他の部分より小さく赤い一つ目。

上腕の装甲は太く分厚い。

脚は短めだが上腕と同じ太く分厚い。

そんな様子を呪血竜とスイレーヌがじっくり見ていた。

呪血竜

「もうすぐ完成ですね、最新アーマー」

スイレーヌ

「はい」

呪血竜

「貴女の『アーマー・シリーズ』の設計図は本当に為になりました」

スィレーヌ

「恐れ入ります」

呪血竜

「技術は『???機関』ものですが」

竜兵は最新アーマーの胸元に“ある”エンブレムを取り付けた。

それは三本の引っ掻き傷の上に竜の顔。

『竜の爪』の紋章である。

呪血竜

「造ったのは、我ら『竜の爪』です」

すると、竜兵達は工具を置き、あるものを運んでくる。

それは、長く太い砲身に根元に二つの玉がくっついた砲台だった。

竜兵

「これを股間に取り付けければ作業終わり…」

呪血竜

「取り付けるな！なんだそれは！？（怒）」

竜兵

「ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲です」

呪血竜

「『アームストロング』二回言ったよ！何だよその形、凄く嫌なんだけど！取り付ける場所もますます嫌なんだけど！っていうか、そんなもの設計図に入って無いぞ！（怒）」

竜兵

「こ、これはロストロギアの一種で、【銀魂】世界の禁断兵器です！」

呪血竜

「別の意味で禁断兵器だ！付けるな！（怒）」

スイレエ又は唾然するのだった。

【アジト内】

真王竜

「遂に完成か？」

呪血竜

「はい、『ヴァルキュリアゴーレムアーマー』完成いたしました」

呪血竜とスイレエ又は真王竜に報告していた。

真王竜

「スイレエ、言うては失礼だが……。今までの『アーマー・シリーズ』は『管理局』と我ら“竜の爪”に倒され続けられている。今

回のアーマーは役立つのかな？」

スレーヌ

「はい、自信はあります」

呪血竜

「今回は私も手を貸しました。次は勝てます」

真王竜

「わかった。では説明してくれ」

呪血竜

「ははっ」

呪血竜はモニター映像を出す。

呪血竜

「『？？？機関』の『ゴーレムアーマー』を元に作りました。ただ違うのは武装と“ある動力源”です。その動力源を発動させればあらゆる攻撃を無効にし、破壊できます」

真王竜

「それで、“ある動力源”とは？」

呪血竜

「『ヴァルキュリアの炎』です」

真王竜

「ヴァルキュリアの炎？もう無いのでは？『試作品016号』も奴ら（時空管理局）の手に渡っている」

呪血竜

「はい、ですから新しいのを取りに行くのです」

真王竜

「【戦場のヴァルキュリア】世界にか。もう見つけたから報告しに来たんだね？」

呪血竜

「当然です。それには“黒鎌竜”と“白天竜”に頼みました」

【戦場のヴァルキュリア世界】

ここは『公国』と『東ヨーロッパ帝国連合』が戦争をしている真つ最中だったが、『ダーク・デス・マスター』の影響により他の異世界と混ざってしまった。  
そのため、この世界は困惑していた。

【森の中】

《♫♫♫♫♫♫♫♫♫》

森では『星のカービィ』に出てくるキャピィが必死に逃げていた。

「待て待て！」

そんなキャピィを追いかけていたのは女軍人だ。

彼女は『義勇軍第3中隊』の“ロージー”である。

《バシッ!》

ロージー

「捕まえた！」

【森の外側】

森の外側には、いくつかテントが張られていた。

それは『義勇軍第3中隊』が滞在しているからだ。

\*

《ワイワイ》

大きな檻にはキャピイの他にワドルデイ、ツイジー、トウーキー、グリゾー、スカラー等の『星のカービィ』のキャラクターばかりだった。

「どれも見たことない生き物ばかりですね」

隊員の一人のイサラ・ギュンターは呟く。

「そうだね」

生き生きと観察していた人がいた。

『義勇軍第3中隊』の隊長であるウエルキン・ギュンターである。イサラの兄でもある。

「凄い、本当に見たことがないよ」

嬉しそうに観察する。

イサラはそんなウエルキンに唾然する。

ワドルデイ

「助けて下さい」

ワドルデイ達は涙ながら頼む。

ウェルキン

「大丈夫だよ。君達に危害は加えないよ」

「さあー、食事よ」

かご一杯に焼きたてのパンを持ってきたのは、アリシア・メルキオツトである。

アリシア

「さっ、どうぞ」

パンを差し出すと、ワドルデイ達は食べる。

「美味しい」と喜ぶ。

「見たこと無い上に本当に何なんだこいつらは？」

隊員のラルゴ・ポツテルは不思議に思う。

ラルゴ

「空から黒い煙が出てきたと思ったら、訳のわからねえ生き物が現れている。いったいどうなっているんだ？」

ロージー

「政府も大混乱らしいよ」

ラルゴ

「今、俺達がやることはこの訳のわからねえ生き物達の捕獲だけか」

イサラ

「兄さんはその任務を大変喜んでいますね」

ウエルキンはパンを食べるワドルディ達をも観察する。

アリシアもワドルディ達に興味津々だったのか、一緒に観察する。

\*

そんな様子を遠くから覗く者達がいた。

メンバーの“白天竜”と“黒鎌竜”そして竜剣兵と竜兵達だった。

白天竜

「あれがヴァルキュリア人のアリシアですね」

竜剣兵

「ははっ、この探知機が反応してます」

探知機とは呪血竜の作った『ヴァルキュリア探知機』である。

黒鎌竜

「どっやって捕まえる？」

白天竜

「いきなり捕まえに行く訳にはいきません。こっそり捕まえなければいけません」

竜剣兵

「奴ら〔時空管理局〕に勘づかれますからね」

竜兵 1

「では、彼女が一人になった時に捕まえましょう。着替える瞬間を狙いましょう」

竜兵 2

「いや、お風呂に入ろうとする瞬間を狙いましょう」

竜兵 3

「どっちも時間が掛かる。排尿した瞬間を狙いましょう」

竜兵 1

「いや、下着姿のまま捕まえた方が色っぽい！」

竜兵 2

「いや、全裸が良いに決まってるんだろ！」

竜兵 3

「いやいや、排尿する瞬間がエロいぞ！」

竜兵 1

「何を言ってるんだ！生で着用するブラジャーとパンティは興奮的だ！運が良ければ、着用済みのを嗅げる！」

竜兵 2

「いや、白天竜様には及ばないが良い乳を持っている！そんな生乳を見れる風呂場が良い！運が良ければ、他の美女も見れる！」

竜兵 3

「アホか！運が良ければ尿が飲めるぞ！」

白天竜

「この馬鹿兵共！……黒鎌竜様、何かおっしゃって下さい！」（怒）

黒鎌竜

「……乳首が敏感な弱点だ。そこを狙え、そこを」

《ザクザク！》

白天竜

「真面目にやらないと、こつなるわよ」

二本の剣で黒鎌竜を串刺しにする。

「……すいませんでした！！」「」

恐怖した竜兵達は、すぐさま土下座する。

ちなみに黒鎌竜は死ぬどころか痛がらなかった。

竜剣兵

「今ので良い案が浮かびました」

竜剣兵の話に傾ける白天竜。

\*

夜になりかけた頃。

「キヤアアアアアアアアア！」

森に女性の悲鳴が響いた。

アリシア達、『第3中隊』が駆けつけると、

《ザバツ！》

「くっ！」

女性は腕を斬られる。

斬ったのは、黒鎌竜だった。

黒鎌竜が鎌を構えると、

《パン！》

アリシア

「止めなさい！」

一発撃って威嚇して、アリシア達は黒鎌竜に向けて銃を構える。

黒鎌竜はひらりと逃げる。

ラルゴ

「待ちやがれ！」

ラルゴ達は黒鎌竜を追いかける。

アリシア

「大丈夫ですか！」

「は、はい……」

アリシア

「怪我してますね。私達は『義勇軍第3中隊』です。向こうで治療しましょう」

「ありがとうございます」

その女性は、素顔の白天竜だった。

【テント内】

白天竜はアリシアに腕の治療され、包帯を巻いてもらう。

ウエルキンは白天竜から事情を聞いていた。

ウエルキン

「すると、その黒いマントには心当たりは無いのですね」

白天竜

「はい、突然斬りかかってきたんです。……とても怖かったです  
身を震わせる。」

アリシアはそんな彼女を抱き寄せる。

ラルゴ

「あんな得体の知れない奴も出てきてるとはな。本当にどうなっち  
まったんだ、この世界は？」

ウエルキン

「……もう遅いですから、今夜は此処に泊まってください」

白天竜

「えっ、よろしいのですか？」

ウエルキン

「構いませんよ。民間人を保護するのも、軍人の仕事です」

白天竜

「ありがとうございます」

ウエルキン

「それでは、あなたのお名前は？」

白天竜

「はい、ユリ・ハクテンです」

ラルゴ

「……………ハクテン？聞いたこと無い名字だな」

白天竜

「よく言われます」

アリシア

「私が付きつきりで看病しますね」

白天竜

「はい、よろしく願いします」

白天竜は不適に笑う。

【テントから離れた距離】

黒鎌竜は座り込んでみると、竜剣兵がやって来る。

竜剣兵

「白天竜様は上手く入り込みました」

黒鎌竜

「そうか」

実は芝居だった。

白天竜を一般人と見せ掛けて襲う。

そこへ『義勇軍第3中隊』が現れて、白天竜を助けてもらう。最終的に白天竜がアリシアを連れ出す。

これが竜剣兵の策である。

黒鎌竜

「策とはいえ、白天竜を傷付けてしまったな」

竜剣兵

「すみません。こうしなければ返って疑われます」

黒鎌竜

「気にするな。やったのは我だ」

竜剣兵

「……黒鎌竜様」

すると、竜兵1が来る。

竜兵1

「黒鎌竜様、準備ができました」

黒鎌竜

「わかった」

【森から離れた草原】

草原に大きな魔方阵が描かれていた。

黒鎌竜は魔方阵に立つ。

黒鎌竜

「召喚！」

魔方阵は輝き出す。

それと同時に魔方阵から何かが現れてくる。

それは…、

『ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲』

だった。

竜兵達はずつこける。

竜兵 1

「何ですかこれは!？」

黒鎌竜

「『ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲』  
!。完成度たけえーな、オイ」

竜兵 2

「し、知ってるんですか!？」

黒鎌竜

「魔界戦記で悪魔軍を尻ぎ払った禁断兵器だ」

竜兵 3

「……形が既に禁断兵器ですけど……」

黒鎌竜

「冗談だ。これではない、運び出せ。もう一度やる」

竜兵達は『ネオアームストロング（以下略）』を運び出す。

黒鎌竜は気を取り直し、もう一度召喚魔法を唱える。

《トントントントントントントントント》

ゆっくりとヴァルキュリアゴーレムアーマーが現れてくる。

黒鎌竜

「後は結界で隠して、動力源となる“あのヴァルキュリア人（アリスア）”をおびき寄せる。そして最後に胸のハッチに入れれば動くか」

竜剣兵

「そのあと、実験がてらに奴ら「時空管理局」と戦わせてデータを録るのですね」

黒鎌竜

「勝っても負けてもこちらには好都合だな」

黒鎌竜は不適に笑うのだった。

「おまけ」

光翔竜

「はい、『竜の爪通信』の始まりです！」

《パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ》

光翔竜

「ヴァルキュリアゴーレムアーマー、凄いですね！そんな凄いゴーレムアーマーの秘密を特別に教えちゃいます！」

『ヴァルキュリアゴーレムアーマー』

〔解説〕

通常のゴーレムアーマーを倍の大きさに作り、さらに『ヴァルキュリアの炎』を扱え耐えられるように改良も加えている。

「技・能力」

『ヴァルキュリアの鎧』

体全体を『ヴァルキュリアの炎』に覆う。

全ての魔法と攻撃を無効にする。

『炎の拳』

『ヴァルキュリアの炎』を拳に宿し、そのまま拳を発射させる。その破壊力は抜群。

『ヴァルキュリア砲』

『ヴァルキュリアの炎』をエネルギーに変えて、ビーム砲として撃つ。街を一つ破壊できる程などで、最終武器としている。

光翔竜

「す、凄いです！これならあの白豚魔王（高町なのは）なんて目じ

やありません！けど、フェイト様は傷つきたくありません！フェイト様と戦わないで欲しいと願い、本日はここまで。では！」

《プシン！》

終わり

(ネタ提供を込めて) 新たな兵器ハヴァルキュリアーゴレムアーマー (後書)

これで青いタヌキ先生のネタ補充になりますか？

新たなサーヴァント!?(前書き)

青いタヌキさん復活を記念し急いで書きました。

新たなサーヴァント!?

『我ら七竜兵隊!』

唄：七竜兵隊

七竜兵隊!七竜兵隊!七竜兵隊!七竜兵隊!七竜兵隊!七竜兵隊!  
七竜兵隊!

私は竜剣兵 白天竜様の側近だ

剣術が得意なのだ! 迎え来る敵など 斬り捨てやる!

自分は竜弓兵 光翔竜様の子分だ

自分の腕前は百発百中! 魔法の弓で仕留めてやるぞ!

七竜兵隊!七竜兵隊!七竜兵隊!七竜兵隊!七竜兵隊!七竜兵隊!  
七竜兵隊!

あつしは竜槍兵 喰樹竜様の下僕だ

あつしの槍術は天下無双! 敵を逃さずに串刺しだ!

俺は竜凶戦士 夜帝竜の舎弟だ！

どんな奴でも 力の限りにぶっ潰してやるぜ！

七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！

僕は竜騎兵 呪血竜様の助手なのさ！

僕の手綱と鞭で どんな猛獣も 従えちゃうぞ！

我は竜暗殺者 氷刃竜様の影である！

どんな強い奴でも 急所をさえ狙えば いちころさ！

七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！

我輩は竜魔導師 魔炎竜様の一番弟子である！

あらゆる魔術を習得している 貴様なんか 怖くない

我らは タダの竜の兵士ではない 『サーヴァント』の力を授かり

し 選ばれた竜の兵士なのだ！

DRAGON NAIL 竜の爪 正義に屈しない！ 悪の組織  
に栄光あれ〜！

七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！七竜兵隊！  
七竜兵隊！

剣竜兵 竜弓兵 竜槍兵 竜騎兵 竜魔導士 竜暗殺者 竜凶戦士  
が揃って合唱と音楽に合わせて踊っていた。

それを『聖なる三弦』の1人である“雷光のユリア”が聴いて観て  
いた。

ユリア

「……………なかなか良かったぞ。これならデビューできる」

竜弓兵

「ほ、本当ですか！？」

ユリア

「ああつ……………よく頑張ったな、お前たち」

や、やったー！！！！

竜剣兵達は喜んだ。

泣いたり、笑ったりと思いきり歓喜する。

ユリアも笑う。

竜剣兵達、『七竜兵隊』はユリアの指導の下で自分達のCD製作をしていたのだ。

もちろん、資金の収入源にするためである。

そんな時、1人の竜兵が入ってくる。

竜兵はユリアに耳打ちをする。

ユリア

「な、何だって!？」

ユリアは驚愕する姿に七竜兵隊は驚く。

竜剣兵

「どうなさいました？」

ユリア

「……………竜槍兵、落ち着いて聞くんた」

竜槍兵

「は、はい」

ユリア

「……………喰樹竜様が倒された……………」

\*

真王竜を初めとした、光翔竜 呪血竜 黒鎌竜 白天竜 魔炎竜  
氷刃竜 聖唱竜 夜帝竜の全てのメンバーが集まっていた。

彼らの頭上には、喰樹竜と『青い死神』こと“優太”との戦いの映像が映されていた。

喰樹竜の攻撃を退け、一撃で葬った優太の強さに驚くメンバー。

しかし、真王竜だけは興味津々と優太を観る。

真王竜

「流石は青い死神だ」

「し、失礼します」

そこへ、竜槍兵が入ってくる。

呪血竜

「来ましたか。報告を聞きましたね？」

竜槍兵

「は、はい、今でも信じられません。あの喰樹竜様が倒されるとは……」

呪血竜

「残念ながら事実です。倒したのは青い死神です」

光翔竜

「流石は『ダークミラー』を結成した男だけのことはありますね」

黒鎌竜

「確かに。あの喰樹竜のツルを、たった切った、後に心臓を刺した後、に燃やし尽くした。喰樹竜の能力を発動させずにな」

と冷静な観察力で優太の戦いを解説する。

魔炎竜

「怖いなあ。我々もそうして倒すつもりか？」

氷刃竜

「そうならない為にも最初から全力で戦えば良いだろ」

夜帝竜

「賛成だ。喧嘩は思い切りやるもんだ」

そう言いながら指を鳴らす。

呪血竜

「真王竜様、『グレンジアーマー』の使用許可をいただけませんか？」

『グラッジアーマー』とは、『アーマーシリーズ』に『怨魂』を備えた新兵器である。

白天竜

「もう使えるのですか!？」

呪血竜

「ええっ、実験は既に済ませてあります。あと、『ヴァルキュリア  
ゴレムアーマー』も使いたいと思います」

黒鎌竜

「あれもか？」

呪血竜

「手配は整っていますよね？」

白天竜

「は、はい……………」

少し浮かない顔で返事をする。

それはアリシア（戦場のヴァルキュリア）のことを思っていたからである。

真王竜

「わかった、許可する」

呪血竜

「ありがとうございます。さて、竜槍兵よ」

竜槍兵

「は、はい」

緊張感が走る。

呪血竜

「この映像を観たまえ」

頭上に映し出される映像を竜槍兵に見せる。

【地獄の大樹】から優太に呼ばれたなのは達は、喰樹竜に捕まっていた人々の救助していた。

人々は助かったことを喜び合い、なのは達に感謝していた。そして優太を『救世主だ』と崇めた。

呪血竜

「こんなに人間を捕まえていたのですか？」

竜槍兵

「……………はい、喰樹竜様の食料として……………」

竜槍兵は恐る恐る答える。

呪血竜

「なるほど。しかし、問題なのは戦いが始まるまえです」

映像は喰樹竜と優太の対話の辺りまで巻き戻しされる。

喰樹竜

「ワシと手を組まないか？てめえがいたら真王竜だなんて目じゃ・・  
」

ここで止められる。

呪血竜

「次はこれです」

次に早送りされる。

今度は【地獄の大樹】の内にいる倉庫から、ハイホー達が次々とあ  
るものを運んでいる辺りだった。

それは『ロストロギア』だった。

\*

竜槍兵は動揺する。

呪血竜

「これは『ロストロギア』ですよ？それもよく見れば、破壊され

たり、紛失してしまったと報告されたものばかり。これはどういうことですか？」

竜槍兵

「……………申し訳ありません!!」

すぐさま土下差をする。

竜槍兵

「実は、喰樹竜様がこっそりと『ロストロギア』を手中に納めていました」

黒鎌竜

「いつからだ？」

睨み付けながら問い出す。

竜槍兵

「活動し始めた時かららしいです。本人から聞かされました」

黒鎌竜

「いつ聞かされた？」

竜槍兵

「配属されて日が浅い時、扉が開いていた倉庫の中を見たときに、大量の『ロストロギア』を発見しました。その時……………喰樹竜に見つかってしまい、喋るなど脅されました」

その時のことを思い出して、恐怖する。

夜帝竜

「チツ！奴らしいやり方だな」

夜帝竜は喰樹竜のやり方に嫌気を刺し、舌打ちをする。

呪血竜

「……君は喰樹竜に忠誠を誓っていましたか？」

竜槍兵

「そ、それは……」

竜槍兵はどう答えるべきか困る。

内心、忠誠を誓うほど信頼していなかったからだ。

呪血竜

「例え脅されてとはいえ、あれだけの『ロストログア』を隠していたことを報告しなかったことは大変に許しがたい！」

呪血竜は竜槍兵を怒鳴る。

竜槍兵は怯える。

呪血竜

「その結果がこれです！」

『大地の聖書』・『天水の宝玉』・『賢者の卵』・『万能の香水』等、どれも最高級のモノばかり。それが今、時空管理局の手中に納まってしまいました。

これはメンバーの1人が倒されることより、痛手です！」

呪血竜は怒りながら、結果報告を述べる。

真王竜

「それは確かにまずいな」

黒鎌竜

「しかも気に入らねえな。ただでさえこんな挑発的に自分の戦いを見せつけられるだけでも腹ただしいのに、得られなかったモノが見えないところで得ていたなんてことがな」

黒鎌竜は苛つくあまりに歯ぎしりを立てる。

聖唱竜

「では、彼の葬式は？」

氷刃竜

「喰樹竜は裏切り者だ！奴を哀れむ必要はない！」

聖唱竜

「ですが、彼もメンバーでした。同じメンバーとして弔って挙げるのが筋ではないでしょうか？」

氷刃竜

「この期に及んで、まだそんなことを言うのか？」

聖唱竜の律儀で信念的な意見と氷刃竜の厳罰で冷徹的な意見がぶつかり合う。

真王竜

「止めないか！」

真王竜はそんな2人を一喝する。

その一喝は2人だけではなく他のメンバーも黙らせてしまう。

真王竜

「……………多数決で決めよう。喰樹竜の葬式を行うべきだと思う者は手を挙げよう」

手を挙げたのは、真王竜と聖唱竜だけだった。

真王竜

「……………決まりだな」

聖唱竜は落ち込む。

真王竜

「次は……………竜槍兵」

竜槍兵

「は、はい！」

竜槍兵は怯える。

いったいどんな刑罰を下されるのかと。

真王竜

「脅されたことを考慮に入れて……………力を剥奪後、謹慎を申し付ける」

真王竜が言い渡すと、竜槍兵の両側から竜騎士が現れて、竜槍兵を捕まえる。

竜槍兵

「え、あ、あのう……」

慌てる竜槍兵の前に呪血竜が立つ。

呪血竜

「心配ありません。殺すわけではありませんから」

そう言うと、呪血竜は右腕を竜槍兵の胸の中心に突き刺す。

竜槍兵

「ぐえ！」

竜槍兵は驚くが、痛がらない。それどころか血も出ていない。

呪血竜が右腕を引き抜くと同時に一枚のカードが抜かれる。

それは『槍兵』のカードだった。

その瞬間、竜槍兵は元の竜兵に戻ってしまう。

呪血竜

「連れていけ」

竜騎士達は竜兵を連れていってしまふ。

真王竜

「……………さて、これからの事だが……………」

黒鎌竜

「真王竜、呪血竜」

突然、2人を意見を述べようとする。

呪血竜

「何ですか？」

黒鎌竜

「あの『ヴァルキュリアゴーレムアーマー』を我と白天竜に使わせてくれ」

白天竜は驚く。

呪血竜

「理由は？」

黒鎌竜

「あんな映像を送りつけた礼に、こっちも組織の実力を見せつけてやりたい。『新機動六課』どもにでもぶつけてやりたい」

白天竜

「黒鎌竜様……………」

真王竜

「……………わかった、許可しよう」

黒鎌竜の真剣な眼差しに根負けする。

呪血竜

「私も構いません。但し、スィレーヌも付けさせます」

黒鎌竜

「感謝する」

魔炎竜

「待て！『新機動六課』には水蓮竜がいるんだ」

魔炎竜は慌てて異議を唱える。

黒鎌竜

「心配するな。危害を加えないようにする」

氷刃竜

「保証できるのか？」

睨み付けながら問う。

光翔竜

「そんなに心配するなら、彼らに任せなきゃ良かったでしょう？」

光翔竜の正論に氷刃竜は黙り込む。

真王竜はあるカードを取り出し、考える。

真王竜

「ならば、どうしようか？」

真王竜の言葉にメンバーは注目する。

\*

【牢屋】の中で『槍兵』のカードを剥奪された竜兵は落ち込む。

竜兵

「はあー、せつかく歌が完成したのに、降格されちゃった。けど、命を取られなかっただけでもありがたいと思わなくちゃ」

そう思っていると、ユリアがやって来る。

竜槍兵

「ユリア様！」

ユリア

「大変だったな」

竜槍兵

「申し訳ありません。せつかくご指導なさって下さったのに、このようなことになってしまいました」

ユリア

「まったくだ。喰樹竜の部下ではあるが、お前は『竜の爪』の一員だ。組織を裏切るな」

竜槍兵

「……………はい」

ユリア

「真王竜様からお前に渡すように頼まれた」

ユリアは竜槍兵にカードを手渡す。

竜槍兵は受け取って見ると、それは侍の絵が描かれてあった。

竜兵

「これは？」

ユリア

「新しく開発した『サーヴァント』のカードだ。これをお前に授ける」

竜兵

「えっ？」

ユリア

「そして、水蓮竜様の補佐となれ」

竜兵

「ええっ！」

あまりにも突然のことなので、驚愕する。

竜兵

「な、なぜ？」

ユリア

「これは過酷な罰だぞ。敵陣の中にいる水蓮竜様を護衛しなきゃならない。しかもこのカードのテストも兼ねているのだ」

竜兵

「た、確かに過酷です」

内容を聞いて、納得する。

ユリア

「近々、『新機動六課』に攻撃するからな。その時、水蓮竜様をお守りするのだ」

竜兵

「わ、わかりました」

竜兵はカードを身体に当てる。

すると、竜兵は青く輝き出す。

しかし、あまり変わっていなかった。ただ2本の日本刀を備えていた。

竜兵

「か、変わっていませんけど」

ユリア

「試しに牢屋を斬ってみろ」

後ろに下がる。

竜兵は日本刀を掴んで、引き抜いて居合い斬りをする。

そして、牢屋の鉄柱がバラバラと斬られる。

竜兵

「す、凄い！」

授かった力を実感して、驚愕する。

ユリア

「なんせ真王竜様の技を組み込まれているからな」

竜兵

「そんな力を私に授けてよろしいのですか？」

ユリア

「メンバー全ては反対しなかった。特に聖唱竜様は是非とおっしゃった」

竜兵

「聖唱竜様が？」

ユリア

「前にリンを庇ってくれたことを感謝していた」

竜兵は思い出す。

ユリア

「その力は強すぎる。向こうで徐々に慣らすしかない」

竜兵

「はい」

ユリア

「早速行ってこい」

竜兵

「わかりました」

竜兵は立ち去ろうとする。

ユリア

「ああっ、それから」

ユリアは竜兵を止める。

ユリア

「お前の新しい名は“竜侍”だ」

竜兵

「は、はい！」

“竜兵”改め、“竜侍”は立ち去る。

果たして、無事に水蓮竜に合流できるだろうか？

「おまけ」

光翔竜

「はい、始めました【竜の爪通信】！」

拍手が聞こえる。

光翔竜

「今回は我が組織の「組織図」について説明します」

【真王竜（リーダー）】

【呪血竜（サブリーダー）】

【黒鎌竜・白天竜・魔炎竜・氷刃竜・聖唱竜・光翔竜・夜帝竜喰樹竜 故人 ・水蓮竜（メンバー（幹部））】

【七竜兵隊（補佐）】

【聖なる三弦（副幹部）】

【喰樹竜親衛隊（副幹部）】

【元：??機関のフレーム・スイレーヌ・サンダナ・シャープの副幹部】

【竜騎士の隊長・護衛役】

【竜兵の兵士・雑用係】

光翔竜

「と、今はこうやって成り立っています。こちら（竜の爪）とあちら（復讐の戦場）の話が進むにつれて変わるかもしれません。それでは本日はここまで！」

ぷつん！

続く

新たなサーヴァント!?(後書き)

青いタヌキさん、いかがでした?

最近のゲームは3D化されている。(前書き)

あらかじめ書いておきます。

台詞の上に名前を書くのをやめました。

以上

最近のゲームは3D化されている。

「ぐっふっふっふっ」

楽しくパソコンを弄る光翔竜。

「何をしているんですか？」

そこへ呪血竜が現れる。

「ゲーム制作です」

「何故また？」

首を傾げる。

「資金を稼ぐためですよ。前に作ったゲームがヒットしたおかげで我が組織の資金が膨れ上がりましたでしょう？」

「それはそれは……。しかし、ヒットをしますか？」

「前作より超えるキャラクターの変貌を狙いにします」

パソコンの画面にキャラクターが表示される。  
秋本優太だった。

「まあ、観てください」

\*

「ぐ、ぬぬぬぬぬ……」

突然、優太は唸り始める。

すると、優太の肌が青くなっていく。

さらに左右の頬に三本の髭を生やし、鼻が赤くなる。

なんと優太は『ドラえもん』になってしまった。

着ぐるみを着たわけではなく、変貌したのだ。  
まるで、実写版のドラえもんようだった。

はつきり不気味である。

しかし、まだ終わっていなかった。

「はああああああああああ！！」

なんと身体全身の筋肉が盛り上がり、黄金の覇気を放つ。

空に上がり、フリーザーやセルみたいな奴と激しく闘う！

優太は両手を構え、

「かゝめゝはゝめゝ波!!」

とフリーザーとセルみたいな奴を吹き飛ばした。

優太はまさに『スーパーサイヤ人』となったドラえもんであった。

ますます不気味である。

\*

呪血竜は啞然する。

「何でも夢を叶えてくれる“ドラえもん”と、最強の戦士“スーパーサイヤ人「孫悟空」”を合わせてみました」

「かなり不気味ですね」

「次はこれです」

気にせずに表示させる。

\*

次は黒美と茜だった。

黒美は黒く、茜は赤く輝きだした。

そして、形が変わっていった。

黒美はゴリラに。

茜は赤毛猿になって走り出した。

向かってくる竜兵達を黒美が次々と薙ぎ払って、茜はカンフーで打ち倒しながら突き進む！

2人に戸惑う竜兵達の横から、天野麗が現れる。

天野麗の『ジエイソンスマスク』を被ると、筋肉ムキムキとなり、チエーンソーン「電動ノコギリ」を持つ。

そして、次々と竜兵達を斬り刻んでいく！

返り血を浴びて、恐怖が増す。

竜騎士数匹も突撃するが次々と狙撃される。

遠い高い場所から狙撃したのは、『ゴルゴ13』の主人公のデューク東郷 となった光だった。

カミソリの刃と形容される鋭い目付きと猛禽類のような眉毛は少女にはあまりに酷かった。

進軍する無数のアーマーの軍団の前に、ミレイザが立つ。

「ぬっおおおおおおおおお！」

突如雄叫びを上げると、姿を変貌させながら巨大化する。

ミレイザはゴジラとなって、アーマー軍団を潰して行く。

ミレイザが雄叫びを上げる。

そして、「DOG DAYS」のリコッタ・エルマールのコスプレをした綾華が現れて、

「よろしくであります」

とご挨拶する。

犬耳で可愛い上に、豊かな胸を強調する姿勢は、かなりの破壊力（萌え）があった。

\*

呪血竜は思わず、トキッとする。

「いかがですか？」

「……スィレーヌの方なら、似合うと思いますよ、犬耳」

「えっ？」

慌てた呪血竜は咳払いして誤魔化す。

「ほ、他の者には酷いのに、榊原綾華さんにはコスプレなんですね」

「だって、あの人の声は……水奈々様ですもの。酷いものより、中の人繋がりにした方が良いでしょう」

「もしや、フェイト・T・ハラオウンのファンではなく、水樹々のファンでは？」

「いいえ、フェイト様と水樹々様は一心同体の存在です！水樹々様を讃えることは、フェイト様を讃えると同じなんです！青いタヌキ先生もそう思っているはずです！」

これを聞いた呪血竜は頭を痛める。

「あと、何でミレイザを怪獣にしたんですか？」

「何でって？」

「忘れたんですか？　　3年Strikers組　銀八先生」のゲスト出演した時、あなたは彼女を「おばさん」だの「おばちゃん」って」

「いや、最初に『おばさん』って、言ったのは呪血竜さんじゃないですか！」

詳しくは、第二十二講を読んで下さい

「それで、最凶の召還竜を召還されて……っう！」

呪血竜はその時の恐怖を思い出し、しゃがみこんで怖がる。

「大丈夫ですよ、どうせ忘れていた筈ですよ、あのおばさん。さて、次は……」

「あ、あなたって、実は大物？」

光翔竜は再び別の表示させる。

\*

マントに被われた梟月が歩き出すと、「北斗の拳」に出てくる雑魚キアラ達が襲いかかる。

「ハアアアアアッ！」

皐月は「北斗の拳」の主人公ケンシロウとなり、

「アツタタタタタタタタタ、オワツタ！」

「「「……ぶべつら！」「」」

《北斗百裂拳》で雑魚キャラ達を抹殺する。

すると、皐月の前にある人物が現れる。

それは、雅也だった。

ただし、完全に女体化されていた。

皐月やヴィヴィオ達より、とても可憐で美しかった。

そんな雅也を捕まえるのは、「北斗の拳」に登場するケンシロウのライバルであるシンとなったマールだった。

皐月とマールは対峙し、己の覇気を漂わせる。

「「……ハアアアアア！！」「」

皐月とマールはお互いの拳を激しくぶつけ合わせる。

すると、突然地面が割れる。

割れた地面から、ブクブク太ったヴィヴィオが現れる。しかも、うさぎのコスプレを着込んでいた。

ヴィヴィオの姿は、まさに「巨大でぶウサギ」だった。

ヴィヴィオは雅也を取っ捕まえる。

そして、キスをしようとする。

「待て！」

空からシュークリームの被り物を頭に被ったメアリーが飛んでくる。

その姿は、まるで“アンパンマン”だった。

シュークリームとなった二つの乳房を掴んで、

「クリームビーム！！」

と生クリームをヴィヴィオに向けて噴射する。

「ぐおおおおおおお！！」

目に生クリームが入ってしまい、思わず雅也を手離してしまう。

「キャアアアアアア！！」

落ちそうな雅也を臯月が受け止める。

マールはぼろぼろにされ、ヴィヴィオは倒れていく。

「……………雅也……………」

ケンシロウの顔で、伊 静の声はあまりに合わない。

「……………臯月……………」

すると、メアリーが雅也を取り戻そうと、臯月に襲い掛かる瞬間。

「愛ゆえに人は苦しむ！」

ヴィヴィオの腹が割れ、中から「北斗の拳」の聖帝サウザーとなった、ヴィヴィオが現れる。

サウザーの顔で、水橋 おりの声もあまり合わない。

こうして三股の闘いが起きてしまっ。

そして、《完》と表示される。

\*

呪血竜は唾然する。

「いかがでしたか？」

自信持って尋ねる。

「臯月とマーブルは「北斗の拳」のキャラにしたのか？ しかも雅也は美少女？」

「こうすれば、『何で雅也だけましな方なのよ！』『雅也君ズルいよ！』と怒って、容赦なく八つ当たりされます。青いタヌキ先生も大喜びです」

これを聞いた呪血竜は『敵ながら哀れだ』と雅也に同情してしまう。

「あと、聖王を『巨大でぶウサギ』から『聖帝』にした意味は？」

「太ったヴィヴィオちゃんは夜帝竜さんを圧倒してました。漫画ではウサギの着ぐるみを着て恥ずかしい思いをしました。そして、『聖』が付いていましたから、『聖帝』にしました」

「それで、あのキャラバーン（メアリー）の格好は？」

「好物のシュークリームとかけました。おっぱいシュークリームは色っぽいでしょ？」

呆れる呪血竜。

「さて、次は新システム『シスターズパワー』を見せますね」

「シスターズパワー？」

「特有のキャラクターの姉妹にしか出来ない特殊なシステムです」

\*

ファウニル・ローゼとマイアル・ナーゼは手を繋いで、

「プリキュア・メタモルフォーゼ!!!」

と叫ぶと輝き出す。

650

2人は、可愛らしいプリキュアとなった。  
はち切れそうな豊満な胸に、ほっそりなうえにへそを丸出し、パンツが見えそうなミニスカートのプリキュアだった。

\*

呪血竜は鼻血（呪血）を出してしまっ。

「じ、これは？」

「この姉妹は初登場以来、あんまり活躍していないから、今テレビで活躍しているプリキュアにイメチェンさせました。それに、実際のプリキュア達は貧乳ですから、これはこれで新鮮でしょう?」  
プリキュアの写真を見せびらかす。  
特に貧乳を指摘する。

(プリキュア達がこれを聞いたら、怒り狂いますね)

呪血竜は予想する。

「次は……」

\*

次はリマ・ナオ姉妹だった。

リマとナオはくるくると回りながら輝き出す。

リマとナオの服装はセーラー服になっていた。

手に拳銃や刀を持っていた。

そして注目なのが、ポリウームの少ない筈のナオが爆乳となっていた。

\*

呪血竜はまた鼻血（呪血）を出してしまう。

「これは「けんぷファー」をイメージさせました」

「しかし、あの妹はかなりの……」

「慈悲ですよ。貧乳じゃあ、売れません。現実じゃあ残念ですから、せめてゲームの中でも夢を見させてあげなきゃ」

溜め息を吐く。

この時、呪血竜は少しだけナオに同情した。

「次は自信作を見せますね」

\*

次の姉妹は、フェイト・アリシア姉妹である。

2人はセーラー服を着ていた。

立ち止まると、2人は制服のボタンを全部はずし始めた。

制服から愛らしいブラジャーに包まれる豊満な胸が露になる。

ちなみにブラジャーの色は、フェイトは黒でアリシアは白である。

突如四つんばになり、近付いてくる。

だんだんと2人の顔が画面に迫ってくる。

綺麗な金髪で、綺麗で柔らかな白い肌な上に、柔らかな唇の顔。そして、見事な巨乳の谷間で、最強の誘惑のポーズだった。

\*

「いやああああああああ、素敵です!!」

光翔竜は大興奮した。

呪血竜は思い切り鼻血（呪血）を噴射した。

「我ながら良くできた方です！」

思わず画面のフェイトとアリシアに擦り寄る光翔竜。

「め、目をさましなさい！」

鼻血（呪血）を抑えながら、光翔竜を正気に戻す。

「いけないいけない……いかがですか？ 瓜二つの姉妹を「シス×キス」にしてみました」

「本人達に怒られますよ」

「大丈夫です！！ 姉妹仲良くデビューさせていますから！！」

「……そういう問題ですか？」

「さて、次の自信作を見せますね」

\*

なのは（教導官服着服）は突然唸り出す。

なのはの顔と身体はみるみる大きく膨らんでいく。

顔も凶悪になり、巨大な『レイジングハート』を持って、「ドラゴンクエスト？」の最終ボスの“魔神ラプソーン”となってしまうのは。

\*

「どうですか、“三十路魔神豚町なのは”は？」

「……物凄く酷くありません？」

「いいえ、傲慢で高い魔力を持つなのはさんにはぴったりですよ」

呪血竜はなのはを気の毒に思う。

「さて、ひとまずこれぐらいにしますか」

データを保存して、電源を消す。

「これを本気で売る気ですか？」

「あり得ないところを突くのも、戦略の一つですよ」

光翔竜と呪血竜は退室する。

《数時間後》

侵入した絢はパソコンの電源を入れて、ゲームの内容を見ていた。

「む、私はどこにいるのよ」

パソコンを動かして探してみる。

すると、『変貌する予定のキャラクター』というフォルダを見つけ、クリックする。

『変貌する予定のキャラクター』

チンク 筋肉ムキムキ

カービィ 演歌歌手の北 三郎

黒崎一護 からくらのへんてこヒーロー

日番谷冬獅郎 魔法少女

阿散井恋次 影が薄いから特に無し

坂田銀時 股間だけ変貌

八神はやて タヌキ

セイバー 美食家トリコ

縁寿 ギルガメッシュ

七姉妹 サーヴァント

絢 兄の童貞を狙う雌狼

\*

「……………持って帰っちゃえ」

絢はデータを持ち帰り、『新機動六課』に見せたそうなの。

終わり。

最近のゲームは3D化されている。(後書き)

さて、あのゲームを見た優太達は……、

青いタヌキさんに任せます。

問題と回答者が居てこそ、初めてクイズ番組ができる。(前書き)

今回は爆笑とゲストありの話です!

問題と回答者が居てこそ、初めてクイズ番組ができる。

【とある……】

「「「フアアアアアアアアア！」」」

【テレビで放送されるクイズ番組のスタジオのような場所】で、たくさんの竜兵や竜騎士達が客席から歓声をあげていた。

その中に、フレーム、スイレーヌ、サンダナ、シャープも居た。

「いったい何が始まるんだ」

「クイズ番組だろ？」

「いや、何で突然クイズ番組を始めるのかが疑問なのよ」

「また、資金稼ぎの行動では？」

フレーム達は、この状況を理解出来なかった。

「ふっふっふっ、久しぶりだな」

フレーム達は聞き覚えのある声を聞き、視線を向けてみると、

「「「マ、マーシャル!?」「」」

そう、『??機関』総帥だった“マーシャル”だった。

「な、何故、貴様が此処に!？」

「『貴様』とは、ずいぶんなご挨拶だな。いくら組織を代えたとはいえ、前の組織の総帥にそんな態度は無いだろう」

「何故あなたが此処にいるのですか？ あなたは青い死神に、正確には榊原綾華に倒されて捕まった筈では？」

マーシャルは不敵に笑う。

「良からう、説明してやる」

\*

時間を遡って、ことの次第は【留置所】で起きた。

【留置所】内が激しく爆発が起きる。

看守達は大慌てで対応を急ぐ。

そんな看守達の中を潜り抜けていく人物がいた。

「あっ、マーシャル！」

「マーシャルが逃げたぞ！」

そう、マーシャルである。

マーシャルは懐から爆弾を取り出し、投げつける。爆弾は爆発し、看守達は火傷を負って倒れる。

マーシャルは次に壁に目掛けて爆弾を投げる。

壁は粉々に壊れ、マーシャルは通り抜けて逃げる。

\*

森を走り抜けると、魔方阵があった。その魔方阵の隣にある男が立っていた。

白髪と赤いレンズの片眼鏡をかけている白衣の高齢の男だった。

「マーシャル様」

「おおっ、ゲソリアン！」

マーシャルは男を“ゲソリアン”と呼んだ。

「お迎えに参りました。 ささつ、魔法陣に入ってください」  
マーシャルは急いで魔法陣に入ると、ゲソリアンも入る。  
2人は、魔法陣ごと消える。

\*

(その後、私は……………屋台のおでん屋でやけ酒を飲んだ)  
屋台のおでん屋でゲソリアンと酒を飲むマーシャル。

(いや、脱走中に何飲んでいるんだ)  
回想のことでも、思わずつつこむフレイム。

マーシャル

「チキシヨー、青い死神め！」

酒をぐびぐび飲んで、荒れる。

「まあまあ、落ち着いて下さい。 親父、玉子とこんにゃく」

「もう一杯！」

親父は黙々と玉子とこんにゃくを取り、酒を注ぐ。

「せっかく『黒き神』の力を得たと思ったら……………あっさりスぺク

ター2は破壊されるわ、女に負けてしまつわで、もう嫌になちやう  
！」

悔しさのあまり、思わず泣いてしまつ。

「……酒癖が悪いですね」

マーシャルの荒れように啞然する。

「ゲソリアン！」

「はい！」

突然呼ばれて、思わず立ち上がる。

「何故スペクター2は破壊されたのだ？ 開発責任者、説明しろ！」

ゲソリアンはスペクター2の開発責任者であつたので、問い詰め  
る。

「いや、あのような強力な砲撃は予想してませんでした」

「笑つて誤魔化すな！」

「笑つてません！ マーシャル様、落ち着いて下さい！」

怒り狂つるマーシャルに襟元を掴まれながらも、ゲソリアンは必死  
でなだめる。

「こ、これからどうなさるおつもりですか！？」

マーシャルはゲソリアンの一言を聞き、一時止まる。

「……決まっている。青い死神への復讐だ！」  
と宣言する。

「どうやってですか？」

「……何？」

ゲソリアンの問いかけで首を傾げる。

「貴方の敗北によつて、我が『??機関』は事実上壊滅してしまいました。幹部方の大半は『竜の爪』に倒され、生き残った者も『竜の爪』に再就職しました」

「何だと!? 裏切ったのか!? 奴等に忠義心は無いのか!？」

「ぐえ〜!？」

裏切れたことに怒り狂うマーシャルは再びゲソリアンの襟元を掴む。

「か、壊滅は失業と同じです! 新しい職に就くために、そこ「竜の爪」へ入るしか無かつたんですよ!」

マーシャルはゲソリアン突き放す。

「マーシャル様も『竜の爪』に入ります? 組織力は『??機関』



「しかし、よく此処「竜の爪の本部」へたどり着きましたね」

「その辺りはゲソリアンが何とかしてくれた」

「ああっ、あの干からびたスルメか」

サンダナは苦々しく呟く。

「スルメでもないし、干からびておらん！ 正しくはゲソリアンじゃ！」

「わっ！」

サンダナの後ろにゲソリアンがいた。

「相変わらずじゃな、電気ウナギ女が！」

「そっちこそ生きてていやがったなスルメイカの糞爺！」

サンダナとゲソリアンはいがみ合う。

見ての通り、二人はとても仲が悪い。

「まあまあ、ゲソリアン落ち着け。私がメンバーになったら、君を私の片腕として迎えよう。そして、その4人を君の部下にしてやる」

「「「「ええっ!?!」「」「」

フレイム達は驚愕する。

「いや、私は真王竜様の補佐をしている！」

「私は呪血竜様の助手をやっています」

「あたしや、“姉御”こと“夜帝竜”様に仕えているよ！」

「既に決まったところに所属しています」

マーシャルは「ふっ」と笑う。

「そんなの、メンバーの権限を持ってすれば、不可能ではない。楽しみにしたまえ」

マーシャルはその場を離れる。

フレイム達は「どうしよう」と焦る。

「心配ありません」

「呪血竜様！」

いつの間にか、スイレーヌの隣に呪血竜が座っていた。

「あんな傲慢な奴の末路は、大抵決まっていますよ」

フレイム達は呪血竜の言葉に首を傾げる。

〔30分後〕

「色々な世界の皆様、お待たせしました！ これより、『T チャンピオン新メンバー決定戦』を放送します！」

司会者の光翔竜の合図で「「わぁー！」「」と観客は歓喜した。

「T チャンピオン!? T チャンピオンって、言ったよな!？」

「それより、これは放送してるの!？」

フレームとスイレー又は思わずつつこむ。

「この勝負はポイント制です。一番多くポイントをゲットした出場者が優勝です！ 優勝者にはメンバーの地位と副賞として『育成ゲーム「愛しのフェイト様」』をプレゼント！」

光翔竜の持つ『ニンテンドーDS』の画面に、フェイトが映っていた。

《……お父さん、大好き?》

「「はうー!」「」

竜兵達は思わず萌える。

「あのフェイト様を君の手で育成できるゲーム！ 勿論、CVは水樹々様です！」

「「ほ、欲しい……」」

「……ケツ！」

フレームとシャープは欲しがり、スイレーヌとサンダナは軽蔑する。

「それでは、出場者の皆さんのご紹介です！」

「えっ、マーシャルの他に出場者いるの？」

他の出場者という意外な展開に驚くフレーム達。

「まずは、悪いことをしているのに憎めない、“ばいきんまん”くん！」

「はひふへほ〜！ 俺様の凄さを見せつけてやる！」

高々に宣言するばいきんまん。

「続いては、再就職を目指すおじさん“長谷川泰三”さん！」

「ど、どつも……」

長谷川は恥ずかしがる。

「続いては、??機関の総帥だった“マーシャル”さん」

「だったではない、今でもそうなのだ！」

プライド高く否定する。

「特別ゲスト出演、【黒と白の物語〔作：闇夜の不死鳥さん〕】の  
主役“火渡優也”くん！」

「優勝して、家計を救うんだ!!」

決意を露にする。

「そして最後は、謎の挑戦者“ナナ”ちゃんです」

灰色のフードを身に纏った者が黙って出てくる。

「なんだアイツは？」

フレーム達はナナに不信に思う。

しかし、呪血竜は不敵に笑う。

5人の出演者は席に座る。

「まずは知識を試させていただきます。目の前にあるボードに、  
今から出される問題の答えを書いて下さい。正解に近いものであ  
ればあるほど、ポイントが高いです！ぴったり当てたら、最高点  
のポイントをゲットです！」

天井から大画面のモニターが出てくる。

（できるだけぴったりの答えを……しかし、どんな問題が出るんだ

?)

マーシャルは少し不安になる。

「今から、数人のアニメキャラクターが映し出されます。映し出されるキャラクターの共通点を書いて下さい」

大画面のモニターが起動する。

まず映し出されるキャラクターは……

張飛（鈴々）、許緒（季衣）、典偉（流琉）だった。

（なんだ、簡単ではないか）

安心したマーシャルはボードに『恋姫』書く。

「これだ!」

「……1ポイント」

「何!?! なぜだ!?!」

合っている筈なのに、少ないポイントに納得出来なかった。

「合っています……正解は」

大画面のモニターに答えが映される。

『チビツ子だが、怪力』

「これが正解です」

マーシャルは思わず頭をぶつける。

「恋姫」という単純な答えを書く人が多いですね。しかし、我が組織の認識は単純ではありません。細かい点を把握しなければなりません」

光翔竜は当たり前のように説明する。

「何、『生意気ながきんちよ』じゃないのか？」

これがばいきんまんの回答。

「見かけで判断すると痛い目に合いますよ。 3ポイント」

「『可愛い妹系』じゃないのか」

これが長谷川の回答。

「それって、貴方の願望でしょ？ しかし、5ポイント」

「えっ、そうなんだ」

優也は『小学生』と書いて回答する。

「単純ですから、3ポイント！」

ナナはボードを見せる。

『小さいが、力を秘めていそう』

「……正解に近いから、10ポイント！」

観客達は驚く。

「な、納得できん〜！」

最初で躓いてしまい、眉をピクリと動かすマーシャル。

「さて、次の問題です」

次に映し出されたのは……

高町なのは、黄忠（紫苑）、ミレイザ・ラシュエだった。

（単純に強いキャラと書いたら、低いポイントだな。ここは……）

マーシャルは『ベテランの女戦士』と書いた。

「皆さんが書き終えたところで、正解をどうぞ」

『正直、三十路を過ぎているおばさん。いい加減、自分の年齢を誤魔化すのを辞めるべきだよ。いくら若く可愛くぶったて、見ている方が気を使う。本当の事をいった人に、制裁を喰らわせるのは、年齢を誤魔化すより酷い！年齢につれて性格は大人気なくなる可哀想な三十路過ぎのお母さん』

(共通を乗り越して毒舌だよ、それ！)

シャフトしながらつつこむマーシャル。

「ええつ、『家の嫁さん“ハツ”の面影がある』じゃないの？」

(それは‘解答’じゃなくて、‘感想’だよ！)

長谷川にツツコミを入れる。

「ちっ、単純に『おばさん』じゃないか。早く書いたのに」

(そっちは‘速答’かい！)

ばいきんまんにもツツコミを入れる。

「……一瞬、母さんと思って、すぐ『母さん』って書きちゃった」

(……彼は‘感想’と‘速答’を一緒にしたのか)

二連続のツッコミに疲れているせいか、冷静に優也の答えを見て考える。

ナナの書いた答えは……

『いつまでも乙女でありたいと思っている熟女』

「ナナさん10ポイント。 優也くん8ポイント。 長谷川さんとばいきんまんくん5ポイント。 マーシャルさんは3ポイント」

(なんだよ、私だけポイント少ないのか!?)

これにも納得出来ず、マーシャルは齒ぎしりする。

「次は単純に一言でよろしいです」

次に映し出されたのは……

榊原綾華、八神はやて、三郷 雫だった。

(あの女(綾華)か！ そしてあの二人の情報は知っている！ つまり答えは……)

『腹黒女』と書いた。

「さて、答えは……」

『料理上手』と映し出された。

マーシャルはまた頭をぶつける。

(しまった〜…引っ掛けだったか！)

心の中で悔しがる。

因みに他の回答は……、

長谷川は『ハツ(自分の女房)』

ばいきんまんは『ワガママ』

優也は『女王』

ナナは『料理上手』でした。

(自分の女房って、どんだけ奥さんに会いたいの!? 他の2人はともかく、何であいつ(ナナ)だけ見事に当ててるの!?)

他の人達の回答に思わずツッコミを入れるマーシャル。

「ナナちゃん20ポイント。長谷川さん10ポイント。ばいきんまんくと優也くんは8ポイント。マーシャルさんは1ポイントです」

「ちょっと待て！ 何で私だけ1ポイント!? しかもこのおっさん（長谷川）は思い切り間違っているのに、10ポイントなの!?!」  
あまりに不公平な採点に抗議する。

「……あなたの答えは《偏見》が込められ、長谷川さんの答えは《纯粹》が込められています。因みに、ばいきんまんくと優也くんのは《素直》が込められています」

観客達は「うんうん」と頷く。特にスイレーヌとサンダナは満足に頷く。

「ちょっと待て！ 先ほどの問題の答え、あれも明らかに《偏見》が込められているだろ!?!」

「いいえ、《偏見》ではありません！ 作者の《本音》です！」

「いや、よっぽどたちが悪いわ!」

「次は高ポイントが得られる問題です」

「勝手に進めんなよ!」

次に映し出されたのは……………、

秋本優太、久本雅也、クロ・アスタリスクだった。

「この共通点の多い3人の違いは何でしょう?」

今までとは違う問題に観客達も驚く。

(今度は逆か……見た目の違いより内面の違いを狙おう)

マーシャルが書いたのは、『経験の差』だった。

「正解は……クロ・アスタリスクだけ『童貞卒業』です。わか  
りました?」

(わかるか、そんなもん!?)

血管切れそうなほど怒る。

因みに……長谷川は『歳の差』。

ばいきんまんは『身長之差』。

優也『強さ』。

ナナは『恋愛の進み具合』だった。

「長谷川さん3ポイント。ばいきんまんくん2ポイント。優也  
くんとマーシャルさん5ポイント。ナナさん9ポイントです」

(何で、ナナさんだけポイント多いの!?)

あまりにも理不尽な扱いを受け、

ナナだけの優遇に苛立ちを隠せなかった。

「ぷぷつ！ 見たか、あのマーシャルの顔」

「しかも低いポイントばかりだし」

「なんかいい気分ね」

「もう総帥の威厳は無いな」

フレ임達はマーシャルの失態のオンパレードで大爆笑する。

「それは良いとして、あのナナさんって、何者？」

スイレエヌはナナの事を気にする。

「いずれわかりますよ」

「あれ、そういえばゲソリアンは？」

サンダナはゲソリアンがいなくなっていることに気付く。

「……大方検討はついていますよ。それより、次はいよいよ最後ですよ」

「知識の問題はここまで。次はいよいよ実力の問題です。これをクリア出来れば、100ポイント！ 優勝は決まります！」

「オオーツ！！」と観客は熱狂する。

(おい、何、そのクイズ番組のお約束!? つーか、今までの問題は何だったんだ!)

今までの理不尽でいい加減な問題を答えては外れまくったマーシャルにとって、これまでにない怒りを燃やす。

「よっしゃ、逆転だ!」

「俺様、負けないぞ!」

「頭使うより、体力勝負が良いな、やっぱり」

長谷川達はマイペースに逆転ができることを喜ぶ。

(た、確かに、これは逆転できるチャンスだな。 よーし、これで優勝してやる!)

マーシャルは怒るのを止め、優勝することに専念する。

「それでは、実力の問題内容をご説明します!」

突然、辺りが暗くなって、一ヶ所だけライトアップされる。

「ちょっと、私は忙しいのよ」

そこに、“マツコ・ラックス”が箱の上に座っていた。

「このマツコ・デラックスさんが尻に敷いている箱を奪えた人の勝ちです!」

(何で、マツコ・ラックスなんだよ!?)

マツコ・ラックスの登場という、あまりにあり得ない展開にマ  
ーシャルは最大のツッコミを入れる。

「私が水樹奈々さんの歌い終わるまでに取って下さい」

(何でお前の歌が制限時間!? 歌いたいのか!?)

つつこむ間に曲が流れてしまう。

「それでは」

「クソッ、もう自棄だ!」

大鎌を携え、マツコに立ち向かっていく。

「俺達も続け!」

「「おおーっ!」!」

長谷川達も立ち向かっていく。

「もう、うるさいわね」

マツコはじゅんじゅんするぞ。

「「うじやあ!」!」

マーシャルはマツコの顔に目掛けて、大鎌を大振りする。  
マツコの右頬に大きな切り傷ができる。

「……血……俺の血……」

「次は首が跳ぶぞ。大人しくその箱を寄越せ」

大鎌を向けて、脅す。

「…………いてええええええええええよ!!」

マツコの顔は凶変し、雄叫びをあげる。

「へっ?」

「いてええええええよ!!」

マツコは叫びながら大暴れする。  
振り回されたマツコの手は、

「ぶぐっ!?!」

とマーシャルを殴り飛ばす。

「うわあああああ!!」

「逃げる!!」

「こわっ!!」

長谷川達は暴れるマツコから逃げる。

しかし、ナナだけは臆せず歩き出す。

「おい、危ないって！」

長谷川は止めるが、ナナは聞かなかった。

「いてえええええよー!!」

マツコがナナに襲いかかろうとする。

ナナは片足でマツコの腹部に蹴りを入れる。

すかさず目に止まらぬ速さで連続で蹴りを入れ続ける。

マツコの腹が連続蹴りの圧力によりへこんでいく。

長谷川や優也、そしてフレイム達、観客も驚愕する。「は、腹が!?」

マツコ自身も驚愕すると、ナナは手刀でマツコの腹の中心を突き刺す。

「……ひでーぶー!!」

マツコは倒れる。

この隙にナナは箱を手に入れる。

「き、決まった!! ナナさんは100ポイントゲット!! つま  
り、優勝はナナさんだ」

観客達は一斉に拍手する。  
長谷川達も拍手する。

「……優勝しちゃた……」

「……何者なんだ……」

「……スゲー……」

「……っていうか、マツコさん大丈夫なの？……」

ナナの優勝に、フレイム達は啞然してしまう。

「……心配なく。あれは当て身ですので、気絶しているだけです」

呪血竜は説明する。

観客席から離れた場所で、様子を伺うゲソリアン。

「ふん、やはりマーシャルはこの程度か。しかし、よい時間稼ぎにはなったか」

気絶しているマーシャルに毒づき、手に持つディスクを懐に入れて立ち去る。

\*

そして、授与式が始まる。

「ナナさん、箱を開けてみて下さい」

ナナは言われた通りに箱を開ける。

中には、灰色のマントと7つの眼を持つ竜の仮面が入っていた。

「着けて下さい」

ナナは素早く取り付ける。

「早っ！」

あまりの素早さに長谷川達は驚く。

「今日から君は“七魔竜”として、頑張ってください！」

ナナ改め、七魔竜は拍手に包まれる。

こうして新たなメンバーとして七魔竜が着任した。

参加した長谷川、ばいきんまん、優也は聖唱竜の手作りクッキーをもらった。

マツコは頬の傷を治して貰い帰りました。

そしてマーシャルは……、

「待たんかーい！」

「逃がさないわよ！」

「ひいひいひいひい！！！」

あのクイズ番組を観て、怒れるはやてと綾華に追いかけてま  
したとさ。

（おまけ）

「始まりました、「竜の爪通信」！ 司会は『なのはさんの入浴よ  
りフェイトさんの入浴が見たい』光翔竜です！」

盛大に拍手が送られる。

「さて、新たにメンバーに入った“ナナちゃん”こと“七魔竜”さ  
んのご説明をしましょう」

\*

“七魔竜”

CV:?????

〔プロフィール〕

各異世界の『魔法文明』と『魔術』と『機械技術』を合わせて造り出された人造人間。

不可能と思われた『サーヴァント』の力を7つ全てを一つにし、使いこなせる。

つまり、剣術、弓術、槍術、馬術、魔術、暗殺、狂気を扱える。

性格は真王竜や先輩メンバーの言うことに従う。

それ以外は色んなことに興味を抱ける無邪気なところがある。それ故、『ナナちゃん』と呼ばれたりしてる。

【特殊能力：七龍分裂】

特殊な合成魔法で一つにした七体を分裂させる。

《セイバードラゴン》

西洋の剣を持ち、西洋の鎧のような体を持つ。

七魔竜の主体でもある。

《アーチャードラゴン》

二本の剣から弓に組み換えることができる武器を持ち、二刀流と弓術を操る。さらに特殊な矢を何本か持っている。

《ランサードラゴン》  
槍術と加速を扱う。

《ライダードラゴン》  
あらゆる動物を召喚し、同時に操ることができる。

《キャストードラゴン》  
あらゆる魔術と儀式を操ることができる。

《アサシンドラゴン》  
影から影に移動する特殊魔法を備えている。

《バーサーカードラゴン》  
他の6人よりも体格が大きい上に頑丈に出来ている。  
棍棒と鎖付きの鉄球を武器に使う。

「うーん、なかなか良い後輩メンバーですね。そんな“ナナちゃん”をよろしくお願いいたします。最後に問題を残して、さようなら」

《問題》  
高町なのは、セツプクウサギ、マイ・アスタリスク。この3人の  
共通点は？

ご感想で答えを書いて下さい。

終わり

問題と回答者が居てこそ、初めてクイズ番組ができる。(後書き)

【闇の不死鳥】さん、ゲスト出演ありがとうございました！

青いタヌキさん、笑えました？

黒王号に乗れるのは、本当の強者のみである。(前書き)

まずは、ギャグ編から。

黒王号に乗れるのは、本当の強者のみである。

今のところ、何も起きていない《新機動六課》の本部。

「……………ギヤアアアアアア!?」

この叫びで事態が起きた。

【雅也の自室】で、あるものが居た。

「な、なんだこりゃ!?!」

機械でできたオレンジ色の馬が鏡に映った自分を見て、驚いた。

「な、なんで馬に、機械でできた馬になってんだよ!」

実は、この馬は“雅也”である。

雅也は馬になっていたことに驚いていた。

「マスター」

「メアリー、実は」

メアリーの方を向くと、さらに驚愕した。

メアリーではなく戦闘機だった。

「マスター、メアリーです」

戦闘機からメアリーの声がする。

「メアリー！？ 何で、お前は戦闘機になつてんだ！？」

「わかりません。 目覚めたら、こうなっていました」

すると、パカパカと蹄の音が聞こえてくる。

「「雅也<sup>くん</sup>！！」」

突如、機械で出来た二頭の馬が飛び込んでくる。

「うわっ!?!?」

雅也は二頭の馬に突き飛ばされ倒れる。

後からメアリーとは形が違う戦闘機が飛んでくる。

「マスター!」

「いてて」

「ええっ、雅也くんも馬になつてる!?!?」

「そ、その声は……」

「マーブルよ!」

「じゃあ、そっちは……」

「臯月よ！」

「ちなみに私はミニキュリアです」

栗色の馬がマール。 紫色の馬が臯月。 戦闘機はミニキュリアである。

「ど、どうなってんだ!？」

雅也は頭を前足の蹄で押さえる。

「この馬の姿って……魔導騎馬じゃない」

臯月はそう気が付く。

「た、確かに……」

雅也も納得する。

「けど、何で私達が魔導騎馬に？」

「しかし、私とミニキュリアだけは戦闘機ですか？」

5人は頭を捻る。

「お前らもなっていたか」

「……えっ?」「」

声のする方へ振り向いてみると、

「……ギヤアアアアアアアア!」「」

黒い霧を身に纏った骨だけの馬だった。あまりに怖かったので、雅也達は泣くほど驚く。

「俺だよ、“黒崎一護”だよ」

「へっ?」

“黒崎一護”と名乗った骨だけの馬の声を聴いて、

「一護さん!?!」

と納得する。

「一護さんも馬になったんですか! しかも、何で骨だけ!?!」

「それは俺が聞きたいよ」

「……けど、ぴったりですね」

「確かに“死神代行”なだけに、骨だけの馬っていうのもありだな」

皐月の指摘に一護自身も納得している。

「つて、和んでいる場合じゃないですよ！ 原因を考えなければ」

「「「「ああっ！」「」「」」

メアリーの言葉で、重大さを思い出す。

「確かに考えなきゃ！」

雅也達は考える。

「あの“紅火”に聞いてみよう！」

“紅火”とは、優太を主として契約した魔導騎馬である。

雅也達は早速、紅火のところへ行く。

\*

雅也達が廊下を歩いていると、他の人も魔導騎馬となっていた。

「私達以外にも魔導騎馬になっているなんて」

皐月は驚く。

すると、人間姿の坂田銀時とバッタリと出会う。

「あつ、銀さん」

銀時は何故か苛立っていた。

「……どうかしました？……」

雅也は恐る恐る訊ねる。

「この騒動の原因に心当たりあるか？」

「お、おそらく、優太さんと魔導騎馬の紅火かと……」

「やっぱりな。そうか、あいつらが原因か」

「あ、貴方は馬にならなかったみたいですね」

「……俺は、馬になるよりも屈辱的な目にあっただよ……」

銀時の言葉に理解できない雅也達は首を傾げる。

「最初、この騒動に驚いた俺は、とりあえず便所に用を足しに行ったらよ。……俺自身がもつと驚いたことになっていた」

雅也達は銀時の経緯を聞き、推理する。

魔導騎馬騒動 銀さんは驚く 銀さん、とりあえず便所に 用を  
足そうとした時 自身の異変に気づいた。

「……ま、まさか……」

雅也は銀時の股間を見つめる。

「……出したら機械化されたジョイスティックが飛び出たよ。しかも馬並みの」

額に青筋を立てながら銀時は呟く。

雅也と一護は啞然、皐月とマールとメアリーは赤面する。

「なあ、あいつ（優太）は青い死神だからよ、いっぺん殺しても、罪にならないよね？」

銀時は本気だった。

「ぎ、銀さん、お、落ち着いて！」

雅也が銀時を落ち着かせると、

「雅也くーん！」

向こうから、人間のままのヴィヴィオと水蓮竜（素顔）とフェイトが走ってくる。

「あれ、ヴィヴィオと水蓮竜ちゃんとフェイトさんは人間のままだ？」

雅也達は驚く。

「やっぱり雅也くんだよな？」

「よ、よくわかった？」

「うん、その聞き覚えのある声と見事なツツコミを見て」

「なるほど……って、何で3人だけ無事なんですか!？」

乗りツツコミをする皐月。

「わからないわ。 起きたら、私達以外は魔導騎馬になっていたから」

「……もしかして……」

水蓮竜は考える。

「心当たりがあるの?」

「これのおかげかも」

紅い宝石と蒼い宝石のペンダントを見せる。

「これはお父さんとお母さんがくれた御守りなの。 これが魔導騎馬になる異変から守ってくれたのかも」

「そうか、そのペンダントのおかげで、そばにいた私とフェイトママも魔導騎馬にならなかったのか」

「凄い御守りだね。 多分、それも“ロストロギア”かもしれない」

ヴィヴィオとフェイトは納得する。

「ちょっと待て。 何で2人は水蓮竜と寝てたんだ」

一護は、そこを疑問に思っていた。

「「……水蓮竜ちゃんが可愛いから」

揃って答える。

雅也達はこそこそと話す。

「可愛いからって、理由になってないよな」

「ヴィヴィオは天然に純粹だから、まだわかるけど……」

「フェイトさんの場合は……あれだよな」

「あれって？」

マーブルは「あれ」を知らない。

「真性の《シヨタコン・ロリコン》だよ」

そう言った銀時の股間に、黄色い魔力の刃が突き付けられる。

それは、バルデッシュを展開させたフェイトだった。 しかも、カオスに入っていた。

「……切り落とそうか？……」

「勘弁して下さい！！ 砲台に変えられても、大事な男の証なんですー！！」

即座に土下座して許しを乞おう銀時。

そばにいる雅也達はフェイト（カオス状態）に恐怖する。

「そうか……フェイトちゃんとヴィヴィオは……無事だったんだ……」

不意になのはの声が聞こえる。

「えっ、なのはママもお馬さんに」

なのはの方に振り向いた時、全員は絶句した。

それは、機械でできた馬ではなく、機械でできた豚だった。

「……なのはママ？」

ヴィヴィオは恐る恐る訊ねる。

「……にはははは」

そう、なのはだった。

「……まさか、本当の豚になるなんて、思わなかった……っっていうか、何で私だけ豚なのかな？ この騒動引き起こした優太さんにぶつけてもいいよね？ 主役だから、殺しても死にはしないよね？」

なのははフェイト以上のカオスに入っていた。

「いいね。一緒にやるっぜ」

「にはははは、八つ裂きなの！」

恐怖から復活した銀時はなのはと意気投合する。

そして雅也達は恐怖するのだった。

\*

んぞ。

「「ごらっ！！ このお騒がせ」

と怒鳴り込むのはと銀魂だったが。

「「えっ？」「

と急に啞然した。

紅火と蒼い魔導騎馬と、二本の角の兜を被った大男が立っていたからだ。

あとからやって来た雅也達も啞然した。

「ラオウ」

と思わず呟くメアリー。

「いや、よく来たね」

蒼い魔導騎馬は、優太だった。

「おい、てめー、こりゃあどついつことなんだよ?」

「説明するなの」

我に返ったなのはと銀時は優太を問い詰める。

『私が説明します』

紅火は止めに入ってから、経緯を語り出す。

優太は紅火のヒューマン化のために、魔導騎馬の構造を調べようと紅火の分解をしようとした。胴体の装甲を外した瞬間、突如紅火が輝き出した。

「なんだ」と優太が驚くと、輝きの中からあの大男が現れる。

「……貴様か? 魔導騎馬に細工を施そうとしたのは?」

「は、はい……」

あまりの迫力に少し驚く優太。

「何の細工を施すつもりだ？」

「に、人間にしようと思いました」

「……愚か者めえ！！」

「ひい！？」

大男は怒鳴る。

「馬に生まれたからには、馬として生きなければならん！ それを己の勝手で形を変えろとは……それは相手の生きる道を打ち砕く所業である」

「お、大袈裟な……」

「馬には馬のよさがある！ 馬の気持ちを教えてやろう。 ……キ  
エエエエエエエエエエ！！」

大男は雄叫びと共に拳を上にかざすと、輝き出す。その輝きは新機動六課をも包み込んだ。

\*

「とまあ、こんな具合で」

「結局、お前が原因かよ!!」

怒りのなのはと銀時は優太をボコボコにする。

「おじさんは誰？」

水蓮竜は大男に名を訊く。

「世紀末覇者ラオウです」

メアリーが教える。

「違う！ 魔導騎馬の防衛システム“キバオウ”だ！」

訂正させて、堂々と名乗る。

「あの、何で俺たちまで魔導騎馬にしたの？」

恐れながらも、キバオウに問い出す。

「馬の気持ちを理解するためだ！」

「いや、私達は関係無いんですけど！」

理解し難い理由に皐月はツツコム。

「それより、何で俺は股間だけなんだよ!？」

「何で私は豚なのよ!？」

なのはと銀時は額に青筋をたてながら問いたです。 因みに、優太はポコポコになっていた。

「貴様のは、軟弱モノだから強硬にした」

「軟弱だと!? 俺のジョイスティックを舐めんな!」

銀時は腰を振りながら怒り出す。

「いや、腰を振らないでよ」

マーブルは赤面しながらツツコム。

「そして、傲慢な上に欲張りな貴様は豚に相應しいわ!」

「あっ、なるほど」

一護は納得すると。

「スターライトブレイカーMAX!!」

「ギヤアアアアアアア!」

ぶちギレたなのが、一護に向けて、鼻から スターライトブレイカーMAX を発射した。

一護は遠く彼方へ吹き飛んだ。

雅也達は物凄く恐怖する。

「それで……」

「何で私達は戦闘機なんですか？」

メアリーとミニキュリアは自分達の姿について訊ねる。

「あんな軟弱では、すぐに撃墜されるわ！」

また理解し難い理由を言うキバオウ。

「だからって、戦闘機にしないでくださいよ！」

「可愛くないし」

小さな少女には戦闘機はご不満だった。

「だから元に戻せ！」

キバオウに嘆願する。

「……ふっふっふっ」

キバオウは兜を脱ぐ。

「ならば、このキバオウに膝を付かせれば、元に戻してやろう！」

キバオウは闘気を身に纏う。

「って、闘う気かよ!？」

愕然する雅也達。

「スターライトブレイカーMAX!!」

すかさず、なのはが『スターライトブレイカーMAX』を撃つ。

「つて、いきなり!?!」

雅也達は更に愕然するが。

「ハアアアアアアア!!」

キバオウが『スターライトブレイカーMAX』を拳一つで粉碎した。

これには、撃つたなのはも雅也達も驚愕した。

『キバオウは魔導騎馬を守る為に、世紀末覇者ラオウのデータを元に造られました』

と紅火が説明する。

「それを早く言え!!　つーか、何でラオウ!?!」

『黒王という馬に乗ってましたから』

「馬繫がりかよ!?!」

あり得ない理由で啞然する雅也達。

「怒り任せの拳なんぞ、我には効かんわ!　次は誰だ?」

「私達だ！」

メアリーが名乗りを挙げる。

「つて、ちょっと待て。 私達つて？」

雅也は訊ねる。

「マスター、ユニゾンしましょう」

「えっ、お前は戦闘機で、俺は魔導騎馬なんだけど」

「やってみなきゃ、わかりません」

雅也は考える。

「わかった」

雅也は決意する。

「「ユニゾン！」」

雅也の背中は装甲を開き、メアリーは変形して、合体した。

「凄い！」

「雅也君、カッコいい！」

ヴィヴィオとマーブルは合体した雅也に絶賛する。

「行くぜ！」

雅也はキバオウに向かって突撃するが。

「てりゃー！」

あっさり吹き飛ばされる。

「……吹き飛ばされてもカッコいい！」

「って、無理に言うな」

マーブルの苦し紛れの応援に臯月はツッコム。

「次は誰だ！？」

キバオウは待ちかねる。

銀時達はどう出るべきか考える。そんな中、水蓮竜はヴィヴィオに耳打ちする。ヴィヴィオは赤面するが承諾する。

「次は誰だ」

「私よ！」

ヴィヴィオが名乗りを挙げる。

「ヴィヴィオ駄目よ！」

フェイトは止める。

「大丈夫。秘策がある！」

ヴィヴィオはそう言いながら、立ち向かう。

ヴィヴィオとキバオウは対峙する。

「娘、勝つ見込みがあると思うか？」

「ううん、膝を付かせればいいんだよね」

「そうだ」

「それじゃ！……とお！」

「ぬおおおおおおお！！」

ヴィヴィオは長い棒でキバオウの股間を叩いた。キバオウはあまりの痛さに膝を付く。

この光景を見た男性陣（銀時だけ）は恐怖し、女性陣は赤面する。

「やった！」

水蓮竜は喜ぶ。

「ヴィヴィオちゃん、なんて攻撃するの」

銀時は恐る恐る訊ねる。

「大丈夫。黒神先生の許可は取ってるから」

「いや、そういう問題じゃなくて……何で、あんな攻撃を」

「だって、「どんなに体を鍛えても、キタマだけは柔らかい。そこを狙え」って、お母さんが言ってたから」

水蓮竜が代わりに説明する。

「お母さん、何教えているの!？」

思わず叫ぶ銀時だった。

「膝を付いたね。さっ、約束を守って」

痛がるキバオウはなんとか立ち上がる。

「……わ、わかった……」

泣く泣く承諾する。

「あと、紅火の人間化を許して」

「そ、それは」

断ろうとするが、キバオウの股間になのはの鼻が突き突かれる。

「……ここなら避けられないよね? 従わないと、キタマを吹き

飛ばすよ  
「

黒く笑うなのは。

「……わかった……」

恐怖したキバオウはこれも承諾する。

紅火は思った。

『あのキバオウに膝を付かせた。あの少女はもしかや……世紀末の救世主!!』

と思った。

「いや、反則技使ったんですけど」

皇月はすかさずツッコム。

こうして、魔導騎馬に変えられた人々は元の人間に戻り、紅火の人間化の研究が再開された。そしてキバオウは新機動六課に居座った。

終わり

黒王号に乗れるのは、本当の強者のみである。(後書き)

黒神先生、ご許可ありがとうございました。

過去編 memory(前書き)

次は、聖唱竜の悲しい話です。

## 過去編 memory

美しく整理整頓ができている洋室。真っ白な壁には、十字架の絵が飾られていた。

そんな部屋に、“聖唱竜”が入る。彼女はそのまま被っていた竜の仮面を外す。

水色の長髪で、金色の瞳で、美しい素顔だった。

そして、ここは聖唱竜の自室である。

聖唱竜は椅子に腰掛け、机に置いてある数枚の写真立てを、懐かしく見ていた。

特に、若き日の自分と、小さな男の子とのツーショットである。

「フォロン君」

男の子を“フォロン”と呼ぶ。

《神曲奏界ポリフォニカS》のタタラ・フォロンである。

「失礼します」

聖唱竜の副官であり、契約精霊でもあるレイラが部屋に入る。

「ああっ、レイラ」

「聖唱」

名前を呼び掛けるレイラを聖唱竜は止める。

「二人で居るときは、本名で呼ぶことと、敬語は止しなさいって、約束でしょ？」

聖唱竜の言葉に、レイラは「はっ」と思い出す。

「……そうだったな、“シャロン”」

は、聖唱竜のことを、“シャロン”と呼び直す。

「それで、何か？」

「あの“喰樹竜”のことだ。……何故、葬式を挙げようとした？」

「何故って、仲間でしょう？」

「ハッー。 奴に「仲間意識」は、まったく無い」

レイラは溜め息を付き、を諭すように話し出す。

「奴は、《竜の爪》の全てのメンバーを欺き、ロストログアを横取りしていた。それ以前に、メンバーに対しても、傲慢な態度をとっていた」

「……横取りは許しがたいことだけだが、態度は仕方がないと思う

わ。個人個人の性格はそれぞれ違うでしょ？」

「確かにそうなんだが、それでも」

「甘い！ でしょ？」

先に言われてしまい、少し唾然するレイラ。

「自覚しているのか？」

呆れつつ尋ねる。

「あっはっはっはっ、もちろんよ」

無邪気に笑って返事をする。

「……“ミミ”も笑うかしらね」

「ああっ、ミミも笑う」

2人はもう1つの写真立てを見る。

それは、若き日のシャロン（聖唱竜）と、《新機動六課》にいる  
マーブルにそっくりな少女と一緒に写っている写真だった。

「……ミミ……」

少女を“ミミ”と呟き、過去を思い出していく。

【過去：神曲奏界ポリフォニカS】

とある町外れに、政府軍 が野営していた。

《政府軍》は、テロリスト《嘆きの異邦人》を鎮圧するために派遣されていた。

《政府軍》の軍服を着用した少女が医務箱を持って走る。

栗色の長い髪を黄色いリボンで束ねていた。

彼女の名は“カガミ・ミミール”。愛称は“ミミ”と呼ばれている。

「そろそろ終わる頃かな」

彼女の向かう先は……。

\*

「よし、そこまでだ！」

甲冑を着込んだレイラがグレートソードを杖がわりにしながら、終わりを告げる。

それは鍛練の指導であった。その鍛練をしていたのは、

「はあー、はあー……」

へトへトで傷だらけで地に這いつくばっていたのは、若き日の聖  
唱竜ことシャロンだった。

彼女も《政府軍》の軍服を着用していた。

「ちょっとやり過ぎでは？」

若い軍人がレイラに意見すると、

「死なぬ程度加減している。それに、この程度は怪我のうちに入  
らぬ」

と意見を突き返すレイラ。

「は、はっ」

「大丈夫です。休めば平気です」

「シャロンさん！」

ミミが駆け寄る。

「それに優しい先輩がいるから」

自分より年下のミミを『先輩』と呼ぶ。

\*

ミミはシャロンの手当てを施す。

「ありがとうございます」

「あとう、敬語は止してください」

ミミは恥ずかしくなる。

「だって、貴女は私より階級が上で、事実上の先輩ですよ」

「確かにそうですけど……」

ミミは困って頭を掻く。

聖唱竜ことシャロンの本名は“シロガネ・シャロン”

彼女の階級は伍長で、ミミの階級は軍曹である。

しかも、シャロンは入隊仕立てである。

「シャロンさんは、私より年上なんです。年上の人に対して、偉そうにできませんよ」

確かに正論である。

「あっはっはっはっ、そうですね」

「ミミはしばらく考えて、

「それじゃ、二人の時だけはタメ口を許します！　これは命令です  
「！」

とシャロンに命令を下す。

しばらく呆気を取られ、少し笑う。

「わかりました。　それじゃ、そうしましょうね、ミミ」

「はい！」

こうして、互いの秘密が成立する。

「それにしても、レイラさんって、厳しすぎますよね。　こんなに  
シャロンさんに怪我させるから」

「仕方がないわ。　私はこの軍隊に入る前は、ただの孤児院の修道  
女。　厳しい戦場で生きていくためにはそれに応用や対応できるよ  
うにならなきゃいけないから」

「……そんなシャロンさんが軍隊に入れたのは……」

「神曲楽士「ダンティスト」しての、高い素質よ」

そう呟いたシャロンは落ち込み始める。

\*

シャロンは元々孤児院で子供達の面倒を見る修道女。孤児院の子供達にとってもなつかれていた。特にフォロンはよく甘えていた。シャロンもフォロンを本当の弟のように可愛がっていた。

しかし、幸せは長くは続かなかった。

シャロンの神曲楽士としての高い素質と力量に目をつけた政府は、強制的に彼女を入隊させた。

シャロン本人はもちろん抵抗した。しかし、孤児院の援助を打ち切るといふ脅しに屈して、入隊せざる終えなかった。

その後も戦場で活躍出来なければ、援助を打ち切るといふ条件を付けられる。

これが彼女が此処にいる理由である。

\*

シャロンは、フォロンと写った写真を哀しく見る。

この事は、ミミも知っていた。だからシャロンに同情共に気遣っている。

「あゝあつ、早く《嘆きの異邦人》達を鎮圧させて、孤児院に戻りたいな」

「そ、そうですね……」

何故か、ミミの表情は暗くなる。

「ミミ？」

「……あつ、そつだ！」

突然、ミミは立ち上がる。

「どうかしたの？」

「実は人形劇場が此処へ来ているんですよ！ この町の子供達や私達軍人にも無料で見せてくれるらしいんですよ！ 観に行きましょうー！」

「えっ、でも……」

「今日の鍛練は終わっている」

「「わっ！」「」

戸惑うシャロンと誘うミミの間にレイラがいつの間にか割って入っていた。

当然、2人は驚く。

「だから、観に行っても構わん」

「……わかりました」

シャロンはミミと共に人形劇場を観に行く。

\*

「ようこそ、お越しくささいました!」

黒鎌竜が司会のようなことを務めていた。

子供達は黒鎌竜の姿を見て、怯える。特に大鎌を見て。

シャロンとミミはそんな子供達に「大丈夫よ」と言い聞かせ、一緒に座りながら鑑賞する。

他の軍人達は立って鑑賞する。

「変わった衣装だな」

何故かレイラも来ていて、木の影に立って鑑賞するが、黒鎌竜を不審に思う。

「おいおい、なんだアイツ？」

「人形より目立ちそうだな」

軍人達も黒鎌竜を不審に思う。

「私のことは気にせず、人形劇場の始まり始まり」

子供達は拍手する。

人形劇場へ博士とカバ

頭のとっぺんがはげている博士は装置パペットなものを造っていた。

「ぐっふっふっ、遂に完成したぞ。　　おい、カバ君」

「あんだよ、糞爺！」

ふてぶてしいカバ（パペット）がピザを持って、やって来る。

「君、助手の癖に呼び捨てかよー！」

「うっせーな、何か用かよ？」

「手伝ってくれぬか？」

「今、喰うことに忙しいんだよ」

カバはピザを一口で食べる。

「この大食いカバが。お前の食費で家は貧乏なんだよ！悪いと思わねえのか？」

「……悪かった。ビンボーダンスを踊るからよ、許してくれ」

カバは「うつつ、ビンボー！」といいながらでかい腹を揺らしながら踊る。

「……ビンボーとマンボーをかけてんじやあねよ。しかし、もう貧乏からおさらばできる装置を完成したぞ！」

「おう、どんな装置だ？」

「これだよ！」

造っていた装置を見せ付ける。

「果物を入れれば、飴玉に変わる。その名も「飴飴製造君」！」

「ぱっとしねえ名前だな、おい」

「名前より性能が凄いだよ。試しにそこにある果物を」

カバはすかさず果物を一気に口に入れて、むしゃむしゃと食べてしまう。

「お前が喰ってどうすんだよ」

「腹が減ったんだよ」

「ピザ喰ったくせに何が腹が減ったんだよ！ ああっ、買ってこよう」

博士は果物を買に行ってくる。

すると、カバはどこからか、別の果物を取り出す。

「へへっ、別の果物を隠してあったもんね。 飴玉喰いてえ」

カバは一気に装置の入り口に果物を入れて、スイッチを押す。そして、装置は動き出す。

「よし、今度こそ、実験を」

帰ってきた博士は装置が動いていることに驚く。特に、入り口に入ったたくさんの果物に焦る。

「おい、そんなに果物を入れると」

装置の出口から、たくさんの飴玉が出てくる。

「いただきます！」

「このカバ野郎！ じゃなかった、バカ野郎！」

博士は怒り出すのだった。

\*

子供達は大笑いする。 軍人達も大笑いする。 もちろんシャロ  
ンとミミも大笑いする。

「どうも、ありがとう」

すると、劇場から2つのパペットを操っていた人が出てくる。

操っていたのは、素顔の真王竜だった。

「あっ……」

シャロンは真王竜の顔を見て、顔を赤くする。

この時、シャロンは真王竜に見惚れる。

ミミはシャロンの様子を見て、何故赤くなるのかと、首を傾げる。

真王竜と黒鎌竜は、劇場で使った飴玉を子供達に配る。

「……あの2人、ただらぬ力を感じる」

レイラは2人から感じる力を感じ取り、鋭く観察する。

\*

夕食時。 政府軍はシャロンの手作りのシチューを食べる。

「美味しい！」

「暖まる」

「シャロンさんは、神曲楽士の腕前だけじゃなく、料理の腕前も見事ですな」

「ありがとうございます」

皆に誉められ、シャロンは喜ぶ。

「本当に美味しい。一緒にさせてありがとうございます」

真王竜もシチューを食べる。

「とても面白い人形劇場を見せてくれたお礼です。遠慮なく食べて下さい」

真王竜は人形劇場を見せたお礼に夕食をご馳走になっていた。

「お連れの方も、ご馳走になれば良かったのに」

「彼には待ち合わせの約束がありますから」

黒鎌竜は都合により、夕食に参加出来なかった。

「シャロンさん、神曲楽士でもあるんですか？」

「はい」

「聴いてみたいですね。神曲楽士は素晴らしい曲を奏でて精霊に力を与える。貴女の精霊は……」

離れて食べるレイラを見て、

「彼女ですね？」

と言い当てる。

これには、本人だけではなく、シャロンや他の軍人達も驚く。

「何故、わかつたんですか？」

シャロンは驚きながら訊ねる。

「……彼女は他の方々とは違う雰囲気漂っている上に、不思議な力を感じたから」

「……そちらも神曲楽士か？」

レイラは鋭い視線で、真王竜に問い掛ける。

「違う。俺は……侍だ」

「侍？」

この答に、レイラは真王竜に疑いの目を向けるが、

「……そういうことにおこつ……」

ひとまず承諾する。

シャロンは真王竜を『不思議な人だな』と思いながら、じっと見つめるのだった。

\*

夕食に参加しなかった黒鎌竜は、人気の無い離れた場所で、怪しい人物達と密談していた。

それは、帽子とコートで変装していた竜兵達である。

「間違いないか？」

「はい、《嘆きの異邦人》が例のモノを厳重に保管しているらしいです」

「……そうか、「魔神器」が……」

黒鎌竜は少し困った顔になる。

「魔神器」とは、闇の精霊を造り出し、操れる伝説の楽器である。しかし、並みの神曲楽士が使えば命を奪われるという禁忌の楽器でもある。

そして、「闇の精霊」とは、闇の力で生み出された精霊。闇の精霊は人間を洗脳して曲を奏でさせて力を得る。

「《嘆きの異邦人》は、目的の為なら仲間を犠牲にすることも問わないからな。いつ使うかわからない。だから、《嘆きの異邦人》を捕まえて、「魔神器」の在りかを吐かせろ！」

「……はっ！」「」

竜兵達はすぐに探しに行ってくる。

「……そんな「魔神器」を手に入れようとする《竜の爪》も、どうかしてるがな」

呆れながら自答する黒鎌竜だった。

\*

夜中、野宮から離れた距離でシャロンとレイラが散歩する。  
2人は真王竜のことを考えていた。

「……この気持ち、なんだか久しぶりね」

「どんな気持ちだ？」

「あの人を思っている、なんだか苦しいの」

「……もしや、それは」

レイラが言いかけると、音楽が聴こえてくる。少し悲しい音楽だった。

「……この曲は……」

2人は曲の流れるところへ行ってみる。

野宮からさらに離れた距離で、鍵盤楽器型の単身楽団「ワンマンオーケストラ」を展開させて、音楽を奏でていた人物がいた。

それはミニだった。

「ふーっ……」

一息つくくと、

「悪くはないわね」

「所々ミスがあるがな」

シャロンとレイラはミミの音楽を評価する。

「シャ、シャロンさん！ レイラさん！」

突然現れたシャロンとレイラに驚くミミ。

「その単身楽団、どこで手に入れた？」

「じ、これは、母の形見です」

「……貴女のお母さん神曲楽士なの？」

「はい、名もない神曲楽士でした」

「そうなの」

シャロンとレイラとミミは座りながら話をする。

「……貴女の奏でていた音楽は……悲しみしか伝わらなかったわ」

少し戸惑いながらも感想を述べるシャロン。

「そうですか？」

「……嫌なことでもあったのか？」

レイラは問い掛けると、ミミは黙ってしまふ。

「無理に言わなくても良い」

「……はい……」

しばらく沈黙した後、シャロンが口を開く。

「貴女は神曲楽士になりたいの？」

「はい」

「理由は？」

「幼い弟2人を養いたいからです」

シャロンは一瞬、フォロンのことを思い出す。

そして、突然、ミミの単身楽団を担ぐ。

「シャロンさん？」

「良いから聴いて」

シャロンは静かに鍵盤を弾く。

シャロンの奏でる音楽はとても綺麗で優しかった。

この時、ミミの心は温かくなる。レイラの心も満足する。

シャロンの音楽は終わる。

「貴女はどんな神曲楽士になりたい？」

「えっ……」

シャロンの問い掛けに答えることができないミミ。

「2人の弟を養いたいという理由はわかるわ。けど、神曲楽士が奏するのは、聴く者がいるからよ」

「えっ、えっ？」

「分かりやすく言えば、誰かを想って奏でて初めて良い音楽を聴かせられるわ。神曲楽士に一番大事なのは……聴かせたい人を思いやってあげること。これを大事にすれば、きっと2人の弟の為になるわ」

ミミはハッと思い出す。

「……お母さんも私や弟達の為に鍵盤を弾いてくれた時、とても優しく温かかった」

「それは、愛する貴女達を想って奏でてくれたのよ」

ミミは涙を流す。

「わ、私……」

すると、シャロンは優しくミミの頭を撫でる。

「……悲しい気持ちは悲しみの音楽を。優しい気持ちは優しさの音楽を奏でるわ。どんな音楽を奏でるのは貴女次第よ」

シャロンは手を離す。

「ゆっくりで良いから、貴女なりの神曲楽士を目指してね」

シャロンとレイラは立ち去ると、すると、

「あ、あのう！」

ミミは2人を呼び止める。

「良かったら、私に鍵盤楽器を教えてください」

「……喜んで……」

「だが、厳しいぞ」

シャロンとレイラは今度こそ立ち去る。

そして、ミミは悲しく2人を見送る。

\*

戦場では、《政府軍》と《嘆きの異邦人》が戦う。

シャロンは神曲を奏でながらレイラに力を与える。

神曲の力を得たレイラは銀翼を羽ばたかせ、グレートソードを掲げる。

レイラの周りにたくさんの竜巻が発生させ、その竜巻を《嘆きの異邦人》達にぶつけて、吹き飛ばしていく。

地に駆け抜ける時も凄まじく強かった。

レイラのグレートソードは、敵の精霊を《嘆きの異邦人》ごと叩き斬る。その際に、神曲楽士の返り血を浴びるレイラ。

もちろん《嘆きの異邦人》達はシャロンにも攻撃を仕掛ける。

しかし、シャロンは単身楽団を担いでいるにも関わらず、敵の精霊の攻撃を避け続ける。

その間にレイラはすぐさま駆け付け、敵の精霊を葬り去る。

そして、残った《嘆きの異邦人》は命乞いをするも、シャロンは冷徹に鍵盤を弾くと、レイラは叩き斬る。

「半端な覚悟で、戦場に立つな」

レイラは冷徹に捨て台詞を吐き。

「……………ごめんなさい……………」

哀しみの表情で謝罪する。

「ミミはそんな2人を悲しく見る。」

遠くから真王竜と黒鎌竜が戦場の様子を窺うのだった。

\*

「おのれ、あの女楽士と精霊め！」

《嘆きの異邦人》の数人は、シャロンとレイラに苛立っていた。

「奴らを殺さなければ、我々に勝利無い！」

「しかし、まともなやりあつのは無謀だ。 どうする？」

「そんなの、策略を張り巡らせば」

「策略だけでは駄目だ」

リーダー格がたしなめる。

「奴らの神曲の力はかなり強力だ。 いざというときに神曲を發揮させれば策略など打ち破られる」

「なら、どうすれば？」

「……あれを使おう」

すると、リーダー格があることを提案する。

「あれって、まさか！」

「そう、「魔神器」を使おう」

「ちょっと待て！ あれは使う者の命を奪うんだぞ！ 一体誰が使  
うんだ」

「……《政府軍》にいる、我が子、に奴らをおびき寄せて、使わせ  
る」

この提案に他の者達は言葉を失う。

「自分の命を、この父の為に使えば本望だ」

不敵に笑うのだった。

\*

街角で、竜兵達の報告を聞いて、黒鎌竜は頭を悩ます。 報告内  
容はもちろん「魔神器」である。

「見つからない限り、本部には戻れそうに無いな」

すると、1人の男の子が走ってくる。男の子は黒鎌竜にぶつか

る。  
「お、どうした？」

よく見れば、傷だらけだった。

「た、助けて」

「へっ？」

「お姉ちゃんを助けて！」

「おいおい、坊主。何を勝手」

文句を言おうとする竜兵を黒鎌竜は止める。

「……………何があった」

\*

野営からかなり離れた場所にシャロンとレイラと他の軍人達がい  
た。

「……ここで禁断の楽器「魔神器」を使うのね」

「《嘆きの異邦人》どもめ、遂にやけを起こしたな」

「良いか、絶対に奴らに「魔神器」を使わせるな！ 使おうとしたら即  
」

隊長が指示を言いかけると、黒い矢に胸を貫かれる。

「隊長！」

シャロンは叫ぶが、隊長は絶命する。

「ぐわっあああ！！」

地中から巨大な黒いミミズが軍人の1人を喰い殺す。  
これを見た他の軍人達は混乱する。

「落ち着け！ 態勢を乱すな！」

レイラは軍人達に指示を下すが、空から無数の黒い矢が降り、軍人達を串刺しにしていく。

「レイラ！」

シャロンはすぐに単身楽団を展開させて神曲を奏でようとする。  
レイラも神曲の力を使おうとするが、

「ぐおっ！」

「はっ！？」

黒い甲冑を着こんだ騎士がランス（槍）でレイラに襲い掛かる。

レイラはすかさずグレートソードで防ぐ。

「くっ!」

レイラは黒い騎士に押される。

「レイラ!」

急いで神曲を奏でようとする。

「させるか!」

突然の声とともに黒いミミズがシャロンに襲い掛かる。

シャロンは素早い反応を活かしながら避ける。しかし、黒いミミズの動きも素早いので、奏でる隙がなかった。

そして、残りの軍人達は全て黒い矢に刺さって全滅した。

「み、皆!」

この光景を見たシャロンは一瞬、動きを鈍らせてしまう。

そして、黒いミミズの尻尾を受けて、吹き飛ばす。

「シャロン!」

レイラは助けに行けず、叫ぶ。

「くっ!」

「動くな！」

「あう！」

シャロンは頭を踏みつけられる。

踏みつけているのは、《嘆きの異邦人》のリーダー格だった。

「《嘆きの異邦人》！」

レイラは睨み付ける。

「如何かな、闇の精霊達は？」

シャロンとレイラは驚愕する。

「まさか、「魔神器」を使ったのか？」

「その通りだ」

他の《嘆きの異邦人》も現れ、リーダー格の隣に、黒い弓矢を持った黒い鳥人が降りてくる。

「素晴らしい、流石は闇の精霊だ」

リーダー格は闇の精霊に絶賛する。

「だ、誰が「魔神器」を……」

「私の娘だ」

シャロンとレイラはさらに驚愕する。

「じ、自分の娘に使わせたの！！？」

「そつだ」

「「魔神器」は使う者の命を奪うものよ！ それを承知で、娘に使わせたの！？」

「親の為なら、本望だろう？ ミミール」

シャロンとレイラは我が耳を疑った。しかし……。

「魔神器」を展開させ、担ぐミミがやって来た。

シャロンとレイラは絶望した。

「このミミールは、貴女方《政府軍》の内面を探るためにあらかじめ送り込んだのですよ。 今回の情報も、彼女に流させました」

「ミミ！ この事を知っていたのか！？ 答えろ！！」

レイラがいくら叫んでもミミは反応しなかった。

「無駄です。 洗脳しておりますから」

シャロンとレイラはリーダー格を睨み付ける。

「あなた、それでも親ですか!？」

「私の子だ。　どうしようと私の勝手だ」

この時、シャロンは生まれて初めての憎悪を宿した。

すると、リーダー格はシャロンの頭から足を退ける。

「おしゃべりはそこまでだ。　多くの同胞を殺めた罪を悔い改めるがよい!」

黒いミミズは倒れるシャロンを食べようとした次の瞬間。

「きしゃあ」

黒いミミズは斬り刻まれる。

シャロンとレイラに《嘆きの異邦人》は驚愕した。

「いけないな。　女性に乱暴は」

メンバーの衣装を着込んだ真王竜が降り立つ。

両手に剣を持っていた。

シャロンとレイラに《嘆きの異邦人》達はさらに驚愕する。

「な、何者だ!？」

「《竜の爪》メンバーの1人、真王竜。　貴様ら《嘆きの異邦人》より格上の悪人だ」

「ふざけるな！ 殺れ！」

黒い鳥人は真王竜に向けて、矢を放つ。

しかし、真王竜は剣で叩き落とす。

今度は連射で放つが、真王竜も連続で叩き落とす。

「あ、あなたはいつたい……」

「あの子を救えるのは、君の神曲だ」

「えっ……」

真王竜の突然の指示にシャロンは戸惑う。

「あの「魔神器」は闇の力で造られたのだ。その闇の力を打ち消すには、聖なる神曲だ」

「け、けど……」

「君の神曲は温かく優しい。その温かく優しい気持ちで彼女を救うんだ」

シャロンは戸惑う。

「シャロンー！」

黒い騎士と闘うレイラは怒鳴る。

「お前はこの私を認めさせた神曲楽士だ！ お前ならできる！」

シャロンはレイラの言葉と洗脳されたミミを見て、決意する。

シャロンは立ち上がり、神曲を奏でようとするが。

「そこまでだ！」

《嘆きの異邦人》の1人が男の子を捕まえて、ナイフを突き付ける。

「お姉ちゃん！」

ミミのことを呼ぶ。

「まさか……」

「ミミールの弟であり、私の息子だ！ 神曲を奏でれば、こいつを殺す！」

「あなた、また自分の子を……」

シャロンは再び憎悪を宿すが、

「動くな！」

ミミの弟にナイフを突き付ける。

「少しでも動けば、ブスツと」

といいかけると、脳天に黒い鎌が刺さる。

黒鎌竜だった。片手に男の子を抱えていた。

「ロロ！」

「トト！」

2人は互いに名を呼んで、抱き合いながら再会を喜んだ。

「遠慮なくやれ」

「は、はい！」

シャロンは神曲を奏でる。

「やらせるな！」

黒い騎士と黒い鳥人はシャロンに襲い掛かるが、

「邪魔するな」「

真王竜とレイラは冷徹に斬り捨てる。

(お願い、目を覚ましてミミ)

シャロンの奏でる神曲は、ミミを救いたいという想いが込められた温かく優しい神曲だった。

すると、無表情のミミの両目から涙が流れる。

「……シャロンさん……」

「魔神器」にヒビが入る。

「や、やめろ！」

リーダー格は止めるが、「魔神器」は粉々に壊れる。それと同時にミミは倒れる。

「ミミ……！」

シャロンとレイラはミミの元へ急いで駆け寄る。

「ま、「魔神器」が……」

「んなもんより、子供の心配だろ」

リーダー格の背後に回り込んだ黒鎌竜は、首を斬り落とす。

「「わーっ……！」」

他の《嘆きの異邦人》達は逃走した。

そして……。

「お姉ちゃん！」

「えぐっえぐっ」

ロロとトトは倒れる姉を見て、泣き出す。

「ロロ、トト、泣かないで」

シャロンはミミを抱き寄せる。レイラと真王竜と黒鎌竜は見守る。

「……シャロンさん、ごめんなさい……」

「喋らないで、すぐに病院に行けば」

ミミは首を振る。

「もう無理です。私の命はもう……尽きかけています」

「諦めないで」

「私は……父の言うがままに、『政府軍』に入り込んで……スパイしました。貴女が来るまでは」

「えっ……」

「貴女と……ふれ合う内に、自分のやっていることに疑問を抱き始めました。どうすれば良いのか、迷って神曲を奏でていました」

「……あの時の悲しい気持ちは、それだったのね」

「……神曲楽士になりたいのは本当です。 シャロンに大事なことを教わって、稽古をつけて貰えて嬉しかった……もっと貴女と一緒にいたかった」

「いてあげる！ 何度でもいてあげる！ だから……」

シャロンは涙を流す。

「ありがとうございます……ごじます。 でも、駄目みたい……です」

ミミの生気が段々となくなっていく。

「ロロ、トト、力を合わせて……お姉ちゃんの方も生きて」

ロロ、トトは泣きながら頷く。

「……シャロンさん……」

ミミは手を伸ばすと、シャロンは握る。

「貴女の、貴女の優しい神曲を……夢を持つ神曲楽士や……子供達に聴かせて……あげて下さい」

シャロンは泣きながら頷く。

「私は……貴女のような……神曲楽士に……なりたかった……」

ミミは眠るように、息を引き取った。

「……！」

シャロンは号泣した。

レイラもこればかりは涙を流す。

ロロとトトは黒鎌竜に泣きつく。

真王竜は何も言わず、ただ見守るしかなかった。

### 【現在】

「その後、《竜の爪》に入る代わりに、《政府軍》を抜けさせることが出来たわ」

「その後も、孤児院の援助続行とロロとトトの引き取りの手続きもしてくれた」

「本当に、あの人には感謝しているわ。本来の目的だった、「魔神器」の回収を失敗したのに、見ず知らずの私達を入れることを、当時のリーダー“魔王竜”に嘆願してくれた」

「その為、一度メンバーから降格された」

「けど、あの‘クーデター’によって、新リーダーになったと同時に、メンバーの昇格と、“聖唱竜”という名を授かった」

「本当に人生とはわからないものだ」

レイラは人生というものを不思議と考える。

「人生と言えば、お前は悪の組織の幹部という人生をどう思っている？」

聖唱竜は考える。

「……少なくとも、悪くは無いと思うわ。　ユリア、マミヤ、リン、そしてシャープにも出会えたから」

「……何より、真王竜と一緒に居れるからか？」

「レ、レイラ！」

赤くなる聖唱竜。

「……悪の組織の幹部と神曲楽士という立場でたくさんの世界を見て、私達にできることを見付けるのが」

「もう一つの理由だな」

「ええっ」

すると、ノックの音がする。

「失礼します」

ユリア、マミヤ、リンが入ってくる。

「《聖なる三弦》、出勤準備ができました」

「わかりました」

聖唱竜は仮面を被る。

「《竜の爪》メンバー聖唱竜、行きます」

聖唱竜とレイラは己の信じた道を突き進むのだった。

終わり

過去編 memory(後書き)

コミック『神曲奏界ポリフォニカ カーディナル・クリムゾン』を  
参考にしました。

自分なりに悲しく書きました。

**過去編 最悪のニードレス+おまけ(前書き)**

今回も過去編です。

過去編 最悪の二ードレス+おまけ

【竜の爪】アジトの研究室で呪血竜があるものを開発していた。

車輪付きの火炎放射器だった。

「スイッチオン！」

呪血竜は火炎放射器のスイッチを入れる。

火炎放射器は青白い炎を放射する。

一つの炎の塊になったところで、呪血竜はスイッチを切る。

青白い炎は徐々に小さくなり、宝石に変わった。

「遂に完成した」

呪血竜が左手をかざすと、呪血が飛び出て、青白い宝石を包み込む。

呪血は呪血竜の手元へ戻り、手のひらに青い宝石が露になる。

「完成だ、ヴァルキュリア石の」

呪血竜は青い宝石を眺める。

「使い捨てだが、これを使えば、人間でも「ヴァルキュリアの炎」が使えるようになる」

呪血竜が作ったのは、《ヴァルキュリア石製造器》

まずヴァルキュリア石とは、「ヴァルキュリアの炎」を石に変化させ、誰でも使えるようになる。

ただし、何回か使用すれば、消耗してしまう。

今回、呪血竜が開発したのは、そんなヴァルキュリア石をヴァルキュリアの炎から作り出す機械である。

「黒鎌竜が捕まえてくれたヴァルキュリア人のおかげで、原料「ヴァルキュリアの炎」が手に入りました。もうあの試作品は必要ありませんね」

そのヴァルキュリア人とはアリシア。

試作品とは“ミニキュリア”のことである。

呪血竜は製造器の電源を切って、何処かへ運んでしまう。

「ふーっ」

一息つく呪血竜は椅子に座る。

「これで戦力の増加になりますね」

呪血竜は仮面を脱ぎ、顔に布を被せて一眠りをする。

呪血竜は過去の夢を見る。

\*

この世界【NEEDLESS】で、組織『シメオン製薬』の本拠地である。

研究室である男性研究者が顕微鏡を覗いていた。

茶髪で少し長めの大人しそうな男性であった。

「焰主任」

金髪の長髪で美しい翡翠のような瞳の女性研究者が男性を“焰主任”と呼ぶ。

「やあ、 “ジエイド”」

女性研究者は“ジエイド”と呼ばれる。

彼は主任を務める“焰”彼女は、助手の“ジエイド”。

この焰は、後の“呪血竜”である。

「いかがですか？」

「ああつ、見てごらん」

ジエイドに顕微鏡を覗かせる。

「綺麗ですね」

「ああつ、この潔白が良い。この潔白なら、どの血液と同化できるし、ウィルスも浄化できる」

「これなら血液不足の人々が救われますね」

「ああつ、これも皆のおかげだ」

2人は血液の研究が成功したことに喜ぶ。

「これを……真つ先に父に使いたいけど、良いかな」

「もちろんです。お父さんの為に頑張って研究したんですから」

ジエイドは喜んで賛同する。

焔の父親は、血液の病気を患っていた。

焔は父親の入院費を稼ぐ為と血液の病気を治す為にシメオン製薬に働きながら研究を続けていたのだ。

「父が治ったら、結婚のことも報告しようと思っているんだ」

「えっ、結婚のこともですか!」

ジェイドは顔を赤くなる。

「駄目かな」

「……いいえ、むしろ良いです」

戸惑いながらも承諾し、抱き合おとすると。

「主任!」

此処に1人の研究者が駆け込んでくる。

「ど、どうしたんですか」

突然の来訪者が来たことに慌てて2人は離れる。

「病院から連絡が入りました! 主任のお父さんが危篤だそうです」  
「!」

「ええっ!?!」

その後、焔は急いで病院に行き、父親の元へ駆けつけた。

そして、焔に看取られながら亡くなった。

葬式が終えて1ヶ月経っても、焔はいまだに落ち込んだままだった。

ジェイドはそんな焔が心配だった。

すると、1人のシメオン製薬の社員が現れる。

「焔主任」

「あつ、はい」

「総帥が呼びです」

「総帥が？」

ジェイドも聞き、何故だか不安になる。

焔は、総帥のアダム・アークライトの部屋にやって来る。

「呼びでしようか？」

「例の新型血液の研究を成功させたそうだね？」

「はい」

「流石だよ。君は血液以外にも、機械部門に生物部門でも優秀な成績を納めている」

「ありがとうございます」

「今回の研究も期待していた。これも、父親に対する想いが実らせたのかな？」

焰は、父親のことを出されて落ち込む。

「あつ、すまない。亡くなったばかりだったよね」

「……いいえ」

「本題に入ろう。君の研究結果を譲って貰えないかね？」

「えっ、譲るとは？」

「君は、父親を治す為に研究を続けて成功させた。しかし、その父親は亡くなってしまい、その後の研究をあまり続けていないそうじゃないか」

「そ、それは……」

父親が亡くなった後、焰は研究に身が入っていなかった。

ただ、書類仕事に部下の指導を行っていただけであった。

「せっかくの研究を続けられない位なら、この私に譲ってくれないかな？」

焰は黙り込む。

「……仕方がない、時間をあげよう。 ゆっくり考えたまえ」

焰は礼をして、退室する。

「ゆっくり考えるだよ。 返事次第では……ふっふっふ」

何やら企んでいたアダム・アークライトだった。

本部の外に出た焰はベンチに座りながら考えていた。

そこへジェイドがやって来る。

「主任、話とは何ですか？」

「……実は……」

焰はジェイドに先ほどの事を話す。

「……主任は、どうするつもりですか？」

「……譲るつもり？」

「ええっ!？」

ジェイドは驚く。

「総帥の言う通りだ。続けるつもりが無いものに、研究を任せられるわけにはいかない」

「そ、そんな……」

「あつ、大丈夫だ。担当が総帥に代わるだけだ。他の皆は研究を続けることはできる」

「そういう問題ではありません！」

むきになり、涙を流すジエイドに焰は驚く。

「ジエイド」

「確かに治すべきお父さんがお亡くなりになって、落ち込むのはわかります。けど、やってきた研究を他人に押し付けなくてください！」

「い、いや、総帥は譲ってくれと」

「放棄する時点で、押し付けているんです！一緒にやってきた皆を裏切るつもりですか？」

「べ、別に裏切るつもりは」

「皆は、皆は貴方の考えに共感して、付いてきたんです」

「共感？」

「……貴方は、こう言いました。『この血液で、私の父や苦しむ人々を救おう』って」

焰は思い出す。

「私は、あの時から貴方のことが好きでした。もう一度、やる気を取り戻して下さい」

ジェイドは泣きながら焰に抱きつく。

「……すまなかった……」

心から反省した焰はジェイドを抱き締める。

「研究は譲れません。最後まで責任を持って続ける義務がありますので」

焰は、アダム・アークライトの元へ行き、返事を伝える。

「……そうか……なら」

アダム・アークライトが指を鳴らすと、黒服の男が焰を捕まえる。

「な、何を」

黒服の男に気絶させられる。

「素直に譲れば良いもの」

「う、うーん」

目覚めた焔が居たのは、実験場だった。

半裸な上に手錠を掛けられて動けない状態である。

「ここは実験場!？」

『目覚めはどうかね』

焔の目の前に、ガラス越しのアダム・アークライトがいた。

「そ、総帥、何の真似ですか？」

『……君の開発した血液と新たな技術を組み合わせた実験を行う』

「何を言っているんですか？」

『そのままの意味だよ』

焔は何のことかわからないでいると。

「ぐわっ!？」

突如、焔は苦痛を感じる。

「な、何を、何をした!？」

『君の骨髄に注入したのだよ。 「呪血」をね』

「じゅ、呪血？」

『呪いという力を新型血液に取り入れたら、面白いものが出来たんでね。 開発者の君に味わって貰いたいと思ったんだよ』

「ふざけるな！ 何の……権利が……あつて……」

苦痛しながら問い掛ける。

『私は神だ。 その神に素晴らしいものを譲らなかった報いを受けてもらおう』

あまりに理不尽な理由に焰は絶句する。

『ほら、早速変化してきた』

突如、焰は鼻血を出すと同時に吐血する。

さらに流血しながら身体全体の皮膚が破れていく。

「ぐわっあああああああー！！」

焰の叫びが高く響く。

ジェイドは落ち込みながら歩く。

「……焰」

いなくなってしまった焰を心配すると、突如警報が鳴り響く。

「な、何!?!」

『緊急事態発生! 実験中のニードレスが脱走! 直ちに避難する  
ように! 繰り返す』

警報共に警告も響く。

「実験中のニードレス?」

ジェイドは言われた通りに避難しようとする。

「!?!、きゃあああああああああ!?!」

ジェイドの目の前に、身体全体が紫色の筋肉に剥き出した人が立っていた。

「……ジ……ェイド……」

「へっ?」

その人はジェイドの名前を呼ぶ。

「……焰……?」

ジェイドは焰と呼ぶ。

そう、実験で変わり果てた姿になった焰である。

「ジェイド！」

焰が左腕を上げたとき、呪血が飛び出てしまい、ジェイドの両目に掛かる。

「ぎゃあああああああああ！！」

「ジェイド！」

「目が、目が！！」

ジェイドは倒れ、激しく痛がる。

「あつ、ああつ」

焰はジェイドを傷つけてしまったことに激しく動揺する。

「いたぞ！」

武装した警備員が焰を見つけて、駆け付ける。

「……くっ！」

焰は窓ガラスを割って、飛び降りる。

警備員達は1人を残して追いかけて、残った1人はジェイドを保護する。

焰は泣きながら走り続ける。

「すまない、ジエイド！ すまない……」

焰はジエイドを傷つけたことを激しく後悔しながら、逃げるのだった。

\*

「はっ！」

呪血竜は目覚める。

手元にあつた鏡を取り、自分の顔を見る呪血竜。  
嫌気を差し、鏡を伏せる。

「……その後、私は“最悪のニードレス”と呼ばれるようになった。そんな私を、当時メンバーだった烈火竜に拾われ、彼の助手になった。あの人には、恩と亡き父の面影があつたからな」

写真立てに写っている自分と烈火竜の写真を見ながら思い出に浸る。

「しかし、貴方は居なくなり、代わりに私が組織のサブリーダーとなった」

溜め息を吐き、呪血竜は仮面を被る。

「さて、仕事を再開しますか」

呪血竜は仕事を再開させる。

「……ジエイド、恨んでいるかな」

ジエイドのことを今でも気にしている。

《おまけ》

「はっ、はっ、はっ！」

子供と女性は必死に走っていた。

子供は女性を必死に引っ張り、女性は鞆を抱える。

その女性はジエイドだった。

「あっ！」

ジエイドは躓いてしまう。

「ママー！」

子供はジェイドを『ママ』と呼んで、駆け寄る。

「ふっふっふっ」

2人は追ってきたのは、パワーアーマーを引き連れた男が近づいてくる。

「さあ、その鞆を寄越せ」

子供はジェイドを庇うように立つ。

「ママに手を出すな！」

「おっ、威勢が良いなガキ」

「ああっ！」

男は子供を殴り倒す。

「篝！」

パワーアーマーは“篝”と呼んだ子供を掴む。

「鞆を寄越さなければ、このガキを潰す」

「うっうっ」

パワーアーマーは篝をじわじわと握る。

「止めてー！」

「止めて欲しければ、その鞆を」

言いかけると、グシャツと機械を潰す音が響く。

「へっ?」

振り向くと、パワーアーマーを踏み潰すドラゴンがいた。箒は潰されていなかった。

「子供を人質にするなんて、最低な人ね」

いつの間にか、ジエイドを抱き寄せるミレイザがいた。

「燃やしましょう」

「えっ?」

同じように、ヒューマン化された紅火が男の横にいつの間にか立っていた。

紅火は手をかざすと、炎を放つ。

「あちいいいいいいいい!」

燃やされる男は逃げてしまう。

「ふん」

紅火は鼻を鳴らし、箒を抱える。

「大丈夫ですか」

「うちの子は？ うちの子は何処ですか!？」

ジェイドは手探りしながら篝を探す。

「大丈夫、気絶しているだけです」

紅火は篝をジェイドに手渡す。

「ああつ、良かった。ありがとうございます」

「……あなた、目が見えないの？」

紅火は先ほどのジェイドの様子を見て訊ねる。

ジェイドは頷く。

『盲目のお母さん、シメオン製薬の人？』

ミレイザは、はやてに報告する。

ミレイザと紅火はシメオン製薬へ偵察する最中に、追われていたジェイドと篝を見かけたのだ。

「はい、名前はジェイドさんと篝君です。 どうか、新機動六課に助けを求めるために脱走したみたいです」

『そうか、それなら連れてきて』

「わかりました」

こうして、ジェイドと篤は機動六課に無事に保護されました。

終わり

**過去編 最悪の二ードレス+おまけ(後書き)**

この展開、いかがですか、青いタヌキ先生？

過去編 大抵のじいちゃんばあちゃんは負けず嫌い。(前書き)

過去編3連続です。

過去編 大抵のじいちゃんばあちゃんは負けず嫌い。

とある荒野に1頭の馬と、女性が対峙していた。

馬は、魔導騎馬の黒山。

女性は、きずいせん色の長い髪に、青ふじ色の瞳をしていた。

それは、素顔を晒した夜帝竜である。

竜の仮面とマントを身に付けていない代わりに、動きやすい紺色のチャイナ服を着用していた。

そんな夜帝竜と黒山の様子を、新しいメンバーである七魔竜が見ていた。

今回は七魔竜の初任務で、仕事の見学に来たのだ。

「かかってこいや、馬」

挑発すると、黒山は爆走で、夜帝竜に向かって突進する。

重量のある黒山が走る度に地が砕けていた。

黒山は前足を振り上げ、夜帝竜を踏み潰そうと降り下ろした。

しかし、夜帝竜は両手で前足を受け止めて、踏ん張った。

よほど重量のある前足な為か、踏ん張った際に両足が地にめり込む。

黒山は、負けじと押し潰そうと力を入れるが、夜帝竜も負けじと踏ん張った。

「どりゃあー!!」

夜帝竜はありったけの力を両手に込め、黒山を押し返し、後ろへ下がる。

黒山は後ろに倒されそうになるが、すぐさま元の体勢に戻る。

黒山は夜帝竜に突進して吹き飛ばそうと爆走する。

夜帝竜は黒山の突進を避けた後、すぐに両腕を使って黒山の首を掴む。

「うりゃー!!」

そのまま首根っこを掴んで、バックドロップを喰らわせた。

黒山を叩きつけられた地は激しく砕かれた。

「私の勝ちだな」

『……まったく、なんという馬鹿力だ……』

逆さに倒れながら、夜帝竜の力を評価する黒山。

「まだ、ほんの序の口だけ。本気になれば、お前は粉々だ」

『……それほどの力を持っていながら、何ゆえ悪の道へ行く?』

この問いに、夜帝竜は考える。

「……子供ガキの頃から、遡るな」

夜帝竜は自分の生い立ちを語り始める。

黒山と七魔竜は黙って聞く。

それは、夜帝竜が【銀魂世界】の宇宙にある惑星に居た。

「うらっ！」

「ぎゃあ！」

「ぐえっ！」

まだ、10歳位の年頃である少女がチンピラ天人達と喧嘩をやっていた。

少女が優先的であった。

彼女の名は“鳳華”。

後の夜帝竜である。

「一昨日来やがれ！」

「お、覚えてやがれ！」

チンピラ達は、三下らしく、捨て台詞を吐いて逃げ出していた。

鳳華は尻餅を付く中年男性に駆け寄る。

「おっちゃん、大丈夫か？」

「相変わらずすげえな、鳳華は」

「おっちゃんも相変わらず気が強いな」

「何、あんなチンピラに屈する程老いちゃいねえよ」

鳳華は、チンピラに絡まれていた中年男性を助けるため、喧嘩をしたのだ。

「けど、いいのか？ じいちゃんにばれたら…」

「平気だよ。見られてねえ」

言いかけた鳳華が殴られる。

鳳華の後ろに眼鏡をかけ、髪薄いおじいさんが殴ったのだ。

「まあ、喧嘩したな」

「じ、じいちゃん!?!」

この人が、鳳華のじいちゃんである。

「あれほど喧嘩するなど、何べん言ったら解るんだ、この馬鹿垂れ  
!」

「馬鹿言つな!」

「馬鹿言つて、何が悪い、この馬鹿!」

「痛っ!」

鳳華に罵声を挙げて、殴り付ける。

「まあまあ、俺を助けるために仕方がなく」

「そついつ問題じゃない。言いつけを破つたからだ。行くぞ」

「痛い痛い痛い!」

鳳華はじいちゃんに引つ張られて行つてしまつた。

「本当に厳しいじいちゃんだな」

じいちゃんの厳しい教育に感心するのだった。

別のところで、2人の様子を見ていた怪しい影がいた。

「チンピラとはいえ、簡単に負かすとは」

「流石は、夜兔族、だな」

鳳華のことを、‘夜兔族’と呼んだ。

\*

「痛つてて！」

小さな外科医院から、鳳華の叫びが響く。

じいちゃんに赤チンを手の傷口に塗られる鳳華は痛がる。

「痛っ！」

とどめに、絆創膏を強く貼られて、さらに痛がる。

「はい、終わりだ」

「丁寧にやってくれよ」

「治療してやったんだ、ありがたいと思え」

手荒い治療に不満を言うが聞き入れてもらえなかった。

鳳華のじいちゃんは、小さな外科医院の医者である。

「お前の馬鹿力は、お前自身も傷付けるんだって、何べん言えば解るんだ？」

「頭で理解するより先に手が出るんだよ」

「そんな理屈、世の中に通じるか！」

痛いところを言われた鳳華は頭を掻いてしまう。

「はい、おしまい」

鳳華の治療が終わる。

「鳳ちゃん」

戸口から老婆が顔を出す。

「ばあちゃん」

鳳華のばあちゃんである。

「米を運んで」

「わかった」

\*

鳳華は自分より大きな米俵を軽く持ち上げて、医院の玄関まで運んでいく。

「ふーっ」

「ありがとう」

ばあちゃんに頭を撫でられ、鳳華は嬉しかった。

(ばあちゃんは好きだ。いつも優しくしてくれるからだ。じいちゃんはいつもあたしを叱るばかりだが、嫌いではない。なぜなら、それはあたしのことを思っていることだからだ)

そう気づいたのは、鳳華が5歳の時に幼稚園で他の園児と喧嘩して、怪我をさせてしまった。

原因は、他の園児が鳳華のことを「化け物」と呼んだからである。そのあと、無我夢中になり、幼稚園で暴れてしまう。

後からじいちゃんがやって来て、鳳華を叱って、殴り付けて大人しくさせて終止符を打ったが、幼稚園を辞めざる得なかった。

その時の鳳華はじいちゃんを恨んだ。

あいつらが悪いのに。 何であいつらの味方をするんだよ、と。

しかし、じいちゃんは怪我をさせた園児の親御さんに頭を下げて謝罪したり、もう一度幼稚園に通わせるように頼み込んだりしたことを知った。

鳳華は何故あそこまでやっているのかと、ばあちゃんに訊ねた。

『じいちゃんは不器用だけど、あなたのことを大切に思っている。

あなたに良い子にいてほしいから、いけないことは叱りつけるの。

暴力は、相手だけじゃなく自分も傷つくのよ』

これを知った鳳華はじいちゃんを恨むのを辞めた。

鳳華は自分なりに反省して、暴力は辞めようと思ったが、なかなか出来なかった。

現在でも、知り合いを助けるためとはいえ、暴力を使ってしまった。

「……なんで、頭にカツと血が昇るんかな……」

鳳華は己の拳を見つめながら、自分の暴力を考えてみる。

「うっ……」

日の光を浴びた鳳華は体力が落ちてしまっ。

鳳華はすぐさま医院の日陰に隠れる。

「何で、喧嘩には強いのに、日の光に弱いんだろっ」

鳳華は、前々から自分の体質に疑問を抱いていた。

日が落ちて、夕食時になる。

「うわっ！」

夕食はカツ丼だった。

「おじさんが助けたお礼に、トンカツをくれたのよ。だから、今日はカツ丼にしたの」

「いただきます！」

鳳華は喜んでカツ丼を食べる。

「うーん、やっぱ、ばあちゃんのカツ丼は美味しい！」

鳳華の美味そうな顔を見て、優しいばあちゃんや厳しいじいちゃんも笑ってしまう。

鳳華はこう思っていた。

いつまでも、ずっとこの幸せが続けば良い。

いつか、じいちゃんとはあちゃんに親孝行したいと思っていた。

しかし、その願いは打ち碎かれる悲劇がおきてしまった。

\*

「じいちゃん、ただい」

帰ってきた鳳華は言葉を失った。

それは、外科医院の中が荒らされて、壁に血の痕がこびりついていたからだ。

「な、なんだよ、これ？」

鳳華は動揺しながらも、じいちゃんとはあちゃんを探す。

2人はいなかったが、代わりに1枚の手紙が置かれていた。手紙にはこう書かれてあった。

「貴様の大切なモノは、我々『春雨』が預かっている。返してほしければ、町外れの廃工場へ来い」

春雨とは、宇宙海賊である。

鳳華は夢中になって、廃工場へと走っていた。

\*

走って息切れする鳳華は巨大な廃工場の中へと、たどり着いた。

「来たぞ、じいちゃんとはあちゃんを返せ！」

鳳華の怒りの込めた呼び声は工場内を響かせる。

「よく来たな」

鳳華の前に現れたのは、何百人もいる春雨の団員達だった。そのリーダーらしき男が、鳳華に近づく。

「よく来てくれた」

「じいちゃんとはあちゃんはどこだ！」

鳳華は怒り心頭で、聞いただす。

「慌てるな」

団員達の中から、怪我を負わされたじいちゃんとはあちゃんが出てくる。

「じいちゃん、ばあちゃん！」

「ほ、鳳華……」

怪我を負わされたじいちゃんとはあちゃんを見た鳳華はさらに怒りを燃やす。

「てめえ、よくもじいちゃんとはあちゃんを！」

「いやいや、この2人が抵抗するから、仕方がなく」

「ぶっ殺す」

鳳華は襲い掛かるとした瞬間、背後から団員の攻撃を受けてしまい倒れる。

「取り押さえる！」

団員達は鳳華を押さえ付ける。

「鳳華！」

「止めて！」

じいちゃんとはあちゃんは必死で呼び止めようとしたが団員達は止めなかった。

押さえつけられてしまった鳳華は悔しがる。

「やっぱりガキだな」

鳳華の頭を踏みつける。

「な、何が目的だ？」

「それは、お前の親父を従わせるためだ」

「お、親父？」

「聞かされていないのか？ 教えてやる。 お前は夜兔族だ」

「夜兔族？」

「や、止める！」

「うるせえ！」

リーダーの話を止めさせようとしたじいちゃんを団員が殴る。

「じいちゃん！」

「あの2人は、血の繋がりの無いただの爺と婆だ。 お前の本当の親は、我が春雨の大幹部の鳳仙だ」

「鳳仙？」

「お前は、鳳仙と名の知らぬ夜兔の女との間に産まれたガキだ。 女は鳳仙に捨てられながらもお前を育てようとしたが、元老達はお前を捕まえようとした。 それは、鳳仙を服従させるか、お前自身を手駒にするために。 しかし、女は命からがら逃げ切り、あの爺と婆に託して死んじまった。 これがお前の経緯だ」

「う、嘘だ」

「気づかねえのか？ 馬鹿力な上に、日に弱い。 それが夜兔族の特徴なんだよ」

「ほ、本当なのか？」

話を聞かされて動揺する鳳華はじいちゃんとはあちゃんに聞いた  
だす。

「……そうだ。お前の母親の事情を知って、引き取った」

「彼女は涙ながら、あなたのことを頼んだわ。そんな彼女の想いを汲んで、本当の子として育てのよ」

「じいちゃん、ばあちゃん」

「だから、その子を連れていくのは辞めてくれ！」

リーダーはじいちゃんとはあちゃんのところへ歩みより。

「うるさい」

刀を抜き、2人を斬り捨てた。

鳳華は言葉を失った。

「鳳……華……」

じいちゃんとはあちゃんは、鳳華の名を呼びながら息を引き取った。

「ふん、馬鹿な爺と婆だ。素直に渡せば、死なずに済んだものを」

虫けらのように見下す。

「じいちゃん……ばあちゃん……」

自分の目の前で、大切なモノは失った。

この時、鳳華の心の中で、激しく憎しみの炎が燃えた。  
同時に血が疼いてきた。

「さっさとそいつを縛り上げ」

リーダーは鳳華の様子がおかしいことに気づいた。

「は、早く縛り上げ」

「くわあああああああ！」「く」

鳳華は自分を押さえ付けていた大の大人全員をはね除けた。

起き上がった鳳華の眼を見た、リーダーや団員達は一瞬寿命を縮める程恐怖した。

鳳華の目は、狂気に満ちていた。

鳳華は歩き出したと思ったら、走り出した。

向かった先は団員達のところだった。

「へっ……」

鳳華は団員1人の頭を殴り飛ばした。  
頭を無くした団員の首から血が噴射した。

「ひい」

隣にいた団員は叫ぼうとした瞬間、鳳華の腕に貫かれてしまい絶命した。

鳳華は貫いた死体をそのまま投げつけ、また別の団員の頭を叩き潰した。

「ば、化け物！」

恐怖で取り乱した大柄の団員は、斧で叩き斬ろう振り上げるが、鳳華が寸前に大柄の団員の腕の中へ近づき、両手を手刀にして団員の両腕を斬り落とす。

「ぎゃああああああああああ！！」

鳳華は斬り落とした両腕から斧を奪い取り、止めとばかりに大柄の団員の頭を叩き斬った。

斬った後、斧に付いた血を舐めて、狂気に笑い出す。

そして、斧を振り回しながら団員を斬り殺し捲った。

工場内は叫びと血が飛び散る殺戮の場となってしまうた。

\*

廃工場に向かって走る、番傘を持った1人の男がいた。

それは、宇宙を駆ける伝説の掃除屋“星海坊主”だった。

「間に合えば良いが」

星海坊主は廃工場に入っつて、一瞬だけ驚愕した。

それは、数えきれない程の団員達の死体が転んでいた。どれも形が整えられない程に斬り刻まれていた。

星海坊主は、そんな死体の中で1人の少女、鳳華を見つけた。

狂気から解放された鳳華は血まみれになっていた。

星海坊主は歩み寄ろうとしたが、近づけなかった。何故なら…

…。

「じいちゃん……ばあちゃん……」

鳳華は愛するじいちゃんとはあちゃんの死に嘆いていたからだ。

星海坊主はしばらくそっとしてあげた。

その後、星海坊主は鳳華と一緒にじいちゃんとはあちゃんを手厚く葬式をしてあげた。

星海坊主は、鳳仙の娘である鳳華に興味を示し、会いに来たのだ。しかし、さらわれたことを知り、助けに行こうとしたが、遅かった。

夜兎族のことと、星海坊主は鳳仙のライバルであることを教えられた鳳華は星海坊主に弟子入りを頼んだ。

目的は父の鳳仙に怒りをぶつけるためであった。

最初は反対する星海坊主だったが、鳳華の真剣な想いと、生きる目的を与える為に弟子入りを許した。

鳳華は星海坊主の元で、夜兔の力の使い方、生きる術、闘いの基礎と経験を授かった。

それと同時に新しい幸せを掴んでいた。

やがて、鳳華は名残惜しくも星海坊主の元から巣立ち、鳳仙をぶっ飛ばそうと、彼の元へ向かった。

しかし、鳳仙は銀時達に倒されていた。

鳳華は鳳仙の墓の前で涙ながら恨みと怒りをぶつけた。  
ぶつけた後、鳳仙の番傘を引き抜いて、自分のモノにした。唯  
一の形見として。

以来、エイリアン退治や傭兵家業しながら歩いていると、真王竜と出会った。

「報酬はカツ丼」で雇われる。

最後の辺りで、黒山は呆れてしまう。

七魔竜にいたっては、首を傾げていた。

『報酬はカツ丼って……』

「組織に入ってからには、他のメンバーと楽しくやったり、新しい目的ができて良かったと思っっているよ」

『新しい目的？』

「……新しい家族の幸せを続けたい。腐った奴らをぶっ潰したい。それが、新しい目的だ」

黒山は自らを宙に浮かせ、起き上がった。

『……貴様の実力と純粋な想いが気に入った。我が主になるっ』

黒山は夜帝竜を主と認めた。

「いいのか？ 悪の組織のメンバーだぞ」

『我は、貴様個人を認めたのだ。いやか？』

「いや、願ってもないことだ」

『我の額に手を当てる』

夜帝竜は黒山の額に手を当てると、黒山は黒く輝き、夜帝竜の手の甲に紋章が浮かび上がって、契約完了した。

「おおっ」

夜帝竜は黒山の乗り心地を堪能した。とても高く速かった。

七魔竜は黒山に乗る夜帝竜を羨ましかった。

「水蓮竜にも乗せよう」

こうして黒山は夜帝竜の馬となった。

終わり。

過去編 大抵のじいちゃんばあちゃんは負けず嫌い。(後書き)

じいちゃんは私の亡くなった祖父を重ねて書きました。  
祖父も外科医でした。

光翔竜、復活計画！+おまけ（前書き）

今回は……少しエッチです。

光翔竜、復活計画！＋おまけ

三十路魔王なのはの攻撃により、光翔竜は倒された、と誰もがそう思っていたが……。

【竜の爪アジト】

「うーん、うーん、うーん」

実は生きていた。

痛々しく包帯を身体中に巻き付けられて、ミイラ状態となっていた。

「光翔竜様、気をしっかり持ってください！」

補佐の竜弓兵は懸命に看病する。

「高町なのはにやられたらしいぞ」

「今まで言ってきた悪口が原因らしい」

「ああつ、豚町」

「言つな、聞こえたらどうする!」

部屋の外側で竜兵達は光翔竜のやられた噂をしていた。

「それより……どうすれば光翔竜様は復活するんだ?」

「あの方は……よき方だ」

「ああつ、我々にフェイト様やその他のヒロインの素晴らしさを教えてくださったからな」

竜兵達は、光翔竜のことを慕っていた。

それは、アニメヒロインの魅力やエロチックな知識を教えてくださいるからだ。

「よし、竜弓兵さんに聞いてみよう!」

「そうだな」

意を決した竜兵達は光翔竜の元へ駆けつける。

「……光翔竜の傷の具合は、なんとか回復しているが……意識の方は弱々しい」

竜弓兵の説明を聞き、竜兵達は肩を落とす。

「どうすれば良いんですか?」

「一気に元気にするしかない」

「い、一気に元気にする？」

「どっやってするんだ？」

竜兵達は考えて、すぐに思い付く。

やっぱり、フェイト様だな。

「写真を見せれば良いのでは？」

「既にやったが、名を呟くだけで、元気にならなかった」

「何度も写真を見ているからな」

光翔竜は、いつもフェイトの写真を見ていることはよく知っている。

「笑顔と凛々しい顔と居眠りの写真を何枚か持っていたな」

「駄目か」

別の方法を考える。

「なら、人形はどうだろうか？」

「触るだけで、何も変化はなかった」

「駄目か」

考える。

「やりたいことを実現させたら？」

「やりたいこと？」

「あつ。そういえば、やりたいことをメモ帳に書いていたな」

竜弓兵は思い出す。

「そのメモ帳を見て、一つでも良いから、できそうなことを実現させよう！」

「わかった、持ってくる」

竜弓兵はすぐに光翔竜のメモ帳を持ってくる。

「見るぞ」

竜弓兵はメモ帳を開き、見てみた。

「フェイト様とやりたいことランキング」

1位：フェイト様とチヨメチヨメ……。……。

2位：フェイト様と一緒に入浴。

3位：フェイト様と海水浴。

4位：フェイト様と買い物。

\*

ど、どれも無理だよ。

「……今までに持っていないモノを見せれば良いのでは？」

「今までに持っていないモノ？」

「例えば……ヌード」

『ヌード』と聞き、フェイトの裸を想像すると、思わず鼻血を出す竜兵達。

もちろん、言い出しっぺ本人も。

「た、確かに効果抜群だな」

「って、どうやって手に入れるだよ!？」

「向こう」新機動六課本部「へ忍び込んで、隠し撮りするか？」

「危険過ぎる！」

「そうだ。その向こうにいる水蓮竜様に頼もう」

「頼みを聞いてくれるか？」

「あの方は無邪気な上に、光翔竜様とは仲がよろしいから聞き入れてくれる筈だ」

「よし、早速竜侍を通じて、連絡しよう」

計画（？）を立てると。

「待った！」

竜兵の1人が手を挙げる。

「どうした？」

「どうやって撮るんだ？ カメラを持ったまま撮るなんて無理だ。隠しカメラを使おうにも、水蓮竜様には使えん。それ以前に、何時どこで撮れば良いんだ？」

「あっ、確かに！」

欠点を指摘され、また別の方法を考える。

「待てよ。確か、直接撮らなくても、記憶力で写真を撮るカメラがあったぞ」

「記憶力で写真を撮るカメラ？」

竜兵達は首を傾げる。

んで。

「記憶カメラ？」

水蓮竜は竜侍から、『記憶カメラ』を手渡された。  
形は『インスタントカメラ』と同じであった。

「えっと、記憶力で写真を撮るカメラらしいです。  
使い方は、見たモノを思い出しながらシャッターを押せば良い  
みたいですよ」

「やってみよう」

水蓮竜は唸りながら何かを思い出して、シャッターを押した。  
カメラから写真が出てくる。

その写真に写っていたのは、ケーキだった。

「本当だ、昨日食べたケーキが写ってる！」

「なるほど、そういうカメラですね」

「それで、このカメラでどうするの？」

カメラを送られた理由を聞く。

「えつとですね……」

カメラに同封された手紙を読み上げる。

「フエイト・Ｔ・ハラウンと一緒に入浴した時のことを写し、こちらに送りください。その後、カメラをご自由にお使いください……つて、ええっ!？」

書かれている内容を読んで、驚愕する。

「うん、わかった」

「いや、簡単に承諾して良いですか!？」

水蓮竜のあっさりした返答に思わずツッコミを入れてしまう。

「いくよ!？」

水蓮竜はフエイトと入浴した時のことを思い出しながらシャッターを押した。

カメラから写真が出てくる。

その写真は、見事にフエイトの憐れみの無い見事に美しい裸体が写されていた。

もちろん、大きく形の良い美巨乳も見事に写されていた。

竜侍は思い切り鼻血を噴射した。

「うん、ちゃんと写っているね」

水蓮竜はフェイトの写真を送った。

\*

鼻血を垂らした竜兵達は壁際に待機する。

鼻血を垂らしていたのは、フェイトの写真を見たからである。

「いきますー！」

竜弓兵はフェイトの写真を光翔竜の目の前に見せた。

しばらく経つと、光翔竜の身体がぶるぶると動き出した。

「こ、光翔竜様……」

これを見た竜弓兵や竜兵達は怖がる。

「フェ、フェ、フェ、フェイト様あああああああー！」

包帯が破かれ、雄叫びがこだまし、身体を輝かせながら光翔竜は立ち上がった。

「おおおっ、フェイト様が光翔竜様に力を！！」

こうして光翔竜は復活した。

そして、フェイトの写真は丁寧に祀られたそう。

「おまけ」

「むむ」

水蓮竜は『記憶カメラ』を使ってたくさん写真を撮っていた。

「水蓮竜様、何をしていますか？」

「夏休みの自由研究」

「えっ、水蓮竜様って、学校行かれてました？」

「うん」

「そうでしたか。それで、自由研究の題材は何ですか？」

撮られた写真を見た途端、鼻血を再び噴射する竜侍。

その写真は女性の全裸ばかり写されていた。

「こ、これはいつたい？」

「自由研究『いろんな人のおっぱい』の写真」

「なんですかそれ!？」

「おっぱいって、色んな形や大きさがあるでしょ？ それが不思議だから、研究するの」

「は、はあ……」

竜侍は恐る恐るとたくさん写真を見てみた。

なのはの豊満な胸。

ヴィヴィオの豊満な胸。

皇月の普通の胸。

メアリーのなかなかの胸。

マーブルの普通の胸。

はやての豊満な胸。

芳佳の残念な胸。

白天竜の豊満な胸。

ユリアの意外に大きな胸等々とあった。

「は、白天竜様やユリア様のもあるんですか!？」

「うん、私の知っている限りのおっぱいだから」

「は、はあ……」

「糊を使って、ノートに綺麗に貼って」

ノートと糊を竜侍に手渡す。

「手伝えというのですか!？」

「いや?」

「うっ……わかりました」

水蓮竜の潤んだ目に負けて手伝う竜侍。

「絶対に驚くね」

「はい、別の意味で」

竜侍は水蓮竜をある意味凄い人だなと思うのだった。

終わり

光翔竜、復活計画！＋おまけ（後書き）

さて、光翔竜が復活したことをなのはが知ったら？

水蓮竜の自由研究を皆さんが知ったらどうなるんでしょうね？

## 狙われた最新型IS（前書き）

あのアニメが登場です！

【復讐の戦場】本編【】でも登場するらしいです。

## 狙われた最新型IS

通気孔内を通る怪しい影がいた。

影の正体は、“竜暗殺者”だった。

竜暗殺者はある場所を目指し進んでいく。

「あそこか」

竜暗殺者のある通気孔を見つけ、覗いていた。

\*

覗いたものは、ある研究室であった。

「ルンルンルン」

鼻歌を歌いながら研究していたウサミミを付けた研究者がいた。

彼女は、“篠ノ之束「しのののたばね」”。ISの発明者である。

「あれが篠ノ之束か。とても開発者には見えんな」

竜暗殺者は束を見て、不思議に思った。

すると、研究室にある人物が入室した。

【IS学園】の教師の“織斑千冬”である。

「あつ、ちいちゃん！」

「どうだ、完成したか？」

「うん」

東はリモコンのスイッチを押すと、床が開いて、あるものが出てきた。

それはISだった。

「これが、《魔法》という力を取り込んだISか？」

「そう、名前は魔法式だからハリー・ポッターにしようかと思っただが、もうすぐ完結だから、可愛らしくプーさんにしようと考えたが弱そうだから、ケンシロウか孫悟空に決めようとしたけど、どっちもジャンプ系だし、女性が使うから、ヴィーナスかクレオパトラにしようかと迷ったが、日本で作られたから、大和撫子だよ」

「「長いわ！」」

あまりに長く意味が理解できない名前に、千冬と、隠れていた竜暗殺者はツッコミを入れた。

「うん！」

(やばっ)

竜暗殺者は、すかさず気配を消した。

「……気のせいか」

(ふーっ)

気配が消えたので、千冬は気のせいと思った。

「しかし、魔法なんて架空のものだと思ったのだが……」

「ところが、実は存在していたんだよね。 “青い死神” って人にこの技術を教えてくれたんだ」

(何、青い死神が絡んでいたのか!?)

これを聞いた竜暗殺者は驚いた。

「何者なんだ、その青い死神とは？ 何の目的で？」

「何でも、悪い奴らから世界を救うために、ISの力が必要だって、言っていたから」

にこやかに答える束に千冬は呆れた。

「正体のわからない奴に協力するな！」

「うーん、私も新しい技術を取り入れてみたいという願望があったから、お互いの利害一致したの。それに悪い人ではないと思うよ」

「あのな……」

この理由を聞いた千冬は頭を痛めた。

「あ、稼働実験の際に来てくれる予定なの。千冬ちゃんも会えば、わかるはずだから」

「……ろくでもない奴だったら、縛り上げるからな」

「良いよ」

というわけで、千冬 conditions に束は承諾した。

竜暗殺者はこっそりと離れていった。

\*

「何、青い死神が絡んでいる？」

竜暗殺者の報告を聞いた竜魔導士は驚いた。

「ああつ。魔法を使うということでお前を連れてきたんだ……大丈夫か？」

「大丈夫だ。魔炎竜様には及ばんといえ、多少の魔法には自信は」

「すみません、‘ストロベリークリーム’と‘チョコバナナ’下さい」

「はいはい。相棒、ストロベリーとチョコとバナナを」

「ああっ！」

学園生徒の2人に注文され、竜魔導士はすぐにクレープの生地を作り、竜暗殺者は具材を用意をした。

竜魔導士と竜暗殺者が話していた場所は、クレープ屋の車の中だった。

これは【IS学園】関係者を欺く為、わざと学園の外にクレープ屋を装いながら調査をしているのだ。

ちなみに、2人は素顔でクレープ屋を営んでいた。

「お待たせしました」

「ありがとうございます」

生徒はクレープを受け取り、支払って帰っていた。

支払金は、なんと200円だった。

「このクレープって、美味しい上に全品100円なんて、凄いでっ！」

「作っている人は怪しいけどね」

などと言いながら歩いて行った。

そんな2人を竜魔導士はにこやかに見送った。

「さて、そろそろ具材を仕入れを」

「任務の話だろ。お前……クレープ屋の板についてないか？」

「えっ？」

竜暗殺者は、竜魔導士の手際の良さを見て、そう感じた。

「い、いや、やり続ければ、そうなるって」

「そりゃそうだが……任務を忘れるなよ」

「わかって」

「すみません、クレープ下さい」

「はいはい」

言っているそばから、商売を始める竜魔導士だった。

「何に」

竜魔導士は客の顔を見た瞬間に驚愕した。

お客は、織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒであった。

(あつ、凰鈴音ちゃんだ！)

凰鈴音に目を止めた竜魔導士。

「もしかして、『中国代表』の凰鈴音ちゃん？」

「はい」

「我輩、貴女のファンなんです、握手して下さい！」

「は、はい」

鈴音は竜魔導士と握手をした。

「ありがとうございます！ お礼にサービスします！」

「あ、ありがとう」

興奮する竜魔導士に鈴音は戸惑ってしまつた。

「おいおい、言っているそばから」

その時、竜暗殺者はシャルロットに目が止まった。

「『フランス代表』のシャルロット・デュノアさんですか？」

「はい」

「我、信奉者です！ この色紙にお名前を書いて下さい！」

「は、はい！」

色紙とサインペンを差し出され、慌てながらサインを書くシャルロット。

「あ、ありがとうございます！ お礼にサービスします！」

「は、はぁー」

「今日はラッキーだな」

竜魔導士と竜暗殺者は、一夏達が持ちきれないほどにクレープを焼いてくれた。

「あ、ありがとうございます！」

「クレープとは色々あるんだな」

「ありすぎて、持ちきれぬな」

「なら、他の皆にも別けるか」

一夏達は帰っていた。

「竜魔導士は、凰鈴音が好きなのか？」

「ああっ、明るく可愛らしい表情にあのクレープの生地のように薄

「胸が魅力的だ」

「お前、貧乳派だったのか？」

竜魔導士の意外な好みに、竜暗殺者は思わず引いてしまう。

「ああっ、鈴音ちゃんと握手できた」

「我もシャルルさんのサインを貰えた」

「「しあわせだ」」

竜魔導士と竜暗殺者はとても満足な気持ちであった。

「すっかり腑抜けているな」

「「はい……っつて、えっ？」」

竜魔導士と竜暗殺者に声を掛けたのは、【IS学園】の制服を着込んだ氷刃竜だった。

もちろん、仮面を外した素顔である。

「ひよ、氷刃竜様！」

「だが、任務を忘れてはいないな？」

「は、はい、それはもちろんです」

「例のモノは見つけました」

慌てて肝に命じながら、報告した。

「そうか。下手に動かず、しばらくは監視だ」

「ははっ！」

「それにしても、氷刃竜様、学生服がよくお似合いですね」

確かに、氷刃竜は学生服を着こなしていた。

「そうか？ 潜入とは言え、22歳で学生服を着るとはな」

「「そうですか……って、えっ？」」

氷刃竜の『22歳』という発言を聞き、竜魔導士と竜暗殺者は固まった。

「えっと……水蓮竜様は確か7歳だったよな」

「ということは、産んだのは……15歳？」

氷刃竜の年齢と水蓮竜の年齢を引き算して、氷刃竜が水蓮竜を産んだ時の年齢を答えた。

「それがどうした？」

「い、いや、全然一児の母には見えませんよ」

竜暗殺者は氷刃竜の見た目を述べた。

「それ以前に、20代にも見えないピチピチな学生に見えますよ」  
「そっか？」

誉められた氷刃竜は照れてしまう。

「あつ、先輩！」

他の【IS学園】の下級生達が駆け寄ってきた。

「先輩もクレープを食べるんですか？」

「あ、ああつ、そうだけど」

「私達もなんです」

「一緒に食べませんか？」

「ええつ、いいわよ」

「やった！」

竜魔導士と竜暗殺者は下級生に慕われている氷刃竜に驚いた。

「あとう、クレープを下さい」

「あ、はいはい」

竜魔導士はすぐに作り始めた。

(このまま、学園生活を続けたら良いのにな)

氷刃竜は、ふとそう思ったそうなの。

《一方、新機動六課では》

「……………」

【IS学園】の女子学生服を着込み、可愛く女装させられた雅也は啞然していた。

「似合ってるわ」

「あのお、何故俺が女装させられているんですか？」

恥ずかしがる雅也は、女装させた綾華に訊ねた。

「女子校である【IS学園】に潜入する為よ」

「いや、なんで男である俺が行かないといけないの？」

「一度やってみたら」

「帰る」

怒った雅也は帰ろうとした時、メアリーはカメラで雅也を撮りま

くった。

「な、何」

「大丈夫です、私も行きますよ。ただし、断ればこの写真をばら蒔きますよ」

悪魔のように笑うメアリーを見て雅也は絶望した。

こうして、女装させられた雅也は【IS学園】に行くことになった。

終わり

狙われた最新型IS（後書き）

青いタヌキさん、雅也を 女装させれますよ。（笑）

一夏と雅也、色んな子に好意を抱かれていますので、気が合つかも。

姉って、兄貴より頼れる存在になっている。(前書き)

今回はあのキャラクター達が登場です。

姉って、兄貴より頼れる存在になっている。

「ここは【銀魂の世界】の江戸の町に、ある者がやってきた。それは……。」

『ここがお前の世界か』

黒山に乗った夜帝竜であった。

巨大な馬（機械でできている）と、それに乗っているのが仮面を付け、マントを着込んだ人だから当然目立った。

黒山が歩く度に、地面に足跡がくつきりと残されていく。

夜帝竜は何故、江戸の町にやって来たのかと言っと、ある目的があるからだ。

夜帝竜は懐から一枚の写真を取り出して見つめていた。

「……神楽……か」

写っていたのは、幼い神楽だった。

\*

「おい、ダメガネ」

『万事屋』で、神楽は酢昆布をしゃぶりながら、ダメガネこと新八を呼んだ。

「誰がダメガネだよ！」

‘ダメガネ’と呼ばれた新八は激怒した。

「銀ちゃん、いつになったら帰ってくるアルか？」

「さあー、わからないよ」

銀時が新機動六課でお世話になっている間、新八と神楽が留守番していた。

「たくつ、青いタヌキめ。ヒロインである私を除け者にするとはいい度胸アル」

「ちよつとちよつと神楽ちゃん、青いタヌキさんの悪口駄目だよ！  
苦情がくるよ！」

毒舌の神楽は容赦なく青いタヌキさんの悪口を言うと、新八は慌て叱りつけた。

青いタヌキさん、ごめんなさい。

「神楽ちゃん、それは間違っているわ」

新八の姉の妙も叱りつける。  
妙は遊びに来ていたのだ。

「真のヒロインは、この私よ。青いタヌキさん、次回ぐらい私を出さないと……雅也くんを可愛がってあげる」

妙は黒い威圧感を漂わせた笑顔で指を鳴らした。

「姉上も何脅迫しているんですか！ 『可愛がってあげる』って、絶対に別の意味で言っているでしょ！」

姉の暴拳に新八はすかさずツッコミを入れた。

青いタヌキさん、本当にごめんなさい！

すると、玄関の戸を叩く音がした。

「あっ、はい」

新八は戸を開けようとする、定春が代わりに玄関にいた。

「あっ、定春、駄目だよ！」

定春がまた噛みつきそうになると考え、止めようとするが、一足遅く、戸が開けられた。

「あー……」

案の定、定春が来客に噛みつこうとしたが、来客の手で、口元を押さえられてしまう。

「おいおい、腹を空かせているからって、私を食おうとするなよ」

来客は夜帝竜であった。

「す、すみません、大丈夫」

新八は夜帝竜の姿を見て驚いた。

「あ、あのう……どちら様ですか？」

「神楽って奴は、何処だ？」

「ちよっ、ちよっと！」

定春を押し退けた夜帝竜は勝手に上がり込んでしまうので、新八は慌てて止めようとするが、制止できなかった。

居間まで入った夜帝竜は神楽を見つけた。

「誰ネ？」

「お前が神楽か？」

「そうアル」

神楽と夜帝竜は互いを見つめあった。

突然の出来事な為、新八と妙は静に見守るしかなかった。

「……昔の私にそっくりだな……」

無邪気で生意気そうな神楽を見た夜帝竜は、昔の自分と重ねた。

「お前は誰ネ？」

「私は……鳳華。お前と同じ夜兔族だ」

夜帝竜は仮面を外し、本名で名乗った。

「夜兔族！？」

「あらあら」

新八は驚愕したが、妙はそんなに驚かなかった。

「鳳華？ 知らないアル」

「えっ、ハゲから聞いてないのか？」

「パピーから？」

ハゲとはパピー。パピーとは星海坊主のことである。

「あなたは星海坊主さんのお知り合いですか？」

「お知り合い以上の関係だ」

「お知り合い以上の関係？」

「まさか、お尻を合わせただけでなく、星海坊主さんの棒とあなたの穴を合わせた関係！」

「おおい、何ヤバイことを言ってるの、あんた!？」

妙の問題発言に新八は即座にツツコミを入れた。

「心配するな。穴の膜は破れていないから」

「あんたも問題発言するな！」

見ず知らずの相手でも、新八はツツコミを入れた。問題発言を言ったら、尚更である。

神楽には3人の会話の意味がわからなかった。

場が落ち着いたところで、神楽達はソファアに座りながら、夜帝竜の話聞くことにした。

夜帝竜は星海坊主の元弟子であったことを説明した。

過去のことを伏せて、現在は夜兎の傭兵となっていると偽っていたが。

「ふーん、パピーもすみ置きに置けないアルな。私がいながら、女を弟子に取るなんて」

「神楽ちゃん、そんなこと言うもんじゃないよ」

「そうよ。お父さんはお父さんなりに、彼女のことを考えて弟子

にしたんだから」

神楽はふてくさった。

それは自分を故郷に置いて、夜帝竜を弟子に取って、行動共にしていたことと、夜帝竜のことを話してくれなかったことに怒っていたのだ。

それを新八と妙は弁解した。

しかし、神楽には納得できなかった。

話した本人の夜帝竜も気まづくなってしまった。

しばらく沈黙が続いた。

「ああつ、もう仕方がねえな」

突如、夜帝竜は立ち上がった。

「神楽、私と勝負しな」

「「「えっ?」「」」

夜帝竜の言葉に、神楽達は呆気に取られた。

\*

江戸の町にある空き地。

神楽と夜帝竜は中央に立っていた。

2人の間にドラム缶が置か

れていた。

そんな2人を、空き地の側面で新八と妙と定春と黒山が見守っていた。

ちなみに新八と妙は黒山を見て驚愕した。特に定春が吠え続けた。

しかし、すぐに慣れた。

「えーと、今から何をするんですか？」

『力比べだ』

「力比べ？」

『夜 鳳華は口下手だから、行動で示そうとしているのだ』

「それで力比べ？」

『あの神楽も口下手と見受ける。あの者も、やる気だ』

黒山の言う通り、神楽の表情は本気であった。

「分かりやすく言えば、ぶつかり合えば良いってことね」

妙の問いに黒山は頷いた。

『始まるぞ』

神楽と夜帝竜は互いの手を握り、肘をドラム缶に置いた。

「負けないネ」

「こっちの台詞だ」

互いがにらみあつたところで、始めた。

「ふぬぬぬぬぬぬぬぬぬ〜！」

「くぬぬぬぬぬぬぬぬぬ〜！」

神楽は歯を食い縛り、夜帝竜は厳しい表情となつて、腕に力を入れる。

「す、凄い！ あの神楽ちゃんに歯を食い縛らせるなんて……。流石は夜兎の人だ」

神楽と付き合いが長い新八は、夜帝竜の力を見て驚いた。

夜帝竜と神楽の腕に血管が浮かび上がった。

それだけ、力を込めていたのだ。

（久しぶりだぜ、こんなに力のある奴とやりあうのは。けど）

（流石パピアの弟子アル。だけど、私は）

（（負けたくない>ネ<！））

2人は一気に力を込めた瞬間、ドラム缶が潰れてしまい、2人は横へと倒れてしまった。

「神楽ちゃん！」

新八と妙と黒山は2人の元へ駆け寄った。

血が滲みながら夜帝竜の手は神楽の手を押さえていた。

つまり、夜帝竜の勝ちであった。

『決まったな』

「おっしゃっ！」

夜帝竜は、手の痛みを気にすることなく自分の勝利を喜んだ。

一方、神楽は負けたことがショックなのか、落ち込んでいた。

「神楽ちゃん」

新八は神楽を励まそうとしたが、妙は止めた。

夜帝竜は、そんな神楽の様子を見かねて、近づいた。

「これで終わりか？」

「むっ」

この言葉に神楽はむっと怒った。

「すっきりしないなら、もう一度勝負してやっても良いぜ」

「んだとコラ！」

夜帝竜の挑発に神楽は激怒した。

「上等だ、コラ！ 今度はアタイが勝つね！」

神楽の言葉に、夜帝竜はにやりと笑った。

「うし、黒山」

夜帝竜は黒山を呼び寄せ、股がった。

夜帝竜は神楽に手をかざした。

「乗れ。 お前の勝負したい場所に案内しろ」

神楽は無言のまま、夜帝竜の手を握った。

夜帝竜はそのまま神楽を持ち上げて、自分の前に乗せた。

「行くぜ！」

黒山は地を蹴るように走り出した。

「おおっ！」

神楽は黒山の迫力があり、地を削る走りに驚いた。

黒山はそのまま走って行き、新八と妙と定春は残された。

「どっつする、新ちゃん？」

「僕らも定春に乗って追いかけましょう。 定春」

「おん！」

定春は新八と妙を乗せて、黒山を追いかけた。

まずは……。

「勝った！」

「チキシヨー！」

神楽と夜帝竜は賭博場で、どれくらい掛け金を稼げるのかの勝負をしていた。

結果、神楽が勝った。

新八と妙は驚いた。

ちなみに、黒山と定春は外で待機していた。

「次、大食いだ！ 大食い勝負だ！」

「ふん、得意分野アル」

悔しがる夜帝竜の挑戦を受けた神楽。

んで……。

「勝ったぜ」

「くっ！」

大食い対決「主食はカツ丼」の結果、夜帝竜の勝利だった。

「ま、まさか、あの神楽ちゃんが負けた!？」

「はじめてだわ」

新八と妙は、大食いの神楽が敗北したことに驚愕した。

「親父、カードの支払いで良いか？」

「はい、まいど」

支払いは夜帝竜が払った。

「さて、次はなんだ？」

「次は………酔昆布しゃぶり勝負ネ」

神楽と夜帝竜は酔昆布をしゃぶり続けた。

あまりに地味な勝負なので、新八達はつまらなく鑑賞した。

「……酸っぱ」

夜帝竜自身もあんまり乗る気がなかった。

「終わった！」

酢昆布をしゃぶりきった神楽が勝った。

「楽しいか？」

「私、酢昆布が大好きネ」

「あっ、そう」

なぜ酢昆布が好きなのか、夜帝竜には理解出来なかった。

とまあ、そんなことは置いていて。夜帝竜と神楽の勝負はまだ続いた。

かけっこ、メンコ、指相撲、痰飛ばしなどと段々低レベルな勝負になってきた。

ちなみに、おっぱい比べでは夜帝竜が圧勝した際に、神楽だけではなく妙も腹が煮えくり返ったそうなの。

そして……。

「はあー、はあー、はあー……」

夜帝竜と神楽は大の字になって、原っぱで寝転んだ。

新八達はそんな2人を静かに見守っていた。

「……勝負は私の勝ちだ……」

数多くの勝負した結果、夜帝竜が勝った。

「……仕方がないネ……」

神楽は潔く負けを認めた。

「認めてやるヨ。お前がパピ一の弟子アル」

「そんじゃ、勝者の言うことを聞いて貰おうか？」

「何アルか？」

「……義理の姉妹の契りを結んでくれ……」

夜帝竜の頼みに神楽も新八達も驚いた。

「……師匠の星海坊主は、お前をいつも1人に行っていることを申し訳ないと話していた。兄貴のことも話してくれた。それで、本当の娘のように育てた私に頼んだんだ。『鳳華、神楽ちゃんのお

姉ちゃんになつてくれないか？ お前にはその資格が充分にある。  
勝手な頼みを聞いてくれないか？』って。それで私は、お前と  
自分自身が納得できるかどうか確かめるって、保留にした」

「そうだったんですか」

新八達は夜帝竜の考えに納得した。

「それで……神楽ちゃんはどつする？」

妙は、恐る恐ると神楽に訊ねた。

考えた神楽の決断は……。

「……仕方がないアル……」

顔を染めながら承諾した。

これを聞いた新八達は安心した。  
もちろん、夜帝竜も安心したと同時に喜んだ。

【スナックお登勢】で夜帝竜と神楽は姉妹の契りを結ぶための盃  
を交わした。

その後、新八達は楽しく過ごした。

主人同士が仲良くなったためか、黒山と定春も酒を飲んで暴れた。  
肩を組む夜帝竜と神楽の姿は本当の姉妹に見えたそうなの。

翌朝……。

「じゃあな、神楽」

立ち去る夜帝竜は黒山に乗りながら、神楽に別れを告いだ。  
新八、妙、定春も見送るために一緒にいた。

「じゃあな、姉貴」

「あ、忘れてた。ほれ」

夜帝竜はあるものを神楽に手渡した。

「何アルか？」

「胸がでかくなる、妖精の聖乳」だ。それを飲んで、私のような乳になれ」

「マジアルか!？」

これを聞いた妙の目が光った。

「ああつ。じゃあな」

黒山を走らせ、夜帝竜は去っていた。

「あばよ、姉貴！」

神楽はいつまでも手を降り続けた。

「神楽ちゃん」

「何アルか？」

「私にも飲ませてくれる」

「いや、これはアタイが貰ったものだから……」

「少しくらい、良いでしょ？」

そう言いながらも妙は神楽の持つ妖精の聖乳を掴む。

「嫌だアル！」

「神楽はあわてて逃げ出した。」

「待ちなさい！」

乳欲しさに妙は神楽を追いかけた。

新八と定春はやれやれとため息をついたそうな。

終わり

姉って、兄貴より頼れる存在になっている。(後書き)

改めて……青いタヌキさん、本当にごめんなさい！

いくら銀魂風とはいえ、神楽の暴言はやり過ぎたと思います。

雅也くん、妙から逃げてください！

劉備、新機動六課側に合流すること（前書き）

青いタヌキさん、ご希望のお話第一弾です。

劉備、新機動六課側に合流すること

とある森の中にある一行がやってきた。

桃色の長髪で巨乳の少女“劉備”。《蜀》の君主である。

黒い長髪で巨乳の少女“関羽”。

赤髪に虎の髪飾りでちびっこの“張飛”。

青い髪で露出の高い衣装“趙雲”。

そして、劉備を乗せている機械仕掛けの翠色の馬、魔導騎馬の“翠林”。

「あれは？」

劉備達は前方にあるものを見つけた。

それは、黒き神を出現させた機械であった。

翠林は機械に近づき、嗅ぐように鼻で擦った。

「翠林殿、それはなんなのだ」

関羽は不思議に訊ねた。

『この機械に、強大な魔力と大いなる別の力を宿しています』

「強大な魔力と大いなる別の力？」

今一つ理解できなかった劉備達。

『魔力とは、以前に話した魔法の力。そして、別の力は今から調べなければなりません』

「どうやって調べるんですか？」

『この機械を分解します』

「分解って？」

張飛は関羽に訊ねてみた。

「バラバラにすることだ」

「なんだ、それなら鈴々におまかせなのだ！」

張飛は、待ってましたとばかりに、武器「蛇矛」を振り回し、機械に近づぐ。

『だめです。壊したら調べるものが調べられま』

翠林は張飛を止めようとするが、張飛の蛇矛は機械に当たろうとする寸前だった。

「ありゃ？」

ところが張飛は突然止まった。

「う、動かないのだ！」

「ええっ？」

張飛はまるで時間が止まったように動けなかった。これを見た劉備達は驚いた。

「いやあ、危なかつたな」

劉備達の前に現れたのは、‘特務エスパー’だった。赤髪の少女の“薫”と黒髪の少女“葵”と白髪の少女“紫穂”であつた。

3人は超能力で張飛の動きを止めたのだ。

『妙な力を使いますね、何者ですか？』

翠林は恐れずに訊ねた。

「怪しい者ではありません」

眼鏡をかけた男性、薫達の上司“皆本”も現れた。

「何者だ？」

関羽は訊ねた。

「申し遅れました、‘バベル’の特務エスパーの主任の皆本です」

「バベル？」

「おおっ、ここにいたのか」

「バベルの皆さん、行くのが早い」

次にメタナイトとドゥーエが現れた。

その時、メタナイトを見かけた関羽は驚いた。

「お主、カーピィ殿に似ている」

関羽は以前にカーピィと協力して、クラブマスターを退治したことがあったのだ。

「む、君はカーピィを知っているのか？」

「はい、あなたはカーピィ殿の知り合いか？」

「うむ、良く知っている」

「それで、彼女達は？」

ドゥーエは皆本に劉備達のことを訊ねた。

「おおっ、よく見れば、魔導騎馬もいるではないか」

メタナイトは翠林の存在に気づいた。

『私のことをご存じみたいですな』

翠林の問いにメタナイトとドゥーエは頷いた。

「魔導騎馬の紅火は“青い死神”と契約したのだ」

『そうですか。 私はこの劉備殿と契約しました』

鼻の先で、劉備を指した。

「そうか」

「あのう、この世界に何が起きているのか、教えてください」

関羽は真つ先にメタナイトに訊ねた。

「それは」

「ああつ、ここにいましたか」

甲冑を着こんだ金髪の少女、“セイバー”が紙袋いっぱい詰めたんだシュークリームを食べながら現れた。

「ああつ、あなたはセイバーさん」

劉備はセイバーを見て驚いた。

「おおつ、劉備殿」

セイバーも劉備を見て驚いた。

武者修行をしていたセイバーは迷子になった劉備を助けたのだ。

「ここで、また会えるとは、なんと言う偶然」

「はい、びっくりしました」

「桃香様、この方は？」

「はわわ、見たことの無い服です」

「うむ、弄りがいのありそうだな」

「って、何を言っているんですか!？」

それぞれいろんな話で盛り上がった。

「こら! 鈴々を元に戻すのだ!」

張飛はすっかり忘れられていた。

張飛が超能力から解放されてすぐに対話を始めた。

まずは、互いの自己紹介をして、今回の事件の経緯から、この恋姫世界で起きたこと、そして、暗躍する悪の組織のことを聞かされた。

「なるほど、我らの世界だけでなく、異世界でも異変が起きているとは……」

「では、村を襲ったのは、??機関という悪の組織の者が」

「その通りだ」

『そして黒き神の復活の影響により、私達、魔導騎馬は蘇ったのですね』

「貴女の仲間の“紅火”は青い死神の“秋本優太”の主になっているわ」

『そうですか、あの紅火も契約者を見つけましたか』

— 安心して呟いた。

「へえー、私の他にも契約者がいるんですね、モグモグ」

「凄いな、モグモグ」

「いいな、私も魔導騎馬に乗りたいな、モグモグ」

「残りはあと二頭でしたね、モグモグ」

「食べながら話さない」

劉備と張飛と薫とセイバーはシュークリームを食べながら話していたので、紫穂は注意した。

「えっと、白くて空を飛べるのが、白風さん。黒くて大きいのが、黒山さんでしたよね？」

『はい』

翠林は劉備の問いに答えた。

「私、その黒くて大きい、黒山が良い！」

「鈴々は空を飛べる、白風が良いのだ！」

「いや、白なら私にふさわしいです」

「駄目なのだ！」

セイバーと張飛は白風の所有権で争った。

「後でケーキという美味しいものを食べさせます」

「譲るのだ」

張飛は、あっさり引き下がった。

「はやっ！」

「空を飛ぶ馬よりケーキを選んだわね」

葵と紫穂は張飛に呆れた。

「待って、ケーキはどう用意するの？ まさか」

「お願いします」

「こっちが用意するの!？」

セイバーはドゥーエに頼んだ。

「自分で用意しないんかい！」

「図々しいわね」

今度はセイバーに呆れる葵と紫穂だった。

「ケーキって、美味しいんですか？」

「はい、甘くとろける焼き菓子です」

それを聞いて、ケーキを食べてみたい劉備は翠林を見た。

『……私とお菓子を交換とかはしませんよね？』

翠林は契約者である劉備を疑った。

「失礼なことを言わないで下さい！ 貴女を裏切りません！」

劉備の一括に、皆は感心した。

「ただ、セイバーさんを乗せたら、ケーキが食べれるかなと思っただけです」

これを聞いて、皆はずっこけた。

「そんなに食べていると、太りますけど、良いですか？」

「あっ、そうなんですよね。けど、誘惑には勝てないですよ」

「なら、食べたなら体を動かして、痩せましょう」

「そんなんですよね。……って、誰ですか？」

劉備に話しかけてたのは、魔獣“マッチョさん”だった。

「魔獣！」

「魔獣？」

「敵よ！」

ドゥー工言葉を聞き、関羽や趙雲らは武器を構えて警戒した。

「私はマッチョさん。私と踊って痩せれるか、勝負してみませんか？」

「はあ、何を言っているのだ？」

関羽は意味が理解できず、首を傾げた。

「私は闘いませんよ。戦うのはこの人です」

マッチョさんが“この人”を紹介した。

それはパソコンやゲームに出てくるウィンドウだった。

「これは、“バトルウィンドウズ”！」

「バトル？　なんだそれは」

趙雲は不思議に訊ねる。

「色んなモンスターを戦わせる、厄介な奴だ」

《フッフッフ、私は昔のバトルウィンドウズではない。私は、バトルウィンドウズ2011となったのだ》

「2011？」

ドゥーエは首を傾げた。

関羽らにはわからなかった。

《では、早速。魔法使いが現れた》

バトルウィンドウズ2011のウィンドウに魔法使いが現れた。

「な、なんだ、絵が現れたぞ！？」

これには関羽らは驚いた。

さて、マッチョさんというと……。

「私ができるのは、ダンス　つまり踊りです！」

腰を振って、ダンスを示す。

「私と踊りで勝負しましょう。痩せた方が勝ちですよ」

「……そんなふざけた勝負、誰が」

「受けます!」

受けたのは、劉備だった。

「ちょっと、劉備はん!」

「畏に決まっている!」

葵と皆本は止める。

「だって、私は剣が上手くないから、真剣勝負は不利だもん。けど、踊りならできそうだもん。それに……」

「「それに?」」

「痩せたいんだもん!」

（）一番の理由はそれかい!（）

「それでは、いきますよ!」

劉備対マッチョさんのダンス対決が始まった。

一方、メタナイト、ドゥーエ、セイバー、関羽、張飛、趙雲がバトルウィンドウズの相手をする。

《魔法使いの魔法攻撃》

魔法使いが魔法攻撃をした。

「わっ、攻撃してきたのだ!？」

「これが奴の力だ」

「この!」

張飛は蛇矛で攻撃するが、空振りした。

「駄目だ、ウィンドウにいる時は攻撃は受け付けない。ウィンドウに出ている時が攻撃を受ける」

「って、そんな簡単に出るわけ」

趙雲が言いかけると、ウィンドウから魔法使いが飛び出た。

「あつたのだ!」

張飛は魔法使いを叩いた。

渾身の一撃だったため、魔法使いはやられた。

《魔法使いがやられた》

「何を呑気に解説しているのだ？」

「あれが、奴のルールなのだ」

《悪魔の使いが現れた》

次は、“悪魔の使い”が現れた。

「今度は私が相手だ」

関羽が青龍エン月刀を構えるのだった。

一方、劉備とマッチョさんのダンス対決は白熱した。

2人は音楽に合わせて、見事に踊っていた。

しかも薫、葵、紫穂、皆本も踊っていた。

「なんか、楽しいな」

「言ってる場合か！」

「……おかしい、止めようと思っても止められない」

「これは、罠だ！」

「ふふっ」

マッチョさんは笑った。

「そう、私の能力は、自分の踊りで他の人も踊らせることができるんですよ。音楽が終わるまで、踊り続けます」

「そ、そんな！」

薫達は、踊りながらダンス対決が終わるのを待つしかなかった。

「てりゃー！」

関羽は悪魔の使いを倒した。

《レッドドラゴンが現れた》

「今度は竜か」

「一緒にやりましょう」

メタナイトとセイバーは剣を構えた。

《レッドドラゴンの炎の攻撃！》

燃え盛る炎を吹いてきた。

メタナイトとセイバーは跳んで避けた。

レッドドラゴンがウィンドウから出てくると、すぐに同時攻撃をした。

「はあー！」

同時とも渾身の一撃を喰らわせ、レッドドラゴンは倒された。

《レッドドラゴンがやられた》

「また呑気に解説か」

趙雲も呆れた。

《グランドドラゴンが現れた》

「む、さっきより手強そうだ」

「なら、今度は全員で」

メタナイト達は身構えた。

《グランドドラゴンの炎の攻撃！》

グランドドラゴンの炎は、レッドドラゴンより燃え盛る上に大きかった。

「うわっ！」

グランドドラゴンの炎で爆発し、メタナイト達は吹き飛んだ。

「愛紗ちゃん！」

「よそ見しない。助けたかったら、私に勝ちなさい。踊り終えても立っていられたらあなたの勝ちよ」

「くっ…」

劉備は悔しかった。

自分の浅はかに受けたこと、何もできないこと。

今できることは、このダンス対決に勝つことしかない。  
劉備は諦めずに踊り続けた。

吹き飛ばされて倒れるメタナイト達。

「っ、強い…」

「これが魔獣というものか」

関羽と趙雲はバトルウィンドウズ2011の強さを実感し、魔獣の恐ろしさを知った。

「うっっ…」

セイバーは唸った。

「どうした？ 急所に当たったのか？」

「お腹が空きました」

この言葉を聞いたメタナイトは頭を打った。

「っつて、さっき食べていたではないか！」

倒れながらも関羽はツツコミを入れた。

「先ほどの攻撃で、消耗しました」

《セイバーは、満腹度80%消耗した》

「わかるのか!?!」

流石のメタナイトも驚いた。

「……仕方がない、これを食べ」

関羽は懐から肉まんを取り出し、セイバーに渡した。

「いただきます」

セイバーは肉まんを食べると、

「グハッ!」

倒れてしまった。

「セイバー!」

「何を食べさせたの!?!」

メタナイトは絶句し、ドゥーエは関羽に訊ねた。

「私が作った肉まんだ」

《セイバーは不味い肉まんて自滅した》

「『不味い』とはなんだ!」

関羽は激怒した。

「いや、愛紗の料理は……」

「不味いのだ」

関羽の料理が不味いのは、趙雲と張飛は知っていた。

すると、セイバーが立ち上げたが、様子がおかしかった。

「セ、セイバー？」

セイバーは黒くなった。

《セイバーはセイバーオルタになった》

「「ええっ!?!」」

メタナイトとドゥーエは驚愕した。

もちろん、事情を知らない関羽達は首を傾げた。

ウィンドウからグランドドラゴンが出てくると、

「消えなさい」

セイバーオルタは剣を振り上げて、グランドドラゴンに目掛けて、真つ二つ斬った。

グランドドラゴンが爆発した後、セイバーは元に戻った。

メタナイト達は啞然するしかなかった。

《魔物の群れは全滅した。セイバーらの経験値は2011を得た。セイバーはレベルが上がった。セイバーは『不味い料理でオルタ化』するという技を習得した。セイバーは満腹度が二倍になった》

バトルウィンドウズ2011は消えた。

「……勝ったのか？」

関羽はメタナイトに訊ねてみた。

「その通りだ」

「……あまり嬉しくない技を覚えてしまいました。しかし、満腹度が上がれば、美味しいものがいっぱい食べれます」

「いや、こちらにとっては困る！」

メタナイトは珍しくツツコミを入れた。  
それは、食費が上がってしまうからだ。

こうして、バトルウィンドウズ2011との闘いが終わった頃、劉備とマッチョさんのダンス対決は……。

「……なかなかやりますね……」

マッチョさんは倒れ、劉備は立ち上がっていた。

メタナイト達が闘っている間、劉備は踊り続けていた。

劉備は持ち前の『諦めない気持ち』で踊り続けたのだ。

「や、やっと終わった」

劉備と同じ踊り続けた薫達は、ぱったりと倒れた。

「ふー……」

劉備が倒れそうになると、翠林が支えてくれた。

『よく頑張りましたね』

「……うん」

『自分の責任を見事に果たせましたね』

「ううん、見事じゃないよ。皆を巻き込んだもん」

『しかし、終わらせたのも、あなたです。後はあなたの想いを私に込めてください』

劉備は翠林の額に手を当てると、翠林が翠色に輝き出す。

そして、翠色の輝きは辺りを包み込んだ。

「あれ、疲れが取れた」

「ほんまや」

「うん、翠の輝きを浴びたら、暖かくて優しかった」

「……これが、魔導騎馬の力が……」

皆本は翠林の力に感心した。

こうして、一段落ついた。

\*

「私、新機動六課に行きますね」

メタナイト達に告げた。

「理由は？」

「愛紗ちゃんを助けてくれた、カービィさんやなのはさんを恩を返したい。翠林さんに、お友達である紅火を会わせたいからです。良いよね？」

「はい、私も是非恩返ししたいです」

「美味しいものを食べたいのだ」

「面白そうなので、賛成です」

関羽達は賛同した。

「わかりました。この魔獣マッシュヨハンを連行する私が同行します」

セイバーが同行を申し込んだ。

「では、手配しよう」

「よろしくお願いいたします」

こうして劉備達、恋姫と翠林は新機動六課に合流した。

【おまけ】

「モグモグ、美味しいのだ」

「うむ、酒があれば良いのだが」

「星、贅沢を言うな」

「本当にケーキって、美味しいです」

「他にもありますよ」

「ペポ」

着いて早々、劉備達は機動六課の食堂でご馳走になっていた。しかも、セイバーとカービィも一緒に食べていた。

紅火はそんな劉備達を呆れて見ている。

「あれが、あなたの選んだ主？」

『はい、素晴らしい主です』

と翠林は笑って答えた。

終わり

劉備、新機動六課側に合流すること（後書き）

青い夕又キさん、満足できました？  
次もお楽しみに！

黄忠、クツパ軍団を支配したのこと（前書き）

青いタヌキさんの希望、第二弾です！

## 黄忠、クツパ軍団を支配したの事

黒き神により混乱にさらされた【恋姫世界】はようやく落ち着きを取り戻していた。

恋姫世界の一部の地を治めている《蜀》。

その地のある屋敷の謁見の間で、軍師で、帽子を被った少女、孔明（真名：朱里）と茶髪のポニーテールの少女、馬超（真名：翠）と薄紫の長髪の年長者

「年長者？」

笑顔なのに怖い威圧感を漂わせながらナレーター（つまり私）に矢を向ける。

ではなく、若く麗しきお姉様の黄忠（真名：紫苑）が深く頭を悩ませながら席に座っていた。

「まったく、いったいこの世界はどうなってんだよ」

馬超は苛つくあまり、机を叩いた。

「まあまあ翠ちゃん、落ち着いて」

「だってよ、各地で訳のわからない軍団が戦を仕掛けてくるわ。あたしが苦戦中に各地で地震が起きた後に、化け物が現れたんだぜ。その上、劉備と愛紗と鈴々と星まで行方不明になってしまった」

\*

そう、‘??機関’が恋姫世界で“黒き神”の復活させたことで各異世界が融合してしまった。当然、復活した現地であるこの世界の被害は酷かった。

それ以前に??機関は三国を制圧しようと戦を仕掛けてきた。いくら普通の人より武芸が優れている恋姫でも、‘魔法’や‘科

学’を扱う??機関相手に苦戦を強いられた。  
そこで三国は同盟するまでに至った。  
しかし、それでも戦況は変わらなかつた。もう駄目かと思われ  
たが

\*

「一貫の終わりかと思つたら、なんであいつらは退却したんだ」  
と首を傾げて考えた。

「そうよね」

あと一步のところ、??機関は何故か退却したので、孔明らは  
不思議に思つた。

それは、首領の“マーシャル”が青い死神に逮捕されてしまい、  
事実上、組織が壊滅したからである。

「恐らく、自分達の本陣に何かあつたのか、あるいは別の策の為に  
退却したのでしょう」

孔明は考えられる点を述べてみた。

「わかりませんが、警戒は怠らないようにしましょう。もちろん、  
兵の皆さんの休養も兼ねて」

「劉備達の搜索は?」

孔明に訊ねる。

「今は何の手がかりが無い以上、迂闊に搜索隊は出せません。……

劉備さん達を信じましょう」

馬超と黄忠は、孔明の意見を聞いて、不本意ながら承諾した時、

「一大事です!」

1人の兵士が慌てて駆け込んできた。

「どうしましたか!??」

「て、敵襲です!」

「敵襲!?」

と思わず立ち上がった。

「奴らめ、この機を狙っていやがったな!」

「迂闊でした!」

孔明らは焦ってしまう。

「いや、それが、奴らとはまったく違うものです!」

「ええっ!?」 この報告を聞き、孔明らはさらに驚愕した。

「あ、新たな敵ですか!」

「は、はあ……」

新たな敵の出現にも関わらず、兵士の表情はあまり焦ってなかった。

「な、なんだよ、どんな敵だ?」

「……害があるかどうか、ご判断をしてください」

孔明らは兵士の言葉に不思議を抱いた。

\*

屋敷の中庭に、ポツリと座る幼女がいた。

黄忠の娘の“璃々”である。

璃々はおやつのおまんを食べようとした時に、

「あっ!」

壁の上に立っている生物に気付いた。

その生物は、【マリオシリーズ】の敵キャラのキューちゃんだった。

「可愛い!」

璃々はキューちゃんに近づくと、キューちゃんも璃々に近づいてみた。キューちゃんの方が大きかった。

璃々はおまんをちぎって、キューちゃんに差し出してみた。

「食べる?」

キューちゃんは、ぱくりと餡まんを食べると、美味しかったので喜んだ。

「えっへへ」

キューちゃんの笑顔で、璃々も笑顔になった。

\*

孔明達は急いで外門に駆け付けた。

「なっ!？」

孔明達は驚愕した。

【マリオシリーズ】の敵キャラのカメックを筆頭にしたり、クツパ軍団だった。

「あなた方は何者なんですか？」

「我々はクツパ軍団、怪しい貴様らを退治しに来たのだ!」

魔法の杖を向けながら答えた。

「はあ? 怪しいのはお前らのほうだろ!」

確かに、人である彼女らから見れば、明らかにクツパ軍団のほう  
が怪しい。

「いやいや、我々から見れば、貴様のほうが怪しい」

こちらからも見れば、彼女らのほうが怪しい。

「行け、奴らをやつつけるのだ!」

クツパ軍団は突撃した。

「だ、仕方がねえ、やるぞ」

「はい!」

馬超と黄忠はすぐに応戦する。

「いくぞ!」

まずはクリボアの頭突き攻撃をする。

「えい、えい」

「きゃー、きゃー」

黄忠は弓「颯鵬」でクリボー達を射ぬ射た。

「うりゃー!!」

ノコノコ達は甲羅に引っ込み、回転しながら馬超に向かっていった。

「なんの!」

「あれ!？」

馬超は難なく、ノコノコ達を武器「銀閃」で打ち返した。

「喰らえ!」

今度はハンマーブロス達がハンマーを無数に投げる。

「翠さんは、あれを全部打ち返してください。その際に紫苑さんはあの亀さんを射ぬ射てください」

孔明の指示通りに、馬超は無数のハンマーを、銀閃を回転させて打ち返した。

ハンマーブロスは驚愕すると、その隙を狙って、ハンマーブロスを射ぬ射た。

「ぐぬぬ、次!」

次はボム兵達が前進した。

頭の導火線から火が吹いていた。

「導火線……ということは爆弾! 紫苑さん、あの導火線を射ぬ射てください!」

「わかったわ!」

黄忠はボム兵の導火線を次々と狙い射て射た。

導火線を切られたボム兵達は逃げ帰った。

「な、なんと、導火線だけを狙うとは!？」

黄忠の神業にカメツクは驚愕した。

「なら……これならばどうだ!」

カメツクは魔法で、砲台を出した。

孔明らは驚いた。

「撃て!」

砲台は、キラーを発射した。

発射されたキラーは勢い良く、屋敷に当たって爆発した。

「うわっ！」

「きゃあ！」

「ひゃっ！」

孔明らは、爆風に吹き飛ばされる。

「な、なんて、攻撃なんだ！」

「危ないわ！」

「はわわ、こんな攻撃見たことありません」

流石の孔明も、予想外の攻撃に焦ってしまう。

「ぎやはっはっ、参ったか？」

カメツクは高笑いする。

とそこへ、キューちゃんが現れた。

「おおっ、良いタイミングじゃ！ キューちゃん、大きくなれ！」

カメツクは魔法でキューちゃんを大きくした。

だが、カメツクは気付かなかった。 キューちゃんの背中に、璃々が抱きついていていたことに。

「えっ？」

キューちゃんと璃々ちゃんは巨大化した。

「うわっ、大きくなっちゃった」

「キュー！」

状況を理解していない璃々は大きくなっちゃったことを喜んだ。

璃々は足を踏む度に地響きを起こしてしまう。

「きゃー、璃々、止めなさい！」

「はわわ！」

「きゃーきゃー！」

もう敵も味方も関係なく地響きで揺れてしまう。

「こらっ、あんたの娘か！？ 早く止めさせるんじゃ！」

「あなたが大きくしたのでしょ！ 娘を元に戻しなさい！」

「先に止める！」

「先に戻して！」

カメツクと黄忠は口論を始めた。

「いいから止める、おばさん！」

「あつ……」

と孔明と馬超は啞然した。

突如、強大な威圧感を漂わせる黄忠。

カメツクやクリボー達は恐怖した。

そして璃々とキューちゃんも恐怖のあまり止まってしまつた。

「……誰がおばさんですって？……」

黄忠はずんずんと歩き出す。

向かう先は、もちろんカメツクである。

「う、撃て！」

恐怖のあまり、カメツクは黄忠に向けて、キラーを発射した。

キラーが黄忠に近付くと、

「ああん？」

と睨み付けると、キラー達は泣きながら引き返し、遠くへと飛んでいった。

「ええっ!？」

カメツクは驚いている間に黄忠が目の前まで、やって来た。

「……覚悟はよろしくて？……」

死刑を執行する意気込みで訊ねると、

「ごめんなさい！」

カメツクはすぐさま土下座をした。

他のクツパ軍団も黄忠に土下座をした。

キューちゃんも泣きそうになると、璃々は頭を撫でる。

「お母さんを怒らせたら駄目だよ」

キューちゃんは震えながら頷く。

かくして、黄忠のおかげで、クツパ軍団は降伏し、璃々とキューちゃんは元に戻った。

そして……、

「みんな、頑張ってたね」

「はい」

カメツク達、クツパ軍団は罪滅ぼしの為に、蜀の屋敷で働いたそうなの。

終わり

黄忠、クツパ軍団を支配したのこと（後書き）

いよいよ、第三弾です！

曹操、秘宝をドロツチェ団に狙われてしまうのこと(前書き)

いよいよ第二弾です！

## 曹操、秘宝をドロツチエ団に狙われてしまうのこと

黒き神により混乱にさらされた【恋姫世界】はようやく落ち着きを取り戻していた。

恋姫世界の一部の地を治めている《魏》。

主である金髪のくるくるツインテール少女、“曹操（真名：華琳）は疲弊した魏の兵士達を連れて帰還した。”

屋敷の謁見の間で曹操は苦虫を噛むような顔で玉座に座っていた。そんな曹操を心配で見っていたのは、双子の夏侯姉妹とちびっこの許緒であった。

眼帯を付けた黒髪で長髪の方が姉の“夏侯惇（真名：春蘭）”。

青髪で短髪の方が妹の“夏侯淵（真名：秋蘭）”である。

「何なの、あの訳のわからない軍団は」

訳のわからない軍団とは、‘？？機関’のことであった。

「まさか、我が魏が……他の国と同盟を組んでも苦戦するなんて」

今までになかった強敵に曹操は頭を悩ませた。数多くの戦を勝

利し続けた魏であったが、？？機関は魏に いや、この世界には無い‘魔法’と‘科学’を使い、戦を勝利した。

いくら普通の人より武芸が立つ‘恋姫’でも苦戦するしかなかった。

最終的に、三国が同盟を結んで対抗したが、それでも苦戦を強いられた。

「申し訳ありません、私達にもっと力があれば……」

夏侯惇は深く曹操に詫びた。

「春蘭、頭をあげなさい。……今度の相手はあまりに未知な上に、見たことの無い力や武器まで使っていたわ。こればかりは私 いえ、私達にはどうにもならなかったわ」

曹操は優しく夏侯惇を慰めた。

「華琳様」

夏侯惇は曹操の優しさに触れて、涙を流した。

「しかし、何故急に奴らが退却したのか、わかりません」

夏侯淵は疑問に思っていた。

「？？機関が退却した理由は、“黒き神”が青い死神に倒された上に、首領の“マーシャル”が逮捕されてしまったからである。

「私の強さに恐れをなしたのだ！」

「流星は春蘭様！」

夏侯惇は高笑いをし、許緒は褒め称えた。

「確かに、姉者は奴らを圧倒してたな」

「どうやら、夏侯惇の強さは？？機関を圧倒していたようだ。」

「しかし、また戦う際には姉者が苦勞し、一番狙われやすくなる。

華琳様もそう思いでしょ？」

「そうね、春蘭ばかりに苦勞させる訳にはいかないわ」

華琳は立ち上がり、謁見の間から出ようとする。

「華琳様、どちらへ」

「我が曹家に伝わる秘宝を取りに行くのよ」

「秘宝？」

夏侯惇達は首を傾げた。

\*

曹操は、付き添う夏侯姉妹と許緒と共に地下へ続く石の階段へと降りる。

「華琳様、ここは？」

「秘宝の隠してある部屋への階段よ」

「秘宝？」

夏侯惇達は驚く。

「知らないのは無理はないわ。この秘宝は、我が曹家にしか伝えられないものだから」

「どんな秘宝なんですか」

許緒は訊ねる。

「不思議な羽毛扇、名は『蒼天翼』」

「蒼天翼？」

3人の家臣は首を傾げた。

曹操は階段を一段ずつ降りながら語り始める。

「その名の通り、蒼天のように蒼い翼にふさわしい羽毛扇。その羽毛扇を仰ぐと自在に天を操ることができる不思議な羽毛扇なのよ」

「天とは……天気ですか」

「その通りよ」

「お天気を操れるなんて、凄いや」

「うむ、天気も戦には重要だ。それを操れば心強い」と驚いたり、納得したりした。

「しかし、そんな凄いものがどうして隠してあるのですか？」

夏侯惇は疑問に思った。

確かに、天気を操れる蒼天翼を使えば、今までの戦は難なく勝つことができたはずだ。

「凄いものだからこそ、狙われやすいわ。欲に満ちた愚か者どもが、こちらを一気に襲い掛かるわよ」

「なるほど」

夏侯淵は納得する。

しかし、夏侯惇と許緒は理解できなかった。

曹操はそれに見かねて

「……貴女達がいるから、使う必要は無いわ」と言うのと夏侯惇と許緒は喜ぶ。

「けど、今回ばかりは使わずにはいかないわ」

心を切り替えたところで、曹操達は秘宝の眠る扉にたどり着く。

「鍵を開けるわ」

曹操はドク口型の紙止めを外し、扉の窪みにはめた。

「それは鍵だったのですか!？」

夏侯淵は驚いた。

曹操はドク口を回すと、ガチャンと鍵が解かれた。  
「開けるわよ」

曹操が扉を開けようとした時、

「お待ちください」

夏侯淵がそれを止める。

「どうしたの？」

「扉の向こうから……なにやら音が聞こえます」

「何ですって!？」

曹操や、夏侯惇と許緒は耳を当てる。

「……本当だ、聞こえます!」

「……これは鳴き声か？」

聞こえてくるのは、鳴き声のようなものだった。

「ちゅーちゅー……鼠だ!」

許緒は鳴き声の主は鼠だと気付いた。

「まあ、鼠の分際で、秘室に近づくなんて!」

曹操は大事な秘室に鼠が寄り付くことに腹を立てた。

「なら、すぐに追い払いましょう」

夏侯惇は勢いよく扉を開けた。

「なっ!？」

曹操達は驚いた。

曹操達が見たものは、赤いシルクハットとマントを身に付けた  
ドロツチエ。

サングラスと赤いスカーフを付けたスピン。

機械に乗っている、眼鏡を掛けた白い髭のドク。

何故か肉まんを食べている眼帯を付けた巨漢のストロン

そして、青、黄、緑のバンダナを付けたたくさんのチューリン。

奴らは鼠の『ドロツチエ団』だった。

「み、見つかったんも！」

「ね、鼠が喋った！」

鼠が喋ったことに、曹操達は驚いた。

「な、何者なの!？」

すぐに気持ちを切り替えて曹操は訊ねた。

「ふっふっふっ、我は世界を股に駆けてお宝を見つける『ドロツチ  
エ団』! 団長のドロツチエだ」

「その団長がここへ何しにきたの？」

「決まっている、この蒼天翼をいただきに参上しに来たのだ」

ドロツチエは蒼い大きな羽毛扇、蒼天翼を見せた。

「ふっふっふっ、我が曹家に伝わる蒼天翼を奪うなんて、とんだ命  
知らずね」

曹操は不敵に笑いながら威圧感を漂わせた。

その威圧感にドロツチエ達は怖じ氣ついた。

「それを返しなさい」

「か、簡単に返すわけにはいかないな」

恐怖で震えるドロツチエは、なんとか強気ている。

「も、者共、行け！」

ちゅーちゅーと鳴きながらスピンのストロン、チューリンは曹操  
達へ向かっていた。

夏侯惇達はすぐに武器を構える。

1人ずつ勝負をした。まずは……

「チュツチュツ、俺様の速さを見切れまい！」

スピンは夏侯淵の周りを高速で走る。

その高速で、何人もいるように錯覚しそうだった。

「どうだ、見切れなければ攻撃」

夏侯淵は長矢「餓狼爪」で、あっさりとスピンを矢で射抜く。

「安心、急所は外してある」  
急所は外してあると言いながら、スピンの額に矢が刺さっている。  
「うそ、なぜ見切れたチユか？」  
痛がりながら訊ねた。  
「その程度の速さを射抜けないで、弓など扱えるか」  
「そういうものでチユか……ガクッ」  
スピンは気絶した。

### 夏侯淵の勝ち

「んも〜！」  
「うりゃ！」  
許緒とストロンは取っ組み合い、互いの力を込めた力比べの勝負をした。  
「なかなか強いな」  
「んも、お前もな。けど、俺はさっき山程あった肉まんを食べたから力が出るんだな」  
「に、肉まん！？ 何処にあったの？」  
肉まんと聞いた許緒は恐る恐る訊ねた。  
「食堂つて部屋にあつたも〜」  
「それ、僕の肉まんだ！」  
自分の肉まんをストロンに食べられたことを知った許緒は、涙を流しながら怒った。  
許緒の力は『食べ物への恨み』によって、倍増した。  
「んも！？」  
ストロンは圧倒された。  
「肉まんを返せ！」  
「んもも！」  
許緒はストロンを高く放り投げた。  
天井にぶつかり、ストロンは落ちて気絶した。

許緒の勝ち

「おらおらー!!」

「ちゅーちゅー!!」

夏侯惇は武器「七星餓狼」で、どんどんとチューリン達を薙ぎ払っていた。

チューリン達は目を回しながら倒れた。

夏侯惇の勝ち

「あっさりやられちゃった!」

流石のドロツチエ団も恋姫には敵わなかったようだ。

「ならば、このワシのマシンで」

ドクはマシンを使って、夏侯惇達をやっつけようとしたが、曹操が素早く動き、武器「絶」で、マシンを真っ二つにした。マシンは爆発し、ドクは黒焦げになって落ちた。

曹操の勝ち

「まだやる?」

曹操は、武器をドロツチエに向けながら訊ねた。

「……蒼天翼を返します」

ドロツチエは観念し、蒼天翼を曹操に返した。

\*

「あゝ、返したのに……何故、火炙りの刑を受けるの!？」

網でぎゅっぎゅっに包まれたドロツチエ団は火炙りの刑を受けて

いた。

「僕の肉まんを食べたから、お前を丸焼きにして食べるんだ！」

許緒は食べられた肉まんを、ドロツチエ団を丸焼きして食べようとした。ではなく、

「許緒は黙ってなさい。侵入し、秘宝を盗もうとした挙げ句、刃向かったからよ」

という罪状で刑を執行しているからである。

「嫌でチュー！」

「食べるのは好きだけど、食べられるのは大嫌いだも〜！」

「ワシは年寄りだから、美味くないぞ！」

「チューチューチュー！」

ドロツチエ団の面々は命乞いをする中、

「ああつ、ここで終わるのか」

団長であるドロツチエだけは諦めかけていた、その時、城壁が砕かれた。

驚いた曹操達は城壁の方を見てみた。

煙から人影が現れる。

それは、七魔竜だった。

バーサーカー用の武器、鉄球付きの棍棒を持っていた。

「怪しい奴、取り押さえる！」

魏の兵士達は一斉になって、七魔竜に向かって行く。

七魔竜は鉄球を大振りに回して、魏の兵士達を薙ぎ倒していた。

「おのれ！」

夏侯惇は七星餓狼を持って、七魔竜を倒そうとした。

しかし、七魔竜は、高速の動きで夏侯惇が七星餓狼を打ち込む前に、腹部を棍棒で打ち込んで、吹き飛ばした。

「ぐわっ！」

夏侯惇は反対側の城壁まで吹き飛ぶ。

「姉者！」

「春蘭様！」

夏侯淵と許緒はすぐに駆けつけた。

この隙に、七魔竜はドロツチエ団のところまで駆け寄り、彼らを網ごと回収して、走って逃げた。

「おのれ！」

曹操は悔しがる。

賊を逃がしてしまったことと、夏侯惇を傷つけられたことに。

\*

「助かった」

ドロツチエ団の面々は七魔竜にお礼を言った。

「真王竜の命令だから」

「真王竜？」

ドロツチエ団は首を傾げた。

「ドロツチエ団、『竜の爪』……手を組む気か？」

「手を組む？」

ドロツチエ団は、七魔竜から竜の爪のことを説明した。

最初は断るが、未知なる宝が入るとい話と、全面的に協力するという条件と、そして恩義で、手を組むことになった。

終わり

曹操、秘宝をドロツチエ団に狙われてしまうのこと（後書き）

青いタヌキさん、満足しましたか？

2ページ突破した記念スペシャル！（前書き）

今回はスペシャルです！

## 2ページ突破した記念スペシャル！

青い死神こと“秋本優太”が、着々と各世界「アニメ」のキャラクター達と協力を仰いでいた。

この情報は既に竜の爪も入手していた。

「ということ、ひちキチキ緊急面接やるついでを開催します」と真王竜が呑気に宣言した。

「ちよつと待って下さい。何ですか、その展開は？」

啞然と訊ねる呪血竜。

「そうですね。略したら、ちキ緊やるつ（チキンやるつ）になりますよ」

と呑気に指摘する光翔竜。

「いや、違うでしょう！」

と呪血竜はつつこんだ。

「ネーミングはどうでも良いんだ。内容は、新たな人材を増やすことなのだ」

ふざけているかと思ったら、実は真王竜は真面目に考えていたのだ。

「はあ？」

「青い死神は、‘恋姫’や‘ストライクウィッチーズ’等に協力を得ている。だから、こちらも協力してくれるアニメキャラクターを得るのだ」

「なるほど……なら初めからそうおっしゃって下さい」  
納得しながらツツコミを入れる呪血竜。

面接官を務めるのが 真王竜、呪血竜、黒鎌竜である。  
補佐役は光翔竜が務める。

「一番から四番、入ってください」

「おや、一度に面接ですか？」

「意外に候補が多く見つかったのだ」  
さて、最初に入ってきたのは、

「にゃー！」

『恋姫十無双』の孟獲（真名：美以）とミケとトラとシャムだった。

「いきなり戦力外ですか？」

呪血竜は愕然した。

「白天竜が見つけてきたのだ。我が組織に協力してくれそうな恋姫が、あれしかいなかったらしい」

黒鎌竜が説明する。

「使えるのですか？」

「マスコットには使えそうだ」

「いや、必要なのは戦力ですから」

「まあまあ、とりあえず特技などを聞いてみよう。特技は何ですか？」

真王竜は孟獲達に訊ねてみる。

「みいは料理にゃー！」

「ミケは食べることによ〜！」

「トラは獲物を捕ることにゃー！」

「シャムは……お昼寝にゃん」

真王竜達の反応は、

「合格（不合格）」

「不合格」と言った呪血竜は驚愕した。

「何故ですか!？」

「使い方によれば利用できるからだ」と言う黒鎌竜。

「水蓮竜のお友達になれそうだから」と言う真王竜。

「黒鎌竜は解りますが、真王竜様は明らかに目的を間違えてますよ

!」 丁寧につっこむ呪血竜。

「冗談だ。あの子らの可愛さで敵の女性陣の心をキャッチだ」

「……それなら、良いですが……」

認めつつ、不安を抱く。

「という訳で、もう出て良いです」

「わかったにゃ!」

採用された孟獲達は退室した後、

「あつ!」

「チユ?」

ドロツチエ団と鉢合わせした。

「あつ、鼠にゃ! 捕まえるにゃ!」

「にゃー!」

「チユー!」

鼠であるドロツチエ団を追いかけていく猫の孟獲達だった。

「……早速、粗相を働きましたよ……」

「他の竜兵にドロツチエ団を救うように言つて!」

なんとか騒動を収めて、面接が再開された。

続いて入ってきたのは

「って誰が日本人やねん」と乗りツッコミをするサイコガンを持つ  
金丸さん。

「ブツ殺ス…床屋」と呟く謎のザビエル。

「フランスパン、クダサイ」とせがむ謎のタカティンだった。

三人とも『銀魂』の謎のキャラクターであった。

「帰って下さい」

呪血竜はすぐさま彼らに退去を命じた。

「何でやねん」

「テメエ、ブツ殺ス」

「フランスパン、一本」

と口々に文句を言った。

「うちはお笑い芸人を雇うつもりはありません。つーか、誰が連れてきたんですか？」

「夜帝竜さんです」

これを聞いた呪血竜は頭を抱えた。

「あれですか？ 面白いからですか？」

「それだけではなく、それ相応の実力を持っています」

「そんなわけないでしょ！ ただの変態達でしょ！」

光翔竜の言葉を否定する。

「どこが変態やねん」

「テメエ、ブツ殺ス！」

「ヘンタイノハンタイ」

「己らは自分の姿を見たことありますか？」

呪血竜の指摘通り、金丸はブルーメランパンツ。ザヒエルはブリーフパンツ。タカティンは法被とパンツしか着用していなかった。

確かに彼らの方が変態だ。

「駄目ですよ。あれは」

「合格」

「何でやねん！」

呪血竜のあり得ないツツコミが高く響いた。

「感じないかね、彼らのオーラを？」 「変態のオーラですか？」

「違う、強者のオーラだ」

「私達にはわかる。激戦をくぐり抜けた者のオーラを感じる」

真王竜と黒鎌竜には彼らから発するオーラを感じ取っていた。

「というわけで採用だ」

「お前の力を我に」

「……パンツ3！」と答えて、彼らは出ていた。

つまり、オツケーということだった。

呪血竜は啞然するしかなかった。

続いて入ってきたのは

「よろしくお願いいたします」

『伝説の勇者の伝説』のキファ・ノールズだった。

「彼女が来た経緯は？」

「彼女は魔炎竜さんが魔眼を使って調査をしたところを偶然見て、『あなたの魔眼を調べさせてください』とせがまれて連れてきました」  
「なるほど」

光翔竜の説明で呪血竜は納得できた。

「キファさん、貴女の得意なことは？」

「潜入、情報収集、魔法です」

「この組織に入りたい理由は何ですか？」

「魔眼の秘密を知りたいからです」

「なぜ魔眼の秘密を？」

「……好きな人を助けたいからです……」

呪血竜はキファの特技と純粋さに興味を示して考えた。

「……わかりました、合格」

「不合格だ」

真王竜が不合格と言いだした。呪血竜とキファは驚いた。

「真王竜様、何故です？」

「彼女は純粹過ぎるからだ」

「純粹の何がいけないんですか!？」

キファは納得できないあまりに食って掛かる。

「君が入ろうとしているのは、我が組織は悪の組織だ。純粹な君に悪の仕事ができるかな？」

キファは考えて、「できます!」と答える。

「その覚悟を見せてもらって良いかな？」

「はい!」

場の空気が緊張に包まれる。

「では……おっぱいを揉ませてくれ」

「えっ?」とキファは呆気に取られる。

「また悪い癖が出た」と呪血竜は頭を抱える。

「君の度胸を試させてもらう。胸なだけにおっぱい」  
真王竜の背後に、大型の剣を持った聖唱竜が現れ、真王竜を斬った。

「レイラ、ありがとう」

大型の剣を持ち主のレイラに返す聖唱竜。

レイラ、呪血竜、キファは返り血を浴びた聖唱竜に恐怖した。

場の空気は恐怖に変わった。

「気にするな、真王竜はあれぐらいでは死なん。あとからお仕置きされるがな」

黒鎌竜は冷静に教える。

「は、はあ……」

「それより、お前の採用は……働きを見て判断してもらう。とりあえず合格した奴らのところへ行ってくれ」

「は、はい」

キファは仮合格となった。

「さて、いよいよ最後の方々です」

「最後はまともだと良いですね」

「次は誰の紹介だ?」

「ナナちゃんこと七魔竜ですね」

「ほう……」

黒鎌竜は興味を示した。

次に入ってきたのは、

「失礼する」

黒鎌竜と呪血竜は驚愕した。

衛宮切嗣、遠坂時臣、言峰綺礼であった。ちなみに言峰は若い頃である。

「確か、第四次聖杯戦争で命を落とした魔導師達では？」

「その通りだ。我々は七魔竜に召喚されたのだ」

「召喚？」

「サーヴァントの召喚魔法を応用して、我々魔導師を魔法で召喚したのだ」

「最初は逆らったのだが、令呪に似たもので契約させられたのだ」  
切嗣らは順序に説明をした。

「……くつくつくつ、まさか七魔竜がそんなことができるとは、生みの親の私も驚きました」

呪血竜は驚きとともに喜んだ。

「それで、我々は合格か？」

「ああ、勿論だ」

「こんな素晴らしい功績を立てた七魔竜に、彼らの指揮を任せよう」  
「ああ、異議は無しだ」

切嗣らも合格し、七魔竜の軍団が誕生した。

『七魔竜の軍団』

・衛宮切嗣

・言峰綺礼

・遠坂時臣

・キファ・ノールズ

- ・パンツ3 (タカティン、金丸、ザビエル)
- ・孟獲と愉快な手下 (ミケ、トラ、シヤム)

「おまけ」

「お久しぶりの「竜の爪通信」！ しかも、特別バージョンで始まりです！」

久しぶりの司会役を務めるので、光翔竜は張り切っていた。

「司会はもちろん、『フェイト様、愛ラブ・ユー！』の光翔竜です！ 今回は2ページを突破した記念に、この物語の登場人物の紹介をします。では、どうぞ！」

\*

竜の爪のメンバーは、竜を象った仮面を被り、マントを身に纏う。その正体は、各アニメ世界のキャラクター（オリジナル）でかなりの実力者。

主要キャラクター達と因縁がある者が多い。

なお、技や武器に属性があります。

炎 炎属性 水 水属性（氷も水属性） 風 風属性 雷 雷属性  
性 地 地属性 光 光属性 闇 闇属性  
ICV「イメージキャラボイス」

【リーダー（首領）】

真王竜「しんおうりゅう」

仮面／威厳ある東洋の龍

イメージカラー：金

《プロフィール》

竜の爪のリーダーを務める謎の人物。

悪の組織と名乗りつつ、世界のために行動している。

まだ未知だが、相当の実力とカリスマ性を持ち、メンバーや配下から強く慕われている。

素顔は高町なのはの父、高町士郎にそっくりだが、傷跡がある。あと身体にもある。

真面目そうに見えて、巨乳好きなスケベなところがある。

〔武器〕

魔剣：ダークレヴァンティン（闇／炎：レヴァンティンシリーズの一つ。闇と炎を合わせた邪炎を持つ強力な魔剣）

聖なる刀：破邪の翼（光／風：聖なる光の効力と風の力を借りた速さを持つ刀）

他多数

〔特殊能力（技／特技）〕

・ 剣技／二刀流（小太刀二刀御神流）

・ 剣技／聖星斬（光：魔力を最大に込めた斬撃）

・ 剣技／邪炎一閃（炎／闇：邪炎という炎を加えた斬撃。邪炎は聖なる水でしか消せない）

・ 魔法／刀の召喚（刀と剣を呼び出す）

・ 魔法／龍の召喚（契約した竜と龍を呼び出す）

・ 魔法『ミッドチルダ式&古代・近代ベルカ式』（術式に関係無くあらゆる魔法が使える）

出身『魔法少女リリカルなのはStrikerS』

ICV：山寺宏一

【メンバー（幹部）】

黒鎌竜「こくれんりゅう」

仮面/角を生やしたドクロ

イメージカラー：黒

《プロフィール》

竜を象った黒い大鎌を武器の実力者で好戦的な性格。

あらゆる攻撃を受けても痛みを感じない身体を持つが、実は黒い大鎌こそが本体で身体は死体。

その正体は黒鋼の皮膚を持つ竜人である。

無愛想で一匹狼に見えるが、かなり面倒見が良く子供好き。

真王竜とは、組織が結成される以前からの付き合いで、強い信頼で結ばれている。

（特殊能力（技/特技））

・特殊能力/黒鋼（闇/地：どんな攻撃や魔法も効かない装甲。

魂の込めた攻撃や想いを込めた魔法でなければ通用しない）

・特殊能力/鎌化（身体のある部分を鎌に変化できる）

・特技/凍てつく蒼き炎（水/炎：あらゆるものを凍てつかせる）

・魔法『古代ベルカ式・闇』（闇/あらゆる闇属性の魔法が使える）

出身『魔法少女リリカルなのはStrikers』

ICV：神奈延年

呪血竜

仮面/龍というより蛇

イメージカラー：紫

《プロフィール》

組織の副リーダーを務める幹部。呪血という恐ろしい血を体内に持つ危険人物。

高い知識と化学力で組織の兵器や武器等を開発している。

かつてはシメオン製薬の優秀な科学者だったが、総帥のアダム・アークライトにより、最悪のニードレスとなった。

以後、人間を憎悪する上に、醜くなった素顔を常に仮面で隠してい

る。

素顔を見られると我を忘れて狂ってしまう。

〔特殊能力（技／特技）〕

・特殊能力／呪血（呪血竜の意思で、自在に硬質や柔軟化する血液。飲んだら、苦しみながら死に至る。さらに武器を作り出すことも可能）

・特殊能力／吸血の腕（触れた者の血を吸収してしまい、呪血に変える。右腕）

・特殊能力／増血の腕（触れた者の呪血を送り込む。左腕）

・最終形態・呪血鎧装（自身に呪血を纏わせて鋼鉄より硬い鎧となる）

出身『NEEDLES』

ICV：竹本英史

白天竜

仮面／若い東洋龍

イメージカラー：白

《プロフィール》

黒鎌竜の相棒で、真王竜の一番弟子であるメンバー。

素質と武家の血で通常の恋姫を越える恋姫だが、心根が優しい為、殺すことに抵抗を持つが、それでも敵を倒す。

元は朝廷を治める霊帝の娘である恋姫だった。本名は劉協子で、真名は百合。

劉備（真名：桃香）とは友達だった。

昔、黒鎌竜に命を救ってもらって以来、黒鎌竜について行くと決めている。

〔武器〕

宝剣：四聖獣剣

魔剣：魔吸剣

魔剣：フリーズレヴァンティン

↳特殊能力（技／特技）↳

・剣技／青龍の牙（風：竜巻を起こし、風とともに無数の斬撃を送る）

・剣技／朱雀の翼（炎：炎を刀身に宿らせ、炎の斬撃で対象物を燃やす）

・剣技／白虎の爪（雷：雷を刀身に宿らせ、一刀両断にする）

・剣技／玄武の甲羅（水：水を起こし、水の壁を作って攻撃を防ぐ）

・剣技／死神狩り（死者を生き返らせる）

出身『真・恋姫十無双』

ICV：伊藤静

光翔竜

仮面／ガーゴイル

イメージカラー：銀色

《プロフィール》

いつも呑気でムードメーカーな幹部。

敵である筈のアニメキャラ達に握手とサインをねだるほど憧れているミィーハ！。

特にフェイトの熱狂的なファンである。その代わり、なのはに対してはぞんざいである。

しかし、実力は確かなもので、光魔法を得意としている。

↳特殊能力（技／特技）↳

・シャイニングワープ（光：光の如く瞬間移動する）

・シャイニングイリュージョン（光：光による幻術）

・シャイニングソード（光／光で作り出された熱の剣）

出身『アスラクライン』

ICV：置鮎龍太郎

聖唱竜「せいしょうりゅう」

仮面／額に十字架の紋章を持つ西洋の竜

イメージカラー：黄色

《プロフィール》

組織一心優しきメンバー。

神曲楽士としての腕前がかなり高く、精霊とも心を通わせれる程の素質を持つ。

そのため、政府により無理矢理軍隊に入隊させられた。

その時レイラと契約し、ミミという少女と出会った。

だが、嘆きの異邦人の策略によりミミは亡くなり、戦争の理不尽さを嘆いた。

レイラとともに自分なりに世界の行く末を見ようと考え、竜の爪に入った。

自分を救ってくれた真王竜に恋をしている。

〔武器〕

単身楽団（パイプオルガン）

〔特殊能力（特技／技）〕

・神曲（光：契約精霊のレイラだけではなく他の精霊を癒したり、力を与えることができる）

出身『神曲奏界ポリフォニカS』

ICV：根谷美智子

魔炎竜「まえんりゅう」

仮面ノサラマンドー

イメージカラー：赤

《プロフィール》

組織一の魔法の使い手であり魔法研究の第一人者でもあるメンバー。娘の水蓮竜の成長を優しく見守る父の面を持つ。魔眼であらゆる魔法の構築や元素を解読し、呪血竜に教えている。かつてはエスタブルの人間兵器として生きたが、人間として生きたいと考えて脱走した。刺客として追ってきた氷刃竜と劇的な恋に落ちた。

その後、真王竜の誘いに乗り、組織に入った。

〔武器〕

火炎竜（炎：炎の魔法を最大に使える上に炎を魔力に変える魔法の杖）

〔特殊能力（特技／技）〕

・魔法／炎の魔法（炎：炎を出したり、操ったり、対象物を燃やしたりできる）

・特殊能力／殲滅の眼（精霊を吸収したり、直接魔法や人間を食い尽くし超人的身体能力を得る）

出身『伝説の勇者の伝説』

ICV：鈴木健一

氷刃竜「ひょうじんりゅう」

仮面／額から鼻の先が一本の氷の刃と一体化している。

イメージカラー：青

《プロフィール》

組織一の暗殺者であり魔炎竜の妻。厳しい一面を持ち合わせているが、娘の水蓮竜を想いやる母の面も持つ。

かつてはエスタブルの刺客だったが、魔炎竜の人間性や出生を知り、次第に愛し合って結ばれた。

魔炎竜と同じ気持ちで組織に入った。

〔武器〕

氷結竜（水：氷の刃を作り出せる。大きさによって、短剣や大型などとバリエーションができる。また飛ばすことも可能）

〔特殊能力（技／特技）〕

・氷の魔法（水：氷を出したり、氷を操ったり、対象物を凍らせたりできる）

・暗殺術（あらゆる暗殺をこなす）

出身『伝説の勇者の伝説』

ICV：坂本真綾

夜帝竜「やていりゆう」

仮面／激怒した竜

イメージカラー：紺色

《プロフィール》

組織一の武闘派メンバー。

普段はカツ井と喧嘩が好きな夜兎の少女だが、子供に好かれやすく面倒見が良い。

吉原の“夜王”鳳仙の娘だった為に春雨に育ての親を殺されてしまい、怒りをぶつける為に夜王のライバル星海坊主の弟子となる。しかし、鳳仙は既に亡くなったので、形見の番傘をもらって傭兵家業をやる。

〔武器〕

番傘（鳳仙が使っていた番傘。呪血竜に頼んで、魔法が使えるように改良された）

ナイトマント（一定の場所を夜にできるデバイス）

〔特殊能力（技／特技）〕

・格闘（星海坊主の直伝）

出身『銀魂』

ICV：沢城みゆき

水蓮竜「すいれんりゅう」

仮面：幼い水龍

イメージカラー：水色

《プロフィール》

魔炎竜と氷刃竜の間に生まれた幼い娘。

人間離れの者や竜等の周りで育ったので、偏見を持たず怖いもの（怒った時の母や父以外）を知らない。

〔特殊能力（特技／技）〕

・魔法（ただし未熟）

出身『竜の爪』  
オリジナル

ICV 中原麻衣

喰樹竜「しょくじゅりゅう」

仮面ノ羽根を生やしたティラノサウルス

イメージカラー：緑

《プロフィール》

組織一の暴君であり大食漢のメンバー。

自分の部下をぞんざいに扱っただけではなく他のメンバーに対しても傍若無人な態度を示している。

主食は人間の肉と骨と怨念である。

真王竜を欺き、回収したロストロギアを横領していた。

青い死神こと優太を仲間に引き込もうとしたが、優太の逆鱗に触れてしまい倒された。

△特殊能力（特技／技）▽

- ・ 鳶攻撃（無限にある鳶で攻撃する）
- ・ 自己再生（傷ついても新しい鳶で傷を塞ぐ）
- ・ コピー（食べた相手の技を自分のモノにする）

出身不明

ICV：小村哲生

七魔竜「ななまりゅう」

仮面ノ七つの目を持つ竜

イメージカラー：灰色

《プロフィール》

呪血竜が組織の技術と各世界の魔法で生み出した人工サーヴァント。亡き喰樹竜の代わりとしてメンバーなのだが、子供のように色んなモノに興味を示したり、幹部に対してはタメ口を許したりと無邪気な性格。

Fate/stay nightの七騎のサーヴァントの能力を一つにまとめられている。

〔武器〕

劍

弓矢

槍

鉄球付き棍棒

鞭

魔法の杖

暗器

〔特殊能力（特技／技）〕

・七龍分裂（七体に分裂する。

一体一体はサーヴァントの能力を宿している）

ICV： 考えてません。

出身『オリジナル竜の爪』

\*

「如何でしたか？ これで【DRAGON NAIL】竜の爪」  
の魅力を知れたはずですよ！ では、時間なのでこれにて失礼します」

終わり

## 2ページ突破した記念スペシャル！（後書き）

『Fate/Zero』ネタと登場人物は如何でしたか（特に青い  
タヌキさんは）？

好きなメンバーいましたか？

氷刃竜のIS学園生活日記(前書き)

面白いおまけを用意しています。

## 氷刃竜のIS学園生活日記

氷刃竜は竜の仮面外し、マントを脱いで、武器である氷結竜を使った訓練をしていた。

しかし、やや乱れている動きだった。

(……水蓮……)

娘の水蓮を新機動六課へ預けていたので、心配しているのだ。そこへ、夫である魔炎竜が現れるが、無視した。

「……まだ怒っている？」

気まずく訊ねるが、氷刃竜は何も答えなかった。

氷刃竜は水蓮竜を連れ戻さなかったことで怒っているのだ。

魔炎竜はため息を吐いて、竜の仮面を外す。

氷刃竜が素顔をさらけ出しているの、自分も素顔になつてころと思つたからだ。

「……ごめん。君の気持ちより、水蓮の気持ちを優先させて」

水蓮の気持ちと聞いて、氷刃竜は動きを止める。

「水蓮の気持ちだけじゃなく、あのまま戦いになれば、水蓮を巻き込んでしまうと思つたからなんだ」

氷刃竜は魔炎竜の言うことに納得した後、訓練を中断して氷結竜を机に置く。

そして、魔炎竜の肩に頭を預けた。

「……それなら早く言え」

「……すまない」

夫婦の間に甘い雰囲気は漂った。

「おほん」と竜暗殺者が咳払いをしたのに気付き、二人はすぐさま離れた。

「邪魔するようで申し訳ありませんが……魔炎竜様は氷刃様に指令を伝えに来たのではありませんか？」

「解っている」

竜暗殺者はすぐさま部屋から出てゆき、氷刃竜は指令を聞くことにする。

「……どんな指令だ？」

「【IS（インフィニット・ストラトス）】世界に行き、新型ISを奪えだつて」

氷刃竜は驚いた。

「その世界は、ISという女性にしか着れないパワードスーツが主流だろ？ 私で良いのか？」

「ああつ、君にはISに適性がある」

「他の女性メンバーは？」

「白天竜と夜帝竜は別件。聖唱竜は落ち込みで出れないらしい。だから指名された」

「別に構わないが……教師としてか？」

「いや、いきなり教師はまずい。教師なのにISが使いこなせなければ怪しまれる」

「それじゃあ……生徒か？」

「その通り」

これを聞いた氷刃竜は驚いた。

「良いのか、私の年齢で学生なんて!？」

「君はまだまだ若いよ。それに……君が学生生活を味わえる機会だよ」

氷刃竜はえつ、と呆気にとられる。

「羨ましがっていただろ？」

氷刃竜は戸惑いながら頷いた。

昔、学校というものに憧れていた。しかし、暗殺者という道へ歩んでいた為にその夢は叶わなかった。

「……良いのかな？」

「もしかしたら水蓮の気持ちかわかるかもしれないよ」

魔炎竜はあるものを氷刃竜に手渡す。

「それは？」

「呪血竜が開発した、君のISブレスレットだよ。返事を待っている」

魔炎竜が去ったあと、ISブレスレットを見つめながら氷刃竜はしばらく考えた。

規模がとて大きい学舎、“IS学園”。

ここでは世界各国から少女が集い、優秀な操縦者として育成されていた。

3年のクラスに転入生がやって来る。

青い長髪で血のように赤い瞳の凛々しい顔付きの少女であった。

担任の教師が紹介する。

「アメリカから来ました、フローズ・ソードさんです」

「フローズ・ソードです。よろしくお願いいたします」

そう、氷刃竜である。

休み時間となると、氷刃竜もとい、フローズは、瞬く間に注目的になった。生徒達は質問する。

「ソードさんって、何が得意なの？」

「スポーツ」

「好きな食べ物は何？」

「アイスクリームよ」

「日本語上手いわね」

「練習したからね」

つてな具合に次々と質問に答えていく。

「フローズさんのISって、どんなの？」

「それは実技でのお楽しみ」

ウィンクして誤魔化した。

「うわっ！」

食堂でフローズは並べられている数多くの料理を見て驚く。昼休みになり、交流を深めるために皆と一緒に食堂で食事をとることにした。

フローズはたくさん注文した。お金は組織の金である。

「フローズさん、全部食べるの？」

「もちろんよ」

余裕の表情で答えるフローズ。そして、楽しく食べる。

(学生生活も悪くないな)

学生生活を楽しむフローズ。

学園の寮でフローズは用意された個室に入って休む。

「ご苦労様です、氷刃竜様」

竜暗殺者は影のごとく現れる。

「……どうだった？」

「色々と仕掛けが出来そうです」

「そう」

フローズは複雑な表情だった。竜暗殺者はそれを察した。

「余計なことを仰います。あまり愛着を持たないように」

「わかっている」

「……失礼……」

竜暗殺者が消えると、フローズはベッドで寝転ぶ。

「……別に愛着なんて……」

天井を眺めながら呟くフローズだった。

最初の授業は早速の実践授業だった。

ISスーツを着こんだフローズの姿はとても美しくスタイル抜群だった。特に胸は豊満である。制服のおかげで着痩せだったのだ。

そんなフローズの姿に女子生徒達は注目した。そして、いよいよISを発動させる時がきた。

「IS発動」

フローズの身は、氷のように透き通った武装に包まれてゆく。

フローズのISが露になった。

両腕は巨大な氷の剣。胸は西洋の竜を象った胸当て。背中には美しい氷の巨翼。両脚は膝と爪先が氷柱で象られた。更に尻には長太く、先っぽに氷の剣が付いた尻尾が備え付けられていた。

まさに氷の竜をイメージしていた。

フローズのISを見た担任や女子生徒達は驚愕した。フローズ自身も驚いていた。

「これが私のIS『アイスソードドラゴン』」

自分のISの名前を呟く。

「そ、それでは始めます！」

担任の呼び声と共にフローズと女子生徒は高く飛び上がり、対戦が始まった。

女子生徒のISは射撃型。

先手必勝とばかりに腕に備えたライフルで氷刃竜を狙い撃つ。

しかし、氷刃竜の飛行能力はとて高かったため、なかなか当たらない。氷の翼から風の力を起こして速さを増した。

（速い！）

フローズ自身も驚いていた。

（このISは私の技をそのまま使えるって、呪血竜が言ってたな）  
フローズは右腕を構えると、右腕が冷気を纏う。（使えるな）

フローズは高速を生かしながら、ライフルの弾丸を避けながら接近する。

女子生徒はすぐに逃げようとするが間に合わなかった。氷の刃が

届く範囲まで接近したフローズはすかさず氷の刃で女子生徒の両足（IS部分）を斬り裂いた。

女子生徒は一瞬焦るが、それだけではすまなかった。

傷口から氷が表れ、両足がたちまち氷に覆われてしまう。

女子生徒は驚く間もなく、氷の重みで徐々に降下してゆく。

さらにフローズは背後に回り込み、氷の刃を向けると刃から無数の氷塊が放たれる。無数の氷塊が当たる度に女子生徒が凍りつき、落下してしまう。

「きゃあああああああ！！」

女子生徒は思わず目を閉じるが、落下の衝撃はなかった。

それはフローズが受け止めていたからだ。

「ごめんなさい！ ちよつとやり過ぎちゃった……」

「い、いいえ……」

「し、試合終了。勝者 フローズ・ソード」

「す、すげえ……」

フローズの試合を離れて観戦していた一年生達がいた。

織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳 鈴音 ラウラ・ボーデヴィツヒ、シャルロット・デュノアである。

「……一瞬で凍らせるなんて……」

「悔しいですけど、美しいですわ」

「操縦者自身も相当手慣れている」

「しかも凍らせる武器なんて見たことないよ」

「名前は確か、フローズ・ソードだったけ？」

「……いったい何者なんだ……」

一夏達の中でフローズの存在が大きくなった。

その後、フローズは学生生活を楽しみながら任務をこなしてゆく。

続けば続ける程、フローズの気持ちは複雑になってゆく。

ある深夜。学園内でこそそそと行動していた。

「これでよし」

竜暗殺者と竜魔導師は怪しげな機械を仕掛けたり、魔方陣を描いたりしていた。

「これでよし」

「全ての召喚の魔方陣と超強力AMF発生装置の取り付けれたな」  
「どうやら召喚の魔方陣を描いたり、超強力AMF発生装置をあちこちに仕掛けていたらしい。」

「あとは魔炎竜様の魔法で発動するだけだな」

竜魔導師は浮かない顔をする竜暗殺者に気付く。

「どうした？」

「……氷刃竜様は……学生生活に愛着を持たれている」

「愛着？」

「つまり……こここの者達に情が移ったかもしれん。任務が終了した際に……その者達を傷つけてしまうことに後悔するかもしれん」

竜魔導師は納得する。

「……果たして実行しても良いのか？」

「よせ、我輩達は言われたことに従う者だ。口出することではない」

「……そうであったな……」

竜暗殺者は己の立場をわかまえる。

「そろそろ退却するぞ」

「御意」

竜魔導師と竜暗殺者は影のごとく消える。

廊下の角から、織斑千冬が顔を出す。

「あれが竜の爪か」

千冬は一部始終を見ていた。

「氷刃竜とは何者だ？」

寮では氷刃竜ことフローズは通信回線で魔炎竜と会話をしていた。  
「いよいよか」

「ええっ」

魔炎竜が何か言いたげそうな仕草を見せる。それにフローズは気付く。

「何か言いたいの？」

「……作戦が開始したら……上手く姿を隠すんだ」

フローズは驚いた。しかし、すぐに言葉の意味を理解した。

「作戦軸の私抜きでやるつもりか？ ふざけんな。せつかくのISがあるのに」

「けど……」

「気にするな。……ありがとう」

フローズは通信回線を切って、窓を開けて夜空を見上げる。

「学生生活は……おしまいにしよう」

フローズこと氷刃竜は意を決した。

「私は……竜の爪メンバーの氷刃竜だ」

こうして、作戦当日を迎える。

## 《おまけ》

「は、始めるまして、久本雅美です」

ぎこちない挨拶する、この女子生徒は……雅也である。

女装でIS学園の女子生徒に成り済ました雅也は1年1組へ編入した。

月1日 マスターの自己紹介から始まった

「可愛い」と女子生徒達に言われてしまい、雅也は悲しくなる。

《マスター、好評で何よりです》

メアリーの姿は見えないが念話は聞こえる。

メアリーは、雅也のブレスレットになっていた。

何故ブレスレットになっているかと言うと、この世界にやって来る前に新機動六課でこんなことがあった。

「私をISにする!？」

優太から自分をISにするという話を聞かされる。

「うん、今回の指令だけではなく今後の為にも君をISにする。君自身は良いかな？」

メアリーは考える。デバイスである自分がISになることは良いことか？ 私自身の為になるのか？ 私自身の為は……マスターである雅也を守ること。ならば……。

「わかりました」

なることを決め、優太の改造を受けた。

こうしてIS化する機能を備えたメアリーは、学園にいる間、待機モード＝ISブレスレットになる。

休み時間、雅也は質問攻めに合うが上手く答える。

もちろん、織斑一夏や篠ノ之箒も雅也と接する。

「一夏くん」

「一夏で良いよ」

「一夏は男なのにISが使えるのね」

「ああっ」

「へえー、凄いわ。(なら、別に女装する必要無いじゃないか)」

《マスターは心の奥でそう思っていた。だが、それでは面白くありませんですか（笑）》

《（笑）って、何だよ！》

雅也は一夏達と話をしながら、メアリーと念話をする。

学校が終わって、自室へ戻った後、マスターの最初の試練が始まった。

雅也は女性の下着を見つめ合った。

「マスター、いい加減に履いたらどうですか？」

ヒューマンノイド  
人型へ戻ったメアリーはそう言う。

女装する雅也はこの女性の下着を履かなければならなかった。しかし、流石に抵抗があった。

ちなみに、雅也の履こうとするのは、白でウサギの絵柄を描かれたパンツだった。

「それはヴィヴィオ本人のお気に入りです」

「本人のか！？」

「他にも、皐月とマーブルのもあります」

「あいつらは自分のを持たせたのか！？」

これを聞いた雅也はますます履きにくくなった。

「さあさあ、早く履きなさい。それとも……ノーパンでポロリと見られたいのですか？」

雅也は涙を流しながらパンツを履いた。

最初の試練、合格しました。

月2日 マスターの第二の試練は……着替えです

更衣室には当然女子生徒しか居なかった。そんな更衣室に男である雅也がいた。

雅也は目のやり場に困った。

所々で女子生徒達が着替えてるからだ。

(ヤバイよ。これはいくらなんでも犯罪だよ)

雅也は困ってしまう。

《マスター、周りを気にせずにとっと着替えて立ち去るしかありません》

(仕方がねえ)

雅也はメアリーの助言通りに、周りを見ないでさっさと着替えて立ち去ろうとした。

しかし、運悪く箒とぶつかって倒れてしまう。

「だ、大丈夫」

雅也の手は箒の豊満な胸を掴んでいたので、鼻血を噴いて倒れてしまう。

「雅美こそ大丈夫か!？」

箒は慌てて雅也を介抱してあげた。

純情なマスターはおっぱいを触ってしまい、鼻血を噴いて倒れてしまった。

よって今日の実技は受けられなかった。あとで弄ろう。

月3日 午前の授業が終わった後、食堂で腹立たしいことがありました。

「美味しい!」

昼食後のデザートにシュークリームを美味しく食べる雅也。一夏達も美味しく食べていた。

「流石、期間限定シュークリームは一味違うぜ」

「本当にうまいいいいいいいいい!？」

突如、雅也は手首を抑えながら痛み出す。

「ど、どうしたんだ雅美!？」

痛み出した雅也に一夏は驚いた。

「な、何でもない何でもない！」

雅也はなんとか堪えながら、平然を装って一夏達を安心させる。  
「ちよつと待てね」

と言つて、食堂の外を出る。一夏達は心配そうに雅也を見る。

雅也はメアリーを睨み付ける。痛みの原因はメアリーが雅也の腕を締め付けていたからだ。

《食べることが出来ない私の目の前でシュークリームを、それも期間限定シュークリームを食べるなんて、マスターは鬼畜です》

怒っている理由を理解して頭を抱える雅也。

「わかつたよ、せめて一個くらい確保するから」

雅也は食堂に戻り、シュークリームを確保しようとカウンターへ向かうが。

「期間限定シュークリーム」

副担任の山田真耶が期間限定シュークリームを嬉しく持って行き、雅也は呆然とした。

その夜、雅也の自室で……、

期間限定シュークリーム期間限定シュークリーム期間限定シュークリーム期間限定シュークリーム期間限定シュークリーム期間限定シュークリーム期間限定シュークリーム期間限定シュークリーム……。

雅也の枕元でメアリーがシュークリームの呪詛を唱え続ける。雅也は全然眠れなかった。

月4日 次なる試練は……実技。いよいよ私のIS姿のお披露目である。

雅也はISスーツを着込んでいた。豊かな胸を持つが、これは偽物だ。

《罪深い胸ですね》

「るさい」

《では、発動します》

「おう」

雅也はISを<sup>メアリー</sup>発動させた。雅也の頭と胸元と手足には甲冑に等しい青い装甲が装着され、いつも使うキャリバーの大型版を装備されていた。背中にウイングパーツが備えられていた。

まさに翼を持つ西洋騎士をイメージしたものであった。

「す、すげえ……」

雅也は自身のISに驚く。

もちろん一夏達も驚く。

「さて、雅美の対戦相手は」

「私がやります！」

手を挙げて立候補したのは、箒だった。

「やるのか箒？」

「うむ、剣を持っているからな」

箒の武士心に火がついた。

「……良いわよ」

雅也も承諾する。

箒はIS『紅椿』を装着し、雅也と共にフィールドに並ぶ。

《マスター、いつも通り属性を発動できますよ》

(そうか。んじゃ、炎で)

《了解》

雅也がユニゾンと同じ要領で炎の属性になると、青い装甲が赤く変色され、ウイングパーツから炎が現れて燃え上がる。

「ほ、炎!？」

箒や一夏達は驚愕した。

「どつする、やめるか？」

「……いや、むしろ相手になろう！」

箒と雅也は互いの剣を構え、試合を始めた。

まずは上空へと上がり、剣を交わり合わせた。箒の紅椿の剣と雅也のキャリバーンはぶつかり合うたびに火花を散らす。

地上からその様子を見ていた一夏達はハラハラさせた。

互いの剣技と必殺技が炸裂しても、なかなか決着がつかなかった。そして、引き分けに終わった。

「久しぶりに白熱したぜ」

雅也はシャワーで試合で流した汗を洗い流す。

「ISでも、いつも通りにやれることがわかったことも収穫ですね」

「ああつ、使えるのかと不安だったけど、一安心だぜ」

雅也はタオルを腰に巻き付けて出てくる。

「マスター、女装は？」

「いや、二人だけだからいいだろ」

その時、誰かが突然入ってきた。

「雅美、皆と一緒に」

箒だった。箒は雅也とメアリーを見て固まった。

「雅美……その姿は……」

「いや、これは……」

雅也は誤魔化そうとすると、タオルがほどけて落ちた。箒は雅也のをパッチリ見てしまった。

「……うーん……」

「……見られたー!!」

箒は気絶して、雅也は絶叫した。

そのあと篠ノ之 箒さんに事情説明して、秘密にしてもらった。最初は怒るが、マスターの純粋な剣の使い手であることと、恥ずかしい写真を手渡すことで事なき得た。

というわけであつという間に最新型のISの稼働実験当日になり

終わり

ました。

氷刃竜のIS学園生活日記（後書き）

青いタヌキさん、いかがでしたか？

コアツパvs呪血竜（前書き）

辰年、DRAGON NAILの竜の爪の年だ！

## コアツパvs呪血竜

とある世界の荒野で疾走するものがいた。

「カービイは何処だ！！　ぬおおおおおおおおお！！」

カービイの（自称）ライバルのコアツパだ。

今度こそカービイを倒そうとしているが、倒せない上になかなか会えない不幸なガキ大将である。現在もカービイを必死になって探していた。

所変わって、この世界には竜の爪の拠点があった。拠点内の工房で、呪血竜があるモノの製作作業をする。

それは『ハートレス』だ。

そのハートレスの横で、助手であるスィレーヌもあるモノを解体して調べていた。それは『単身楽団』だ。

「不思議ですね、この精霊とリンクする装置は」

スィレーヌはレンズを通して装置の構造をじっくり観察する。

「私も最初に見て、聖翔竜の話聞き、関心しました。神曲という聖なる曲とそれに共鳴する仕組みは素晴らしく偉大だと。これを研究した時は楽しかったですよ」

昔のことを楽しく思い出す呪血竜。それを見たスィレーヌは、

この方は純粋な研究者なんだな。

と興味を示す。

そんな時、竜騎兵が入ってくる。

「呪血竜様、スィレーヌさん。工場の準備が整いました」

「わかりました」

僅かな電灯が照らす薄暗い下り階段。竜騎兵を先頭に呪血竜とスィレー又は地下へと続く階段を降りる。

階段の先には機械で造られた扉があった。

竜騎兵は扉に備え付けられてる電子パネルに暗証番号を押す口ツクを解除する。

呪血竜とスィレー又が扉へ入ると、

ハートレスの生産工場だった。

人型、獣型、獣人型、鳥型、巨人型と色んなハートレスが造られていた。竜兵と、『??機関』の人間が混じって造っていた。呪血竜はそんな彼らの様子を伺っていた。

「彼らもよく働いてくれますね」

「はい。路頭に迷っていたところを拾ってくださったので、感謝していますから」

彼らは??機関が壊滅した後、戦闘員や科学者なども路頭に迷っていたところを真王竜がまとめて採用した。その恩を感じた彼らは懸命に働くことを誓った。

「作業が終わったら、労いにワインをご馳走させなさい。神曲奏界

『ポリフォニカS』産のを」

「解りました」

「スィレー又もいかがですか？ とても美味ですよ」

「は、はい。いただきます」

スィレー又は思った。部下には本当に優しい人だと。

そんな時に、一人の竜兵が駆け込んできた。

「呪血竜様！」

「どうしました？」

「なにやら妙な物が動力源と一緒に混じってました」

「妙な物？」

呪血竜とスイレーヌは首を傾げる。

『妙な物』を見に、動力源を取り付けれる機械のところへやって来る呪血竜とスイレーヌ。

二人が見た妙な物とは……、

「ここから出せ！」

コワツパだった。コワツパの上半身がアーマーの胴体部分に突っ込まれていた。

「……これはいつたい？」

「動力源の取り付け作業をしていた時に、何故か動力源と一緒にベルトコンベアに乗ってました」

「ちよつと、ベルトコンベアを見ていた人は気付かなかったの!？」

「あり得ない。動力源とコワツパをどうして見分けられないの。」

「と、とりあえず、引っこ抜きなさい」

竜兵の二人が引っこ抜いた。

「やれやれ、参ったぜ」

“それは、こっちの台詞だよ”と思う呪血竜。

「ところで、お前は誰だ？」

「つて、自分の状況を考えなさい。何故、あれ（アーマー）に突っ込んでいたのですか？」

「話せば長い。カービィを探して走り続けているうちに躓いてコロコロ転んで落ちて気絶したら、ここへいた」

全然長くないよ。

一同は同時に同じ台詞でツッコミを入れた。

「おそらく、その転がって気絶したところは、動力源を積んだトラツクの荷台ですね」

呪血竜はそう推測する。

「で、どうしますか？」

スイレエヌはコワツパの処遇を訊ねる。

「俺の力を見せてやる！」

「って、お前に聞いてねえよ！」

挑戦的なコワツパにツツコミを入れるスイレエヌ。

「俺をこんな目に合わせたことを後悔するが良い！」

スイレエヌの言うこと（ツツコミ）を全く聞いていなかった。

「良いでしょ」

あっさり承諾する呪血竜にスイレエヌは驚く。

「呪血竜様、よろしいのですか？」

「彼は、試作品016号の回収を邪魔したという罪があります。少し懲らしめてあげましょう」

と左手の指を鳴らした。

二人の闘う場は、広い実戦場であった。

この実戦場はアーマーの実験を行えるように設けられた。

呪血竜とコワツパはその中心で対峙する。

実戦場の外野席で、スイレエヌや竜兵に元???機関の人間達が観戦する。

「あいつ（コワツパ）、勝ってると思うか？」

「無い無い」

呪血竜の実力を知る竜兵達はコワツパが勝てるとは全然思っていなかった。

「スイレエヌ様、呪血竜様の實力はどれくらいですか」

「と言うか、どんな力を使うのですか？」

呪血竜の實力を知らない元???機関の人間達はスイレエヌに訊ねる。

「見ればわかるけど……恐怖するわよ」

スィレー又は怖がらせるように教えると、二人の戦いは始まった。先に攻撃を仕掛けたのは、コアツパだ。

「コアツパキック！」

呪血竜を蹴り飛ばそうと、コアツパキックをする。

それに対して呪血竜は左腕を掲げると、左手の手の内から呪血が吹き出し、壁を作り出す。

呪血の壁は硬く、コワツパキックでは壊せなかった。

呪血竜の呪血を初めて見た元?? 機関の人間達は驚く。

着地し、呪血の壁に驚く。

「なかなかやるな。ならば、体当たり！」

今度は体当たりでぶつかると、壊せずに吹き飛ばす。

「なら、ヘッドバッド！」

殻の被ったヘッドバッドで再びぶつかるが、呪血の壁は壊せなかった。

「くっ!?!」

思った以上に硬い呪血の壁にコワツパは苦い顔を表す。

「こっとなつたら……魔法だ！」

「ほう?」

コワツパに魔法が使えることに興味を抱く呪血竜。

「いくぜ！」

コワツパは魔法を唱え始めると、呪血竜の上空に雷雲が漂う。

「喰らえ、カミナリ魔法！」

雷雲から雷が落ちる。雷は呪血竜に直撃する。

「やったぜ！」

コワツパは喜ぶ。一瞬だけ。

「なっ!?!」

雷が直撃したのに、何ともなっていない呪血竜を見て、驚く。

よく見ると、呪血竜の全身は呪血に包まれていた。

雷の落ちる直前、呪血で己の身を包んで、雷を防いだのだ。

「お返しです」

包んでいた呪血を左手に集めて、鞭の形にした。

「うぎゃー！」

鞭を伸ばして、コワツパを打つ。

「チキショー……回復魔法！」

コワツパは回復魔法でダメージを回復させた。

「こうなったら……モンスター召喚！」

コワツパの足元に魔方阵が現れ、数多くのモンスターが召喚された。

ただし、全部“雑魚”である。

「……遊びはここまでにしましょう」

呪血竜は再び左腕を掲げて、左手を広げ、

「呪血雨！」

放たれた呪血は礫の如く雑魚モンスター達に当たる。

「痛ったたたたたたたたたたたたた！！！」

当然、コワツパにも当たる。

呪血雨が終わると同時に気絶した雑魚モンスター達は消える。

「痛いな」

痛がるコワツパの前に呪血竜が立つ。その左手は呪血でトンカチの形を作っていた。

「ゲームオーバーです」

コワツパは殴られて気絶した。呪血竜の勝利で終わった。

「……うーん……」

気絶したコワツパが目覚めたところは、何も無い部屋だった。

「……そうか、俺は負けたのか……チキショー！！！」

負けた悔しさで思わず叫ぶ。

「全く歯が立たなかった！ これじゃあ、カービィに勝つなんて……無理だ！」

コアツパの心情は悔しさに満ちていた。思わず、ベッドの上で拳を叩く。

「思い知りましたか？」

当然の声を聞いたコアツパは顔を上げる。

そこに、呪血竜が立っていた。

「自分の実力の差を思い知ったようですね」

「……ああつ」

「……諦めますか？」

落ち込むコアツパに恐る恐る訊ねる。

「ふざけんな！ 俺は絶対に、あいつに、カービィに負けたくない！」

切り替えが早く、コアツパは負けん気を見せる。

「それで良いのです」

「何？」

「負けん気も大事ですが、それだけでは駄目です。己の弱さを知り、己を強くする。それが勝利への道です」

「勝利の道？」

「我が組織も、勝利を得るために力を蓄えたり、知略を張り巡らしたりと念入りな活動をします」

「なんだか面倒だな」

「その面倒なことも、後から思い起こせば……良い思い出と嫌な思い出にもなりますよ」

この年を重ねてきた者の台詞に子供のコアツパには解らなかった。……ただ負けてしまって悔しがり、その悔しさをバネにするのも良いですが、何故負けてしまったのか、よく思い返してください。今度こそ勝ちたいと思うのなら」

そう言い残し、呪血竜は部屋を出て行く。コアツパは呪血竜の言

葉を考える。

こっそりと抜け出すコアツパは外へ出ると、目の前に、あるものが置かれてあることに驚く。

それはレーダー装置だった。

コアツパは拾い上げると、下に手紙があることに気付いて読み上げる。

「それはカービイを見つけるレーダーです。それでカービイを見つけないさい。」

見つける間に考えたり特訓するをオススメします。

呪血竜より

コアツパは思わず笑って、レーダーを持って走り去る。

あんがとな、蛇のおっさん。

そんなコアツパをこっそり見送る呪血竜とスイレーヌ。

「よろしいのですか？ 狼藉を働いた者にレーダーを渡して」

「……自分でも、子供に甘いと反省してます。しかし……なんだか応援したくなりました」

笑う呪血竜を見て、スイレーヌも笑う。

こうしてコアツパはカービイに会える確率が高くなった。

終わり

コアツパvs呪血竜（後書き）

紅白の水樹奈々様、最高でした。

By光翔竜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9528k/>

---

DRAGON NAIL ~ 竜の爪 ~

2012年1月2日08時48分発行